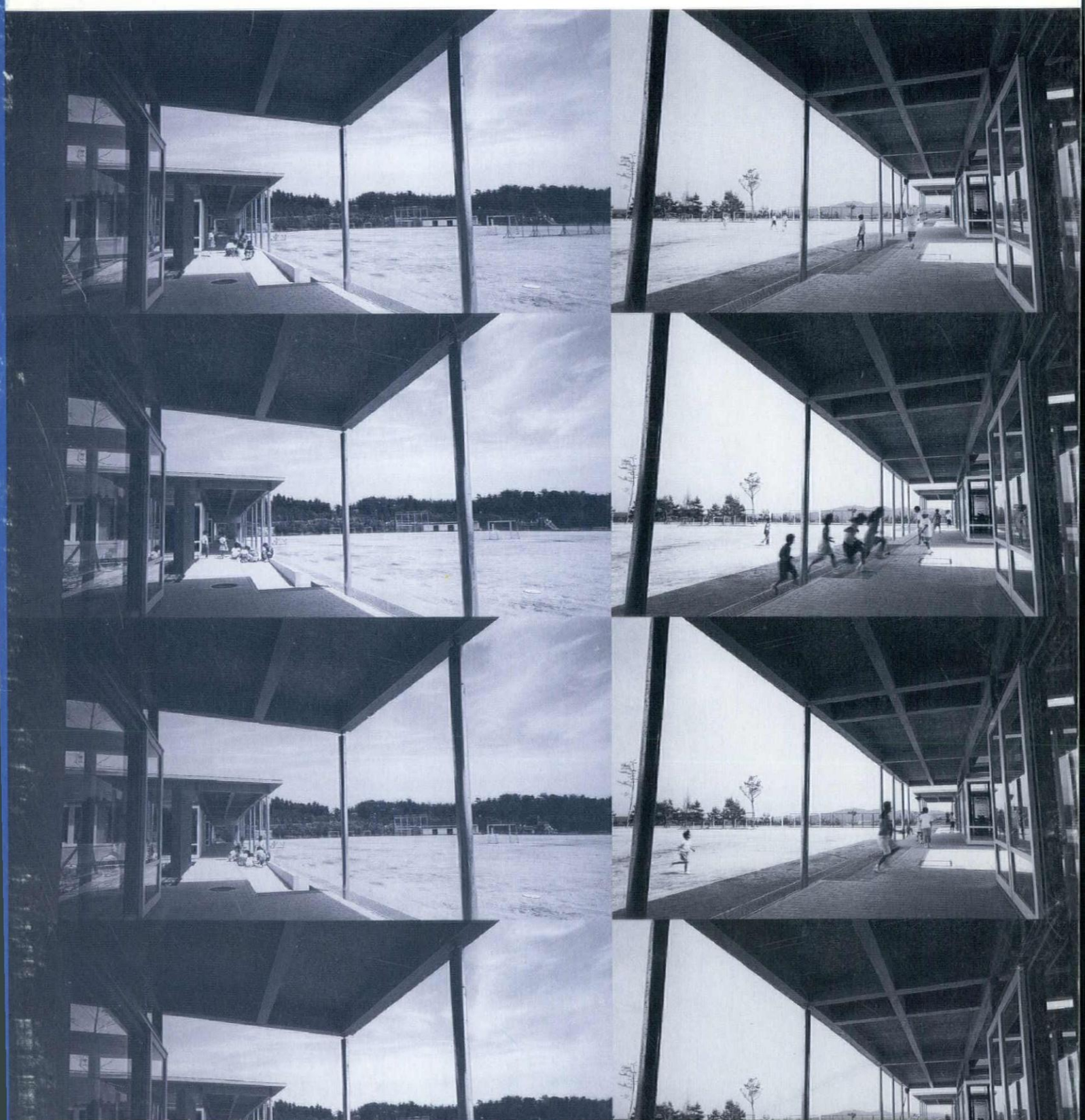
9807 Space Design

スペースデザイン ISSN 0563-0991
第406号1998年7月1日発行
毎月1回1日発行
昭和40年2月5日第三種郵便物許可

SD

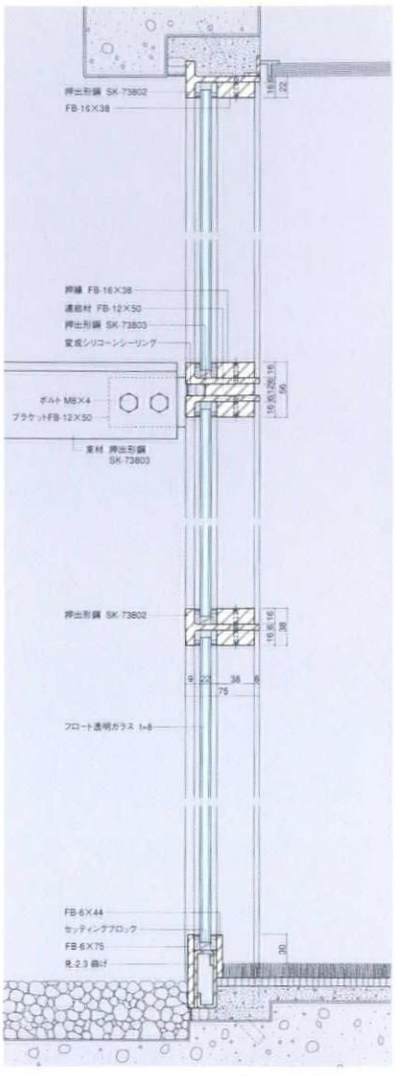
シーラカンス
12年間の活動と次なる展開に向けて

Coelacanth Architects:
Works of Twelve Years and
Steps to the Future



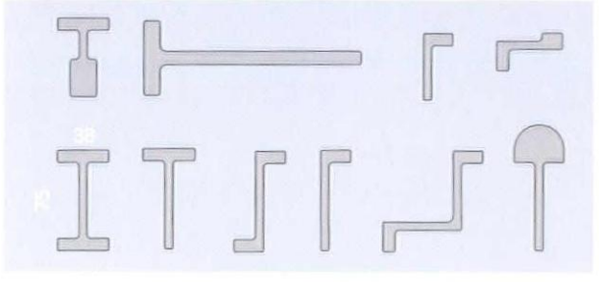
Monthly Journal of Art and Architecture















時代が求めるファサードを
スチールという素材で表現

NECESS St 3875

建築の外装デザインにおいて、ガラスによる透明感のある表現は、近年、構造設計や施工方法、新素材の開発などの技術革新により、さまざまな形で具現化されています。YKK APでは、この様なデザインを可能とする新技術や新素材を常に研究し、新しい商品を生み出しています。その中で「スチール」という古くからある素材を改めて見直してみました。そして、鉄の持つ強度、耐火性などの魅力ある特長を活かし、開発したサッシシステムが「NECESS St 3875」です。熱間押出成形による専用形鋼は、既存形鋼との組み合わせが自由にできるシンプルな断面形状です。シャープでありながらも存在感を持ち、スリムでありながらも重量感が感じられるものを目指し、優れた材料特性とも相まってデザイン自由度の高いシステムとなっています。

■仕様

・表面処理　最下層：電気亜鉛メッキ処理
下地塗装：エポキシ系錆止め塗料
仕上げ塗装：ウレタン樹脂塗料

・バリエーション　FIXスクリーン
はめ殺し窓
外開き窓
外倒し窓
框ドア
フラッシュパネルドア

YKK ap
YKKアーキテクチュラルプロダクツ株式会社
東京都千代田区神田和泉町1
YKK APホームページ http://www.ykkap.co.jp/



都市の顔をつくる仕事。

都市の詩情をスクリーンのように映し出すカーテンウォール。
その多彩な表情のひとつひとつに私たちの技術が活かされています。
不二サッシは、都市景観を彩る、新しい建築文化
コミュニケーションスペースを創造してまいります。

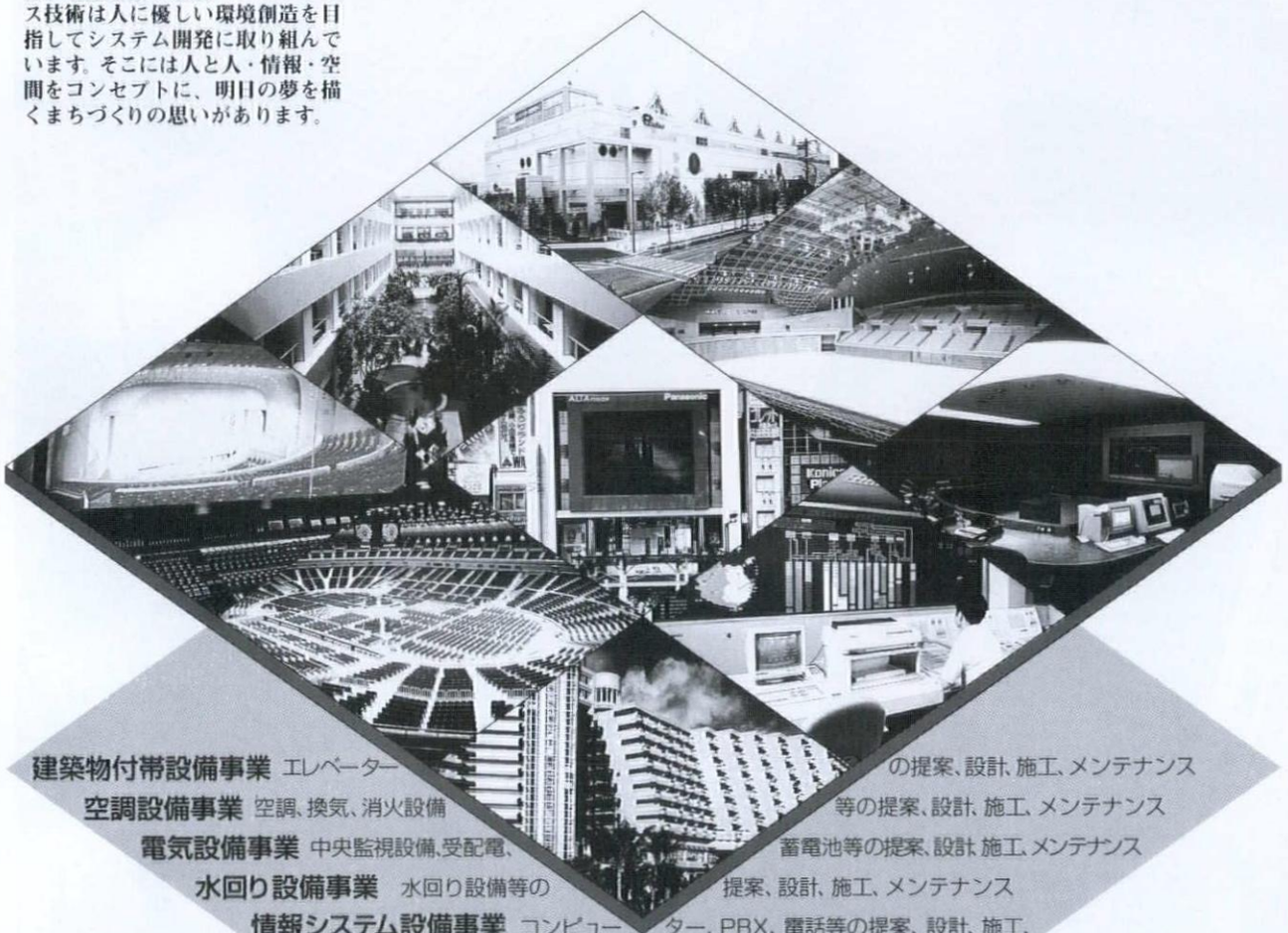
窓から夢をひろげていきます
不二サッシ

本　社 〒211-0012 川崎市中原区中丸子135 TEL.044-422-1111
東京本部 〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町9-8 TEL.03-5458-7024

National/Panasonic

私たちは快適をシステムにしてお届けします。

松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。



建築物付帯設備事業 エレベーター の提案、設計、施工、メンテナンス

空調設備事業 空調、換気、消火設備 等の提案、設計、施工、メンテナンス

電気設備事業 中央監視設備、受配電、 蓄電池等の提案、設計、施工、メンテナンス

水回り設備事業 水回り設備等の 提案、設計、施工、メンテナンス

情報システム設備事業 コンピューター、PBX、電話等の提案、設計、施工、メンテナンス

映像・音響設備事業 映像、音響システムの提案、設計、施工、メンテナンス

まちづくり事業 都市再開発、施設開発、環境創造の提案、設計

松下電器産業株式会社

建設システム営業本部	☎03-5500-7504
北海道支店	☎011-207-7722
東北支店	☎022-711-3551
新潟支店	☎025-246-1031
関東支店	☎0286-37-2241
神奈川支店	☎045-651-5051
建設システム営業本部中部支店	☎052-951-6010
長野支店	☎0262-26-3990
北陸支店	☎0762-23-1121
静岡支店	☎054-247-5155
建設システム営業本部関西支店	☎06-949-2111
中国支店	☎082-247-5272
四国支店	☎0878-26-1711
九州支店	☎092-431-1100
沖縄支店	☎098-869-2926

FLAPS、羽ばたくという意味をもつ新キーワード「AV & CC FLAPS」は映像・音響・情報通信システム・食品流通・照明・空調・水管理・搬送とさまざまな設備システムの融合により真の快適環境を求め夢の実現へと願いをこめて事業展開を進めていきます。

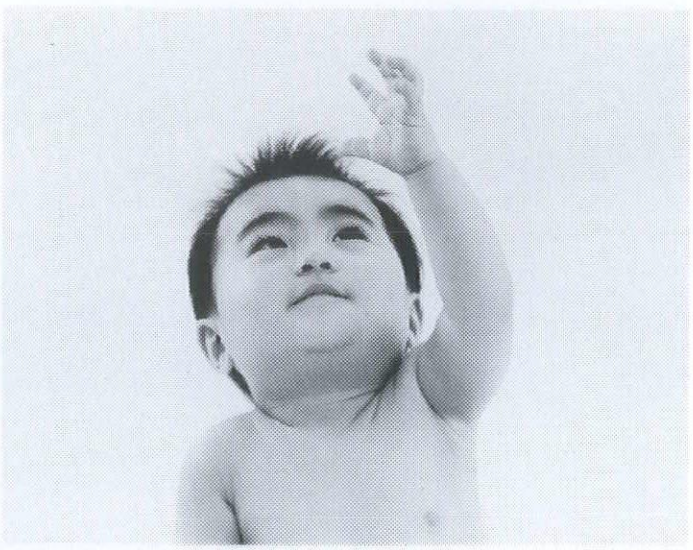


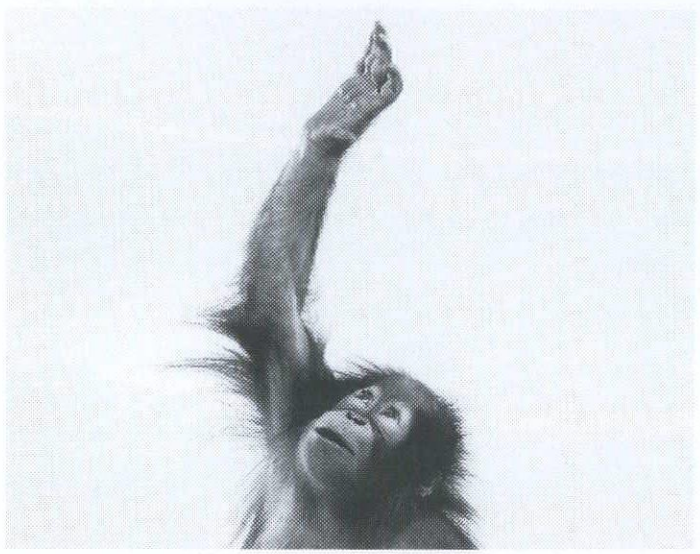
AV&CC FLAPS

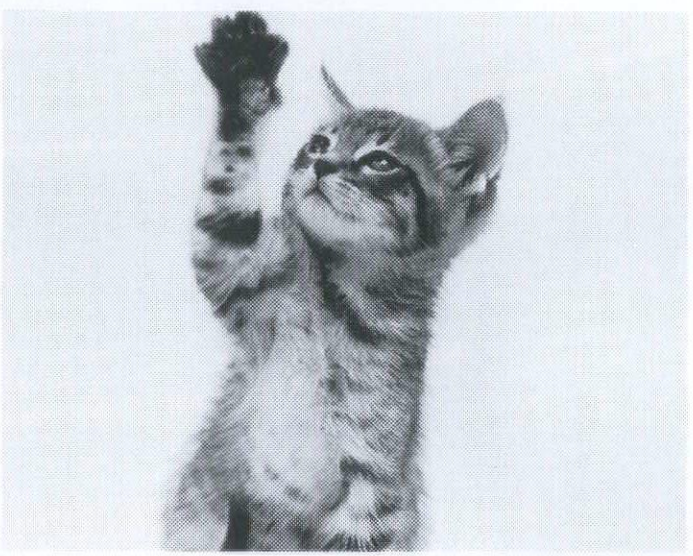
AUDIO VISUAL COMMUNICATION COMPUTER FOOD LIGHT AIR&AQUA PASSAGE SOFTWARE&SYSTEM

KANDENKO









大切なのは、
何かをつかもうとする心。

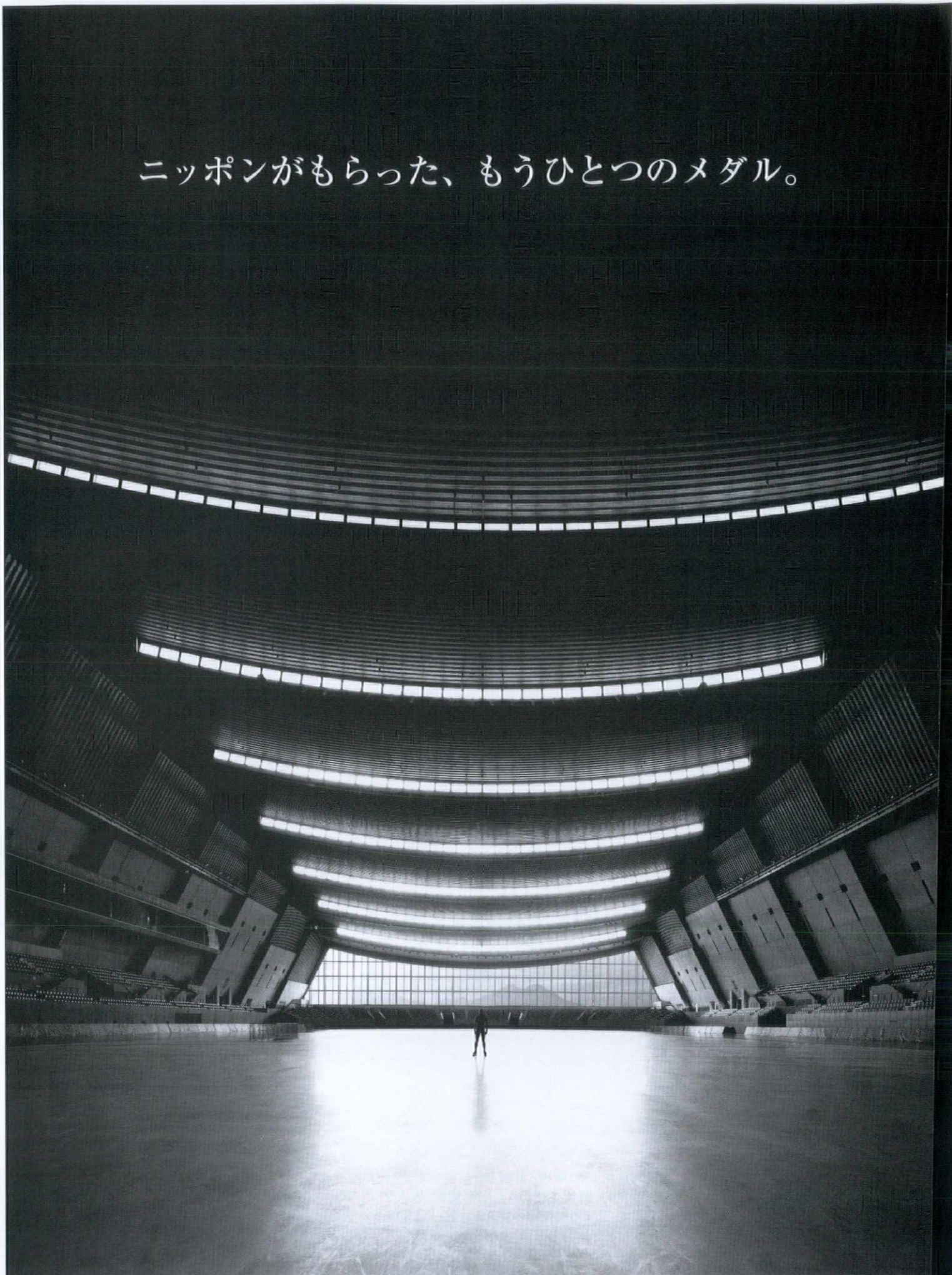
電気は光・熱・情報・音響などに姿を変え、私たちの暮らしを支えています。関電工はこうした電気を、住宅で、オフィスで、劇場で、工場で、環境への配慮と安全性を第一に具体的なシステムや設備のカタチでお届けしています。そしてつねに、さらなる可能性を広げようと、新たな夢を描き、日夜さまざまな研究を続けています。今までも、これからも、関電工の技術はいつもあなたの近くにいます。

いつも、人に優しい技術で未来へ。

関電工

本社：〒108-8533 東京都港区芝浦4丁目8番33号
☎：NTT 03(5476)2111 TTNet 03(4431)2111

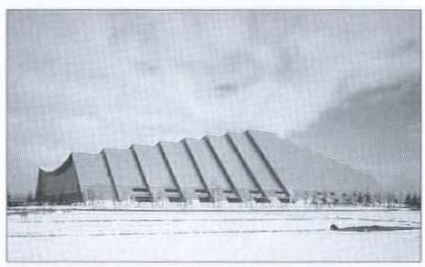
広告についてのお問合せの際は＜SDを見て＞と御明記願います


ニッポンがもらった、もうひとつのメダル。

数々の感動が生まれた。その舞台になれた。それだけで、十分幸せでした。でもその舞台のことまで、
見ていてくれた人々がいたのです。そのことが、とにかくうれしかった…。

ナガノのスピードスケート会場として、一躍その名が知られるようになった、「エムウェーブ」。
先頃、この建築が、世界の著名建造物が名を連ねる「英国構造技術者協会特別賞」を受賞しました。
この賞は、シドニーオペラハウス、ポンピドーセンター等、過去３０年間でわずか５６件というごく少数の建築・
土木作品に贈られてきた、「建造物の金メダル」といえるもの。日本からは、初めての選出となります。
評価の対象となったのは、ドームとは逆に真ん中の下がった、「木造吊り屋根構造」。Mの字が連なる
ようなデザインの中に、「空調負荷を少なく」「音響効果を優れたものに」「結露や露垂れのないように」等々、
最高のスケート競技の実現を願う、わたしたちの思いの丈が込められています。
でも実は、この構造、スケート以外の使い方をするときには、もっと威力を発揮します。なぜなら、真ん中が
下がっている分、空間の容積が小さくなり、気持ち悪い残響もないので、アリーナ全面を使うときはもちろん、
区切って小さく使うとき特に有利なんです。

建築とは、「建てること」ではなく「使われること」。わたしたちはそう考えています。だからこそ“M”ウェーブは、
“S、L兼用”にこだわってつくりました。これから長い時間を経て、いろんな人に使われ愛され続けるエム
ウェーブがそこにあるとしたら、それこそが、金メダルより価値があること。受賞後もその信念は変わりません。



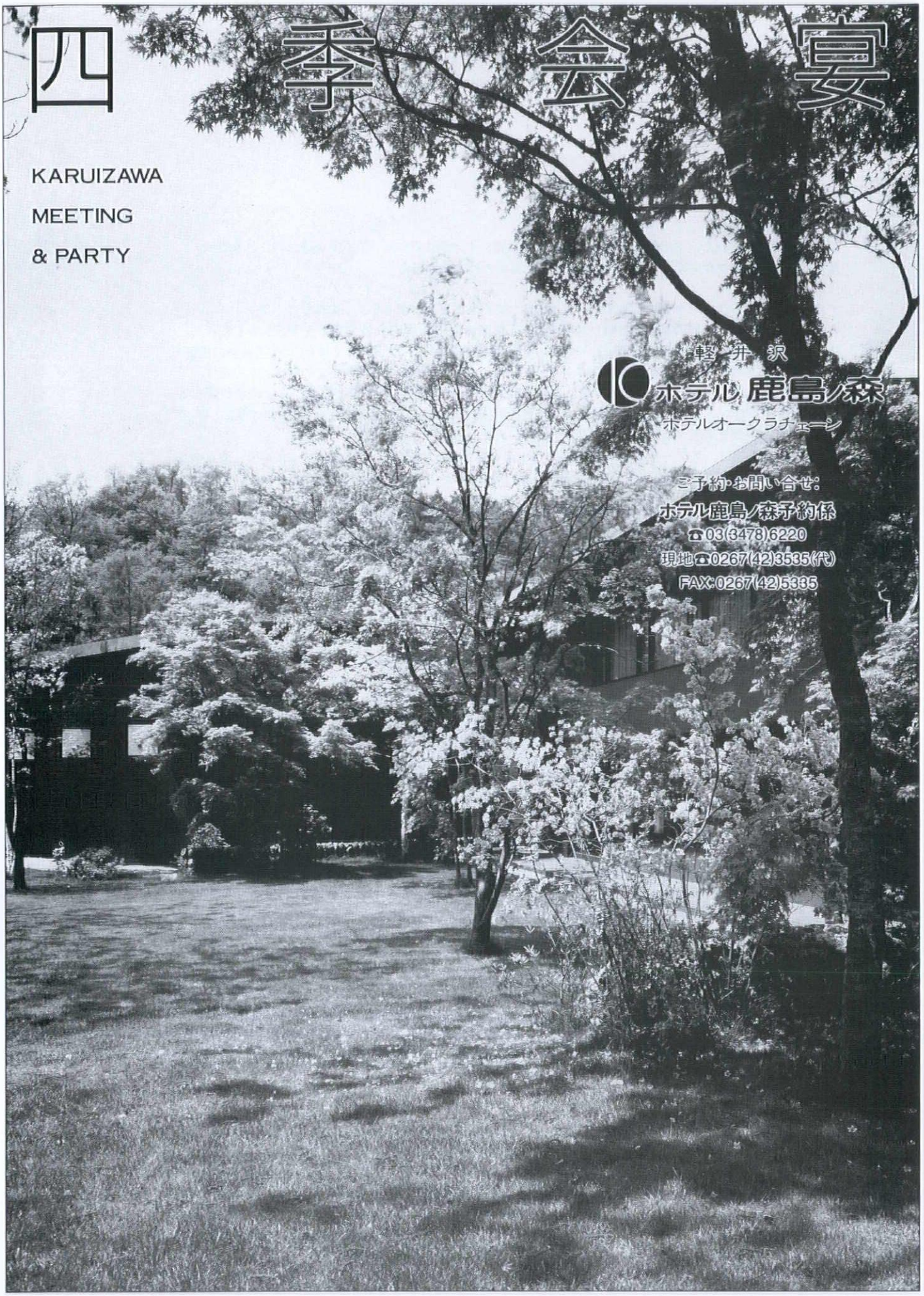
長野市オリンピック記念アリーナ「M wave（エムウェーブ）」
設計：久米・鹿島 ほかＪＶ　施工：鹿島 ほかＪＶ

エムウェーブは、日本建築史上初めて、『英国構造技術者協会特別賞』を受賞しました。

ある日、
その発想に
人は集まる。

鹿島

東京都港区元赤坂1-2-7 tel.03-3404-3311 〒107-8388
http://www.kajima.co.jp/



広告についてのお問合せの際は≪SDを見て≫と御明記願います



ロビーラウンジ

ようこそ、クラシカル・エレガントな世界へ。

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。
ドアマンに迎えられホテルに一歩脚を踏み込めば、
あなたの新しい物語がはじまります。

(客室&施設)

●ビジネス向き、女性向き、観光、ファミリー、個人滞在用と、目的に応じて選べる全404室。(シングル¥15,000～ ツイン¥25,000～) ●ジャグジー、ヒーティングルームなどを付帯した2,000㎡の"ガーデンプール"。●クラシカルなインテリアや絵画で統一された趣のあるロビー。●個性的なステンドグラス、パイプオルガンを配したチャペル〈3F〉。ガーデンプールの一角に設けられたガーデンチャペル〈5F屋外〉。厳粛な神殿(八幡殿=やひろでん)〈3F〉。●最大800名様まで可能な大宴会場(永代)、中、小、さまざまな8つの宴会場。●最新設備を完備したビジネスセンター。●心身の健康管理と増進、心の交流を目的とした新しいタイプのヘルスクラブ"ジ・イースト"。●都内初のホテル直結型多目的ホール"イースト21ホール"。

(レストラン&バー)

●フランス料理を主としたコンチネンタル料理……【プラスリー ハーモニー(2F)】
●本格的広東料理……【中国料理 桃園(2F)】
●アフリカンムードのメインバー……【バー エレファント(2F)】
●旬の素材が織りなす食の芸術……【日本料理 さざんか(21F)】
●四季折々の味覚…【鉄板焼 木場(21F)】●心に残る夜景…【カクテルラウンジ パノラマ(21F)】



チャペル

HOTEL East 21 TOKYO

地下鉄東西線『東陽町駅』より徒歩7分。
東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

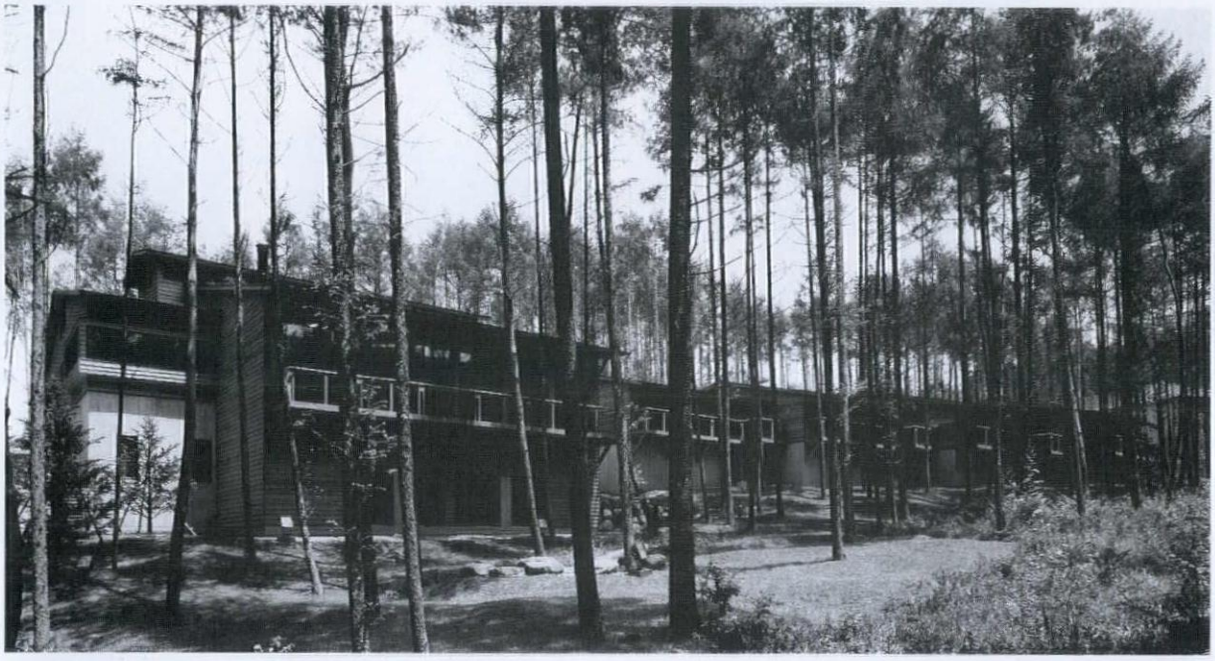
ホテル イースト21東京

〒135-0016 東京都江東区東陽6-3-3
TEL 03(5683)5683㈹ FAX 03(5683)5775



大興物産の海外建材シリーズ

No.6　木製品(ツーバイフォー,集成材)







大興蓼科山荘

大興物産は、米国ツーバイフォーシステム用各種部材をパッケージ輸入しており、
企画段階から調達・施工段階までトータルなコーディネーションを致します。

お問い合わせは、大興物産株式会社・海外調達部まで。
〒107-8318 東京都港区元赤坂1-5-31(新井ビル) TEL 03-5474-6054 FAX 03-5474-6386

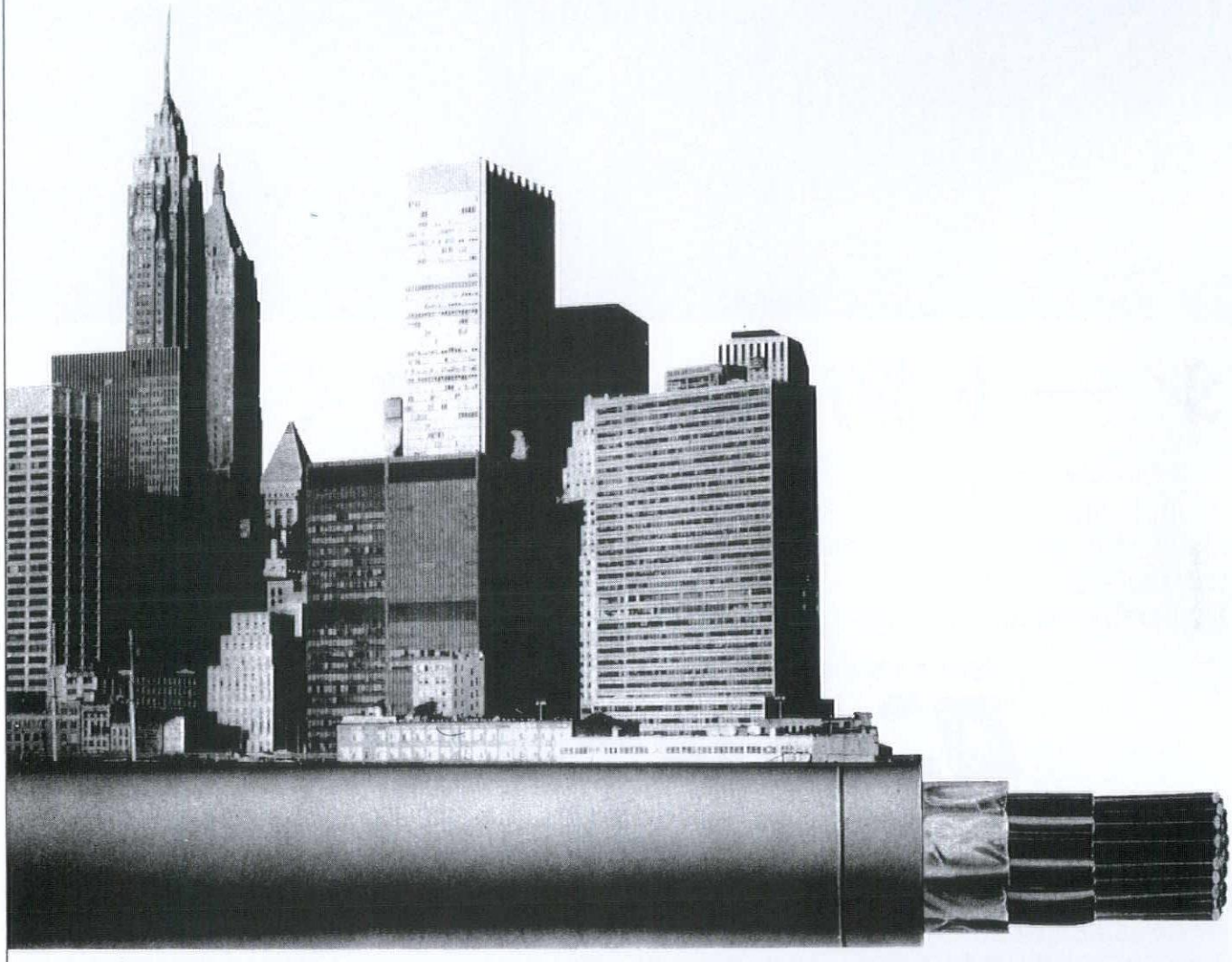
建設資機材の総合商社

鹿島グループ　**大興物産株式会社**

本　社　〒107-8307 東京都港区元赤坂1－6－4 安全ビル

本　社	☎(03)5474-6060 FAX(03)5474-6076	札幌営業所	☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074	四国営業所	☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
東京支店	☎(03)5474-6072 FAX(03)3423-1915	東北営業所	☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867	九州営業所	☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
横浜支店	☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996	関東営業所	☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719	シンガポール オフィス	☎65-3440590　FAX65-3446714
名古屋支店	☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179	北陸営業所	☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248		
大阪支店	☎(06) 762-5661 FAX(06) 762-1074	広島営業所	☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270		

ビルにも神経があります。



古いビルも最新のビルも確実な電気工事で支えています。

ビルにとって電気系統の働きは、人体にはりめぐらされた神経の働きに似ています。外部の情報を収集したり、整理して送るなど、まさにコントローラーの役目をもっているからです。とくにこれからの高層ビルは、複雑な建築技術が必要なだけに、ビルの中枢神経といわれる電気系統の安全性、合理性、経済性などは、ビルがより良く機能するうえで欠かすことのできない条件です。私ども弘電社は1本の配線にも、細心の注意を払って確実な設計、施工を行なっています。

電気工事のパイオニア

株式会社 弘電社

東京都中央区銀座5-11-10
TEL.03(3542)5111



シート防水が大きく飛躍

『ロンプルーフエース』は、物理的強度の高いガラスクロスを中間に積層し寸法安定性は抜群で(低収縮性)、耐オゾン劣化、耐紫外線などに対する耐候性、寒冷地における耐寒性、十分な水密性、さらに軽い、施工が簡単、歩行可能、補修が容易など優れた特長があります。熱融着だけでなく液溶着も可能になり、溶着がより一体化されました。改修工事では、既存の防水材を撤去しない方法(廃材を出さない)も適用でき、環境に優しい工法です。

塩化ビニル樹脂系シート防水材(JIS A 6008)

ロンプルーフエース

建物に優しい

他の防水工法と比較してロンプルーフエースの屋根は軽量化でき、建物に優しい工法です。

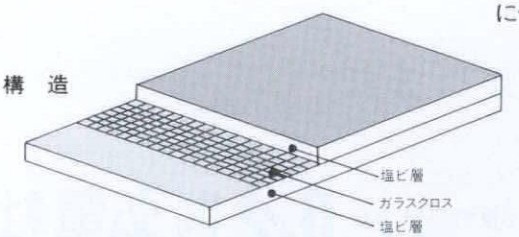
人間に優しい

熱融着だけでなく液溶着も可能。溶着がより一体化されました。しかも省力化が実現。人間に優しい工法です。

環境に優しい

改修工事では、既存の防水材を撤去しない方法(廃材を出さない)も適用でき、環境に優しい工法です。

構造



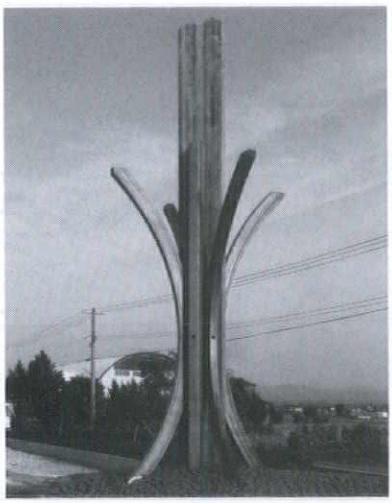
●規格 厚さ／2.0mm(2.5mm※)
※(受注生産品)
幅／1,830mm 長さ／10m
色数／PA-31 ホワイト
PA-33 グリーン
PA-34 グレー
PA-35 ライトブラウン

お客様の満足が私たちの目標です
ISO 9001 認証取得

ときめきの生活空間をサイエンスする
ロンシール工業株式会社

●本社 防水部／〒130-8570 東京都墨田区緑4-15-3 ☎03(5600)1866
●大阪支店／〒532-0011 大阪市淀川区西中島3-9-13大北ビル ☎06 (304) 2700
インターネットホームページアドレス http://www.lonseal.co.jp/

●営業所
札幌 ☎011(271)0411 大宮 ☎048(664)1511 静岡 ☎054(251)3712 広島 ☎082(211)2700
盛岡 ☎019(624)6925 土浦 ☎0298(32)8813 名古屋 ☎052(935)7063 高松 ☎087(831)4177
仙台 ☎022(265)4771 千葉 ☎043(246)5851 金沢 ☎076(292)1161 福岡 ☎092(472)5857
新潟 ☎025(243)3791 横浜 ☎045(662)7370 岡山 ☎086(231)6011 鹿児島 ☎099(258)6571



構造用集成材

Buildings of Wooden Nature

プランからお手伝いします

★企画・設計・製造・施工の一貫体制によりコストダウン、工期短縮を実現。木構造における新たなコンストラクターを目指します。

総合建設・構造用集成材製造販売（JAS認定工場）

つくる、たてる、かんがえる。

CHUTO

株式会社 中東

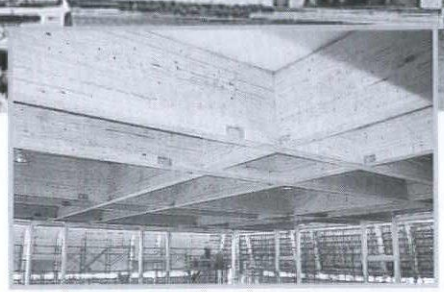
□工　場□
本社工場:石川県能美郡寺井町小長野ト113-2
(JAS認定工場LT-57号)
下荒工場:石川県加賀市柏野町イ51
(JAS認定工場LT-8号、LW-214号)

本　　社　石川県能美郡寺井町寺井た116-1
TEL(0761)57-0521　FAX(0761)58-5521
辰口支店　石川県能美郡辰口町三ツ屋口26-1
TEL(0761)51-6565　FAX(0761)51-6687
富山営業所　富山県富山市古志町6-39
TEL(0764)38-5333　FAX(0764)38-5718
仙台営業所　宮城県仙台市泉区南光台南3-9-6
TEL(022)251-1906　FAX(022)252-0250
大阪営業所　大阪府大阪市北区中崎1-4-21 タカヤマ北ビル301号
TEL(06)361-6607　FAX(06)365-8772

金物が見えないBVD工法
あらゆる金物工法のお手伝いをいたします。



鈴木木材工業本社社屋(佐世保市)



吉備高原都市小学校

業務内容

構造用大断面集成材工事・特殊木工事

① 設計支援　② 積　算　③ 設計、施工
④ 大断面集成材、LVLのプレカット　⑤ 大断面集成材用、取付け金具の製造販売　⑥ 大断面集成材の販売
⑦ デッキ材工法　⑧ パネル工法　⑨ BVD工法

株式会社 スギヤマ
〒501-0601 岐阜県揖斐群揖斐川町北方1826
TEL.0585-22-0422　FAX.0585-22-5008

HI-CITYへの思想。

それは「人と町のもっと知的な出会い」。日立は総合システム技術で取り組みます。

日立特約店

八洲電機株式会社

〒105-8686　東京都港区新橋三丁目1番1号
電話（03）3507－3711

支社・営業所
●関西（06）362－7671　●中国（082）247－8411　●岡山（086）422－1322
●京滋（075）351－8321　●千葉（043）224－4801　●茨城（029）264－2272
●長野（0263）36－7818　●鹿島（0299）92－5480　●延岡（0982）33－3799

たゆまぬ努力で、未来への新たな飛躍へ。



株式会社 **大本組**

本店／岡山市内山下1丁目1番13号
☎086−225−5131
本社／東京都千代田区永田町2丁目17番3号
☎03−3593−1511

舞台照明設備 製作／施工／メンテナンス

MATSUMURA

明かりを通して文化に貢献する



株式会社 松村電機製作所

中国支店 〒730-0051 広島市中区大手町3-1-7 ユナイテッドエムケイビル TEL.082-245-8161
本　　社 〒113-0031 東京都文京区根津2-12-1 TEL.03-3821-6161
東京・関西・中部・九州・東北支店，札幌営業所



必要な場所があります



できることなら
ずっと
笑顔を見ていたい。
そんな空間創りを
サポートします。

エコロック

倉敷化工株式会社
〒712-8555 岡山県倉敷市連島矢柄4630
TEL：086-460-0177 FAX：086-466-2600
事業所：仙台・東京・名古屋・大阪・岡山・広島・福岡

CHUDENKO

確かな歩み未来まで……

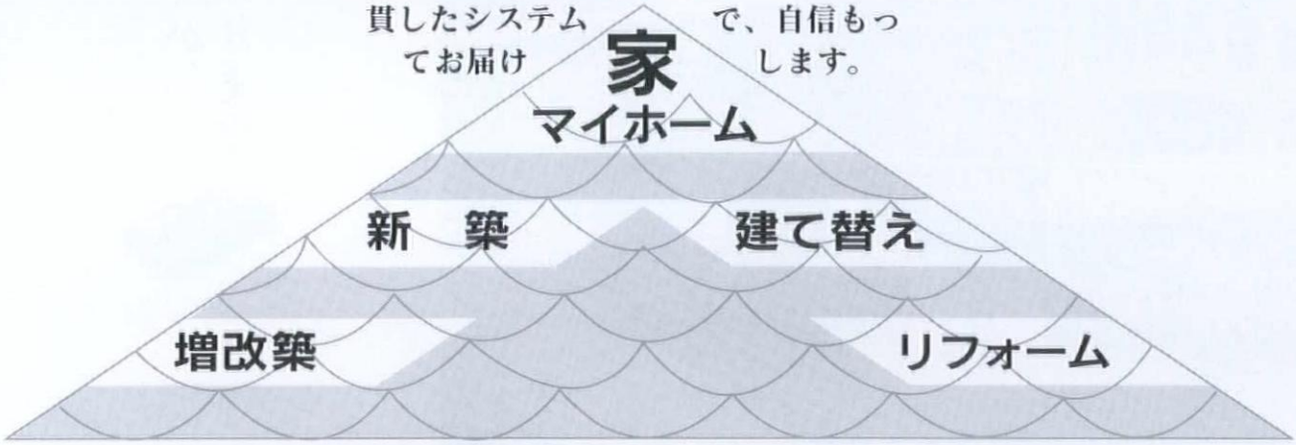


総合設備の設計施工　電気・情報通信・計装・空調・給排水・水道施設

株式会社 中電工
本店／広島市中区小網町6番12号　TEL (082)291-7411
支店／広島・岡山・山口・島根・鳥取・東京・大阪

● 安心　● 信頼　● 実績

地域に育てられて35年。おかげさまで千五百軒の実績をつませていただきました。これまで、数え切れないお客様と接して、多くのことを教えられたことが当社の財産となっております。今後もモットーである「お客様に喜ばれる家づくり」を守り、ご相談からプラン、施工、アフターサービスまで一貫したシステムで、自信もってお届けします。



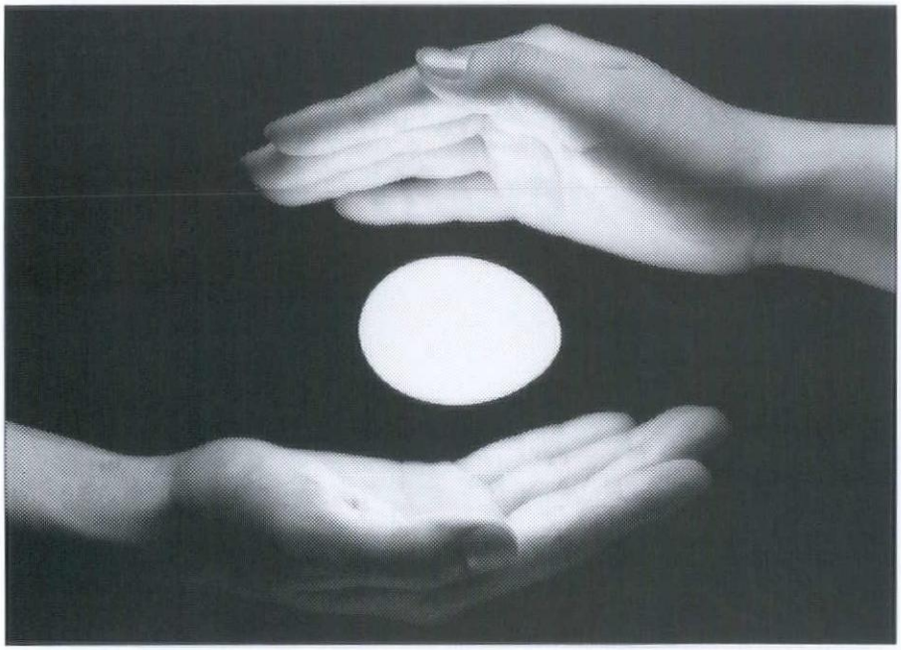
お客様に喜ばれる家づくりをめざす総合プランナー

株式会社 親松工務店　オヤマツホームサービス

〒215-0016　川崎市麻生区早野515　TEL 044-988-0492
〒225-0024　横浜市青葉区市ケ尾町719　TEL 045-973-3249

SANKEN
ENVIRONMENTAL ENGINEERING

設備は手にとって選べません。
だから……



大切なのは、技術の信頼性。
豊富な実績と、
そのなかで培われた
確かなノウハウです。
私たち三建設備工業は、
求められる環境を
信頼の技術で創りだします。

望まれる環境を、信頼の技術で。

三建設備工業株式會社

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛎殻町1-35-8 TEL.03-3667-3431

最先端のハーモニー。

さまざまな先端技術が調和して、「快適」という名のハーモニーを奏でる。トーエネックのエンジニアリングは、まさにそんなイメージです。電気設備をはじめ、情報通信・冷暖房・空調・防災設備など…。システム設計から施工・保守まで、高度で総合的な技術力を活かし、全国主要都市を拠点に幅広いネットワークでみなさまにお応えしています。オフィスビルやマンション、ホテル、工場、さらにはコミュニティ施設。あらゆるスペースを、心地よい技術のハーモニーで包み込みたい。インテリジェント&ヒューマン。私たちは、トーエネックです。



先端技術で、システムする。
TOENEC

株式会社 トーエネック

本　店/名古屋市中区栄1-20-31 〒460-0008 ☎(052)221-1111
東京本店/東京都豊島区巣鴨1-3-11 〒170-0002 ☎(03)5395-7111
大阪本部/大阪市淀川区新北野3-8-2 〒532-0025 ☎(06) 305-2181

快適さは…安全、確実が基本。

快適な環境づくりに、豊かな経験。



●技術と伝統の…
内線工事■外線工事

東光電気工事株式会社

本社　〒101-8350 東京都千代田区西神田1-4-5　TEL.(03)3292-2111

支社所在地／札幌・仙台・大宮・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・福岡

SD

バックナンバー

鹿島出版会
東京都港区赤坂6-5-13
電話：03-5561-2550
振替：00160-2-180883
Home Page Address:
http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm
年間定期購読料
26,000円（特別定価号＋消費税、送料込み）

SDバックナンバー常備店
［東京］
八重洲ブックセンター
03-3281-8203
三省堂本店（神田）
03-3233-3314
書泉ブックマート
03-3294-0011
紀伊国屋本店 03-3354-0131
大盛堂書店 03-3463-0511
［大阪］
旭屋書店本店
柳々堂 06-443-0167
［札幌］
旭屋書店 011-241-3007
［横浜］
有隣堂本店 045-261-1231
［京都］
大龍堂書店 075-231-3036
［大学生協内書店］
東北工業大学　東京工業大学
法政大学工学部　早稲田大学理工学部　関東学院大学

9607　再考 建築家土浦亀城　1988円
戦前、戦後の作品を紹介しながら、昭和初期モダニズムにおける土浦の再評価を試みる。作品：土浦邸（第1, 2）［**スタジオ建築計画の集住考**］最新作 FH-HOYA-Ⅱを取りあげながら彼らの設計思想を紹介

9608　マイケル・ホプキンス　2447円
「構造上の表現がクリアな」主要作品を紹介。ホプキンス自邸、イギリス国税局新庁舎、ブラッケン・ハウス、他［**光と空間の夢を訪ねて：ドナルド・ジャッドとウォルター・デ・マリア**］文＝南條史生

9609　デンマーク・モダンハウスの最盛期　1988円
デンマークの50-60年代の住宅を紹介。キンゴー・ハウス、ヨーン・ウッツォン、他［山上の都市と塔の家――イエメン：都市と住居の形態学］文＋写真＝芦川研究室

9610　中世の光と空間　1988円
フランス中南部のロマネスク建築を紹介。ル・トロネ修道院、他。写真＝堀内広治、文＝羽生修二、他［**ふたつの都市考〈近代都市と芸術展〉〈未来都市の考古学展〉**］［**97の椅子プロジェクト**］

9611　栗生明　2548円
彼のみごとなディレクションに裏付けられた、コラボレーションの結晶を紹介。岡崎市美術館、植村直巳冒険館、カーニバル・ショーケース、他。［**田窪恭治のサン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂プロジェクト3**］

9612　SDレビュー1996　1988円
第15回SDレビュー誌上発表。ユストス・ビザール＋ベーター・ルーゲ、高橋昌巳、城戸崎和佐建築設計事務所、他［**伊丹潤の近作より：石彩の教会、木の教会、土の教会**］

9701　葉祥栄：カリステニクス　3059円
地方自治体主体のまちづくりプロジェクトを紹介。事例：くまもとアートポリス、クリエイティブTOWN岡山、長崎アーバン・ルネッサンス、白石メディア・ポリス、他

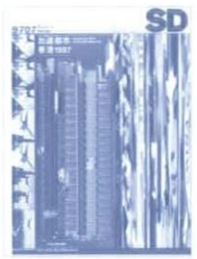
9702　木を生かした架構と空間　1988円
木の性質を生かした国内外の25例を紹介。金山の火葬場、モルジュのホール、他。文＝川口衛、今川憲英［**アジアを熱くする新世代建築家たち：IAA国際会議より**］アジアの都市・建築の現在、未来を問う。

9703　ミニマル・スペース・アーキテクチュア　1988円
ミニマルでシンプルな建築表現が特徴的な、4人の建築家を紹介。ジョン・ポーソン、小川晋一、岸和郎、石田敏明。文＝丸山洋志、他［**東京国際フォーラム**］写真＝堀内広治

9704　拡張するデジタル・デザイン　3059円
コンピュータとネットワーク技術による、建築・都市の新しい環境を造り出すプロジェクトを紹介。文＝田島則行、山口重之、桂 英史、マイケル・ベネディクト、藤幡正樹、久保田晃弘、坂村健、奥出直人、両角光男、他

9705　アフラ＋トビア・スカルパと「ベネトン」　2000円
アフラ＋トビア・スカルパによるベネトンのオフィス社屋、ショップなどを紹介。文＋インタビュー＋写真＝豊田博之［**都市ビサとカルマッシの仕事**］カーサ・ムーティ、ヴェルディ劇場修復計画など

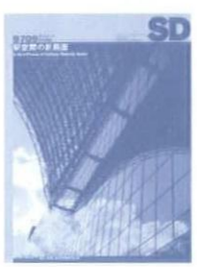
9706　柳澤孝彦：劇場の空間構成　2000円
新国立劇場、東京オペラシティビル、三鷹市芸術文化センター、他。文＝長友宗重、本杉省三　対談＝川向正人×柳澤孝彦［**装飾を排したフォルムデザイン――スウェーデンのグッドデザイン展より**］



9707
加速都市・香港
「速度」をテーマに激動する香港の姿を捉える。参加作家＝アラン・チャン、タイクーングラフィックス、漫川敏、江頭慎、他　監修＝村松伸、小嶋一浩、木下光　文＝松田直則
2000円



9708
R.ヴェンチューリ＋D.スコット・ブラウン：90年代の仕事
日本での処女作〈メルバルク日光霧降〉を中心に90年代の作品を紹介。シアトル美術館、他。文＝香山壽夫、安山宜之、他［**岐阜県営北方住宅プロジェクト**］談＝磯崎新
2400円



9709
駅空間の新曲面
コミュニティ性を重視した駅を紹介。JR矢吹駅、JR大曲駅、他。国際コンペとして衆目を集めたJR京都駅も併せて紹介する。文＝宮林敬幸、饗庭孝男、他。対談＝横尾忠則×原広司　写真＝大野繁
2000円



9710
ガラス建築
光学的、構造的特性など、ガラスの性質を幅広く採り入れた作品を紹介し、ガラス建築の現在と今後の可能性を探る。ガラス建築23作品、他。座談会＝伊東豊雄×難波和彦×今川憲英、他
3000円



9711
隈研吾
ポストモダン以降の建築における言説を続けてる隈研吾。今年建築学会賞、ヴェネディクタス賞を受賞した近作を紹介する。慰霊公園、他。文＝飯島洋一、グレッグ・リン、対談＝横文彦×隈研吾
2800円



9712
SDレビュー1997
第16回SDレビュー誌上発表。建築研究室高安重一事務所＋佐久間達也＋橋爪宏直＋重富博之、川人洋志、藤本壮介、松澤穣、他。［**光と色が彩る空間――チェコのガラスアーティストたち**］写真＝鈴木豊
2000円



9801
SDレビューの15年
これまでのSDレビューを一挙に振り返る。出展作、建築界での意義などを再確認し、今後の方向性を探る。文＝槇文彦、原広司、飯島洋一、中筋修、他。座談会＝元倉眞琴＋鈴木了二＋栗生明＋小嶋一浩
2800円



9802
都市へ向かう透明性：スイス・ドイツ語圏の建築
スイス建築の背景、建築の生まれる文脈を捉えながらその魅力を探る。文＝貝島桃代、ハンス・フライ、他。往復書簡＝篠原一男×ヘルツォーク＆ド・ムロン
2200円



9803
表層革命再考：チェコ・キュビズム・ロンドキュビズム建築
現存するプラハのキュビズム建築を撮り下ろし写真により紹介する。撮影＝鈴木豊。［**香山壽夫のドローイングと空間**］文＝香山壽夫、八木幸二、鈴木恂、青木淳
2000円



9804
次世代のマルチ・アーキテクトたち
30歳代の若手建築家たちの作品と創作活動を紹介し、時代性を浮かび上がらせる。インテンショナリーズ、みかんぐみ、他。［**デスクトップ・コミュニティ**］
2000円



9805
空間演出の最前線
建築家とデザイナー、アーティストとのコラボレーションの具体例を紹介。藤江和子、中村綿平、新宮晋、他。［**カーロとリベラの家**］**ファン・オゴルマンの建築とメキシカン・モダン**
2000円



9806
風景創出の現在：ランドスケープ・アーキテクトの挑戦
「公共的な価値」によって自然の風景と区別され、積極的な社会性が意図されている事例を紹介。佐々木葉二、プレイスメディア、三谷 徹、登坂 誠、他。
3000円

SDレビュー 1998

第17回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

SD Review 1998　The 17th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings

[主催]

鹿島出版会SD編集部

[審査員]

林 昌二（建築家）
播 繁　（構造家）
岸 和郎（建築家、京都工芸繊維大学助教授）
團 紀彦（建築家）

[募集対象]

実施を前提とした設計中ないしは施工中の建築、屋外空間、インテリア。国外に建つものも含める。但し、応募の時点で既に完成しているもの、雑誌などに発表済みのもの、実施の見込みが全く無いもの、コンペの応募作品（公開、指名、入選、落選を問わず）は対象外とする。応募作品点数は原則として1人1点に限る。

[応募者の資格]

特になし。

[提出物]

プレゼンテーション：

1. 設計意図を説明するために必要と思われる図面、写真等特に制約はなく、各自選択すること。
   表現方法は自由であるが、プレゼンテーションそれ自体の技術や密度は、審査に当たっての主要な評価の対象とはされない。
2. プロジェクト名、建築用途、施主名（事業主体名）、工事予定期間、主体構造、主要仕上げ材料、建築面積、延床面積。
3. 400字以内の設計趣旨文（省略してもよい）

以上をA3判用紙（420×297mm）4枚以内にまとめたもの、パネル化は不可（クリアファイル等に入っている場合は審査時に取り外します）。設計者氏名、設計組織名は一切記入しないこと。2、3は添付書類に含めず1と共にA3判用紙に記述することに注意。

添付書類：

プロジェクト名、応募者（＝設計者）名・フリガナ、応募者の年齢、職業、勤務先名とその住所（以上、組織の場合は、その担当者について明記）、応募者への連絡先（自宅か勤務先か明記のうえ、郵便番号、住所、電話、FAX番号）、共同設計者名、設計者略歴（入選の際、展覧会パンフレットに掲載いたします）。以上の事項をA4判用紙に記載したもの。

[応募の受付]

・開始　1998年6月23日（火）
・締切　1998年7月1日（水）

郵送または持参のこと。（持参の場合は平日の午前11時から午後5時まで。郵送は当日消印有効）

受付後、受領通知を発送いたします。提出後7日以内に通知が届かない時はSD編集部へお問い合わせ下さい。

[提出先]

〒107-8345　東京都港区赤坂6-5-13
鹿島出版会SD編集部　SDレビュー係
TEL 03-5561-2555　　FAX 03-5561-2565
（地下鉄千代田線赤坂駅より徒歩5分　鹿島建設赤坂別館4F）

[結果通知]

前記の審査員により15点前後が選抜された後、入選者のみに7月中旬までに書類にて通知する。

[提出物の返却]

提出物（図面、添付書類等）は、1998年8月18日（火）から9月25日（金）までの平日午前11時から午後5時までの間に、鹿島出版会SD編集部まで直接受取りに来られた場合に限り、返却します。但し、梱包材、クリアファイルなどは返却できません。

[入選者の出展]

入選者は通知後、指定期間（約40日間）以内に、展覧会に出展するための図面、模型、その他のプレゼンテーションを製作し、後日指定の日時、場所に搬入する。この作品は、SD1998年12月号に掲載され、誌上発表される。入選者には製作費用として、一律5万円が支払われる。

[SDレビュー1998入選展]

東京展
期間：1998年9月16日～9月27日（予定）
会場：東京都渋谷区猿楽町18−8
代官山ヒルサイドテラスF棟　ヒルサイドフォーラム

大阪展
期間：1998年10月1日～10月11日（予定）
会場：大阪府南河内郡河南町東山
大阪芸術大学芸術情報センター

[誌上発表]

SD1998年12月号（予定）

[鹿島賞、朝倉賞、SD賞、新人賞]

入選展に展示された作品の中から、鹿島賞、朝倉賞、SD賞、新人賞を選び記念品を贈呈します。
発表はSD1998年12月号誌上にて行う予定。

[お問い合わせ]

SDレビュー1998についての御質問は、SD編集部へハガキまたはFAXにてお問い合わせ下さい。
宛先は提出覧参照のこと。

応募締切 7月1日（水）

9807 Space Design

スペースデザイン 第406号
1998年7月号
都市・建築・芸術の
総合誌

SD

5 特集
シーラカンス
12年の活動と次なる展開に向けて

23
シーラカンス：
1986-1998

28
インタビュー
インタビュアー=西沢立衛

28
工藤和美
堀場 弘

45
小泉雅生
小嶋一浩
三瓶満真

73
伊藤恭行
宇野 享
日色真帆

85
シーラカンス建築用語集

134
掲載作品建築データ

26
可能態としてのシーラカンス
シーラカンスは21世紀の爽やかな風になれるのか
原 広司

44
世界はエーテルで満ちている
シーラカンスにおけるスペースブロックの概念
土居義岳

72
インタビュー：
強い意志をもった建築へ向けて
山本理顕

6
吉備高原小学校
プロジェクトTS
大阪市水上消防署
(仮称)外ヶ岡交流拠点施設
福岡市立博多小学校
吉備高原小学校
(仮称)出雲市地域交流センター
ハウスジャパン中間実証住宅-C棟

58
スペースブロック上新庄
(仮称)鴻巣市文化センター
吉備高原幼稚園
K総合学科高校
WHITE/BLUE 西脇の住宅
(仮称)愛知淑徳大学新講議棟
朝日新聞社秋田支局

93
大阪市水上消防署仮設庁舎
千葉市立打瀬小学校
ART HUT SD
那須の別荘
氷室アパートメント
BUOYANT(伊豆の別荘)

108
永福の住宅
下鴨の住宅
鎌倉の住宅
北山コンドミニアム
GIMMICK(計画案)
星田アーバンリビングコンペ案

110
CREVASSE(井草プロジェクト)
ハウスオブカップコンペ案
インスタントシフト(東高現代美術館展覧会)
西麻布WHOOPEE!
パチンコパーラーコンペ案
江古田アパートメント
TRANS

113
桜台アパートメント／SELFISH
大阪国際平和センター(ピースおおさか)
幕張新都心住宅地基本構想+基本計画
マインズ北堀江
小松フォークリフト神戸工場
SELFISH(恵比寿プロジェクト)
ais(アイス)

122
大阪ガス NEXT21 303住戸
ヤクルト独身寮コンペ案
新潟文化会館コンペ案
千葉ニュータウン 7-8駅圏都市景観計画策定調査

126
大田区区民休暇村+校外施設コンペ案
横浜大桟橋コンペ案
埼玉環境科学国際センターコンペ案
HOUSE TM
空の中庭
狛江の住宅
プラモデル住宅
HOUSE YG

132
K-PROJECT 基本計画+基本設計
-スコープ(ミラノトリエンナーレ1996出品)
GJ LEAGUE 94(スペースブロックワールド)
下山田小学校コンペ案
広島市西消防署コンペ案
浪速消防署コンペ案
麻布大学キャンパス計画コンペ案

138 連載：森島紘史の起こし絵図——日本のかたち紙考 森島紘史
7. 七夕

141 連載：世界の現代美術館探訪——美術館は生まれ変わる 丹下敏明
11. 都市に息吹を吹き込む美術館

150 書評

152 メトロポリタン・ライブラリー

155 海外レポート： 上原雄史
ベルリン発、コールハース オランダを語る

156 海外レポート： 桑原 茂
ブロック・ケンチク——ニューヨーク長老教会

159 海外レポート： 吉良森子
都市計画とランドスケープデザインに境界はない——ボルネオ・スポールンブルグ島開発

160 ニュース：
第2回設計方法シンポジウム「建築設計におけるネットワークコラボレーションの可能性」

162 お知らせ

編集長：相川幸二
編集スタッフ：
寺田真理子 高木伸哉
大野由美 飯塚りえ
高森和志
制作協力：久世 健
勅使河原馨／guild
(有)シンクス
アドバイザー：伊藤公文

発行人：平田賴那
編集人：長谷川愛子

発行所：鹿島出版会
〒107-0052 東京都港区
赤坂6丁目5番13号
電話：
(03) 5561-2551 営業
(03) 5561-2555 編集
FAX：
(03) 5561-2561 営業
(03) 5561-2565 編集
TELEX：
02422467 KAJIMA J
振替00160-2-180883番
Home Page：
http://www.kajima.co.jp/
group/publish/index.htm

印刷・製本：
凸版印刷株式会社
〒174-0056 東京都板橋区
志村1丁目11番1号
電話：
(03) 3968-5111 案内

取次店：トーハン・日販・
大阪屋・太洋社・
栗田出版販売・誠光堂・
鈴木書店・西村書店・中央社

特別定価：2,600円
[本体2,476円]

年間直接購読料：26,000円
特別定価号+送料込み

表紙：吉備高原小学校
表紙写真：平井広行
表紙デザイン：小泉均

9807 Space Design

Monthly Journal of Art and Architecture
No.406
July 1998

SD

5 **Special Feature:**
Coelacanth Architects:
Works of Twelve Years and Steps to the Future

23
Coelacanth: 1986-1998

28
Interview
Interviewer: Ryue Nishizawa

28
Kazumi Kudo
Hiroshi Horiba

45
Masao Koizumi
Kazuhiro Kojima
Mitsumasa Sampei

73
Yasuyuki Ito
Susumu Uno
Maho Hiiro

85
The Coelacanth Architectural Vocabulary

134
Architectural Data for Works Introduced

26
The Potential of Coelacanth:
The Coelacanth As a Trailblazer in the 21st Century?
Hiroshi Hara

44
An Ether-filled World:
The Coelacanth Concept of Space Block
Yoshitake Doi

72
Interview:
Toward a Strong-willed Architecture
Riken Yamamoto

6
Kibikougen Elementary School
Project TS
Suijo Fire Station of Osaka City (Marine)
(Temporary Name) Sotogaoka Exchange Forum
Hakata Elementary School
Kibikougen Elementary School
(Temporary Name) Izumo-City Area Exchange Center
House Japan Experimental Houses (House-C)

58
Space Blocks Kamishinjo
(Temporary Name) Konosu-City Cultural Center
Kibikougen Kindergarten
K Comprehensive High School
"White/Blue" House in Nishiwaki
(Temporary Name) New Lecture Wing, Aichi Syukutoku University
Asahi Shimbun Akita Bureau

93
Suijo Fire Station of Osaka City
Temporary Building (Marine)
Utase Elementary School
Art Hut SD
Villa in Nasu
Himuro Apartment
Buoyant-Villa in Izu

108
House in Eifuku
House in Shimogamo
House in Kamakura
Kitayama Condominium
Gimmick
Hoshida Urban Living Competition

110
Crevasse (Igusa Project)
House of Cup Competition
Instant Shift (Toko Contemporary Museum)
Nishiazabu Whoopee!
Competition for Design of Pachinko Parlor
Ekoda Apartment
Trans

113
Selfish-Sakuradai Apartment
Osaka International Peace Center
Makuhari New Inner City Residential Area Basic Plan
Mines Kitahorie
Kobe Factory/Komatsu Forklift
Selfish-Ebisu
a.i.s

122
Osaka Gas Experimental Housing Next 21, 303
Yakuruto Bachelor's Dormitory Competition
Niigata Cultural Center Competition
Urban Environment Research for Chiba New Town 7-8 Station Area

126
Ota Ward Citizens' Village Competition
Yokohama Main Pier Center Competition
International Environmental Science Research Center Competition
House TM
Yushima Project
House in Komae
House YG

132
K-project
-scope/ Triennale di Milano 1996
GA Japan League 1994 (Space Block World)
Shimoyamada Elementary School Competition
Hiroshima-Nishi Fire Station Competition
Naniwa Fire Station Competition
Azabu University Campus Plan Competition

138	The Okoshi-e of Hiroshi Morishima: Forms of Japanese Tradition in Paper 7. Star Festival	Hiroshi Morishima
141	"Museums of the World" Series: The Museum Transforms 11. Museums That Breathe Life into the City	Toshiaki Tange
150	Book Review	
152	Metropolitan Library	
155	Topics Abroad: Rem Koolhaas Speaks on Dutch in Berlin	Yushi Uehara
156	Topics Abroad: Blob Architecture "New York Presbyterian Church"	Shigeru Kuwahara
159	Topics Abroad: There is no Border Between Urban Design and Landscape Design	Moriko Kira
160	News: 2nd Design Methods Symposium, "Possibilities of Network Collaboration for Architectural Design"	
162	Announcements	

Chief Editor: Koji Aikawa
Associate Editors:
Mariko Terada
Shinya Takagi
Yumi Ohno
Rie Iizuka
Kazushi Takamori
Production Cooperation:
Takeshi Kuze
Kaoru Teshigahara/guild
Digital Studio SINKS
Adviser: Kobun Ito

Publisher: Kanna Hirata
Executive Director:
Aiko Hasegawa

Published by
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka,
Minato-ku, Tokyo 107-0052,
Japan
TEL:
03.5561.2551 [Management]
03.5561.2555 [Editing]
FAX:
03.5561.2561 [Management]
03.5561.2565 [Editing]
TELEX:
02422467 KAJIMA J
Home Page:
http://www.kajima.co.jp/Group/publish/index.htm

Printed in Japan

This Copy: ¥2,600
¥30,000 a year
¥50,000 two years

Order Form: Page172

Cover:
Kibikougen Elementary Sc
Cover Photo: Hiroyuki Hira
Cover Design:
Hitoshi Koizumi/NID

特集

シーラカンス

12年の活動と次なる展開に向けて

Special Feature

Coelacanth Architects

Works of Twelve Years and Steps to the Future



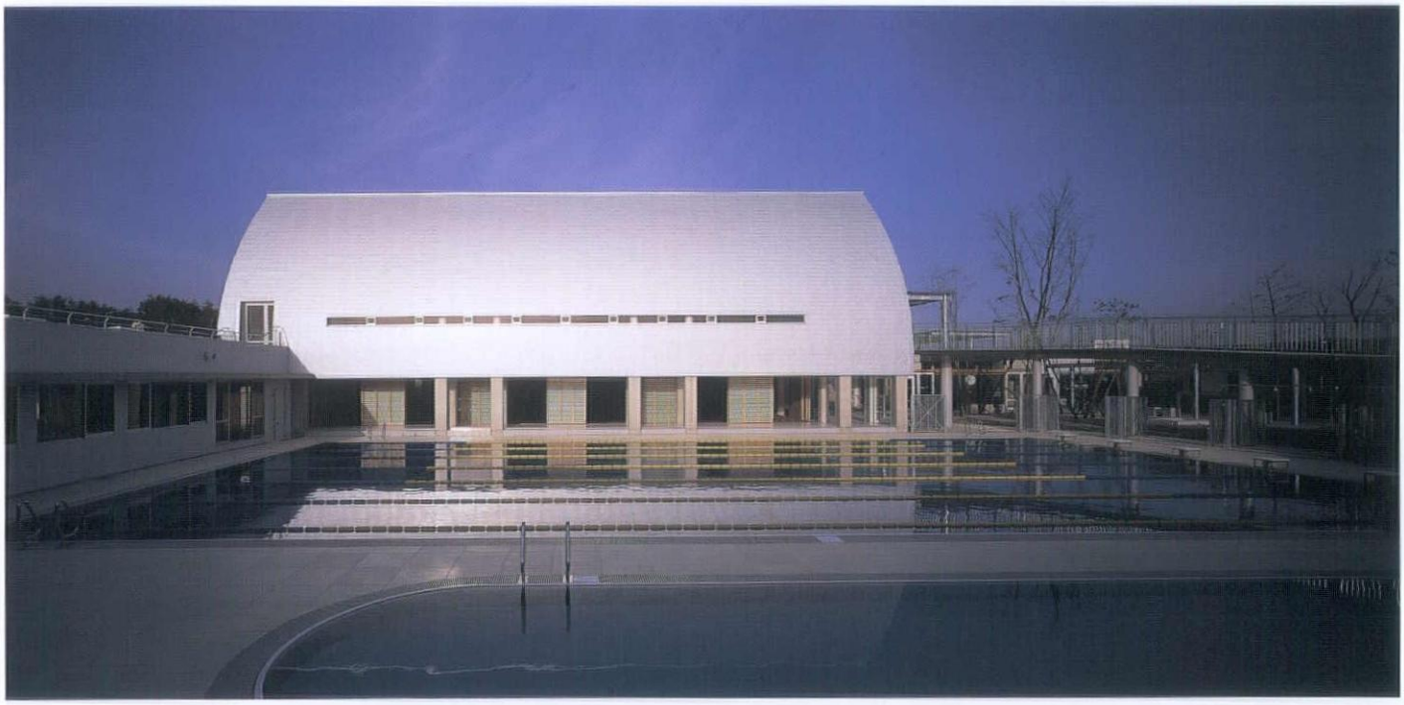
吉備高原小学校

小泉雅生+小嶋一浩／C+A

Kibikougen Elementary School

Masao Koizumi+Kazuhiro Kojima / C+A





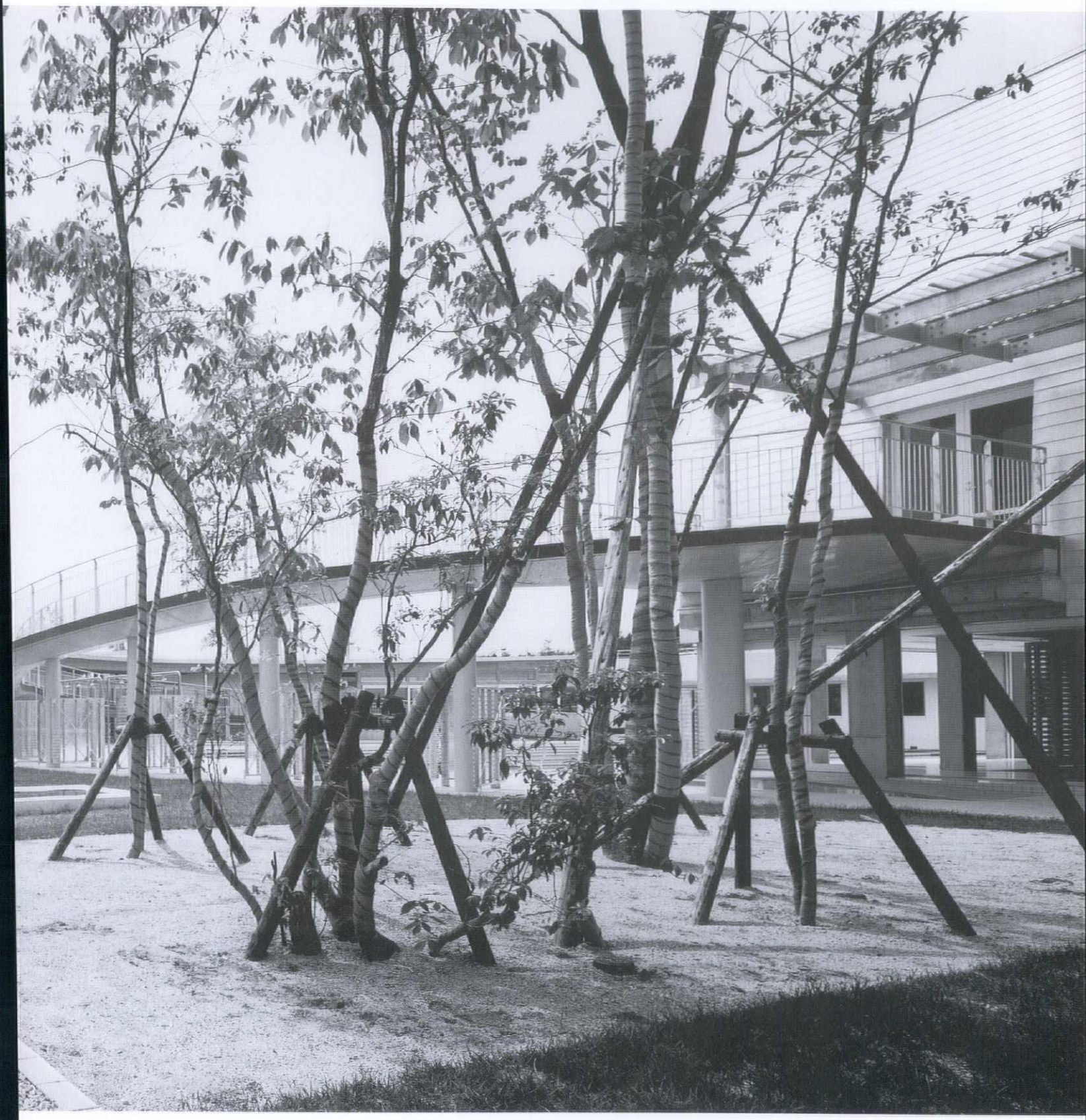


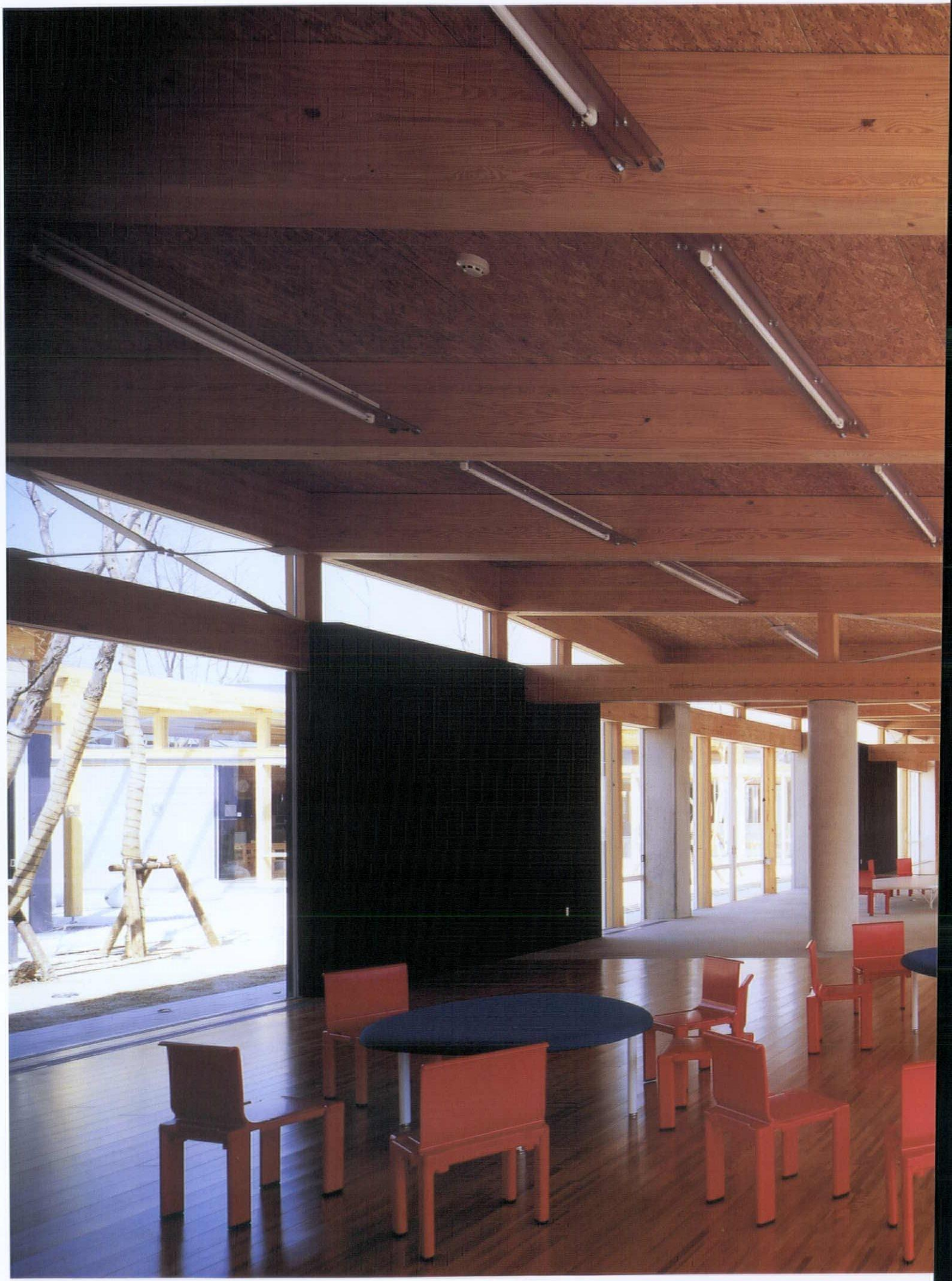










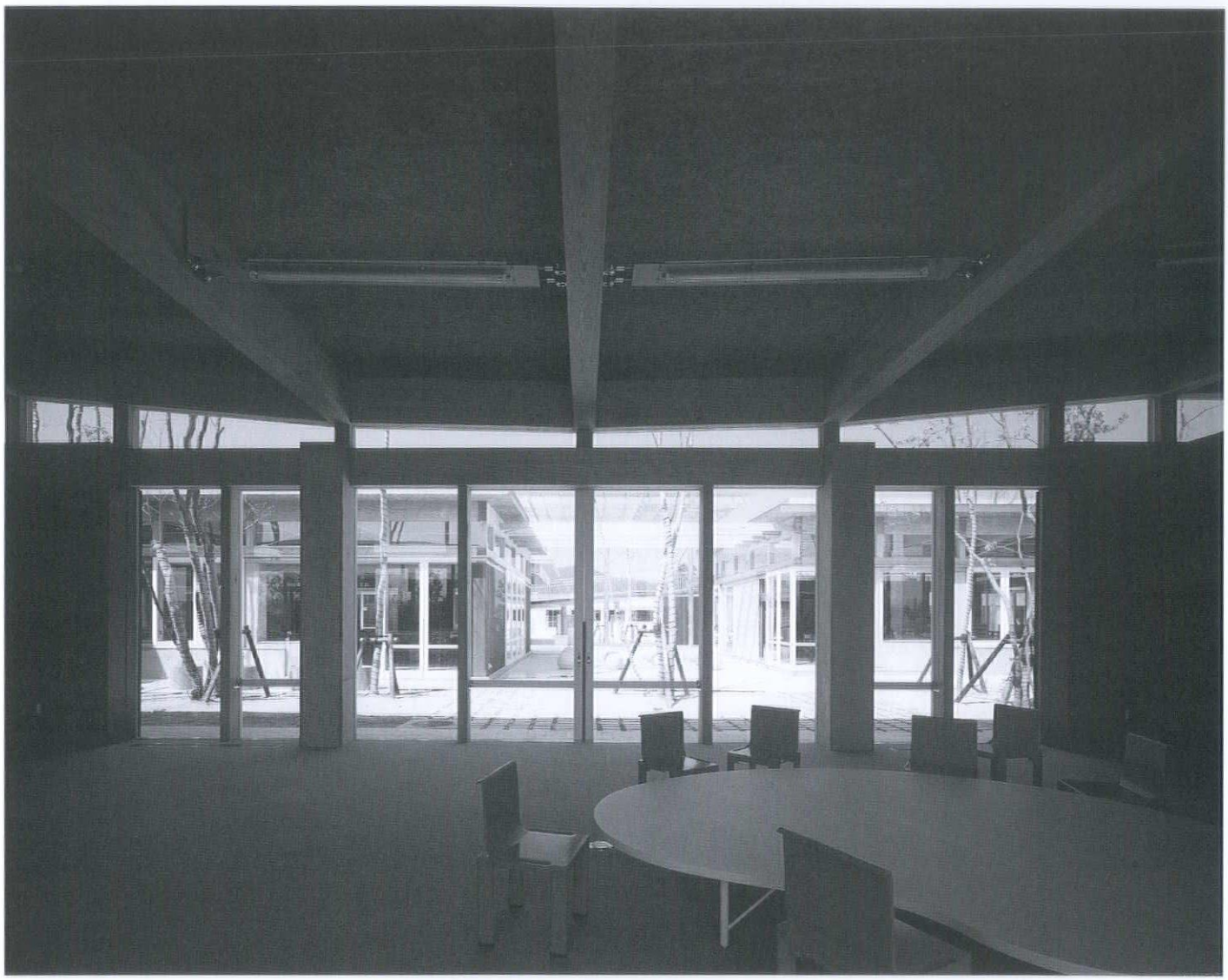


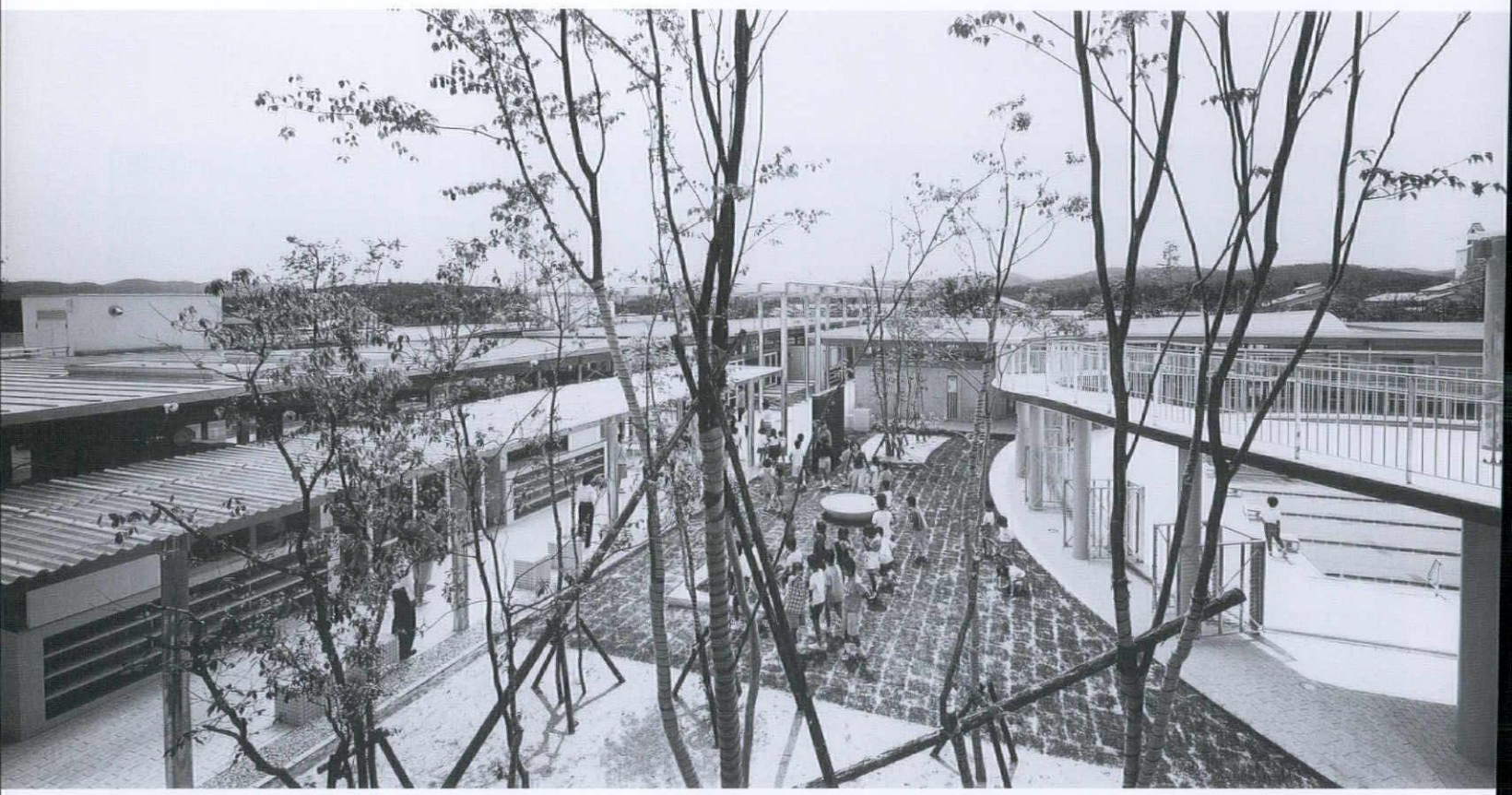














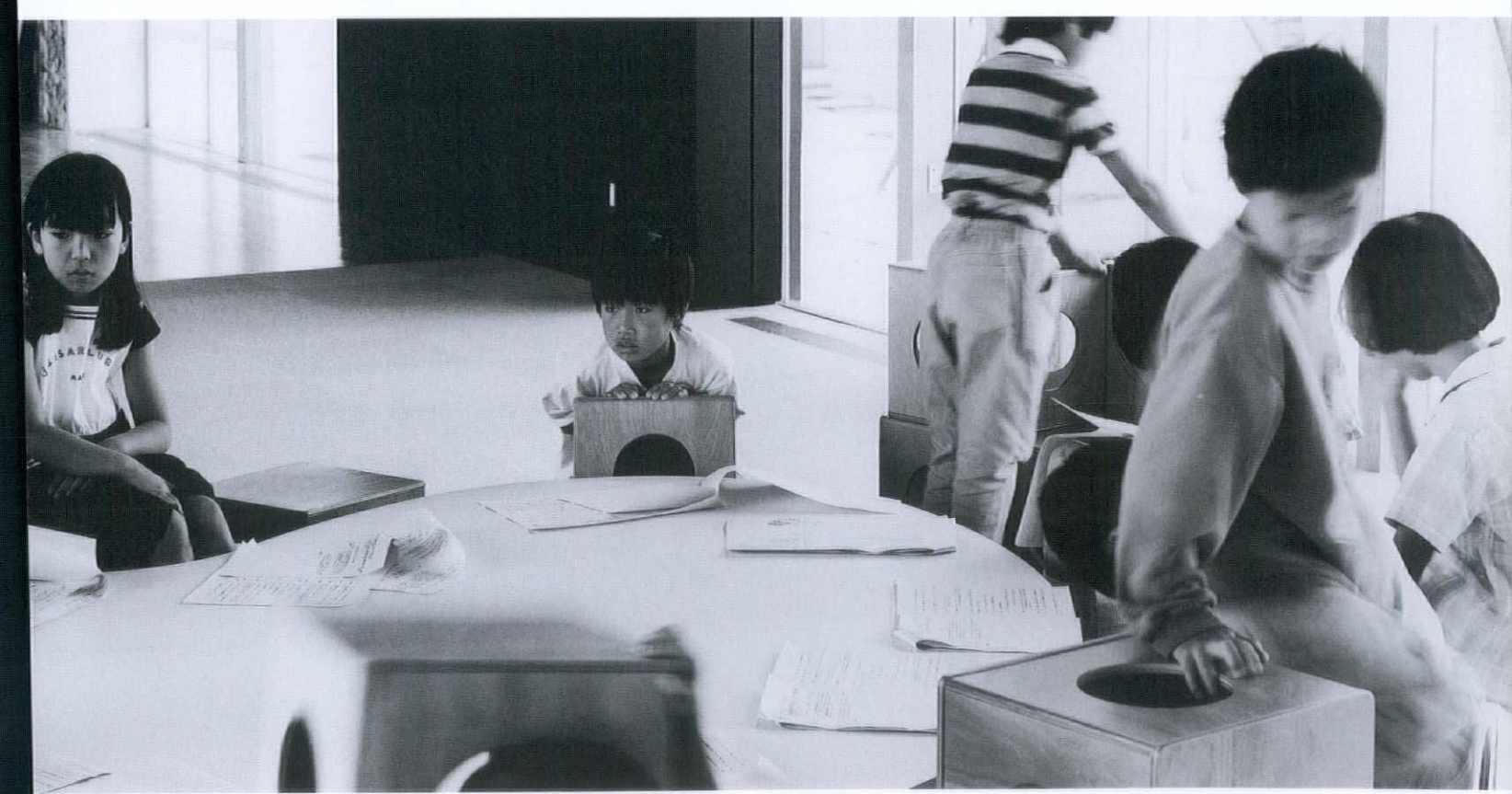














p.5：上の道からパスを見下ろす。屋根の合間に樹木がのびる
p.6上：東側全景をグラウンドから見る
P.6下：体育館のポリカシャッターを開け放つと、廊下がプールサイドの一部になる
p.7：ワークルームより中庭、教室を透過してパスが見える
p.8上：上の（レベルの）道。遠景につながる日常とは違った経路と視点
p.8下：アプローチ。将来は樹木が屋根となる。中央パスの右に教室ゾーン、左側の食堂越しに体育館
p.9：80mのパスに昇降口が並ぶ
p.10-11：パス、中庭、プールサイド、スロープが一体となる流動的な空間
p.12-13：黒板壁が点在する教室ゾーン
p.14-15：アリーナ。集成材格子梁の架構。廊下外周のポリカシャッターを開け放つとプールサイドと連続
p.16：LVLの目透かし張りの壁。柱の両サイドはハンガードア。四周にスカイライト
p.17：ワークスペースから外の教室越しにプールサイドスロープが見える
p.18：プールサイドと中庭が一体になる
P.19：黒板壁と可動黒板の組み合わせでつくられた教室
p.20：外の教室。子供達は内と外を自由に行き交う。建具を開け放つことで教室と一体となる
p.21：ワークルームでの学習

Coelacanth: 1986-1998

This is a comprehensive record of our activities under a partnership of architects called Coelacanth from 1986 through 1998. Coelacanth was established in 1986 by seven then-graduate students; Yasuyuki Ito, Kazumi Kudo, Masao Koizumi, Kazuhiro Kojima, Yoshiyuki Sakata, Maho Hiiro and Hiroshi Horiba. Later, Yoshiyuki Sakata left the organization, and Susumu Uno and Mitsumasa Sampei joined in 1995, the year that saw the completion of Utase Elementary School.

Designing under a partnership has two aspects; it is helpful when developing a project theme through discussion, but extremely challenging when narrowing down a particular concept. Actually, the shift from our early design approach which intentionally did not narrow down ideas to the more recent approach which does so is reflected by our changing choice of working styles. Working under a partnership, we have developed common design ideas across various projects. Although there are design ideas specific to individual projects, it is those that are universal among our projects that will be discussed here.

City

Our early theme was the "Asian city." We appreciated the architectural chaos that many Asian cities accompany with no mathematical geometry or order. The dynamism of such a city is brimmed with potential which is so different from that of static order. In such a city, architecture is no more than part of a track for a traveling individual, and is equivalent to a crossroads or a subway car, in that sense. Because many of our assignments then involved creating a highly dense space on a site like a fragment of a city, we treated each building as a small city in itself. For the apartment houses in Himuro, Ekota and Sakuradai, we intended to create a building that forms part of a non-self-contained city. The effect is plainly seen in "Coelacanth City," a collage of photographs of study models produced during our early years – you cannot tell which project each photo represents. Among our projects during the early period, "Gimmick" most directly represented a chaotic city. Also, our proposal for the design bid in 1989 for Osaka International Peace Center shows the peak of our inclination during that period.

Later, we developed our understanding of a city further in two directions. One direction was a shift to re-considering the borderline between the city and the architecture. For example, in Utase Elementary School, we created paths continuing from the outside that cut through the premises, and classrooms directly on the public sidewalk. For the "a.i.s." Building, we designed the architecture as a model of localized urban planning, devising the relationship between the street and the void space in the building. The other direction was looking at a city from the level of "activities" in a city.

Activity and Space

We try to understand macro-level activity as being shaped by many concurrent personal activities, just as a city is shaped by many concurrent incidents happening within: By doing so, we believe we can escape the fixation of the architectural program.

The design phase for Utase Elementary School coincided with a surge of educational problems in Japan such as bullying, and students suffering from emotional upsets. Consequently, there was much discussion on shift from uniform teaching to personal learning: The conventional educational style that puts a teacher in front of a blackboard facing some 40 students or more was questioned. Ironically, a new but again uniform answer – the open-system school – was being mass-produced. Through Utase Elementary School, we proposed an alternative to that new uniformity.

We regarded the school as the home for its thousand pupils, and arranged "class sets," each combining a classroom and a neighboring garden. Our objective was to resolve conventional school architecture, consisting of classrooms and corridors, and instead, to offer a space filled with small places to "hang around" in. Also, by creating paths continuing from the outside and through the school, we eliminated the borderline between the school and the town. When we simulated students' traffic, we allowed for many concurrent and irregular personal activities instead of orderly ones.

Some of the design techniques we developed for Utase Elementary School have been employed in other projects such as Izumo-City Area Exchange Center, Suijo Fire Station of Osaka City and Kibikogen Elementary School.

Resolution of the Architectural Program

We design a space by going back to the level of personal activities, and by considering how a space interacts with those activities. In the conventional design approach, the designer defines required functions by room names, provides corresponding rooms and connects those rooms with a corridor. This normally results in a space that restricts activities more than necessary. To avoid that over-definition, we eliminate unnecessary walls to create one fluid space as much as possible. If human activities are to be compared to a constantly shifting weather map, elements such as interior/exterior boundary and distribution of furniture and small corners influence how the "weather map" changes. With this image in mind, we design a space as a field for concurrent fluid activities. As we eliminate established room nomenclature from floor plans, we are resolving the conventional architectural program.

Now . . .

Our recent years are marked by an increasingly wide range of concepts being explored each reflecting our diverse partnership while we retain some common techniques and concepts such as those concerning light ("source" and "reflector"), structure/frame, interior/exterior relationship, modeling using a computer and models, "space block" and "white and black spaces." Collectively, these things serve as a library from which we select the effective tools for each individual project.

In February 1998, Coelacanth separated its office into two organizations in three locations. Now, each of us pursues his/her own activities. There won't be this kind of a collection nor a joint work as Coelacanth again. Already in this book, credits are indicated for projects that took place after the reorganization. Now, Kudo and Horiba perform as K&H while Koizumi, Kojima and Sampei (the Tokyo office) and Ito, Uno and Hiiro (the Nagoya office) perform as C+A. This book will be the last record of our activities as Coelacanth.

●Coelacanth

シーラカンス：1986-1998

＊は、P.85〜P.92の「シーラカンス建築用語集」で取り上げられる言葉。

「シーラカンス」をスタートした1986年の時点で、パートナーは全員大学院に在籍中で実務経験もほとんどなかった。創設時のパートナーは、伊藤恭行、工藤和美、小泉雅生、小嶋一浩、坂田佳之、日色真帆、堀場弘の7人だった（坂田は約3年後に組織を離れた）。12年の間、全員が均しく実務に関わっていたわけではない。旅に出る者や、研究をやったり、教職につく者がいた。そういうことを許容する組織だった。〈打瀬小学校〉が完成した1995年にそれまでスタッフだった宇野享と三瓶満真がパートナーに加わった。パートナーが固定することで発生するヒエラルキーを避けて、設計している場所の環境自体が変化し刺激が持続した方がいいという考えがあった。12年経った現在でも全員30代である。パートナーシップで設計することは、プロジェクト毎に何をテーマにしたらいいかをディスカッションして決めていくのには有効である。反面、アイデアを絞り込み捨てていくのには難しい面もあるし、時間がかかる。前半期の「捨てない／整理しない」デザインから最近の比較的整理しているものへの移行は、事務所内の設計の進め方の変化とも対応しているかもしれない。

設計の鍵となるアイデアには、プロジェクトを超えて普遍性のあるものと、個別のプログラム*や敷地に有効なものがある。この稿では主に前者について記述する。後者はプロジェクト毎の主旨文や「用語集」で触れる。

都市

最初の頃、主題は「都市」だった。アジアの都市は幾何学的でもなく秩序が明示されてもいない。だからそれまでは無秩序なものとしてネガティブに捉えられていた。私たちは、そんな混成系の都市を評価した。都市を私たち自身が日々活動するフィールドとして考えれば、都市の持つ変化のスピードや乱雑さや何に出会うかわからないような要素の併置のされ方といったダイナミズムは、静的な秩序とは異なる可能性に満ちている。建築は日々の移動する主体の経路の一部と見ることができる。街路や交差点も、地下鉄の中も、ワンルームのアパートといった建築の空間も、ある時間を費やして通過する空間として見れば等価である。都市内の断片のような敷地に高密度な空間をつくる仕事が多かったこともあり、建築を小さな都市のように、あるいは都市の魅力的な一部分のようにつくることを考えていた。〈氷室アパートメント〉から〈江古田アパートメント〉〈桜台アパートメント〉〈マインズ北堀江〉まで、敷地の中で自己完結しない、都市の一部分であるような建築を設計した。この頃のスタディ模型を積み重ねて写真に撮った〈シーラカンス・シティ〉*が、そうした姿を端的に示している。どの部分が何のプロジェクトなのか判然としない。なかでも、〈GIMMICK〉が都市を最も直喩的に扱った事例であり、1989年にコンペがあった〈大阪国際平和センター〉はそうした方向のひとつのピークであった。「都市はひとりでは設計できない」ということを、都市的な建築を共同で設計する根拠に組み込んでいたかもしれない。また都市そのものの「かたち」でない部分、見え方、体験といったものへの関心は〈東京タワープロジェクト*(1987年)〉として展覧会への出品作品となった。

都市との関わり方はその後ふたつの方向に展開した。ひとつは、より具体的に都市と建築の境界を考える方向へのシフトである。1991年に設計を始めた〈打瀬小学校〉で敷地内にパスを引き込み、外壁を歩道に接してつくったことや、〈Friedrich Strassen Berlin〉コンペ案や〈ais〉ビルでのストリートと建築の中のヴォイドとの関係などでは、「局所的な都市計画」のモデルとして建築が都市に働きかけている。もうひとつは「アクティビティ」*を主題として考える展開である。

アクティビティと空間

都市で同時多発的に生起する事柄や変化のように、マスのアクティビティを個別のパーソナルなアクティビティが同時多発的に生起する様相として捉える。そこに、従来のビルディングタイプに代表される、建築のプログラムを固定的に捉える思考をすり抜ける回路がある。

〈大阪国際平和センター〉までは、異なる多くの部分を接続する私たちの方法は「シークエンス」と「経路」*だった。これは建築を多くの異質な部分の集合で組み立てていることとセットで持ち込まれた個人が都市を体験する仕方である。様々なレベルでの諸部分の差異と、無限に張り巡らされた経路とが行動の選択可能性を保証することのアナロジーが私たちの建築に巡らされた経路であった。

〈幕張新都心住宅地〉計画に参加したことは私たちにとって重要な体験だった。84haに2万6千人が居住する街を設計することは、小さな建築を都市のアナロジーで設計することとは異なる思考と方法を必要とした。「郊外の団地ではなく街をつくる」ことを目指した計画で、「アクティビティ」や「変化」、あるいは「参加」や「情報のインタラクティブなやりとり」といったことがテーマになった。アクティビティをシミュレートして道路や建築ヴォリュームとオープンスペースの配列や寸法が決定されていった。

また〈小松フォークリフト神戸工場(1990-91年)〉では、働く環境をどのようにつくるかを考えた。ハイテク工場では広大な面積に比して従業員数が少ない。持ち場に着くと休み時間以外、誰とも会話をすることがない孤独な環境の中で、人の顔から表情が消失する。だから、生産ラインの配列を人の配置を先行させて組み替え、そこに居場所としての休憩所フォリーを配するという方法で、工場の中でのアクティビティを喚起し、可視化するデザインを試みた。このプロジェクトでの試行錯誤が後の〈打瀬小学校〉につながっていく。

〈打瀬小学校〉の設計を進めていた頃、学校にいじめや登校拒否などのさまざまな問題が発生していた。「一斉・画一」の教育から「個別・自発的」な学びへの教育のプログラムの転換が議論され、黒板の前で授業を行う教師に40人の子供たちが向き合う構図が問い直され始めた。〈打瀬小学校〉はオープンスクールに日本中の学校が変わり始めていたときに、その新たな画一化に対するオルタナティブとして提案された。この計画では、1000人の子供たちの活動を、単純化されたマス・アクティビティではなくパーソナルなアクティビティの集合として考えている。学校を子供たち「1000人の住居」と捉えて、教室の隣に庭を持つ豊かな領域「クラスセット」*を用意した。目的は、「部屋と廊下」の集合でできた建築を解体し、「コーナー」や「居場

所」に満ちた空間をつくることだった。また、校舎敷地を通り抜けられる「パス」を組み込んで、街との境界のない学校を考えた。整然としたアクティビティではなく、「蜘蛛の子を散らした」ような同時多発的なアクティビティをコンピュータでシミュレートした。完成した空間には、日本はおろか世界でもそれまでなかった活動が実現されている。

〈打瀬小学校〉で発見した方法はその後、工事が進行中の〈出雲市地域交流センター〉〈大阪市水上消防署〉や、この春に開校した〈吉備高原小学校〉などでいろいろな方向に展開されている。

プログラムの解体

個別のアクティビティにさかのぼって空間を考えることは、ビルディングタイプに代表される建築のプログラムの解体につながっていく。時間とともに空間の使われ方は変化するし、完成直後に限ってみても、あまりに空間と用途や意味が1対1対応したものは窮屈で息が詰まる。用途を室名で表記しそれに「部屋」を対応させて廊下で繋いでいく設計は、建築の中に使用頻度の少ない場所を多くつくるし、行為を必要以上に規定する。だから、できるだけ部屋をつくる壁を取り去り、建築全体を流動的なワンルームに近づける。動線も廊下として明示しない。人々の活動を天気図が刻々と変化するように捉えている。海や山脈などの地形が気圧や雲の分布に影響するように、内外の境界や家具やコーナーの分布が活動の総量に影響する。空間はそうした同時多発的で流動的な活動のためのフィールドとして捉えられる。「室名」がプランから消えていくことでプログラムは解体されていく。

〈打瀬小学校〉では、将来ニュータウンで子供が減って学校としての寿命がつきるとスクラップになるのではなく、地域施設や老人施設としてでも使えるように空間を構想しているのだが、結果として低層接地型の大規模建築の空間モデルになっている。だから、ある種の病院や郊外型オフィスと見ても成立するだろう。〈出雲市地域交流センター〉や〈吉備高原小学校〉はこうした方向を進めたものである。

また〈博多小学校（1997年～）〉では、マルチメディアという便利な道具の発達に合わせて、職員や地域にとってのオープンスクールがテーマとなった。職員室はなくなり、地域や他校や教育委員会との垣根を取り払い、これまでの学校が果たしてきたプログラムそのものを、都市レベルで捉え直している。現在設計中の〈K総合学科高校〉も総合学科（単位制高校）という新しいタイプの高校の使われ方に見合った空間の探求である。

こうした見方は住宅などの小さくてパーソナルな空間にも有効である。実験集合住宅であった〈NEXT21 303住戸〉の「自立家族の家」というプログラムから生まれた平面計画は、住宅という枠組みに捕らわれずに自立した各人によるアクティビティを、家族、あるいは家と突き合わせるところから始まっている。このプロジェクトでは平面のダイアグラムと変換される境界としての建具の実現が主要なテーマだった。

使われる建築へ

「いきいき使われるスペース」をつくるためにアクティビティを喚起することは、公共建築を設計する機会が増えてますます重要になっている。建築のプログラムから提案し、ワークショップ*を行い、「使い方マニュアル*」を作成したりと、本来の設計以外の作業のウェイトが増している。与えられたプログラムを読み直して、アクティビティと空間の応答や使われ方から建築を考え、部屋と廊下でできた建築を一度解体してしまう時に、こうしたインタラクティブなコミュニケーションは不可欠である。その先に「何のために建築をつくるのか」を問い直した「建築でできること」の可能性が見えてくる。市民が知らない間に立ち上がった建物が「ハコモノ」と呼ばれるのを避けるには、ソフトが先行しないこの国では今のところ有効な手立てだ。

現在

最近はパートナーが大勢いることでいろいろな方向にコンセプトが拡散的に展開している。あるアイデアが飛び火するように別のプロジェクトに移ったりしているのは、場所を共有してきたことのメリットかもしれない。「シーラカンス」というフレームで見た場合は、散漫に見えるという問題もあるだろう。私たちが共有してはいるが、必ずしもすべてのプロジェクトで前面に出ているわけでもない伏流のような部分として、光の扱い方（「ソース」と「リフレクター」*）、構造／架構*の捉え方、環境*を考えること（「ポーラス」*）、コンピュータや模型による「モデリング」*、「スペースブロック」*や「黒と白」*といったアイデアなどがある。これらの概念や方法は、シーラカンスの中でライブラリーにある書籍のように共有されてきた。使用頻度はそれらがどの程度有効だと認知されるかによるし、発案者が誰かはさほど問題にされていない。研究のような厳密さもないから、使い手によって意味内容が変化することも多い。「スペースブロック」のようなオリジナルもあれば、「モデリング」のようにコンピュータの普及に伴う一般的なものの展開もある。これら具体的に設計を進めるのに用いてきた多くのアイデアについては個々のプロジェクトの解説や「用語集」で後述する。いろいろな方法を併置して、そこから個別のプロジェクトに有効な方法を選択して使っている。空間をリアライズする方法をひとつに固執する気はない。

「シーラカンス」は1998年2月に2組織3箇所に分離した。現在私たちは、各々の新しい形態での活動に移行している。「シーラカンス」というかたちで私たちの活動をまとめたものは今後はつくらないし、「シーラカンス」として新たな作品を発表することもない。各々の組織が引き継いだ作品には新しいクレジットを明記した。組織改編後は工藤と堀場は「K&H」で組織そのものと個人の両方を明快にする。小泉、小嶋、三瓶が東京、伊藤、宇野、日色が名古屋を拠点にする「C+A」は個人として自立した建築家の活動の場所といったものになるだろう。

この特集でまとめていただいたものは、1986年～98年まで「シーラカンス」として8人のパートナーシップで私たちが行ってきた最後の活動記録である。

●シーラカンス

可能態としてのシーラカンス

シーラカンスは21世紀の爽やかな風になれるのか

原 広司

詳しい構成を捉えているとは言えないが、シーラカンスに関係するメンバーの多くは、私が大学にいた頃の研究室に属していた。彼等は研究室の世代から言うと、集落調査の世代（建築家として知られている名前を挙げれば、山本理顕、入之内瑛、隈研吾、竹山聖など）の後の人々で、インターナショナルのコンペティションを、一緒に経験してきた世代に属している。大学の研究は、それぞれ固有のテーマをもっているが、都市の「場」に関する点で、共通していた。そのような事情から、私がシーラカンスについて見解を述べるとすると、自ずから限られた視点であって、また意外に見当違いの判断をしている畏れもあるだろう。シーラカンスはグループで活動してきたし、また将来も何らかの協同態勢をもって建築にあたるのであろうが、研究室にいたメンバーのそれぞれをみると、多様な性格や気質に富んだ人々の集合体であり、本来ならひとり一人が独立した設計者として活躍するはずであると私は考えてきた。そのような判断が正しいとすれば、これまでのグループでの仕事は、おそらくこれからの仕事に向けての出発期のそれであって、完成された作品群というより、可能態としての作品群としてあるように私には思われる。

シーラカンスのデザイン上のひとつの特性は、集落や都市に表出される偶発性に関連している。これは、ひとつにはグループで設計する上での決定機構に関わっている面もあるのであろうが、むしろ美学的な根拠を示しており、わかりやすく言えば、設計者の決定が絶対的な意味をもつとは限らないとする態度の表明である。この偶発性の排除がモダニズムの本質であり、ミニマリズムの源流であるとすれば、シーラカンスの美学上の立脚点は、近代建築の路線とはかなり対立するところがある。現在のシーラカンスの世代の傾向が近代の初期にみられたと言うより、ミース・ファン・デル・ローエの系譜上の展開にあるとすると、そのラインからははずれている美学である。

ミースの建築は、他の分野での表現、例えば量子力学などの言い方に合わせれば、近代古典のそれである。量子力学では、ハイゼンベルグあたりまでを含めて近代古典とするので、偶有性についても不確定性によってすでに取り込まれている。均質空間によって、フレキシビリティを最大にするとするミースの態度も、偶有性を明確に把握しているのであるが、そうした偶有性の規定は、いささかもゆるがないとするところに、近代古典の特性がある。近代古典が確立した世界が揺らいできたから、古典と呼ばれるのではなく、むしろ確実であることは、ますます証左されてゆくがために古典と呼ばれるのである。と同時に、その理論ないしは表現において、覆いきれない現象がますます拡大されてゆくがために、古典と呼ばれもする。例えば、ミースの場合、ひとつの建物における整合性は十全であるにせよ、都市においてはどのようにして、均質空間は具体化されるのか、といった観点について言及してゆくと、そこには方法なり、観念なり、概念なりが不在であることが可視的になってくる。シーラカンスのこれまでの作品群が、そうした近代古典、すなわちモダニズムの路線では覆いきれない領野を照明しきれたかどうかは別としても、その態度は明らかなのである。

具体的には、シーラカンスの建築美学は、偶発的なるものを内包しきれるものではなく、それを誘起する原因は建築の外にあり、外から建築に作用し、建築のあり方に影響を与えるとするところにあるように思われる。

この都市的な作用力は、偶発的なるものを誘起すると同時に、建築の各点に動きを発生する。したがって、建築は都市のベクトル場のなかで分解され、都市のムーブメントの表出そのものになってゆくのである。動きである以上、近代建築の表現主義のムーブメントとの差異に触れておかなくてはならないであろうが、当時のムーブメントが、世界の本質としての観念としての動きであるのに対して、少なくともシーラカンスの動きは、現実の現象としてのそれであって、建築はその動きによって干渉され、撹拌され、そして秩序づけられる原因となっている。したがって、偶発性と動きは、都市の現象のなかで表出される同根の2側面なのであると考えられる。この両者は、静けさとやすらぎの建築とは対比的な騒音と絶え間ない活動の建築を生み出すのである。

しかしながら、最初のシーラカンスの建築のなかには、必ずしも絶え間ない活動の建築とは言い切れない事例が見られる。建築において集団的な制作が、静かな古典美の追求におもむくという結果は想定しにくいので、そこには集団のあり方に対する見解の変遷があり、建築にもその影響が現れているかもしれない。

シーラカンスの美学的な立脚点というより、方法的な態度として、シミュレーションの建築への志向がある。これは、おそらく都市を「場」として把握してきたところから由来しているように思われる。シミュレーションへの志向は、都市や建築を出来事として捉え、それを予測しようとする態度、あるいはそれを構想し実現しようとする態度の表明である。実際のところ、すべての建築家は、経験

的にこれまでのシミュレーションをしてきたのであるが、計算機の時代になって、実用上もまた経験的な操作としても、シミュレーションは、これまでとは異なった意味をもってきている。シミュレーションは、言語を媒介としない空間体験とその伝達の手段となる可能性が高く、そのきざしは今日でもすでに見えている。もし、この空間体験をめぐる予測が、建築そのものを変革しないとすれば、建築家の活動の本質には関わってこないであろう。しかしながら、建築のもっている本来的に人々の行動を誘起する性格が、シミュレーション技術のシステマティックな展開の上で、これまでの理解とはまったく異なった方向へ、建築をもってゆくのではないかとも思われもする。シーラカンスのメンバーは、そうした予感をもっているのではないだろうか。実際のところ、シーラカンスのいくつかの作品には、建築を、出来事を誘起してゆく契機としてつくられている。

先に挙げたシーラカンスの偶発性と動きの建築と、シミュレーションの建築とは、重なり合った現象と計画のふたつの面をそれぞれに記述したにすぎないものであって、この重ね合わせは、都市と建築に対するひとつの解釈を示している。ただ、シーラカンスの建築には、今日の都市が建築に介入してくること、都市の延長としての建築への志向は見られるものの、いかなる都市があるべき都市であるのかはよく見えていない。しかし今日、ほとんどの若い建築家が、小さな安息の場所を築くことに注意を向けているのに比べれば、都市への関心自体もひとつの大きな存在理由足りうるのであろう。安息の場所をつくる建築家たちは、ギリシア以来の「内はコスモス、外はカオス」の考えを変えていない。そうした保守主義は、世間での評価は得やすいものの、建築の歴史の展開の上ではさしたる意味をもっていない。ただ、新しい都市像が表出できないとすれば、都市への関心もまた無意に終わるであろう。シーラカンスが可能態としてあると私が思うのは、この点においてなのである。

オーバーレイの第三の面は、シーラカンスのグループ制作活動に関わっている。すでに触れたように、グループ自体は小さな都市であって、それ故にシーラカンスはさまざまな作用力が重なり合い、時に反発し合うベクトル場に意を払ってきたのであろう。少なくとも建築の表現としてみる場合、ベクトル場に作用している都市の力とは、シーラカンスが好んで表出しようとしたのは、事物を分離（アーティキュレート）させ、密着しようとする諸要素を剥離させる力であったのではなかったろうか。こうした分解力や剥離力は、仮に集団のあり方と建築のあり方とがある面で通底し、ひとつの理念のものに現象するシステムであると考えれば、仲良しグループから自立的人間の集団へと向かう契機を、自らの小さな都市のなかに見ていたはずである。

この小さな都市を展開させる契機は、私の考えでは「離散的である」こと、「離れて立つ」ことであるが、実は新しい都市像は、近代古典のコミュニケーションや、あるいはその後表現した地域の概念にあるのではなく、地球上に溢れつつあるおびただしい数の人群の中に立つ時の言われもない幸福感を誘起する原因に結び付いている。その都市の契機を、はっきりと表現すること、この課題が今日の都市の課題になっており、その予感をシーラカンスは、これまでの建築で表現してきたのではなかったか。

小さな都市をめぐって、シーラカンスは他の建築家たちとは異なったグループ制作の自らの組織の設計課題を持っている。このややこしいであろう課題は、今後のシーラカンスの建築の表現にどのように現象してくるのか、私としては楽しみでもあり、かなり難問でもあるように思えもする。新たに組織態勢を組み立てて、おそらくこれからが本格的な制作の時期となるであろう。今世紀は、なんといっても近代古典の世紀であった。次世紀は、おそらくまったく異なった都市と建築の世紀になるであろう。なぜなら、おびただしい人群のそれぞれの異なった主張がぶつかりあう時代となるだろうからである。建築家は、不法占拠の町に住む人々や、道路上で食事を作っている人々、そうした人群の外で都市の城壁を築くわけにはゆかなくなる時代である。シーラカンスが21世紀の爽やかな風になってくれることを祈っている。

●はら・ひろし／建築家

インタビュー1

工藤和美

インタビュアー：西沢立衛

くどう・かずみ　Kazumi Kudo
1960年　福岡県出身
1985年　横浜国立大学建築学科卒業
1986年　シーラカンス設立
1991年　東京大学大学院博士課程修了
現在、シーラカンスK&H株式会社代表、東京大学、横浜国立大学非常勤講師

――まず博多小学校の進行状況から聞かせて下さい。

進行状況としては、基本設計でまとめたことの見直しです。廊下と教室からスタートしたオープンスクール・タイプの発想をやめて、もともと人が集まるというところから、どんなスペースが必要かというところに戻そうと思って、ダーッと可能性のパターンを洗いだしているんです。教室を優先して、可能なところに体育館と階段教室をもっていくべきなのか。あるいは、大物の方の配置から教室の方が決まってくるのかというのを、1回全部分解しちゃったら、どっちに重さがあるのかを自分のなかで問い直している。

特に小学校みたいに使い手の先生が次々に変わっていくと、初めて出会う空間をどう使っていいかわからないという。いい空間がありますと言っても、それをあまりやりすぎるとおし着せになるから、そこが難しいところ。ある程度は可能性を見せてあげて、そこから先はその人たちの自由な発想で、思ってもいない使われ方をしたとかいう展開の方が私は面白いと思うのね。だから、シミュレーションして思っていた通りの動きをしていたという回答が出ちゃうと、私はつまらないと思う。シミュレーションの結果と似ているけど、でも思ってもいない使い方をして逆に教えられるとか。そっちの方が楽しいですね。

――建物だけじゃなくてプログラム・レベルから提案するという場合、普通建築家としては、こう使うべきだみたいなシナリオが強くなりがちですよね。かなり啓蒙的になっちゃうというか。

確かにモダニズムの時代というのは、割と啓蒙型が多いように思うのね。やっぱりここでピシッと構えてくれないと困る的な。だけど空間をピシッと作っていたにしても、使う側がもっとそれをすごくファンキーに使うとかね。例えば、ピシッとスーツを着ると、そういう時というのは何かラフな帽子は合わないよと。だけどそうじゃなくて、気分が楽になったらスーツと麦藁帽子を合わせるとか、そういうことが起きていいと思うのね。合わせてみたら結構面白いとか。そういうことの方が建築って楽しいと私は思うんですよ。ただ、あまりに意図していたことと異なる状態に展開した場合は、微妙な話だと思うんだけど。

――ビルディングタイプとしてみても、いわゆるアカデミックな教育機関としての小学校というよりは、街のなかの公民館というような話をされていましたよね。

小学校というのは、今まで子供と先生というのが登場人物だったでしょう。ところがそこに地域の人が教えにくるとか、地域の人が公民館の延長みたいに使うとか。登場してくる人たちが変わると建物の姿は変わるべきだというか、必然的に変わってきますよね。それをそのまま素直に街のなかだから、本当に学校に見えなくてもいいと思うんですよ。例えばオフィスビルの隣にレストランがあって、その先に街のプールがあったっていいというレベルで、街がある部分拡大したという形になれば、人も行き来できるし、入りやすいしという。いろいろな意味での諸条件から、L型に建物のヴォリュームがきて、飛び地に幼稚園と公民館がくる。公民館を重ねるというのもあったんですけどね。

――エレベーションが面白いと僕は思っていて、突然体育館のガラス面が道にばーんと出てきて、また普通の街並みに戻って、また学校が現れてというように、建築と街並みが混ざってゆくのが、立面にはっきり現れてくる気がするんですよね。

そうですね。これってすごい特殊でしょう。変でしょう。周り三方を一皮隣地が囲んでいて、普通だとあれが学校って、街の中で見えるのに、部分だけが見えてきて全体を認知しなくてはいけないみたいな。だから例えばある時、学校が必要なくなったら、街のゾーンに属しちゃってもいい。あげちゃえる。地域に開放されるゾーンの辺りは、街が増幅していくみたいに見える。それはそれで面白いかもしれない。

――ところで最近工藤さんがコンペを取りすぎると話題になっている。どういう秘訣でそんな……（笑）。

そんなことないですよ。うーん、困ったなあ。あえて言うと、私自身そうなんだけど結構アーバンの、都市計画の仕事をずっとやっていて、建築って、やっぱりもうちょっと都市計画をみんな勉強しないとだめだと思うことがある。私が幕張のニュータウン計画に参加した時、最初に「街をつくろう」と言い出したのは、どんなところに住みたいかを都市的な視点で考えたからです。さらに公共施設が街の質を決めてしまうので、公共施設のデザインは質の高いものにしないといけないということを強く主張しました。例えばレム・コールハースにしても、みんな都市計画をすごくよくわかって建築しているでしょう。日本の都市計画って、分野が分かれすぎちゃっているから、都市計画でデザイナーという人が、ほとんどいないでしょう。私はコールハースなんか都市計画のデザイナーとしてのすばらしさをいつも思うんですよ。そういう人が今不在じゃない。日本では提案が建築に寄りすぎているというか。

――前に僕一度OMAに見学に行ったことがあるんです。ちょうどリールをやっている時で、部屋の中に部屋と同じぐらいの都市の模型がばーっと広がっていた。〈コングレスポ〉がこんな小さく作ってあって、後はひたすら都市が広がっていくという。コンテキストを何とか形にしようという非常に強い意志を感じて、衝撃的だった。

でもコンペの時って、結構周辺敷地って作るじゃないですか。作るんだけど、結局はなんとなく写真の背景じゃないけど、それに近いものになっちゃっているでしょう。例えば車で移動している私たちにとって、プランよりもパーッと加速しているスピードのなかで認識する方が、圧倒的に実は都市を見ているスタンスなんだよね。そうすると実は5km先のものと、あそこにある交番とここにあるビルというのは、実は見ている側の視点の中ではサッと連続の一端になっていたりするわけでしょう。博多小学校もそうなんだけど、全貌はたぶん把握できない学校なのね。周りが囲まれているから。でも、そのよぎっていく瞬間瞬間に何か見えてくる学校の像というのが街のなかで一緒になってくれば、それはそれでいいんじゃないかと、私はこのプロジェクトに関しては考えているのね。

（1998年5月8日、於：シーラカンスK&H事務所）

●にしざわ・りゅうえ／建築家、西沢立衛建築設計事務所

インタビュー2

堀場 弘

インタビュアー：西沢立衛

ほりば・ひろし　Hiroshi Horiba
1960年　東京都出身
1983年　武蔵工業大学建築学科卒業
1986年　東京大学大学院修士課程修了
1986年　シーラカンス設立
現在、シーラカンスK&H株式会社代表、東京都立大学非常勤講師、武蔵工業大学大学院特別講師

――K&Hとして始められて、工藤さんとどんな感じで進められているか、そのあたりから聞かせて頂けますか。

今までシーラカンスでずっとやってきていますから、そういう意味でK&Hになっても、そんなに大きな差はないかなとは思うんですよ。特に博多は、コンペの時は工藤がほとんどやったので、基本設計に入って、今デザイン・ミーティングをやる時には一緒に出たりとかというふうにやろうとしてますけれど。ただ言えるのは、やっぱり忙しくなってしまっていて、以前だとシーラカンスでデザイン・ミーティングというと、大抵パートナーは4、5人とか3、4人とかは集まって、何とか週1回ぐらいではやっていたんだけども、ふたりになって、その時間の合わせ方がなかなか難しくなってきたというのはあります。

――各プロジェクトは分担をしているのですか。

そうですね。各フェーズでいろんなケースがあります。〈外ヶ岡交流拠点施設〉は、コンペの段階では僕も結構案をたくさん出したりしてますけれど、最終的にまとめたのは工藤で、その後、彼女が他のプロジェクトとかで、なかなか時間もとれないので、それをどういうふうにリファインしていくかというあたりは、僕が結構見ています。

――〈プロジェクトTS〉の方はいかがですか。

今は基本設計中です。ワークショップであるとか、この施設を盛り立ててくれるような地元の人たちをどういうふうに巻き込むかを、プロポーザルでも提案しているのですが、それの1発目として昨年の春ぐらいにみんなで砂丘をとにかく歩いたんですよ。5、60人ぐらいかな。結構、みんな良かった良かったと興奮してました。だから、最終的に使ってくれる人とか盛り立ててくれる人たちというのを巻き込むことで、逆に何か最終的な形に置き換えた時に、新しいことが生まれるかもしれないなあという期待みたいなものがある。そういう意味で、提案は評価されてきている。ワークショップは、もう5回ぐらいやったりして、特に体験ベースというのをどういうものにしていくかということをやっています。それとは別にインターネットでできるだけ情報を公開してやることを、行政としてもっと進めるべきではないかと思っています。本当は役所とのやりとりなんかも、極端なこと言うと全部見えるようになっているのがいいんだろうなと思うんですよ。なぜ、ここがこうなったのかということが、建築家が決めたのか、誰が決めたのかというのが、何かたどれば必ずわかるようになっているというのがすごく重要かなと。公共建築の場合には。

――具体的な構成と言いますか、この屋上広場や内部空間は、今どのような方向で考えられていますか。

構成としては、コンペの時も白黒みたいな話をちょっと書いているんですけど、砂丘を歩いてくるという体験がすごくいいなと思ったので、例えば博物館だったらエントランス・ホールとか、展示にたどり着くまでというのは、単純に言うと砂丘を歩いてきた連続でずっとこれるようにしたいと。滑らかに連続した感じで。砂丘をずっと歩いても行き止まりがないように、展示の部屋を開けて中に入ったら、また外に出てきて、また次に行って。それがずっと回れるように。

屋上広場についてですが、現状は建物が建って、法面になっているんですけど、元の地形みたいに埋め戻して連続させ、段差があっても1段程度で、基本的には四方全部から人が寄りつけるように考えています。仕上げを砂で覆ってしまうと、もう完全に地下だし、本当に下に建物があることが感じられない。そうじゃなくて、やっぱりパースもそうなんですけど、同系色でカメレオン状態というのか。それでほとんど砂丘とゾロに収まっているというのがいいかなという気がしています。

――砂丘や消防署などいくつか同時進行されていて、そういう場合というのは、建築ひとつだけ考えているのと、随分違ってくると思うんですよね。例えば博物館をやっている場合、建築単体について考えるのと同時に、一歩それを抽象化して、「博物館って何だろう」とか「砂丘って何だろう」とか進むじゃないですか。一段言説化を進めるというか。そうすると、複数扱うことによって何かくくり出せるものが違ってくるんではないかと思うんですが。

そういう意味で言うと、例えば小学校に何か影響を与えるというのは、プログラム的な部分でももちろんありますけど、建築でいうと何かストラクチュアを考えていくときに、かなり違うのかなというか、影響があるのかなという感じはします。

――ストラクチュアというのは、架構のことですか。

そうですね。骨格というくらいの意味ですが、最後まで残るのはやっぱり構造だし、そこで何かできないと結局、新しいものはできないのかなという気が今はしています。逆に言うとそれ以外は、仕上げを除いてシステムの設計かもしれない。こちらが全部決めることでもないのかなと。どこまでを建築として規定しておくかが大切で、少なくともストラクチュアと空気環境は、そうだと思うんです。その意味で構造、設備の方との協働は、一番エキサイティングな部分のひとつと思っています。そうは言っても、最終的な仕上げやフィニッシュとして、かっこ良くしたいというのは、もちろんあるわけですね。だけどそれだけじゃ、面白くないのかなという気もするし。

――ところで僕は、砂丘も下田も博多も消防署も、外部空間の提案が大きいように思うんです。外部空間を通して、何か公共性のようなものをつかもうとしているように、僕には見えるんですね。

確かに外部空間を提案して、それで評価されてコンペとか通っているということなのかな。ただ逆に言うと、コンペの時にはクライアント側が建物の使い方について、あまりつめていないので、内部に対する提案がしにくいということもあります。建物の目的にまでさかのぼって、内部と提案した外部空間をどういうふうに関係づけていくかというのが、今まさにやっていることです。壁で仕切られていて、ここから外ですよ、内ですよというよりは、物理的にはそうなのですが、外の空間の作られ方みたいなのと内部空間が、ひとつの論理のなかで扱われているかどうかが大切な気がします。

（1998年5月8日、於：シーラカンスK&H事務所）

プロジェクトTS

1997年-
堀場 弘／シーラカンスK&H

Project TS

1997-
Hiroshi Horiba／Coelacanth K&H

砂丘のビジター・センターであり、砂丘やそこから発展した乾燥地に関する技術や地球規模の環境*問題に関する展示を行う施設。公開プロポーザル*コンペの当選案である。敷地は、国立公園特別保護地区に隣接し、自然景観との調和、配慮が問われた。

本来の傾斜した地形を復元するように半地下に埋め込んだ建築とし、上部を約60m四方の砂丘から連続する広場とした。砂丘の雄大な起伏をイメージしたひとつながりの面となるように、線材のプレストレスジョイスト梁を連続的にずらし、これを実現しようとしている。砂丘から歩いてなめらかに内部へ連続した床が続いて、自然にアクセスできる。広場のアクティビティ*には、床のモデリングで応答している。

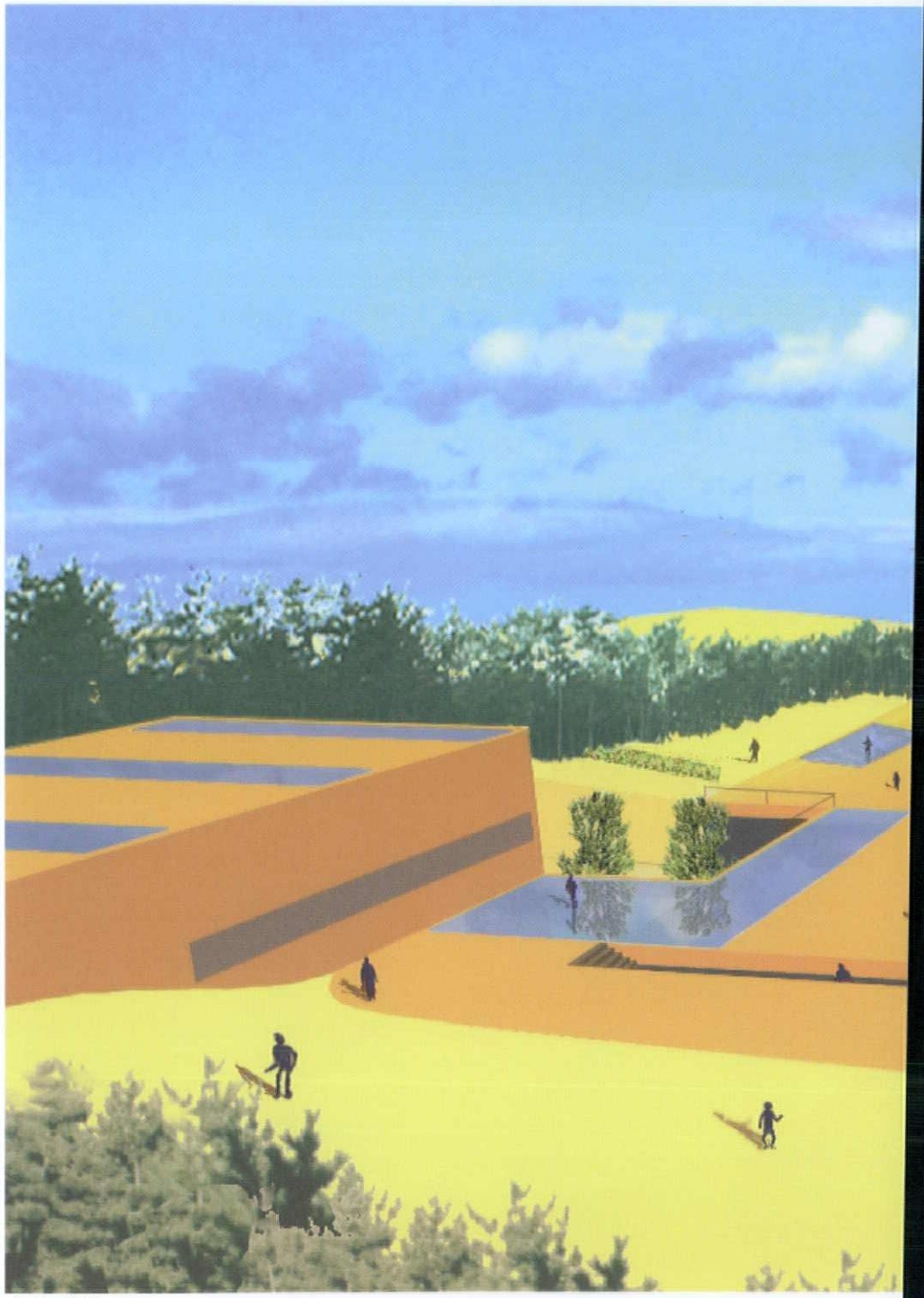
内部空間は自然光が入り、中庭に面した行き止まりのないスロープ空間を白とし、そこからアクセスうする展示テーマごとの閉鎖的な空間を黒とした。黒の空間は、特徴的な小さなスケール感をもった展示室の組み合わせをスペースブロックによって立体的に検討している。

また、計画プロセスを開かれたものとするために、砂丘コミッティ*による議論の公開、ワークショップ*、インターネット*による設計プロセスの公開やヴァーチャル・ミュージアム*といったことを、「かたちのない砂丘博物館」計画として、プロポーザル時に提案している。(堀場弘)

This is the proposal that won the grand prize in the design competition for a dune museum that will exhibit the dune itself, arid land cultivation, global environment issues, etc. Because the site is in a national park, harmonizing the building with the surrounding environment was called for.

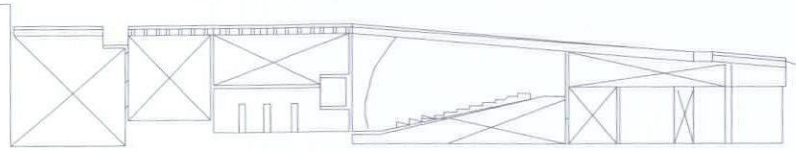
The proposed solution was to make the building half-underground in the restored slope, and to make the roof deck into a 60m-by-60m plaza that continues from the sand hill. The roof is intended to simulate the undulations of the dune with gradually shifted pre-stressed joists to allow visitors to be smoothly introduced into the building.

Inside, the circulating slope is to be finished in white for a sense of continuity with the dune while the small discrete exhibition spaces are to be black. Combinations of rooms were studied using tools called "space blocks." The proposal also suggested the "Intangible Dune Museum Program," which included public access to the design process, workshops and a virtual museum on the Internet. (Hiroshi Horiba)

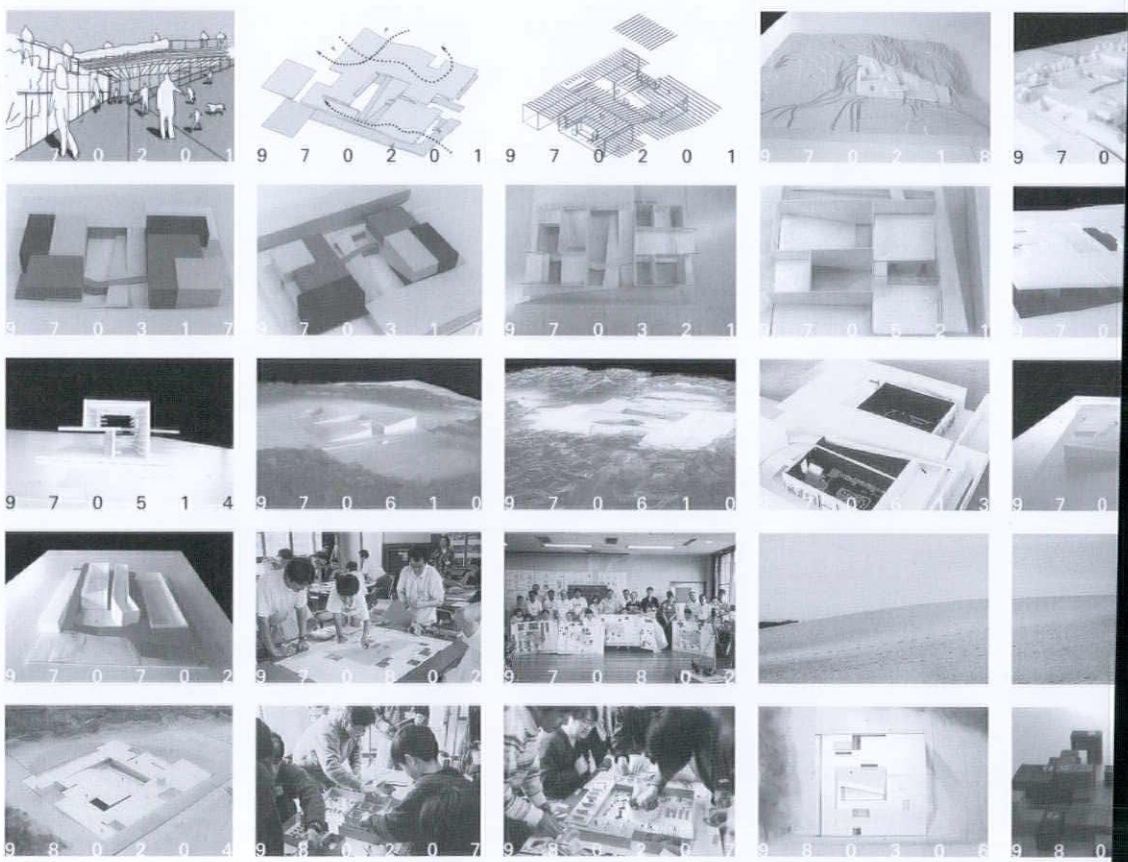


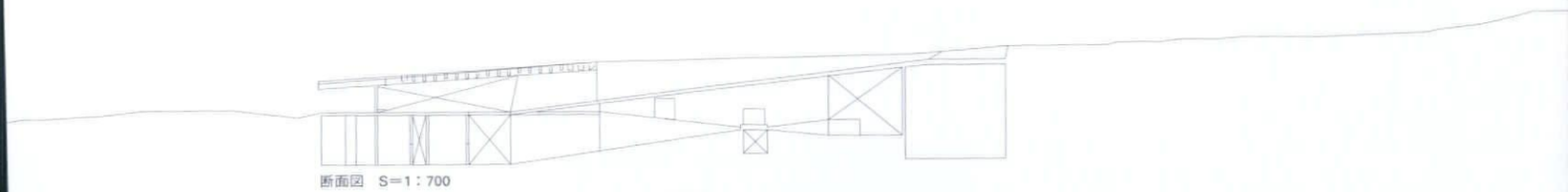
プロポーザル案、970201



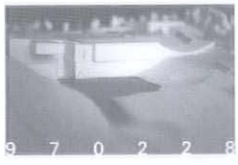


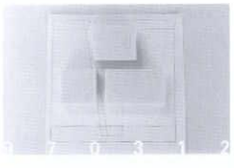
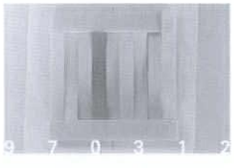
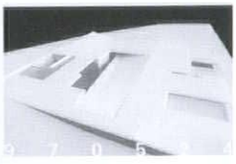
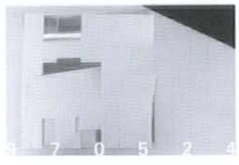
断面図　S＝1：700

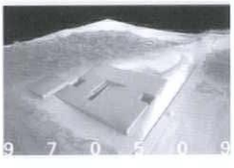
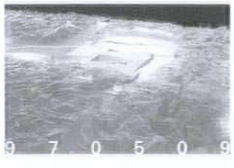
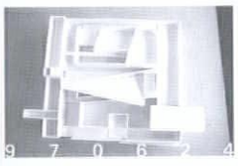
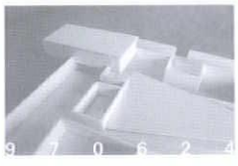
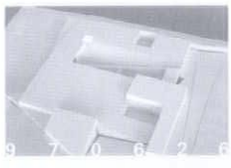
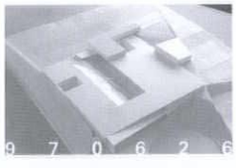


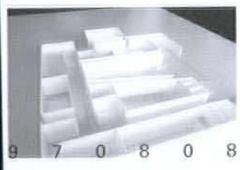


断面図　S＝1：700

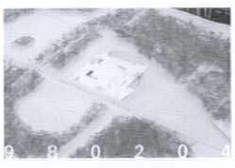



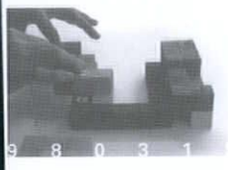






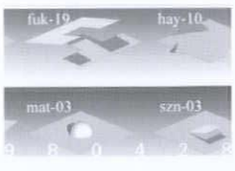



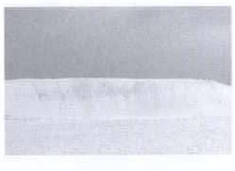
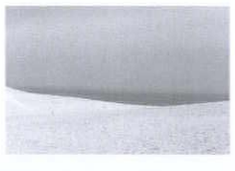










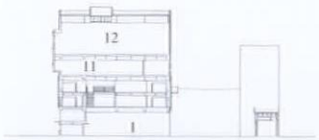
大阪市水上消防署

大阪府大阪市　1996年-
堀場 弘+工藤和美／シーラカンスK&H

Suijo Fire Station of Osaka City

(Marine)

Osaka city, Osaka, 1996-
H. Horiba+K. H. Kudo／ Coelacanth K&H



断面図　S=1：1500

急速な賑わいを見せている大阪港の天保山に位置するこの消防署は、船を使っての海上への出動という特殊性と、消防車などによる陸上への出動という二面性を持っている。

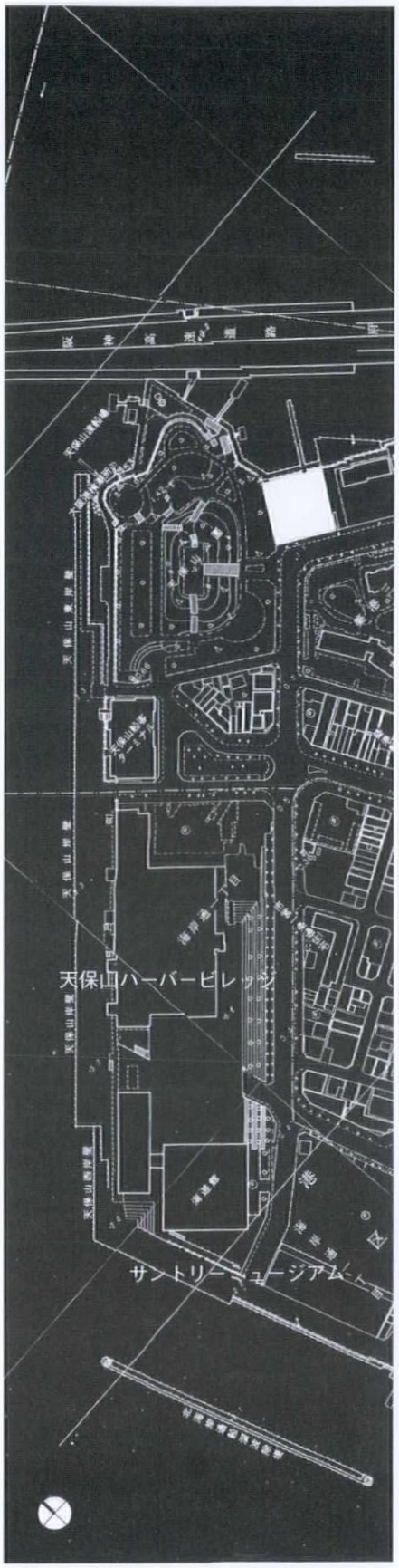
消防署特有のアクティビティと街との関係から、新しい建築の表現を目指している。それは夜間にも人がいて、地域の安全を見守る公共施設としてのあり方と、そこでの24時間のアクティビティ* そのものがデザインの対象となっているからだ。

「起床、身支度、掃除、食事、ミーティング、勤務交代、運行前点検、各隊別行動、食事、訓練、事務処理、食事、連絡事項、入浴、事務処理、仮眠」の間に、出動というイレギュラーなアクティビティがスムーズに受け入れられるような平面・断面計画。陸海2方向への出動と、限られた署庭内で豊かな訓練ができるような、建築ヴォリューム* と空地ヴォリューム* の関係性。それによる敷地全体の建築化。仮眠をとるための個人ブースとしての待機室。ブースの環境を考慮し、光や風を入れつつ、周囲との視線の交錯* を制御するための、フィルターとしての可動ルーバー*。夜間の地域安全を見守る、表情としての赤いフレーム*、など。常に人がいるという状態を、建物全体で表現している。（工藤和美）

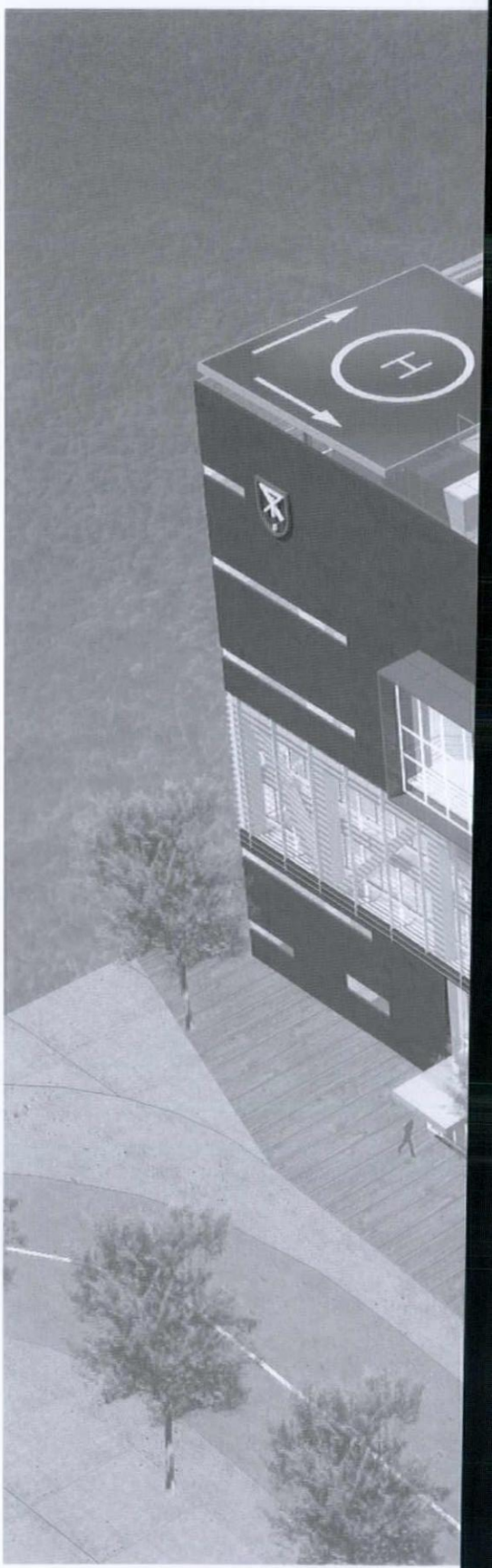
This fire station will serve as base for land and marine fire fighting activities in a fast growing water front in Osaka Harbor. The design objective here was to create a new architectural form which expresses the fire station's around-the-clock activities and its significance to the community as a watchtower.

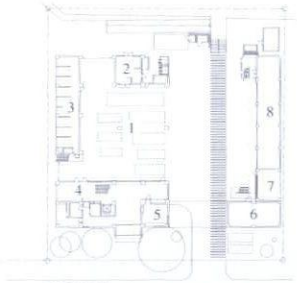
The plans and cross sections of the building are designed to allow the dispatching of fire fighting teams to be smoothly added to the string of daily activities (i.e. the staff on duty waking up, cleaning, a meal, a meeting, a drill, etc.) The built and the void volumes are arranged in a manner that allows immediate access to both sea and land, and provides sufficient space for fire drills. To provide privacy while letting in light and air, the stand-by rooms, in which fire fighters can lay down and rest, will have movable louvers on the windows. To symbolize the guarding of the community, window frames on the building will be painted red. All in all, the entire building is designed to express the constant human activities within. (Kazumi H. Kudo)





配置図　S=1：5000

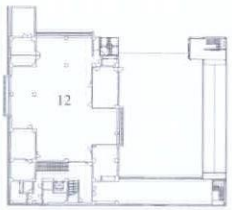




1階平面図　S=1：1500

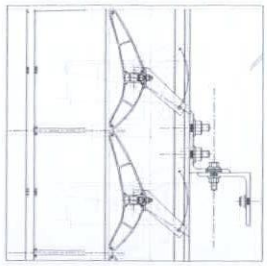


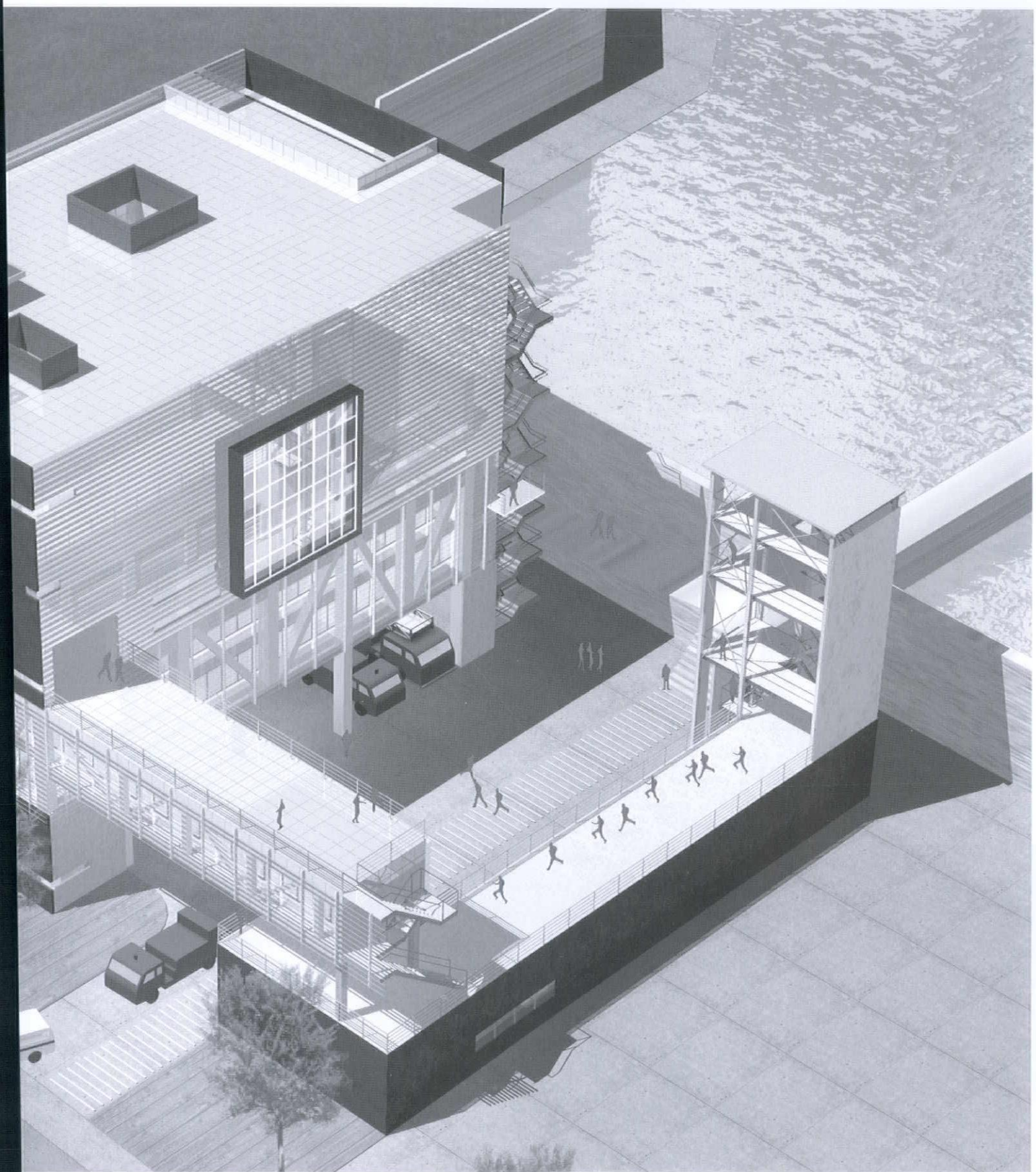
4階平面図



5階平面図

1：車庫
2：資材庫
3：救急待機室
4：救急消毒室
5：受付通信室
6：受水槽室
7：室内訓練室
8：資機材庫
9：待機室
10：会議室
11：事務室
12：講堂

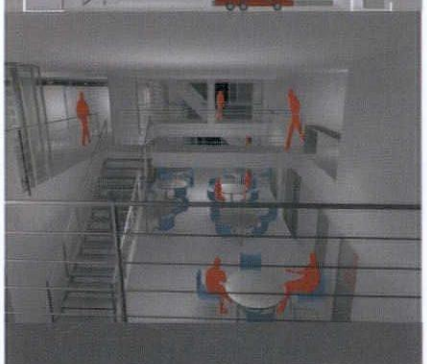

可動ルーバ詳細図



水上消防署における**24**時間の
アクティビティ

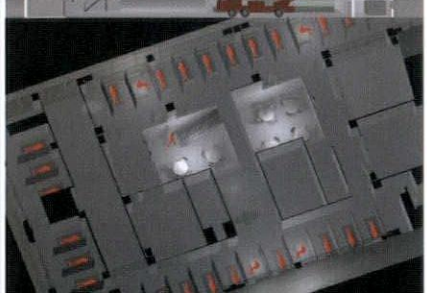






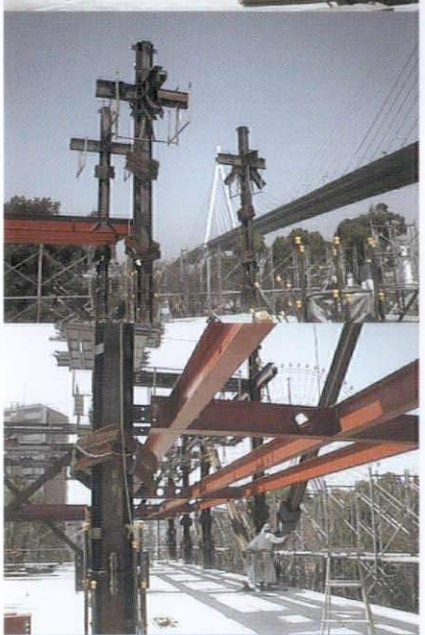












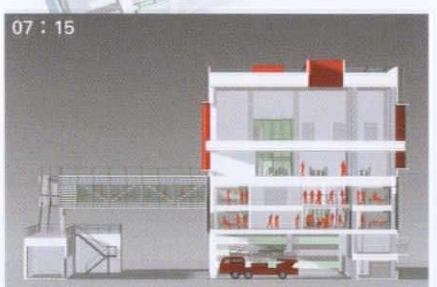


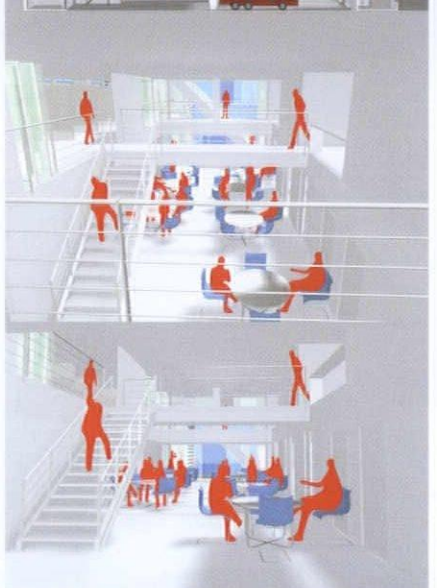


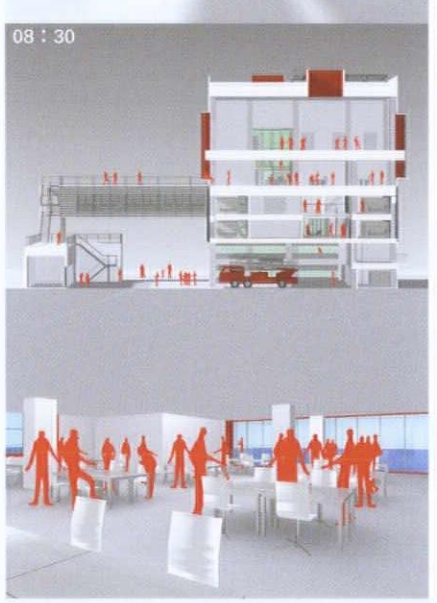




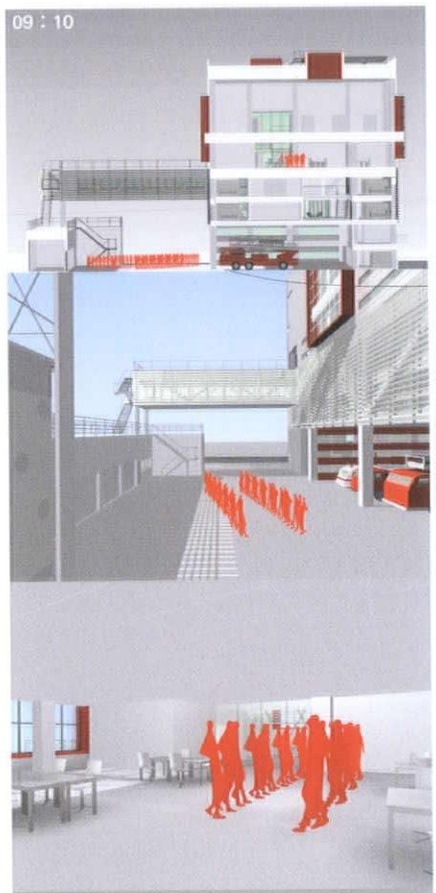




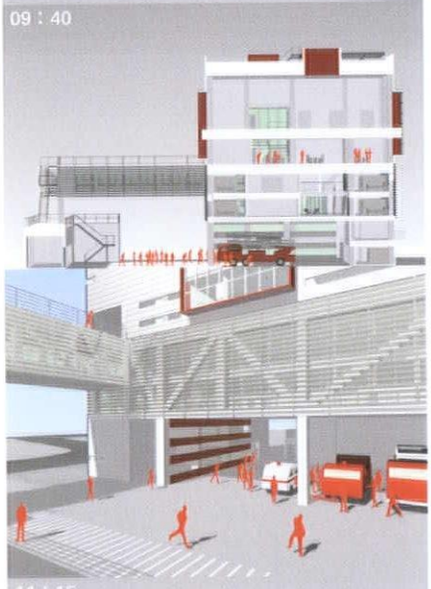




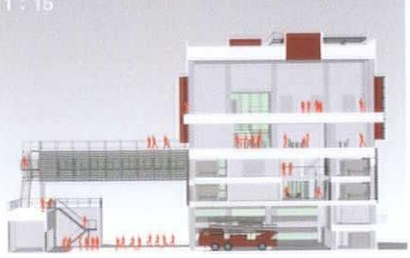
09 : 10



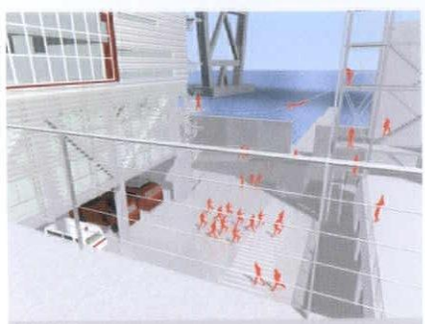
09 : 40



11 : 15



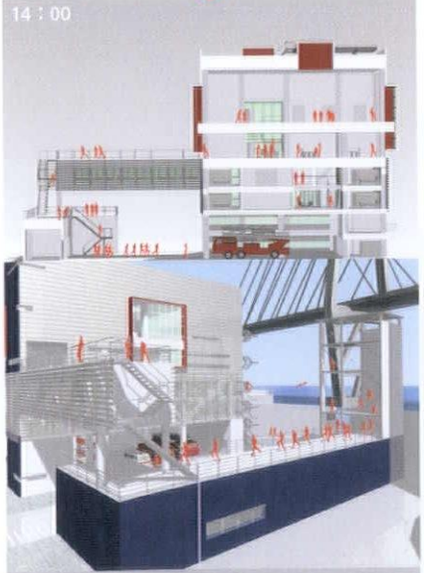




12 : 30



14 : 00







16 : 30



18 : 00







(仮称) 外ヶ岡交流拠点施設

静岡県下田市　1997年-
工藤和美+堀場 弘／シーラカンスK&H

Sotogaoka Exchange Forum

Shimoda city, Shizuoka, 1997-
K. H. Kudo+H. Horiba／ Coelacanth K&H

下田市の中心街に入る国道に面した、山と海に挟まれた細長い敷地全体を、新たな交流と観光情報の拠点として整備する計画。魚市場に面した海側に南伊豆交流館（市民ギャラリーや物産品を展示販売する市場）を、山側に下田の歴史と自然の紹介を行う下田ハーバーミュージアムを配置した。

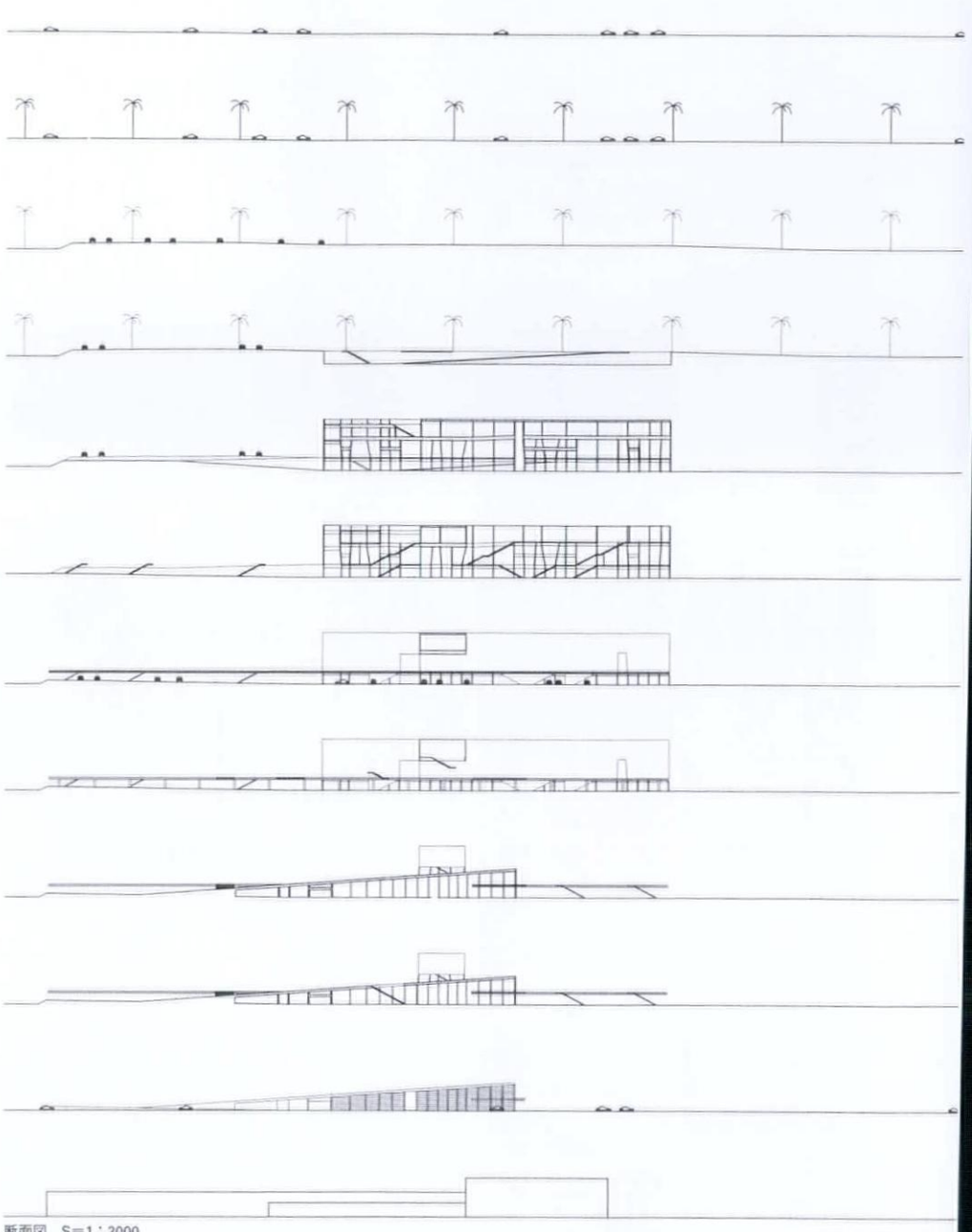
ふたつの建物に挟まれた部分は、下部の駐車場の日除けも兼ねた幅約13mのデッキとし、西側の下田市中心部から延びて桟橋へとつながるアクティビティ* による、にぎわいの広場空間をつくった。駐車場も利用の度合いに応じて広場的に使用できるようにし、敷地全体を海と平行なストライプ状のゾーニングとして定義している。それらを横断する海ー山の方向へ視線が抜けるように、スリットや展示室の開口（下田湾の歴史的な名所に向いている）や柱、壁を配置した。長く広がりのある方向に対して、限定的な視線の抜け* や行き来をとることで、山が迫った南伊豆の海岸線を歩く体験を強調している。

建築は、ストライプからの凹凸によってモデリング* し、ラウンジ的な会議室はデッキへ所属させるように上空に突き出している。構造は門型フレームの連続によるラーメン構造で、一部のフレームをスパン、階高に応じて斜めにすることで、建物全体の耐震性を高めている。ミュージアムの南側では、日射制御の観点から環境* 制御のゾーンを設け、表層は小さく刻まれた材料による構成を検討しており、周りの自然景観を映し出している。（堀場弘）

This project is to build, on a narrow strip of land squeezed between hills and the harbor, a tourism facility which will include a local product market hall and a local history and nature museum.

The buildings will be connected by a 13m-wide walking deck, which will function as a plaza while providing shade for the parking lot underneath. During the design stage, the site was first zoned into stripes, which then were staggered as necessary. Slits and windows will direct visitors' eye to the city's historic spots, the hills and the harbor. Views and paths will run at angles to the stripes to arouse a feeling of walking along the local narrow beach below the impending hills. The auditorium is lifted above the building so that it may belong to the plaza. The structure comprises a series of moment-resisting gate frames, some of which will be tilted depending on the span and the floor height, for seismic resistance.

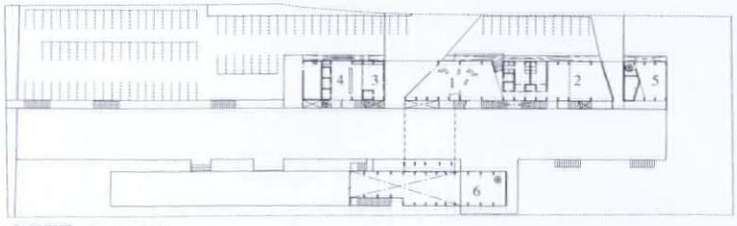
The buildings' surfaces will be divided into small planes as a way to control the light penetration. The interior space of the museum will be protected from the sun by a buffer zone. (Hiroshi Horiba)



断面図　S=1：2000



4F平面図



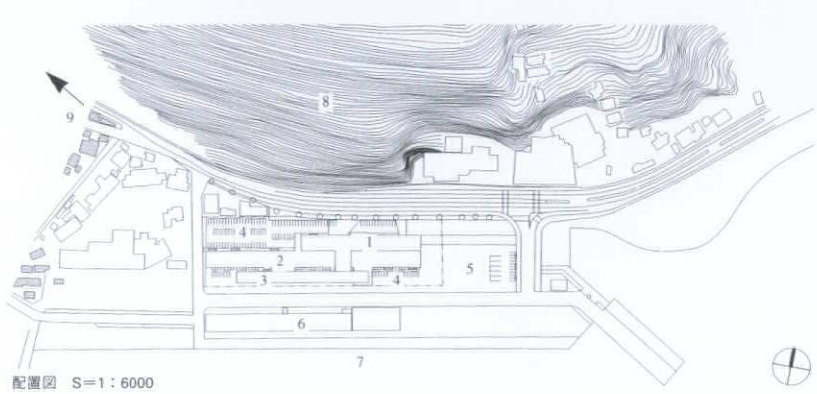
2階平面図　S=1：2000

1：エントランスホール　4：図書コーナー　7：常設展示室
2：特別展示室　5：レストラン　8：会議室
3：事務室　6：市民ギャラリー　9：研究室

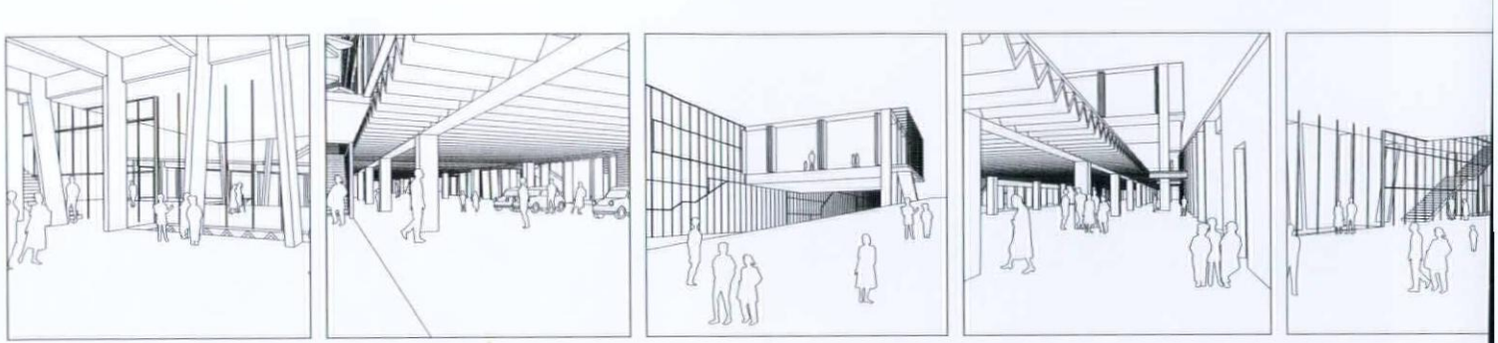




1：ハーバーミュージアム
2：デッキ
3：南伊豆交流館
4：駐車場
5：広場（暫定）
6：漁市場
7：下田港
8：武山
9：下田市街

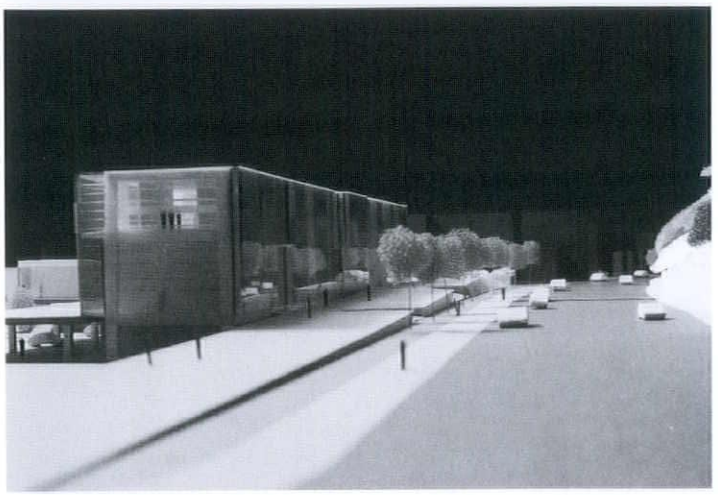


配置図　S＝1：6000

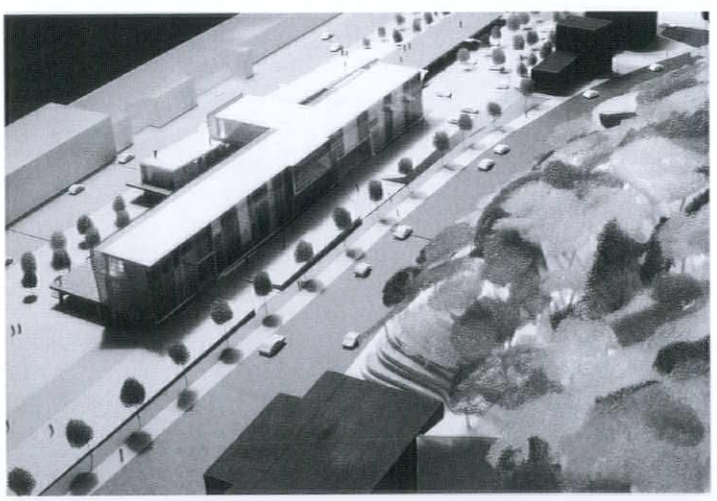


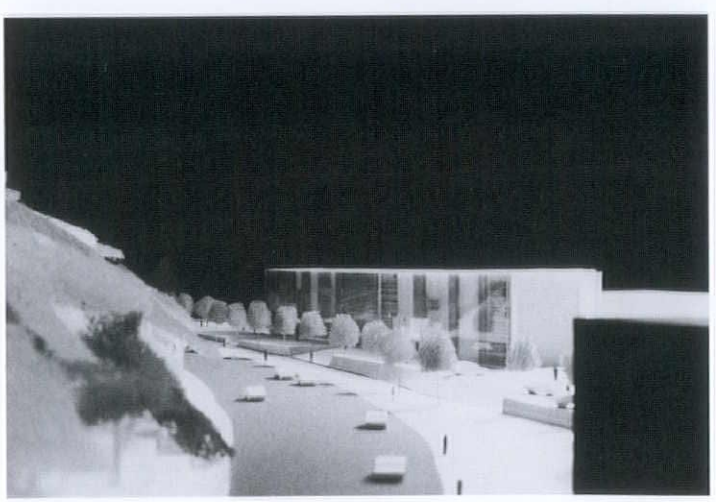










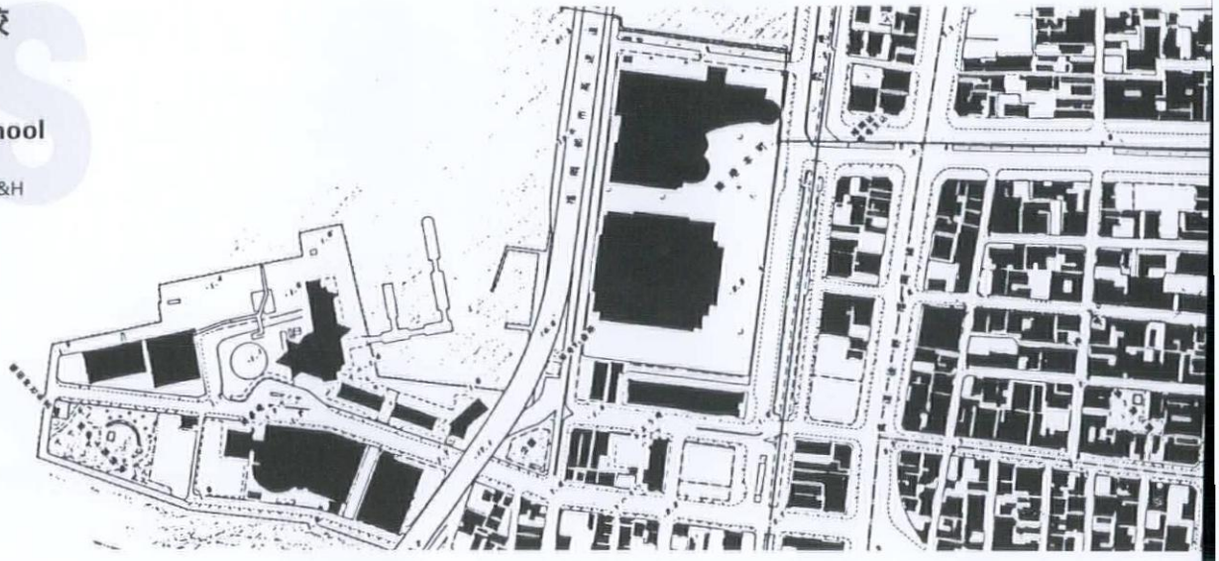


福岡市立博多小学校

福岡県福岡市　1998年-
工藤和美／シーラカンスK&H

Hakata Elementary School

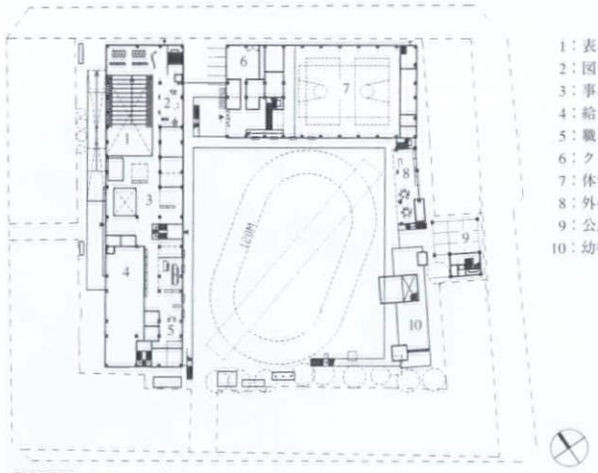
Fukuoka city, Fukuoka, 1998-
Kazumi H. Kudo／ Coelacanth K&H



［まちの学校としてのアクティビティ］

アトラクション





1階平面図　S=1：2000

1：表現の舞台
2：図書ラウンジ
3：事務管理ゾーン
4：給食室
5：職員ラウンジ
6：クラブハウス
7：体育館
8：外の教室
9：公民館
10：幼稚園



大都市の中心部における定住人口の減少（インナーシティ* 問題）から、いま学校が着目されている。児童の減少による教育の現場の危機感と正常な住環境の確保のため、この歴史と伝統の生き続けている博多部でも4つの学校がひとつに統合されることになった。

規模は19クラスから25クラスへの拡張を前提とし、聴覚障害のある生徒のための「きこえとことば」の教室と公民館と留守家庭子供会室を併設している。さらに同一敷地内に幼稚園もある、まさに幼児から老人まで活用する複合施設として生まれ変わることになる。

この統合を機会に、ソフト面での学校教育の在り方と、それを実現するハードの両面を見直している。都心だからこそ、屋上やデッキや立体街路を活用して積極的な緑化を計画し、森のような教室環境をめざしている。

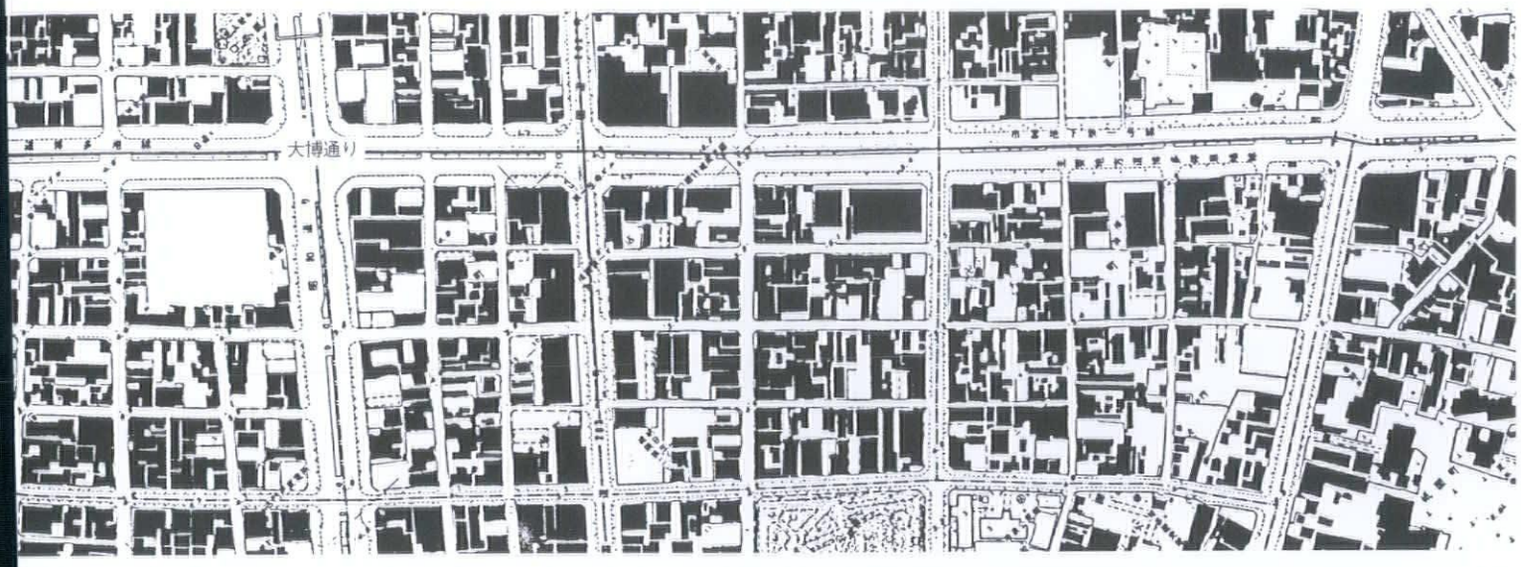
また「学校はまち、まちは学校」* をテーマに、強い自治活動と伝統的な祭りを特色とする博多部の地域特性を活かした新しい学校づくりの実現を目指している。従来型の職員室をなくし、学校家具やクラスルームを見直し、マルチメディアを道具として取り入れる。

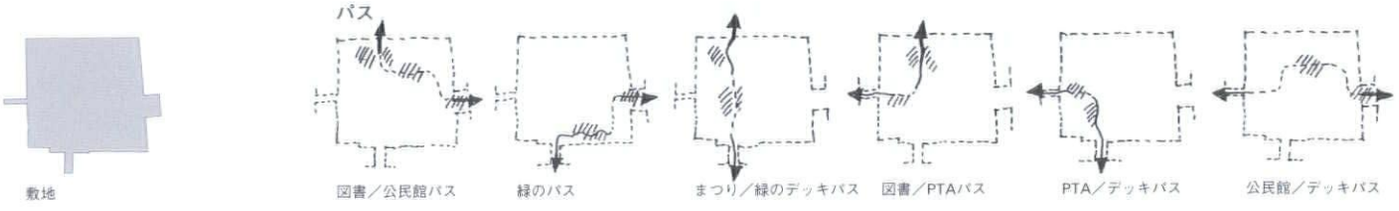
また、表現の舞台や外の教室* や立体街路といった、これまでにない学校空間を実現する上で、地域と教育委員会を中心とした行政が一体となって、参加型の「まちの学校」づくりが進められている。（工藤和美）

This project is to combine four elementary schools in Hakatabu, a metropolitan area in south Japan, into one school in response to the declining student numbers and to help rectify the inner-city living environment.

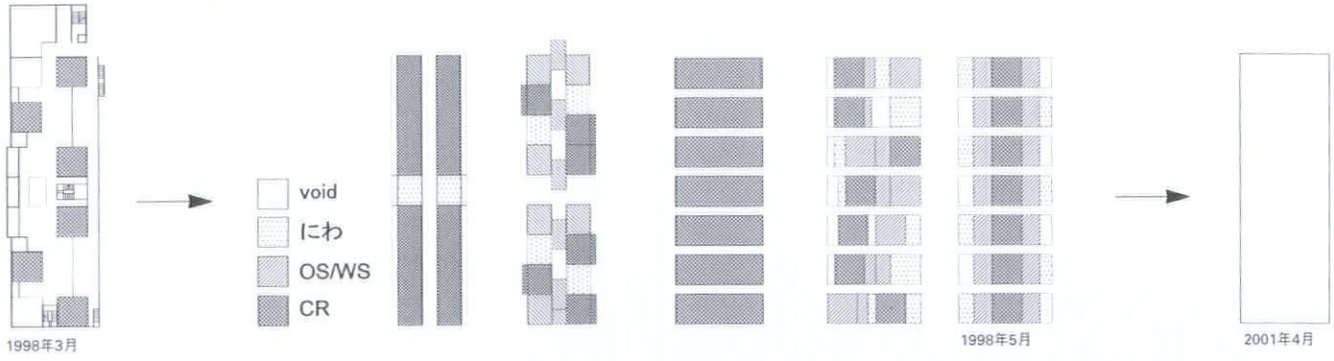
The new school will be a comprehensive facility for citizens young and old, and will include a classroom for deaf students, a community center and a day care center. An almost forest-like environment is intended with plentiful greenery to be planted on the roof-deck and the balconies.

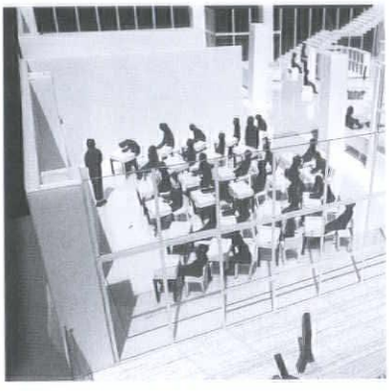
The design goal is to create a new type of school under the theme "a school is a city, a city is a school" while capitalizing the city's characteristics such as vigorous self-governing activities and traditional festivals. The school will have "re-invented" school furniture and classrooms, multimedia educational tools and no conventional faculty rooms. The community and the local government also contribute to build the "community's school" through their participation in the development of innovative educational spaces such as outdoor classrooms, elevated walkways and "students' self-expression stages." （Kazumi H. Kudo）

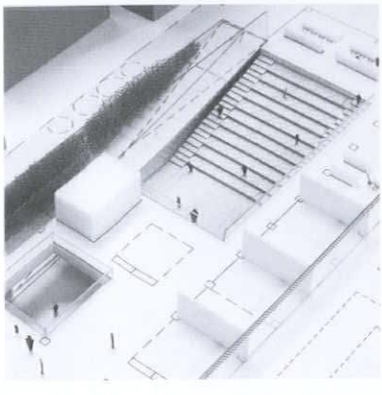




クラスルーム配置の再考









世界はエーテルで満ちている

シーラカンスにおけるスペースブロックの概念

土居義岳

シーラカンスの仕事の進め方から、当世はやりのコラボレーションや非作家性が論じられよう。ただし建築はもともと本質的に共同作業である。ある特定の作家の署名がなされる場合でも、その下にはエスキスに参加し、実質的に設計をした所員がいる場合がほとんどで、保存が問題となる近代建築でも作者の問題は慎重にならなければいけない場合がある。作家性そのものが虚構の上に成立しているようなものであり、協同性を強調するということは、むしろ事実を直視するという意味合いがあろう。しかし、このあたりの議論はほかの論者にまかせようと思う。

世代論的には父親が不在である人びとであると言えよう。事務所勤務を経由しないで、学生の集まりがそのまま設計集団に移行していった様子は、たとえて言えば、放課後の集まりがヴェンチャー化していったようなものだ。彼ら以前は、まずどういう個性をもつ建築家を師として選ぶかが、修業のスタートであることが普通であった。しかしシーラカンスに限らず彼らの世代から、マスターのもとでの修業というプロセスを必要と感じない人びとが多くなった。彼らには乗り越えるべきものは最初からなく、それはエディプス・コンプレクス以前か以後なのかは知らないが、とにかく父は不在であり、それはある時代の終わりを告げている。ただし後見人はあらわれようし、誰がそうなるかは注目に値する。彼らは団塊の世代にはうけは良いだろう、という気がする。

団塊の世代における共同体指向とチームワークの精神は重なっているようにも思える。しかし前者の共同体には平等のようで実はリーダーがいるのに対し、後者はむしろ父が不在であることの方が重要である。

さて私が関心があるのはスペースブロックの概念である。おもに原広司の研究室にいた彼らが空間概念を取り上げているとするのは考えやすく、すると「父」はちゃんといるではないかと思いがちだが、原広司の「空間」と彼らの「スペースブロック」はほとんど無縁のように思える。なぜなら後者はむしろ「エーテル」の概念にきわめて近いからである。

周知の通り古代ギリシアにおいてはこの世界に真空は存在してはならないのであり、哲学者たちは世界はエーテルなるある種の媒体によって満たされていると考えた。そののち、物理学の発達により、とくに光が粒子か波かといった議論などによって、宇宙空間はまさに真空であり、エーテルは存在しないと考えられるようになった。しかしエーテル的な発想はなくなったわけではない。

建築においても、19世紀の折衷主義建築的な潮流のなかで様式や装飾などの実体的な側面があまりに注目されたことの批判として、また19世紀末から20世紀にかけて、ものとものの間の空虚が「空間」として、建築にとって本質的なものであると考えられるようになった。つまり、これは建築における「真空」なのである。しかし絶対的に空虚なものの考察はきわめて困難であり、空間の考察はプランニングという19世紀的な思考方法に回帰するか、逆にきわめて観念的にならざるをえなかった。真空空間は必然的に均質空間でしかあり得ない。それは批判的ではありえたが、実は方法論とするのは困難であった。

しかしシーラカンスは、あっさりとこの空間を実体として理解する。つまりすべてがエーテルで満たされているとしたら、ボイドとソリッドの二分法はもはや必要がない。

これはちょうど磁場や電場の発見によって、すなわち「場」の概念の登場によって、空間は真空であるとは考えられなくなったようなものだ。つまり空間は、かならずしも無色無臭で完全に中性的なものではなく、それ自体、作用を与え、受ける。

建築空間が完全に均質なら、それを操作の対象とするのは困難である。しかしスペースブロックの概念によって、空間にも色がつき、比重に偏りがあり、濃淡がありうる、すなわち不均質でありうると考えられるようになった。〈プロジェクトTS〉で試みられたことは、砂丘に対比的な建築空間をつくることではなく、砂漠のなかにさらに密度の濃い砂漠をつくることであったようにみえる。それは庭園において、ハーハ（庭園に見られる隠し堀）や借景の手法により、視覚的には連続させるが身体的には隔離することとはちがう。〈House TM〉や〈Art Hut SD〉では光の演出が試みられているが、それは透明な空間を経由して光がいかに壁や床に到達するかではなく、この空間そのもののなかに光がいかに滲むかを検証しているようにも思える。つまり水のなかに色素を溶かしたり、流れを発生させたり、味をつけたりする感覚である。また〈千葉市立打瀬小学校〉や岡山県の〈吉備高原小学校〉では、壁によって空間を暴力的に組織化するのではなく、空間の密度の濃いエリアと薄いエリアを並べ、しかもその差が急激ではなく、スムーズに密度が変化するように意図されている。

こうした試みは80年代以降に流行し優勢となった場所論とも異なる。近代建築が批判されるなかで「空間ではなく場を」と繰り返し主張されてきたが、それらはほとんどの場合、歴史や風土や文脈といった意味性を付加することであった。すなわち物語性を与え、建築を文学化することだと理解されてきた。しかしそれは建築を共同体化し、そこから排除される人びとを生み出すことになろう。

スペースブロックの概念を発展させた究極には、排除の構図のない、開かれた庭園のような建築がイメージされる。文学ではなく物理学との関連をもってほしいので、私はそれを「エーテル」と呼んでみることにした。

●どい・よしたけ／九州芸術工科大学助教授

インタビュー3

小泉雅生

インタビュアー：西沢立衛

こいずみ・まさお　Masao Koizumi
1963年　神奈川県出身
1986年　東京大学建築学科卒業
1986年　シーラカンス設立
1988年　東京大学大学院修士課程修了
現在、C+Aパートナー、東京都立大学、東海大学、日本大学非常勤講師

――以前、鴻巣のプロジェクトについてお聞きした際に、この建物固有のヴォリュームを決めていくだけではなくて、何かヴォリュームを導き出してゆく「手続き」のようなものを同時にデザインできないか、と小泉さんが考えていらっしゃる点が、僕はすごく興味深くて、それについてお聞きしたいのがひとつ。もうひとつは、小泉さんはコンピュータというものをかなり積極的にその「手続き」に関わらせようとしていますが、その辺りからまずお話し頂けますか。

今、西沢さんが言われたように、ここではヴォリュームをどういうふうにつくっていくか、ということが一番大きなテーマだったと思います。なぜ、そうなのかということについては、住宅地に隣接するという敷地の特性がまずあったと思います。この敷地の中で大ホールの巨大なヴォリュームがどういうふうに置かれるか、どういうふうに人々の目に映るかということが、非常に高い公共性を持つのではないかと考えたわけです。

「手続きのデザイン」という表現はまったくその通りで、「手続き」というのを「プロセス」というふうに言ってもいいかもしれませんが、そのプロセス自体がかなり興味のあるところで、そのプロセスが独自であれば自ずからその最終形も面白いものができ上がってくるのではないか。ですから、プロセスそのものをかなり意識的にうまくデザインしてやりたいと思っています。それはある意味で、コンピュータでいうところのプログラムを組むような、プログラムを構築していくような作業だと思うのですね。どういうパラメーターを与えて、どこをフィックスし、どこを変数とすると、どういうアウトプットになっていくのかという道すじをプログラミングしていく意識があり、恐らくそういった思考過程がコンピュータと相性がいいのだと思うのですね。

――この場合、パラメーターの設定とかは、具体的にはどのような形で進められているのですか。

ホールの中ですと、舞台やスピーカーからの音が届くとか、技術室や客席から舞台が見えるかどうかが重要になるわけですが、それらはすべて「視線」に置き換えられる。つまり、あるポイントから必要な「視線」を確保するという条件で、ホールの中の形状が決まっていきます。まず、前に座る人の頭をよけた高さに後ろの列の座席を配置していくと、床勾配が決まり、次にその下にある技術室からのプロセニアムへの視線がけられないように、その床スラブが切り欠かれる。今度は逆にスピーカーからの視線をとばし、見通すことのできない座席を取り外す、といったような流れで座席配置が決まってくるわけです。屋根について言えば、フライや投光室など機能的に要求される高さや角度があります。それに構造や仕上げの寸法が加わり、屋根面に厳密に座標の決まってくるポイントというのがいくつか出てきます。次にそれらのポイントを結んでいくのですが、どういう線―曲線で結んでいくのかで、屋根面やスカイラインがどんどん変わっていきます。面が連続しているから、思わぬところにその影響が出て、スムーズな面ができる場合とそうではない場合とがあるのですが、その辺りを逐一試行錯誤しながら決め込んでいく、というようなプロセスですね。

――ジャン・ヌーベルが第二国立劇場案でホールの形をむき出しにしていますね。フライタワーが必要だから飛び出して、袖舞台が必要だから取ってというふうに、非常に即物的なホールを作っていく。あれも一種の合理主義だと思うんですが、そういう手続きというのは、鴻巣と共通するところもあるのでしょうか。

そうですね。そういう意味ではすごく即物的です。だから、こういう模型を見せると表現主義的、あるいは造形的なことが第一義にあるように受け止められがちなのだけれども、僕の意識としては必ずしもそうではなくて、非常に即物的につくっているつもりです。

――即物的な合理性と恣意的にも見えかねない造形という、対極的なふたつを両方持とうという、その境界でがんばるというところは、すごく面白いですよね。

そこであるロジックに乗せさえすれば、またはある変数を与えさえすれば、オートマティックに形を発生させるという、コンピュータの役割が大きいと思います。

――ところで〈ハウスジャパン〉とか〈プラモデル住宅〉とかは、鴻巣とはかなり方向が違うように思うんですが、いかがですか。

自分自身の中では、それほど設計のスタンスを変えているという意識はないんです。むしろ、先ほど言ったようなプロセスをデザインするというのと同じ線上にあると思います。〈プラモデル住宅〉では、隣地が迫っているという敷地条件では、隣地との間の壁が果たす役割が大きい。だから、壁というものに対して必要な機能をもう1回洗い直すところから始めて設計を走らせていくと、光を透過する光壁というのが出てきて、壁パネルが出て、軸組が決まってくる。そうすると逆に形はそこでは問題ではない、パネルや軸組が要求する形になればいい、というようになってくる。あるいは〈ハウスジャパン〉の場合では、もう少し踏み込んで環境工学的なことがテーマになり、プロセスに盛り込まれています。外から内に、下から上に空気を流すといったところから、中央の吹き抜けのコアとペリメータの回廊という平面図式が出てきたし、日射の遮蔽を考えて、屋根面と西面の壁とを同じに扱おうとした結果、断面のような平面という、ああいった形状が決まってきたわけです。

――つまり、形というよりは形と機能の関係なんですよね。でも、機能があって形が生まれるというと確かにその通りなんだけれど、形と機能という非常にモダンなテーマが、なぜか大変造形的な形を生み出しもする。やはり、何か小泉さんがおっしゃる即物的なプロセスということでは、明かしていないことがある気がしませんか？（笑）

自分自身をあまり分析的に捉えたことがないのですが、僕としてはすごくまじめに合理的に、ある意味でモダニズムをやっているつもりがあったりするんです。それでもやはり、どこかでずれていっているのかも知れませんが。ただ、最終的にはこれで新しい可能性が広がるかどうかというところでは、ふるいをかけています。連続的に屋根が推移していくというのも、恣意的でない造形をすることで新しい形が生み出せるのではないかということを意識していたと思います。

（1998年5月14日、於：C+A Tokyo事務所）

インタビュー4

小嶋一浩

インタビュアー：西沢立衛

こじま・かずひろ　Kazuhiro Kojima
1958年　大阪府出身
1982年　京都大学建築学科卒業
1986年　シーラカンス設立
1988年　東京大学大学院博士課程単位取得退学
1988-91年　東京大学建築学科助手
現在、C+Aパートナー、東京理科大学助教授

――まずは、パートナーシップを最近、分けられましたよね。そのあたりのことから聞かせていただけますか。

ひとつの理由は、実際に8人のパートナーがいて、少ない仕事をワーワーやっているときはそれでも成立したけれども、大きいプロジェクトが複数動くようになってくると、自分が直接関与していないプロジェクトは結局、どの程度自分に責任があるのかというリアリティがなくなってくる。もうひとつは、他者から見た時にそろそろシーラカンスのイメージが強く固定されてきて、それがあまり自由じゃない気がしました。最初につくったルールでは、シーラカンスと言って発表しているものは全部、小嶋が責任を持っているし、他の皆も責任を持つということになっている。それと我々の活動にちょっと矛盾が出てきたように思ったからです。

――具体的なプロジェクトの関わりということでは、どのように変わってきていますか。

例えば、〈打瀬小学校〉と〈吉備高原小学校〉とを比べると、空間の質とか、アクティビティという言葉で言っているようなことで目指しているものはある意味で同じなのだけれども、吉備では整理できることは整理して、それで質の方だけ残したいと考えました。打瀬までは多くの考えが、そのままかたちとして未整理に並置されていました。ただ、徹底的に空間を整理しようとしているわけではなくて、いろいろな場所があって、ある種の総量としての豊かさみたいなものは変えているつもりはない。出雲のプロジェクトも同様の方向です。吉備は小泉と私のふたりがやった仕事で、それがうまくいったと思うけれども、もう1回、あれとまったく同じやり方でやってもうまくいかない。というのは、2回目になると何か戦略が発生してしまいます。それは必然的です。だから、大勢のパートナーシップの良い点を挙げると、同じ人と組んで同じようにやる仕事というのは、2ラウンド目まで廻っていくのに時間がかかるので、常に組み合わせを変えながらやれていたことで、それは割と良かったかも知れません。

――前に僕、小嶋さんってチューナーみたいだなと思ったことがあるんですね（笑）。自分がいじれるつまみというかパラメーター全部を調整しながら、建物のリアリティを出していくという。

チューニングのつまみがたくさんあって、それをいろいろといじってみることで見えてくるものというのは、ダイアグラムや模型でパターンを作るのと同じような意味がないでしょうか。一番普通だと、バランスの表現になるのでしょうけれども、実際にはファースト・プライオリティが何かということをはっきりさせてないと設計はできません。一般的に言うのは難しいので、K総合学科高校の例を挙げると、OMソーラーのような環境制御をやりたいというのが先にあったわけではなくて、廊下と部屋ではないプランをつくるのには、寒い所だということを本気で考えなければいけないということがスタートです。

――バランスと言うとまさにその通りですけれど、でもバランスのいい建物って大体つまらないじゃないですか（笑）。やはりどこかですごい飛躍をしていて、でも一方でその飛躍を合理化してゆく作業があるように思うんです。

もちろんブレイクスルーは必要です。一方でかなり無理やりでも、一点では何か合理的にやっています。そういう点で、コラボレートする相手の中に、プロフェッショナル・アドバイザーとして、学校だとプランナーの上野先生とかが入っていることに意味があります。

東京のようなゴミの集積みたいなモデルも結構居心地が良いということから、建築をスタートしたような気がします。整然とした都市ではない。だけれども、やはり東京というのは、緻密にコントロールされていて、よくこれで吹っ飛ばないで維持されているのだということがすごくて、その縮小モデルというのは、どうも建築ではうまくいかないというのを体でわかったみたいなことがあります。

――ゴミの集積のような都市と言う時に、小嶋さんはまったくアナーキーな破れかぶれの都市と、もしくは異様に複雑ながらも確実に構造化されている都市と、どっちをイメージされているんですか？

全く破れかぶれの都市というのは、都市の定義と矛盾しています。東京はカオティックに見えるという要素はあるけれども、本当のカオスではないと思います。そういう意味では何かしらすごく複雑なパラメーターによるかもしれないけれども、構造はあると思う。

もう随分前に修士論文で東京の航空写真を分析した時に、23区を4m角ぐらいの写真にして、それに毎日張りついて作業をしていたのですが、すべての点ぐらいにしか見えない小さい木造家屋にも電話回線とかガスとかというインフラがちゃんと整備されている。東京はカオスなんかでは全然なくて、こんな複雑なものをコントロールするのはすごく高度なことだと思います。そういう観点で言うと、僕が興味があるのは、何百人とかの自分の頭の中で目を閉じて想像しても絶対読み切れないような変数の多いアクティビティのようなものです。変数が多いから今までは単純化して太い動線にしていたのを、あくまでひとりずつの行為の集積として考えると、それはコンピュータにすごくフィットしたものかもしれません。人間の思考だと5人ぐらいでも同時に100m動かしたら、絶対同時には想像できないでしょう。

――アクティビティについて僕がお聞きしたかったのは、つまりそれがどういう拡大率で定義しているのかということなんですよね。例えば、マス的な巨大なうねりみたいに見えるモノが、拡大率を上げてみると、例えばあくびをしているとか、ソファで休んでいるとか、つまり拡大率によって全然異なる対象を引き出せると思うんです。

そういう意味で言うと、ズームするのではなくて、引いているのですね。ひとりずつ子どもを追いかけるということと、総量としての何百人を同時に考えるのは全然違う作業です。アクティビティというのは活動だから、例えて言えば、都市のアクティビティとか経済のアクティビティというような、特に経済なんて言うと意味の拡がりがよくわかります。だから以前は、例えば東京というモデルを物的に作ろうとしていたのですが、いろいろな都市がある中で、東京は全体としてはまとまりのないものではありますが、そこに生起する活動が何か自由度と表裏一体になっていることは割とそれでいいのではと思っています。

（1998年5月8日、於：C+A Tokyo事務所）

インタビュー5

三瓶満真

インタビュアー：西沢立衛

さんぺい・みつまさ　Mitsumasa Sampei
1964年　神奈川県出身
1988年　明治大学建築学科卒業
1990年　明治大学大学院修士課程修了
1995年　シーラカンスのパートナーに加わる
現在、C+Aパートナー、昭和女子大学非常勤講師

――三瓶さんは、創設時からのパートナーではなくて、1995年からパートナーになられたわけですが、初めの頃から現在に至るまでの経緯について、簡単にお話しいただけますか。

最初にシーラカンスのメンバーたちと出会ったのは、学部の1年生の時です。原研究室ではその頃、オーストリアのグラーツの展覧会の準備をしていて、その手伝いに行ったのが最初ですね。その時、何かすごく面白い世界だなと思って、2、3ヶ月ぐらい入り浸ってしまって。その後はしばらくコンタクトはなかったんですけれど、彼らがシーラカンスという組織を始めたということを聞いたので興味をもって見に行ったんです。当時僕は4年生で、漠然と事務所に入ろうかなと思っていたので、彼らが実際に設計している姿を見て、かなり近いことをやっているなという気がしたんです。でも、その時はもうすでに大学院に行こうと決めていたのでバイトとして始めたら、〈桜台アパートメント〉の仕事の話があって、じゃあ、これを担当としてやってみるかという話になって。それからずっとやってきて、95年にパートナーになったんです。

――パートナーになってから、どう変わってきましたか。

実際の設計活動という意味では、それほど激変はしていませんけれども、経営的な仕事といった設計以外の仕事はすごく増えていますね。パートナーになってからは、クライアントの行政側や外部の協力者との調整といった仕事が多くなりました。鴻巣のプロジェクトのような公共建築の場合には、建築家が思う存分力を出せるような下地というか、環境づくりみたいなものが、すごく大事じゃないですか。そこをうまく持っていけるかどうかで、建築の作品としての質がかなり決まってしまう。そういうことを、この仕事をやりながら随分感じました。

――そういった環境づくりのようなことは、三瓶さんが中心に進めているんですか。

ええ。鴻巣のホールについては、運営につながるホールのあり方みたいなことについて、コンペの時から日本大学の本杉先生にご協力頂いて、行政側ともいろいろと話をしています。この仕事に限りませんが、公共建築の場合、民間のプロジェクトに比べて、クライアントや地域住民なりが何を求めてどういうことを望んでいるかといった辺りのことがクリアでない場合が多いわけです。それをうまくすくい上げて、具体的な案として提示するのがすごく難しいし、面白い部分でもありますね。ここでは、公園と一体化した敷地の中に建つこともあって、ホールとしての催しがない時でも日常的に住民に使われる施設にしたいというのが出発点でした。だけど一方で、ホールというのは非日常的な時空間を体験できる施設ですし、当然本格的なプロの使用にも耐えるものにしなくちゃならない。そういったことから、ホールの仕様を詰めていったわけです。

――具体的にはどういった提案をしているのですか。

地方の多目的ホールがとかく中途半端なものになって、うまく使われていない例はイヤというほど耳にしていましたが、うまく多目的性を持たせてあげないとこういう場所でのホールは成立しにくい。だから、無理やり専門ホール側に引っ張るのは良くないという考え方でした。演劇に求められる客席空間は、音楽に比べると密度感とか、親密感とか、一体性みたいなもので、音楽の客席空間はもうちょっと拡散していて、くつろげて、ゆったりしているというのがあると思います。今回のホールの場合は、客席の寸法関係なんかは割とゆったりめに取っていますけれども、ホールとしての密度感が損なわれないように、客席のバルコニーをもみあげ席といって、1階の床から2階席にずっと連続させていて、反対側は1階から3階に連続するようなかたちで全体をぐるっと取り囲むような、そんな客席形態をとっています。演劇ホールとしての空間性は確保しながら、音はちゃんと鳴るように空間のプロポーションをやる。そんなふうに多目的ということについては考えました。

――K総合学科高校でも、太陽熱空気式床暖房を使うなど、意匠設計以外のものを巻き込むような提案をされていますよね。

他のプロジェクトでもそうですが、最近は環境問題を考えずにはプロジェクトが成立しないようなものに意識的に引っ張っていますね。ここでは、設備設計は高間三郎さんにお願いしているんですが、太陽熱を利用しているのは、プランの問題とかなり関係があります。普通、学校というのは廊下と教室でできていますから、廊下は寒い、教室は暖かいというのが普通なわけですよね。ここはすごく寒い地域だということもあって、特に屋内での活動が重要だし、しかも総合学科高校という新しいプログラムを持っていますから、生徒を1ヶ所にとどめておいて、そこで勉強させるというわけにいかないのです。生徒が自分の居場所として、教室以外にいろんなスペースを持っていなければいけないわけで、そこが暖房されていないと十分に使われないんだけれど、そうなると本当に全館暖房をしなくちゃならなくなる。それで、ランニングコストのかからない太陽熱の床暖房というのが出てきたんです。そういった計画的なことを理解してくれて、積極的な提案をしてくれる協力者の存在は大きいですね。

――ところで、今後はC+Aの中での活動はどういうふうにお考えですか。

今は、たまたまメインで引っ張るプロジェクトがないわけですが、これは小泉、これは小嶋というようなかたちで、三瓶が頭になってやっているぞというプロジェクトを近々実現できればいいなと思っています。でも、誰かが頭になっても、複数のパートナーがいるということは、すごく大きなメリットが出てきます。そこの辺りは、対外的な交渉なんかの上では、戦略的に捉えている部分もありますし、デザインの上でもそれをいい方向に活かしていける設計の進め方みたいなものを僕らは今までやってきたわけですから、そういうものは捨てたくないなと思いますね。

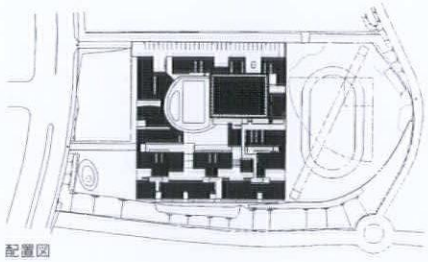
（1998年5月14日、於：C+A Tokyo事務所）

吉備高原小学校

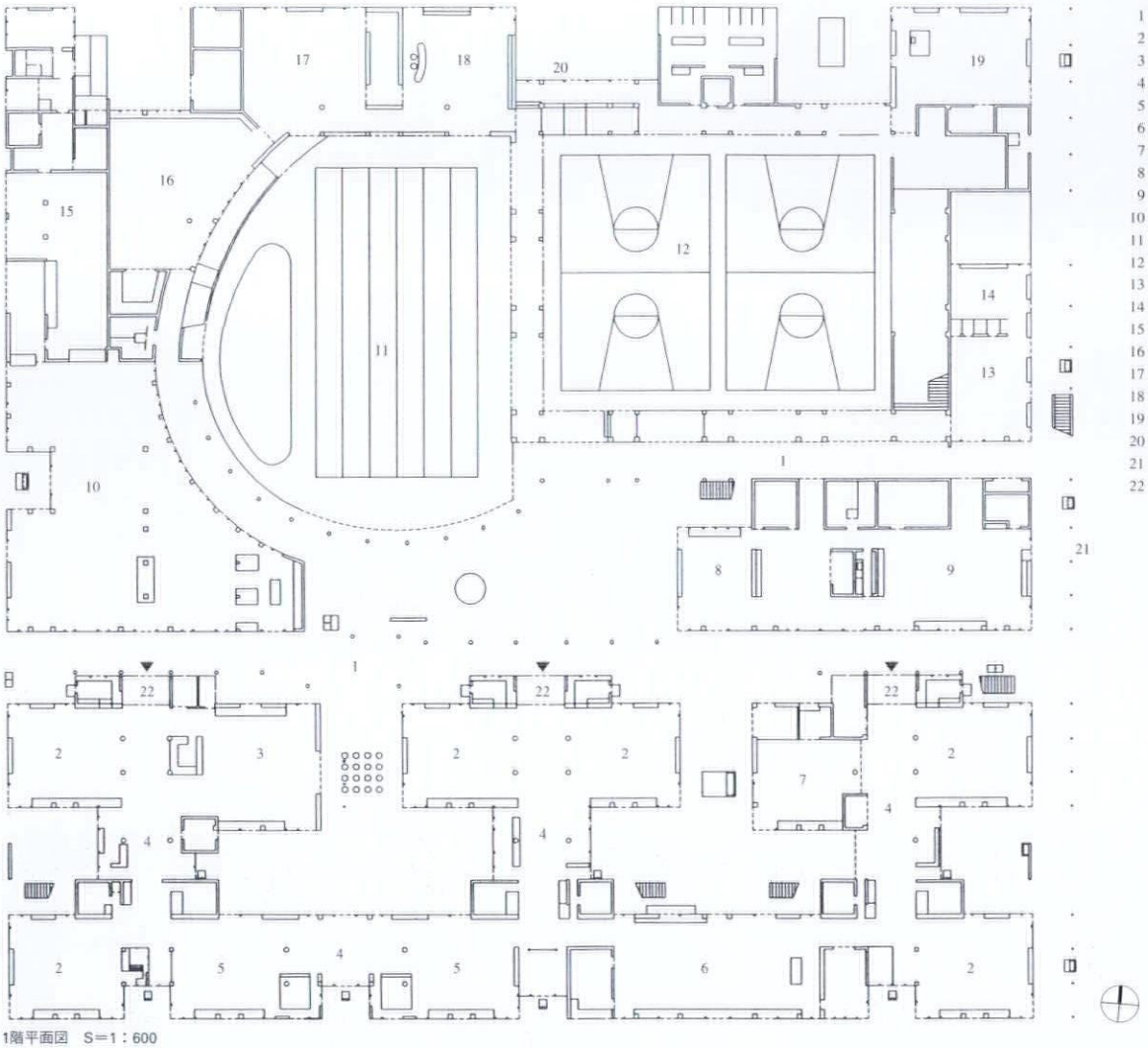
岡山県御津郡　1998年
小泉雅生+小嶋一浩／C+A

Kibikougen Elementary School

Mitsu-gun, Okayama,1998
M. Koizumi+K. Kojima ／C+A



配置図



1：パス
2：教室
3：図画工作室
4：ワークスペース
5：ワークルーム
6：理科兼家庭科教室
7：特殊教室
8：校長室
9：職員室
10：食堂
11：プール
12：アリーナ
13：保健室
14：教育相談室
15：給食調理室
16：音楽室
17：視聴覚／コンピュータ室
18：図書室
19：クラブハウス
20：地域開放用玄関
21：グラウンド
22：昇降口

1階平面図　S=1：600

岡山駅から車で1時間弱の中国山地が造成された高原都市に建つオープンスクール形式の小学校である。元の森の植生に近い「樹木の下の学校」という環境をつくろうと考えて、80m角の平屋のポーラス*な平面とした。その中に教室、ワークスペース、中庭、プール、体育館といった場所が連続的に展開する。各教室の廻りに黒板壁*が散在し、その上に木質構造の屋根が架けられている。各教室はワークスペースに開かれるだけでなく、随所に織り込まれた外部空間とも繋がる行き止まりのない連続的な空間の一部となる。

防火区画上、RC造となる部分を「上の（レベルの）道」*として、中庭から中庭・体育館・グラウンドへの屋外動線として利用することで、日常とは異なった経路と視点を重ね合わせている。「上の道」は大きな樋として落ち葉対策で軒樋を設けない計画の雨水経路も兼ねている。中央パスの南側を教室ゾーン、北側を開放ゾーンとして体育館、プールを含めて裏となる行き止まりをなくし、80m角の平面を、子供達や地域の人々が自在に動きまわれるようにした。中庭に植えられた樹木が茂り、建築が木々の下に還り、あたかも林の中で授業が展開するようなシーンとなることを期待している。（小泉雅生）

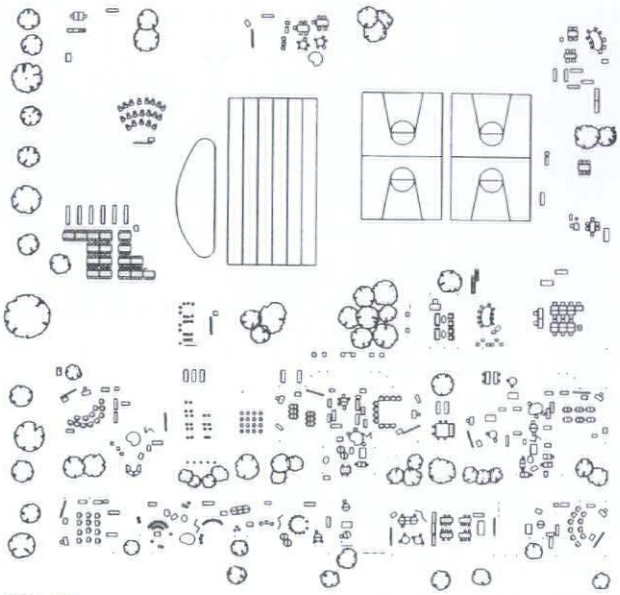
This open-system elementary school will be built in a recently developed city in a southwestern mountain region. An 80m-by-80m single-storied building with exterior courts in it is planned. The environment of the existing indigenous forest is expected to be reproduced as trees in the courts will grow thick and eventually engulf the building. Each classroom will have blackboard walls laid out around it, which will support a wood-structured roof. Not just being connected to the adjacent workspace, each classroom will form one large space with the rest of the building.

Parts of the building required to be of RC will be used to make an elevated walkway with a special feeling, which will link the courts, the gymnasium and the playground. The walkway will also serve as a huge gutter as regular ones would be clogged by fallen leaves.

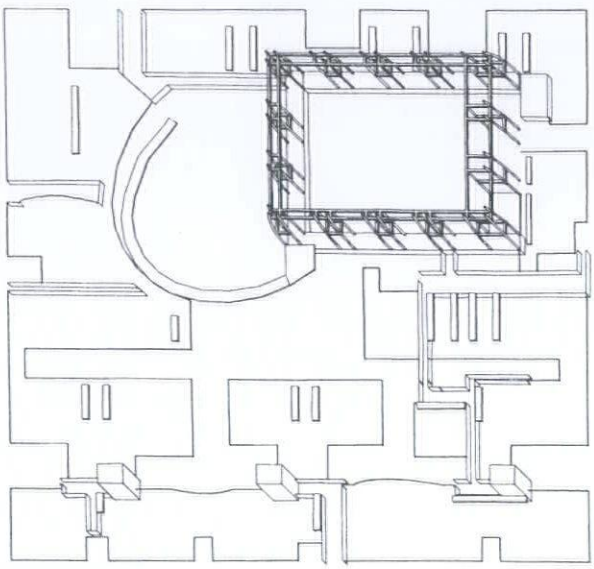
A central path will divide the building into the classroom zone and the open zone. The gymnasium and the pool will be incorporated to the open zone within the building to eliminate any dead end or "back-of-the-house." As a result, children and visiting local residents will be able to move around to their hearts' content in the 80m-by-80m plane.
(Masao Koizumi)



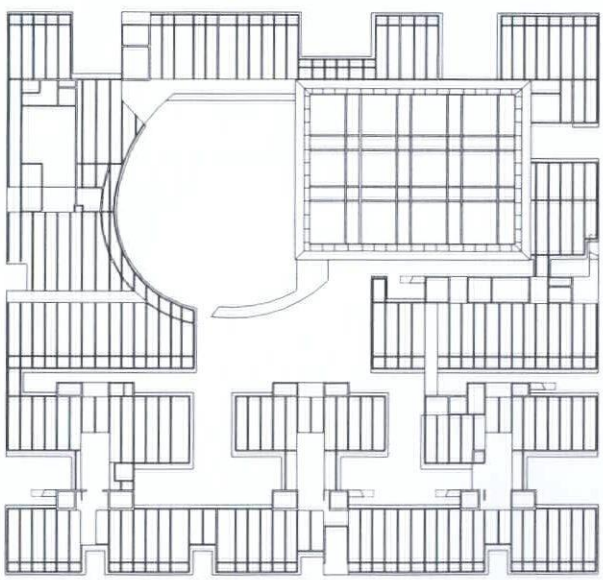




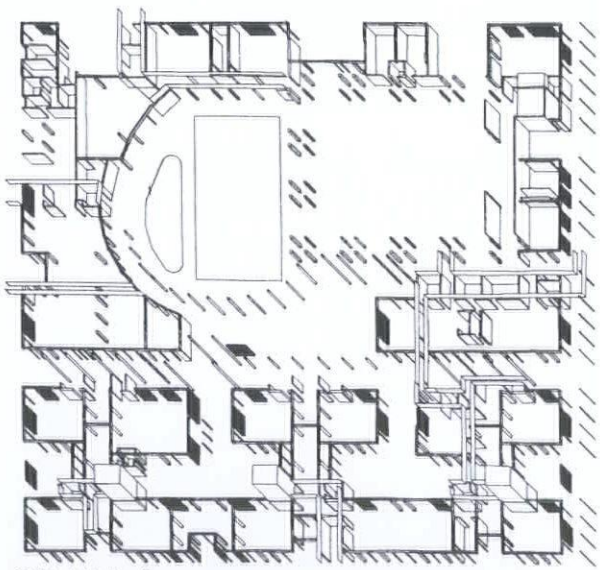
家具と樹木



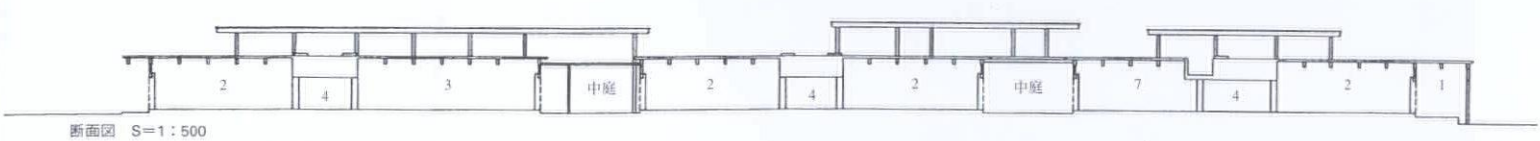
アクソノメトリック



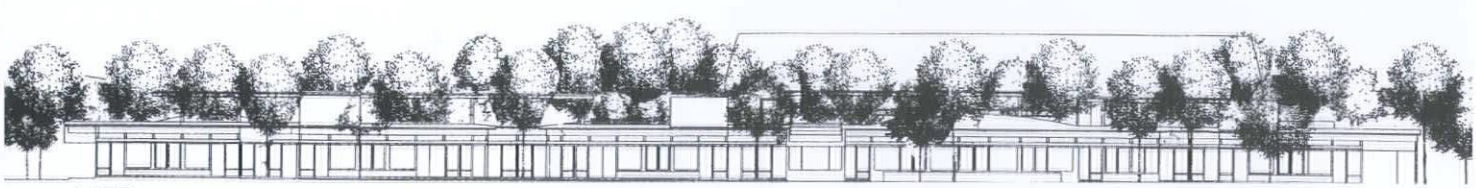
屋根架構



アクソノメトリック



断面図　S=1：500



南立面図　S=1：500

(仮称) 出雲市地域交流センター

島根県出雲市　1995年-
小嶋一浩+小泉雅生+宇野 亨／C+A

Izumo-City Area Exchange Center
(Temporary Name)

Izumo city, Shimane, 1995-
K. Kojima+M. Koizumi+S.Uno／C+A

この計画は、出雲市駅とその周辺の整備に合わせて建設されるホール、ギャラリー、スタジオ、市民サロン、レストラン、ビジターセンターからなる複合施設である。駅前広場・多目的広場は一体で整備され、市民の活動をサポートする。

一般にこの種の施設は、人の気配が希薄な時間が多く、アクティビティ*の気配をどうつくり出すかが重要である。

ここでは、中庭を挟んでウイングが並ぶ「ラジエータ」型配置を採用し、広場と建築を連続的に「マウンド」*でつないでいる。均等に植栽することで駅周辺全体のアーバンファブリックの形成を誘導する。「マウンド」は、音や光で気配は伝わるが、ガラス張りの建築の全体が見渡せないよう最大1.8mの高さとした。建築の透明感を確保し、春秋にはガラスも全開して外と内の境界が消失するような空間を目指した。そのため、鉄骨の「櫓柱」を平面中央に配し、剛性の高い屋根面を「やじろべえ」式にバランスさせた軽快な構造としている（偏荷重にはマリオンで抵抗）。

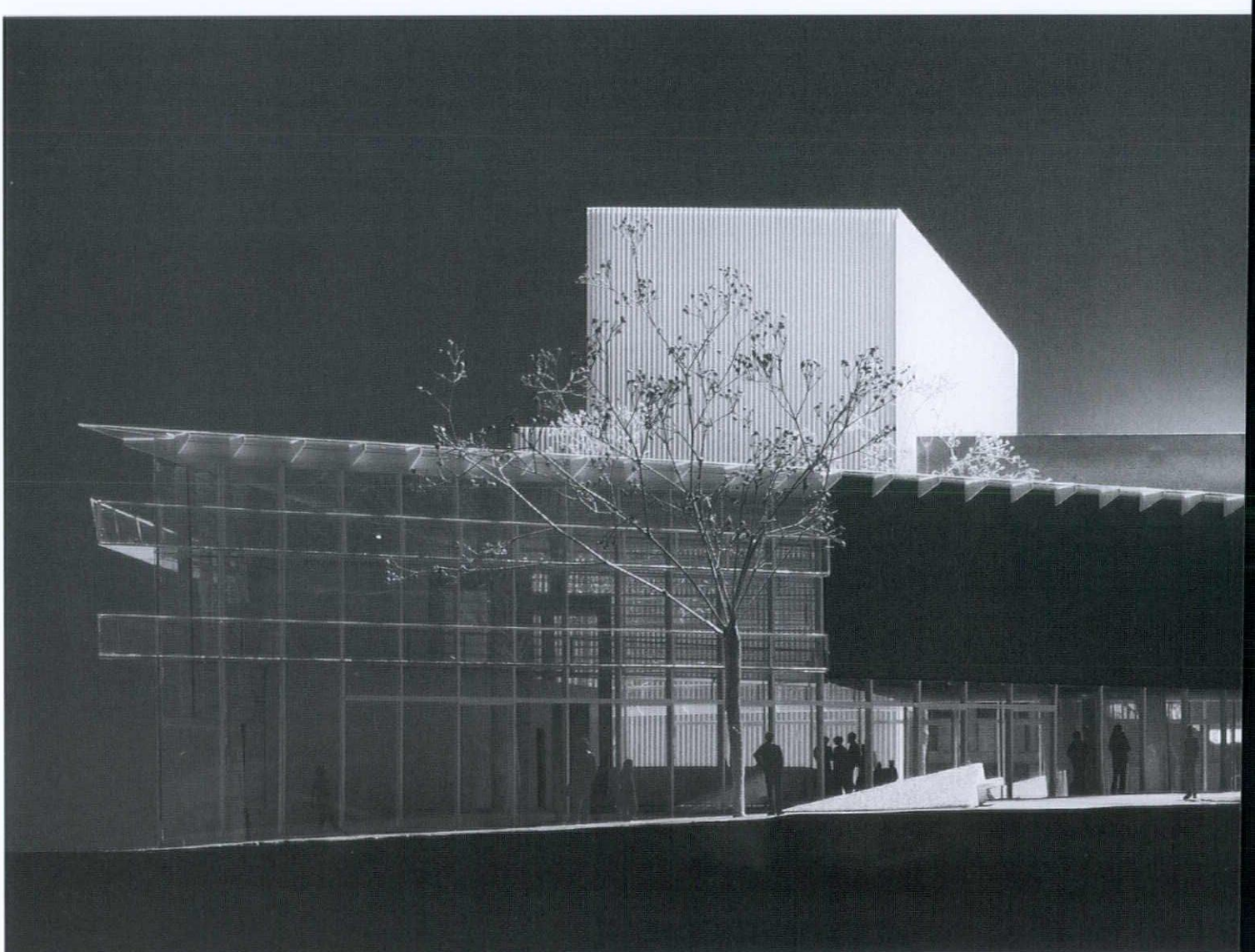
また、エアタイト・ダブルジャロジー*をコンピュータ制御し、ガラス面全体が呼吸するように開閉する仕掛けを開発した。

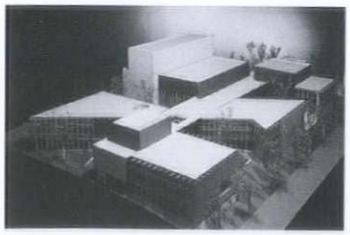
設計と並行して、市民参加型ワークショップ*を何度も開催した。脇舞台の中の可動「櫓客席」*を用いた音楽と演劇で形式、客席数とも大きく変化するホールなどは対話の成果だ。現在1999年秋のオープンを目指して建設中である。（小嶋一浩）

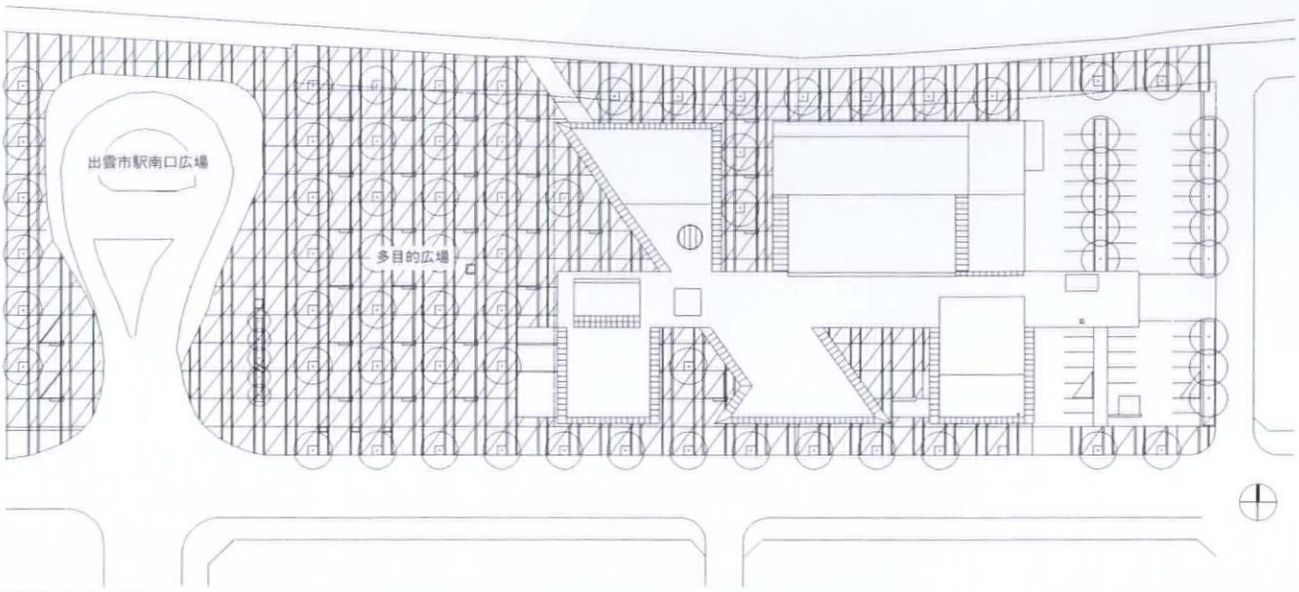
This community center will house an auditorium, a gallery, a citizens' salon, restaurants, a visitors' center, etc. as part of a larger redevelopment program that covers a railway station and its surrounding area.

To create a sense of coherency, the center (with its wings and courts arranged in the shape of a radiator) and the squares will be built on the same, evenly planted smooth mound. To add life to the entire area, the mound's height is calculated to allow people in the squares to catch glimpses of the activities in the center but not to see the entire building. The building is designed to look transparent, using a delicate-looking structure comprising of smaller steel columns joined with horizontal members and a highly rigid roof balanced at one point. Unbalanced load will be resisted by mullions. A computer-controlled airtight double-jalousie system has been developed to "vanish" the borderline between the outside and inside by making the entire glazing openable.

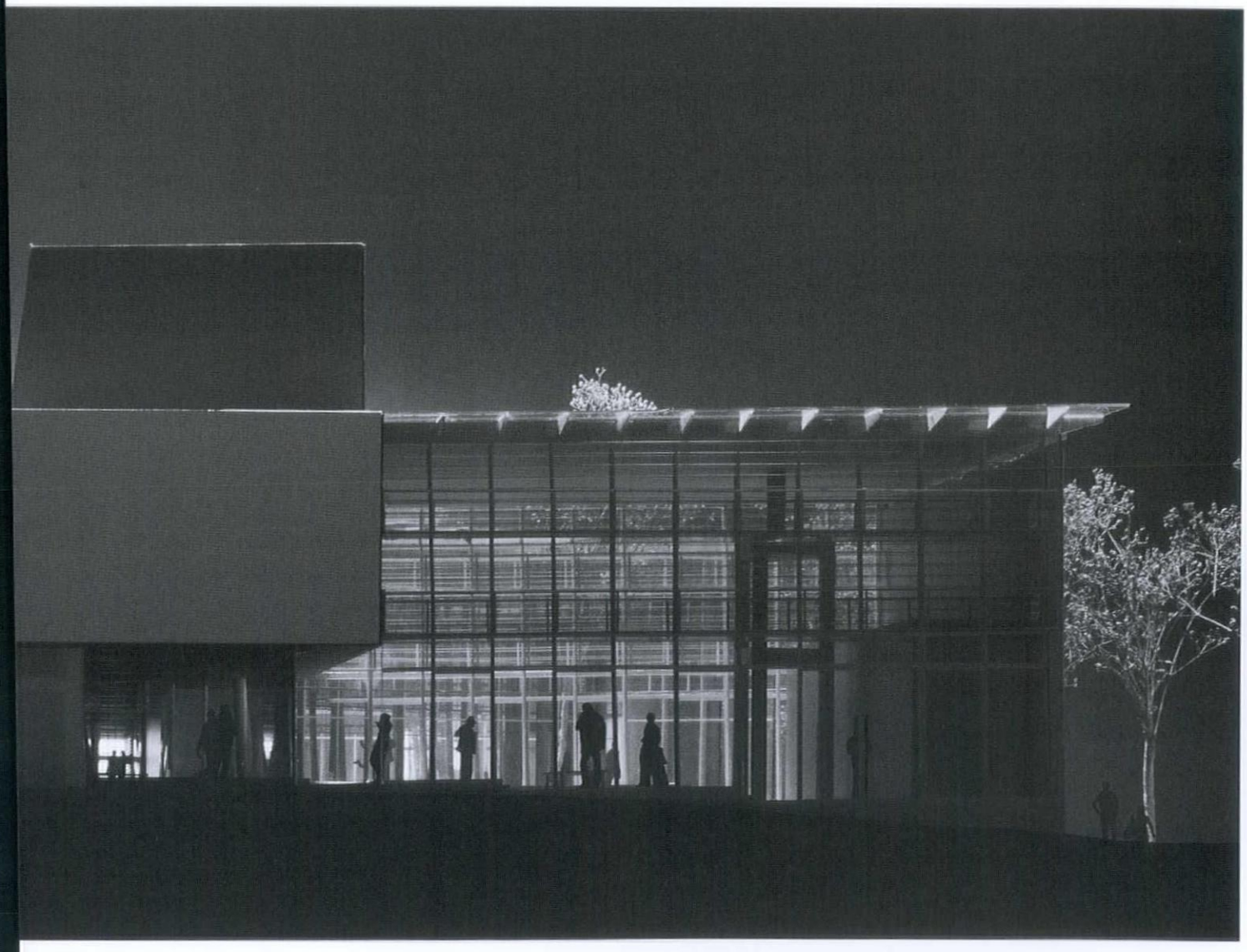
During the design phase, workshops for the local community were held, which resulted in, for example, the auditorium that can be changed in style and capacity using retractable seats in the stage wings. (Kazuhiro Kojima)

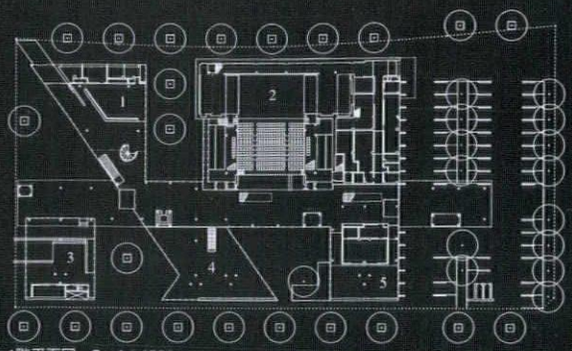




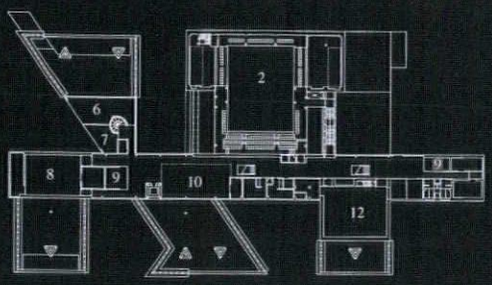


配置図　S=1：1200



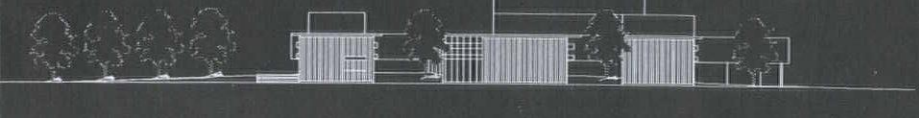


1階平面図　S=1：1500

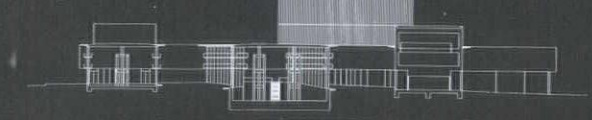


2階平面図

1：ビジターセンター
2：白のホール
3：文化サロン
4：ギャラリー
5：レストラン
6：応接室
7：会議室
8：茶のスタジオ
9：光庭
10：レセプション
11：黒のスタジオ
12：練習室



立面図　S=1：1500



断面図　S=1：1500

配置図 S=1：1600

この住宅は、通産省主導の「ハウスジャパン」プロジェクトの中間実証として計画された実験施設である。各種の実験機器を納め、技術を実証した上で、さらに高断熱・高気密化、健康性への配慮といった環境工学*的な側面をからめて住宅の将来像や可能性を探ることがテーマとして与えられた。

ここで我々は住宅をその機能的な側面から「居室」「コア」「動線」*の3つに還元して捉えている。中央に「コア」、外周部に「動線」をそれぞれ配し、それらの間に「居室」が確保されるという図式である。

外周部に設けられた動線は熱環境的な緩衝領域として機能し、また個室の数や配置の変化にも柔軟な対応が可能である。今回の計画では、オープンスペースが1階から2階へとUターンしながら連続し、壁で囲われた居室が1階の北側にひとつ、2階の南側にふたつ設けられた状態としている。中央に設けられたコア上部は吹き抜けとし、開閉可能なトップライトを設置することで、光を1階まで落とし、圧力差による自然換気を行っている。言うなれば住宅の中での「裏」である設備コアを裏返して、光と風の出入りする外界への窓、すなわち「表」として機能させている。

外壁は、軸組にパネル化した大判の材料を取り付けるプラモデル*的な乾式工法としている。また、平面のフレキシビリティを考える上で、試みとして引き出し*型のコアを提案している。(小泉雅生)

This house was designed for the mid-term demonstration of the Government's "House Japan Program" and explores a future vision for Japanese houses, including environmental aspects such as heat insulation and air tightness.

We reduced a house into three functional elements; "rooms," "utility core" and "circulation," and developed a scheme comprising the central utility core and the peripheral circulation with rooms in between. In addition to allowing human traffic, the peripheral circulation provides a buffer zone against exterior heat/cold while accommodating changes in room partitioning.

This house has a continuous open space that has one first-floor room on its north side and two second-floor rooms on its south side. Above the utility core is a void space capped with an openable skylight, which creates the utility core (usually a back-stage element) into a front-stage "window to exterior."

The proposal also includes a dry method to clip exterior wall panels onto the framing, and a drawer-type core for greater floor planning flexibility. (Masao Koizumi)

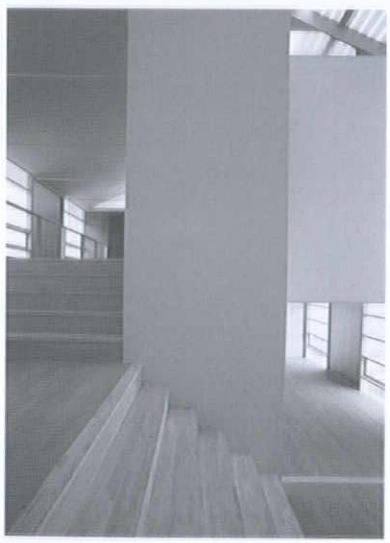




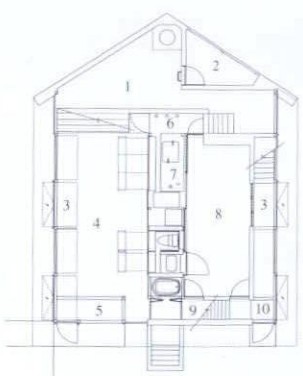




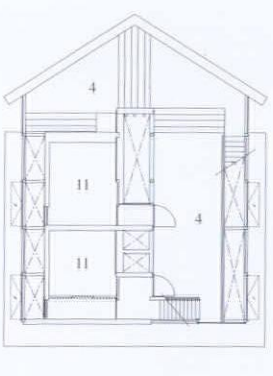




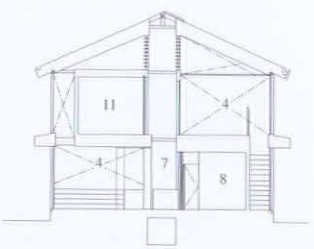
1：計測機器置場
2：室外機置場
3：廊下
4：共用スペース
5：玄関
6：PS
7：台所
8：主室
9：脱衣室
10：勝手口
11：個室



1階平面図　S=1：300



2階平面図



断面図　S=1：300



スペースブロック上新庄

大阪府大阪市　1998年
小嶋一浩／C+A

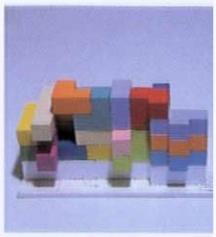
Space Blocks Kamishinjo

Osaka city, Osaka, 1998
Kazuhiro Kojima／C+A



配置図　S=1：4000





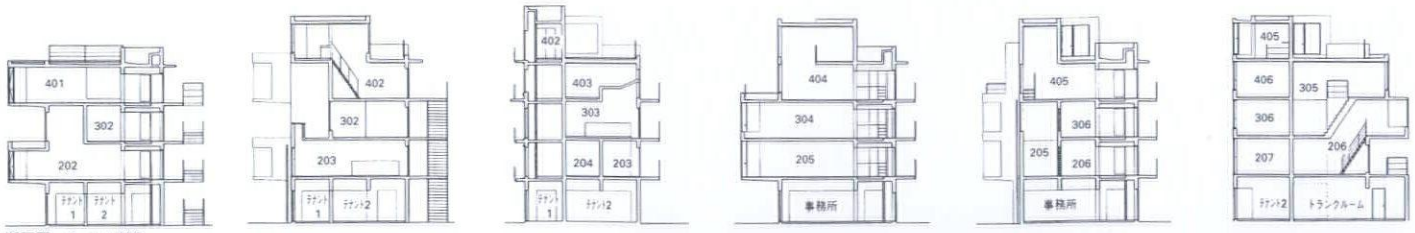
大阪市内に建つ単身者用賃貸マンションである。こういった賃貸物件では、「手間をかけずにリスクは少なく利潤は多く」の理論から、同じパターンの建物が量産されることになる。そういった中で設備や仕上げ、警備システムなどのグレードアップによる差別化が出てくるのだが、ここでは、一般性を持つ単純なツールで複雑な空間をつくり出すベーシック・スペースブロック*(以下BSB)を用いることで、スペースのユニークさという付加価値を持つ、新たなワンルームマンションの空間提案ができないかと考えた。

1辺2.4mのモデュールを立体的に数個つないで積み木を作る。ひとつの住戸がひとつの積み木で出来ている。その積み木の集合が建築となる。各住戸に①入り口がある②採光・換気の窓がある③水廻りを持つ④賃貸の床面積として適当であることが必要条件である。建築だから構造的に成立させなければならない。今回は、上下の壁が通りにくいという、通常の壁式構造では不利なBSBの空間を、水廻りのコアを構造と一体化させて水平力を多く負担させ、かつ壁の配置を立体的に解析することで、積み木のヴォリューム感をそのまま建築として成立させることができた。また、構造壁以外の界壁はコンクリート・ブロックを積んでおり、将来的にはこの壁を壊して拡張するという空間の再生*の可能性をも含んだ提案としている。(赤松佳珠子)

Generally, studio apartments are mass-produced using similar designs, and their product differentiation is often superficial, achieved through modifying utilities, finishing work or security systems. This studio apartment building to be built in Kamishinjo, Osaka, however, will propose differentiation in the shape of the interior space using a method called the "Basic Space Block."

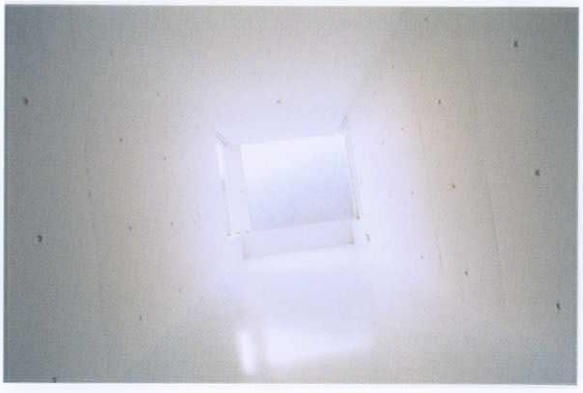
During the design process, 2.4m-by-2.4m cubes were arranged in many ways to make "building blocks" of different shapes. These "blocks," each representing an apartment, were put together to make the whole building. To make the resultant design (which had varying wall locations on each different floor) structurally feasible, a 3D analysis of the wall locations was carried out, and it has been decided that the kitchen-and-bathroom core will be used to sustain the lateral force. Also, a concrete block construction method was chosen for non-load-bearing separation walls to enable major remodeling in the future. (Kazuko Akamatsu)




401
302
202
テナント1
テナント2
402
302
203
テナント1
テナント2
402
403
303
204
203
テナント1
テナント2
404
304
205
事務所
405
306
205
206
事務所
405
406
305
306
207
206
テナント2
トランクルーム
断面図　S=1：500





















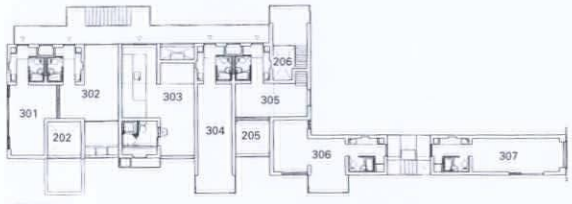








2階平面図　S=1：500



3階平面図






テラス(401)
401
302
303
402
403
404
405
305
406
407

4階平面図


テラス(403)
テラス(402)
テラス(404)
402
403
404
405
テラス(405)

5階平面図

(仮称) 鴻巣市文化センター

埼玉県鴻巣市　1996年-
小泉雅生+三瓶満真／C+A

(Temporary Name)
Konosu-City Cultural Center

Konosu city, Saitama, 1996-
M. Koizumi+M. Sampei／C+A



埼玉県北部の町に計画された、多目的ホールを中心とした施設。敷地は町の中心部からはずれた公共施設の集まるエリアにあり、南側が公園、北側は小学校、東側は住宅地に面している。配置に当たっては公園との一体化を図るとともに、巨大なヴォリュームを置くことでの周辺への配慮が求められた。

ここでは、いくつかの帯状のヴォリュームを敷地の中に織り込むことで、とりとめのない茫洋とした風景の中で、周囲を巻き込んでいくような建築を提案している。帯の重なり合いの中に、表と裏がありながらもそれらが交差し、貫通し、相互に出会う場面が数多く生みだされることを期待している。

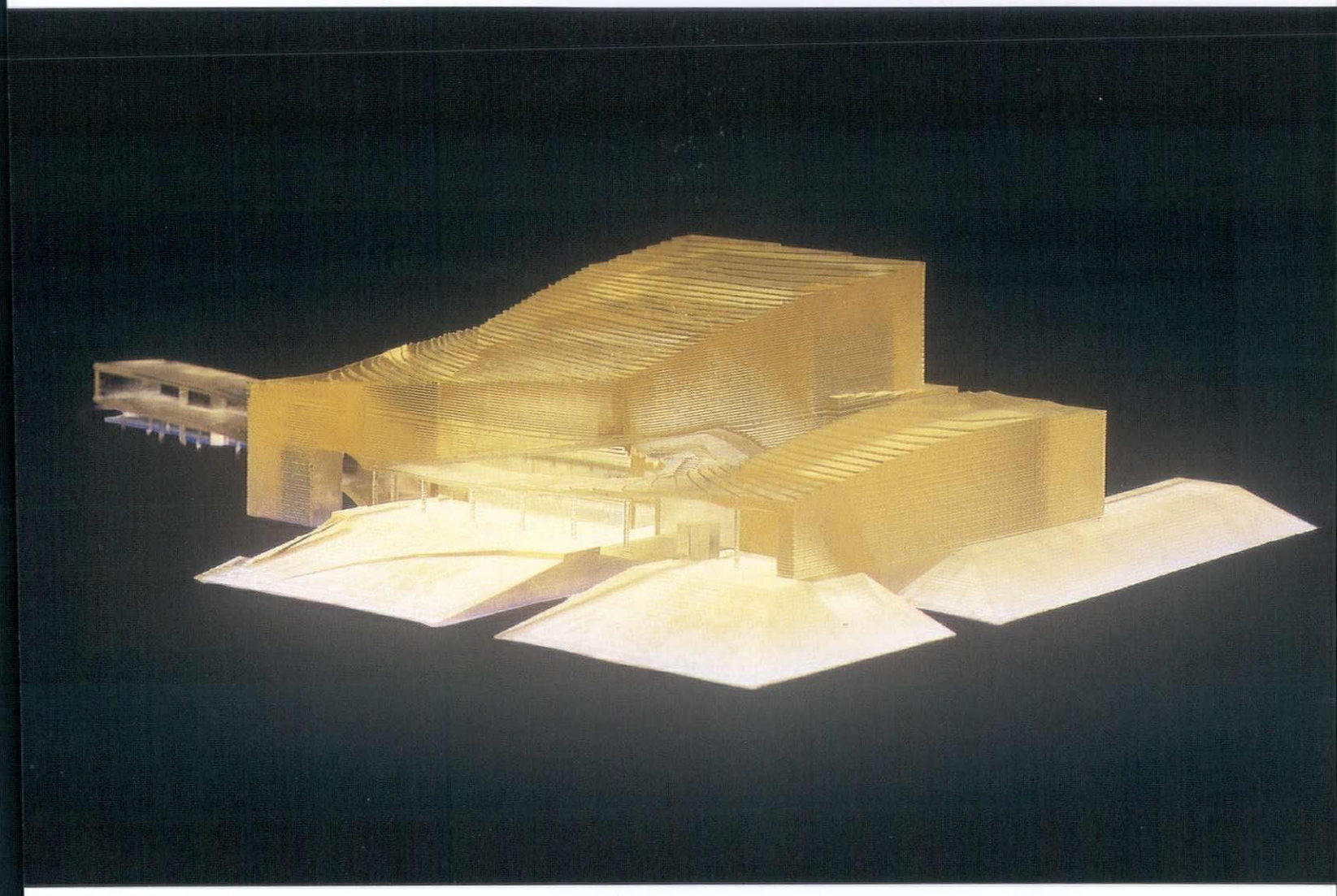
大ホールとそれに伴う諸室は中庭を巡るロの字型の配列とし、「観客と演者」とが交錯する「環状の帯」として捉えている。展示ホール、レストランは公園との接触長さが最大となるように細長い「線状の帯」とし、かつ透過性を高め公園からのアクセスを容易なものとしている。さらに北側駐車場と南側の公園とを一体化する外部の「L型の帯」をそれらの間に挟み込んでいる。

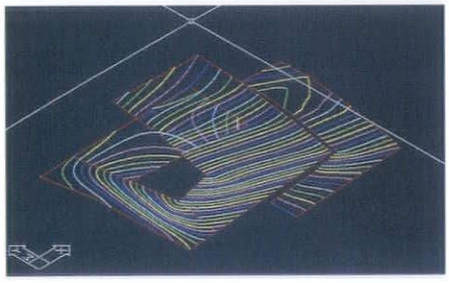
これらの帯のスカイラインは、必要な室容積、機能から要求される天井高をつなぎ、それらをなめらかな曲線で結んで建物の形態を作り出すこと——モデリング* を行うことで決定されている。(小泉雅生)

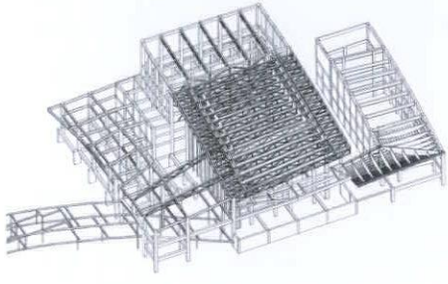
This complex that centers around a multi-purpose auditorium is planned for a northern city in Saitama Prefecture in the government office area somewhat away from the central downtown. The site faces a park, an elementary school and a residential area. To add character and coherency to the landscape, belt-like volumes will be created within the premises to connect the complex to its surroundings. Belts will be made to overlap, cross and meet one another to produce varying scenes. The auditorium and its accessory rooms will be arranged in a hollow square to produce a circular belt for audience and performers.

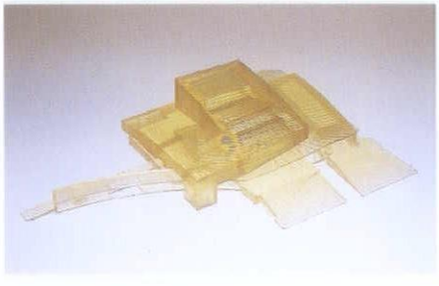
The exhibition hall and the restaurant will form a long linear belt for the complex's maximum contact with the park as well as greater openness to the public. The circular and the linear belts will sandwich the L-shaped belt, which will link the parking lot on the north and the park on the south.

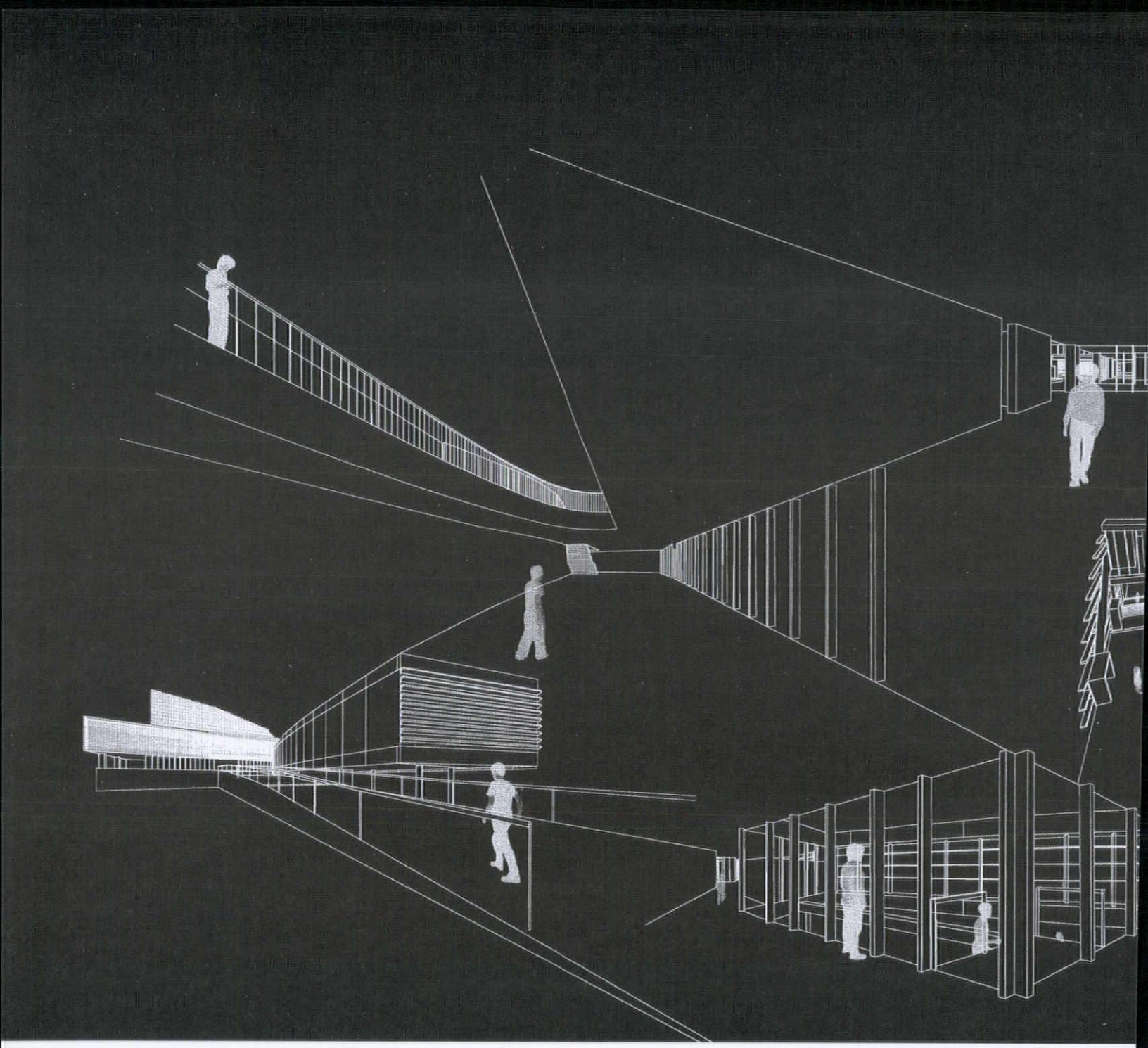
The skylines of the "belts" will be developed by connecting the ceiling heights obtained from the necessary room space and required functions, with a smoothly curved line. (Masao Koizumi)

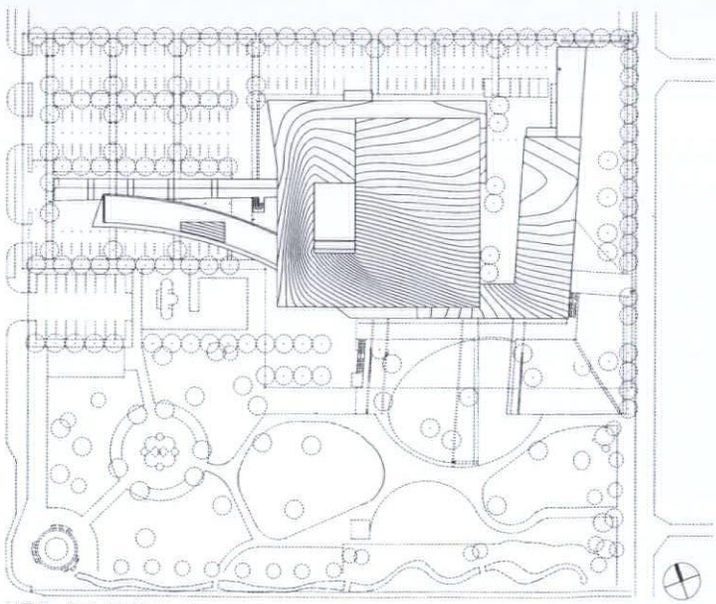




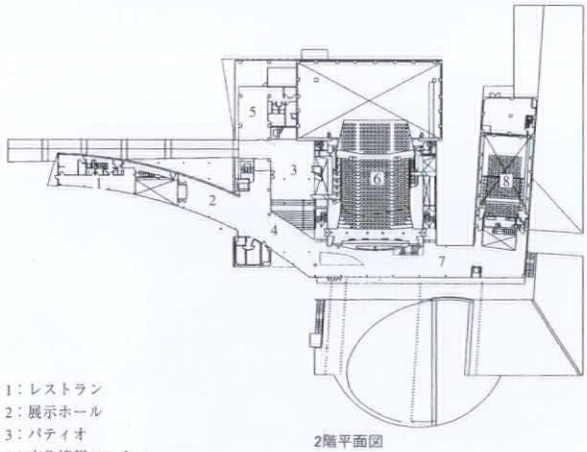






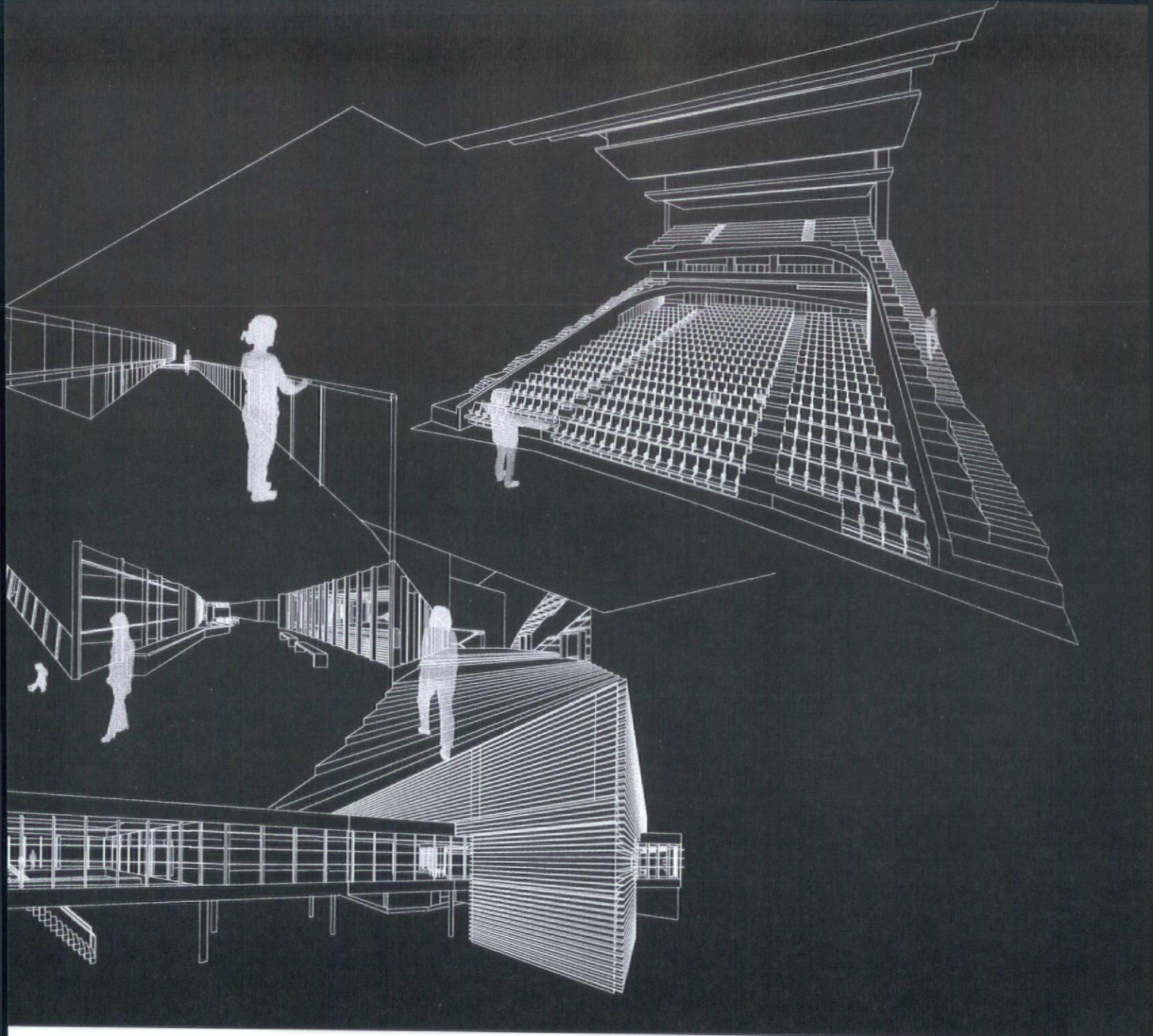


配置図　S＝1：2000



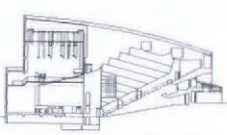
1：レストラン
2：展示ホール
3：パティオ
4：文化情報コーナー
5：事務室
6：大ホール
7：ホワイエ
8：小ホール

2階平面図





南立面図　S＝1：2000



大ホール断面図　S＝1：2000

吉備高原幼稚園

岡山県御津郡　1997年-
小泉雅生／C+A

Kibikougen Kindergarten

Mitsu-gun, Okayama, 1997-
Masao Koizumi／C+A





吉備高原小学校に隣接して建設される幼稚園。3つの保育室とひとつの遊戯室とが1枚の屋根の下に、折れ曲がった立体格子で緩く仕切られた木造平屋の建物である。

この仕切りに用いられる立体格子は、1200mm角のモデュールでxyz方向に等断面の柱、梁を組み合わせたジャングルジム状の構造体である。1200mm角の立体格子は、大人には間仕切りとして目に映るであろうが、園児達には自由にその下を動き回れる寸法であり、各保育室・遊戯室は大きなワンルームの空間として受け止められるであろう。

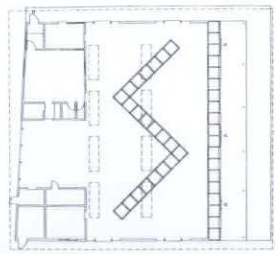
その格子面に対して、展示機能や吸音機能をもった可動パネルを着脱することにより、壁としての強度を自由に設定・調整することが可能である。また格子の間に家具を挿入することにより、子供のスケールに合った隠れ家的な部屋をつくり出すこともできる。

立体格子の上に置かれる屋根はそのスパンに応じて、ピッチを変化させた梁によって構成され、微妙な陰影をもった天井面をつくり出す。(小泉雅生)

This kindergarten to be built next to an elementary school will be a wooden single-storied structure with three nursery rooms and a play room.

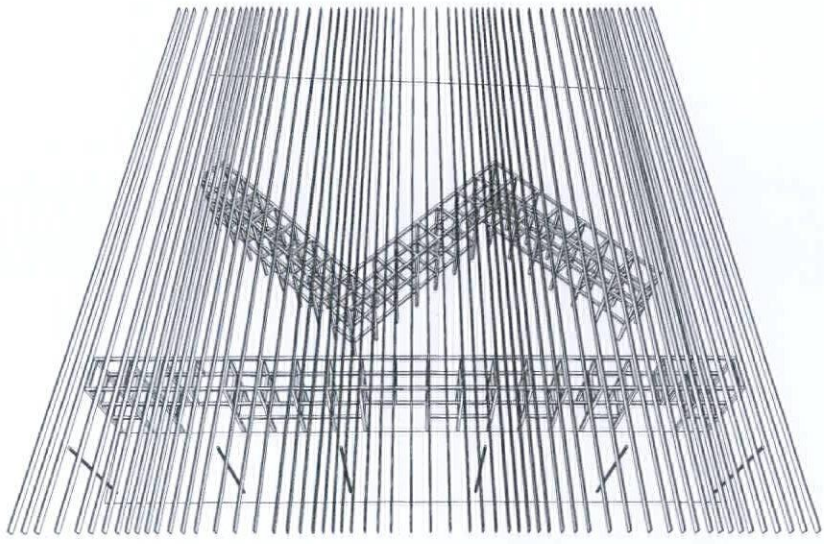
The rooms will be separated by a jungle-gym-like three-dimensional lattice. Because the lattice will be based on the 1200 mm module, which is large enough for children to move through, the three rooms will appear as one big space to children. It will be possible to turn the lattice into walls by attaching movable panels with display and acoustic functions. Pieces of furniture can also be placed into the lattice to make exciting little hiding places for children.

Above the lattice will be a ceiling with delicate shadows created by beams at varying pitches according to the span. (Masao Koizumi)



1階平面図　S=1：800



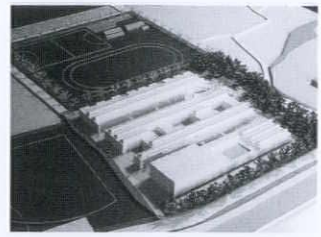


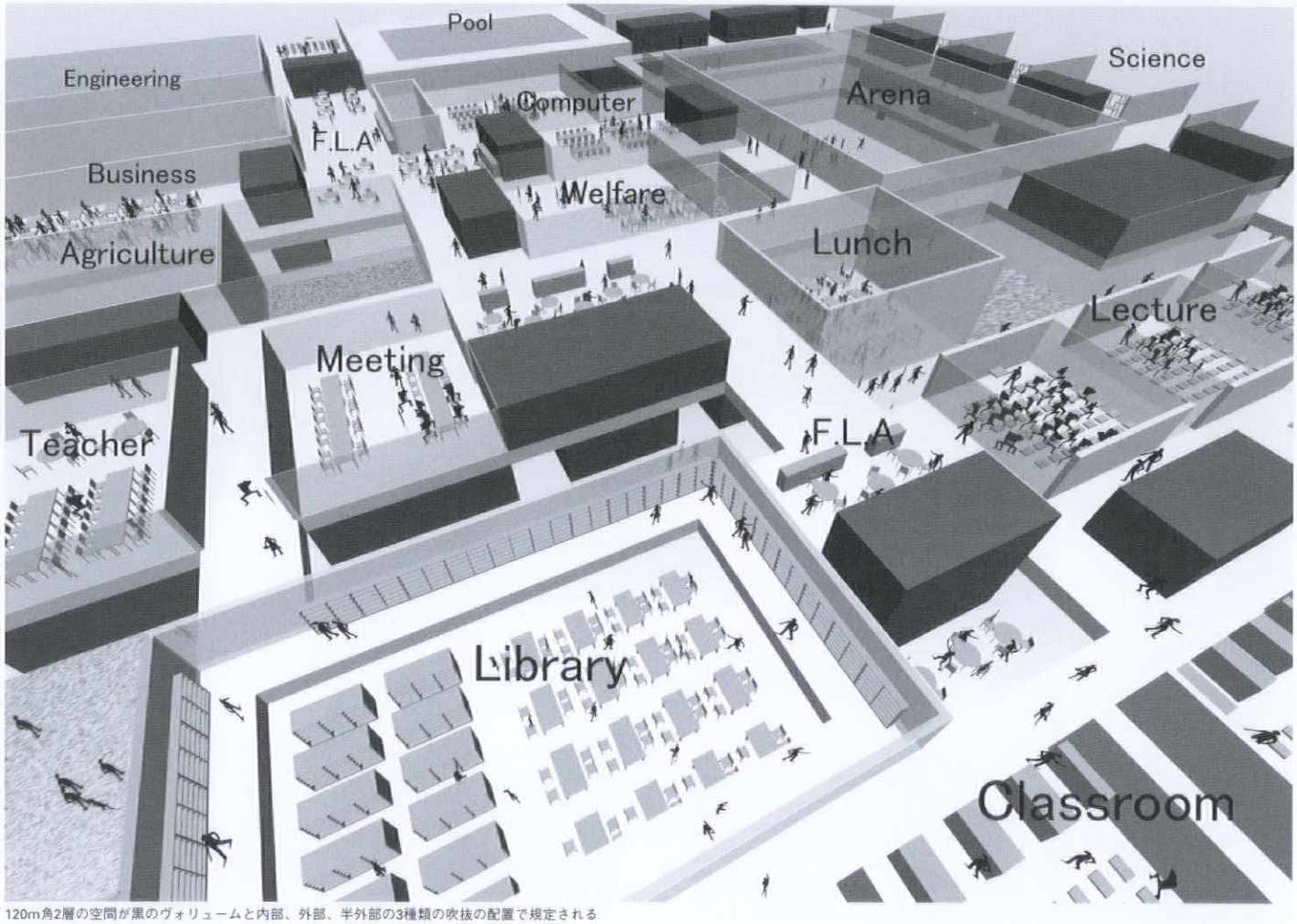
K総合学科高校

1997年-
小嶋一浩+三瓶満真／C+A

K Comprehensive High School

1997-
K. Kojima+M. Sampei／C+A





120m角2層の空間が黒のヴォリュームと内部、外部、半外部の3種類の吹抜の配置で規定される

既存の普通科高校と農業高校を統合し、総合学科高校を新設するというプロジェクト。

総合学科の生徒たちは、1ヶ所にとどまって授業を受けるのでなく、時間ごとに教室を移動することが多い。作業着や白衣などに着替えて受ける実習も多く、常に変化に富んだ生活が展開される。生徒が自分で時間割を設定できるなどの、プログラム* 上の自由度を持っている上、将来の系列の統廃合や、科目の変更、更新も考えられる。

こうしたダイナミックな活動や変化には硬直化した建築では対応できない。空間全体が柔らかに連続し、生徒が流れるように移動できるようなものであるべきだろう。私たちは、生徒や職員のアクティビティ* の状態が、あたかも天気図のように刻々と移り変わるような建築をめざした。

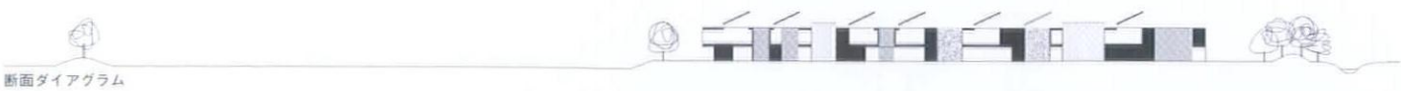
120m角×2層のヴォリュームのなかに、どのように異なる系列（コース）を配列するかが主要なテーマとなった。生徒たちはこれらの系列の間を横切るたびに、異なる分野から刺激を受けることになるだろう。

また、個人の拠点が定まりにくい生徒たちのためにロッカースペースをより積極的に居場所として捉え、コンピュータの端末や様々な家具が設置されたフレキシブル・ラーニング・エリア* （FLA）という空間を提案している。ここでは私たちが「黒と白」* と呼ぶ「黒」（比較的機能が限定されて、閉じた空間。準備室、WCなど）のヴォリュームにより分節されつつ、機能や領域が限定されない「白」が柔らかく連続している。（三瓶満真）

This project combines two existing high schools into a comprehensive whole which will offer academic, agricultural, industrial and other courses. In the new school, students can select their own classes to some extent and change classrooms according to each subject. Also, the courses may be integrated/divided in the future.

To serve such a dynamic learning environment, we arranged loosely connected, flexible spaces to allow for the constant shift of human activities while allowing students to receive inspiration from the different courses.

Instead of conventional classrooms, the locker area is made into a "flexible learning area" where students can "hang around," complete with computer terminals and appropriate furniture. The resultant building will have smoothly connected spaces without clearly defined function or borders (in Coelacanth, we call such spaces "white spaces"), punctuated by closed spaces with defined borders and function, such as preparation rooms and lavatories ("black spaces"). (Mitsumasa Sampei)



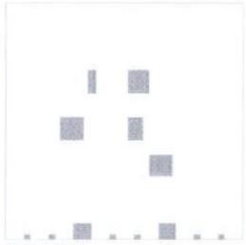
断面ダイアグラム



空間利用とアクティビティのプログラム

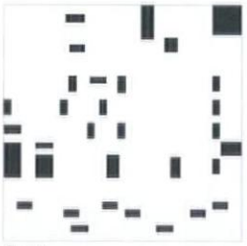


吹抜（内部）

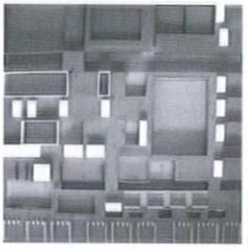


吹抜（外部）

吹抜（半外部）



黒／白



FLA

教師コーナー



家具



コンピュータ

ルーフ









インタビュー

強い意志をもった建築へ向けて

山本理顕

――まず、山本さんのシーラカンスの建築全体に対する印象をお聞きしたいと思います。

シーラカンスの建築の最初の印象は、SDレビューに入選した小嶋さんの〈氷室アパートメント〉が非常に新鮮でした。僕も一緒に入選した時だったので、当時の気分をよく覚えています。最初から最後まで矛盾のない、整合性のある建築をきれいにまとめていこうと僕の方は考えていたものですから、その氷室アパートの「アドリブ」のような方法に強いインパクトを感じました。彼等の建築には、さまざまなものが偶然に出会って、その偶然性がそのまま建築になっているという感じが非常に強くしました。

その後の彼等の活動も基本的にはこの最初の印象が常に背景に感じられるようなものだったと思います。特に大阪の平和センターではそれがかなり強く表れていて、その偶然性みたいなものだけで成立しているようなそぶりですよね。それは、さまざまな意見の人たちの手の跡とか意見を整合させようとしているのではなくて、調整以前のままでそれでも建築として固めていくというようなことを彼等は目指しているからなんだと思いました。一般的に共同設計というと、何らかの理念を共有して設計をしていると思うのです。シーラカンスの建築は、そういう理念を共有しなくても、たとえ参加する人が様々な方向を向いていても、それでも建築としてまとめていくことができるいう建築なんだと思います。

――若い人たちによる共同設計という点でも、何か新鮮さを与えていたような気がしますが。

そうですね。確かに方法が新鮮なんだと思います。でも、その方法によって何が切り開かれているのかということも知りたい。つまり、どこに向かおうとしているのか。未整合のまま残すことが目的なのか。民主主義的と言うか、多くの人たちの意見によってものが出来上がっていく時の、非常に上手いやり方であると同時に、未完成のままそれを引き渡していくような、いわば危うさみたいなものを同時にもっているような気がします。

――特にシーラカンスはアクティビティという人間の行為と空間の関係をどう建築化していくかということをよくテーマにしていますが、そのような方法をどのようにお考えになりますか。

僕は、常にアクティビティは何らかの空間の中でしか検証できないという意見なんです。だから、今までのアクティビティを調査しても、それはかつての空間の中でのアクティビティであって、まったく違う空間のなかでは、アクティビティは全然違うものになっていくと思うんです。つまり空間の果たす役割は、アクティビティに対して非常に強い拘束力をもっていると思うんです。拘束力をもっているから空間はアクティビティと関わるわけで、僕はそこがそのアクティビティと空間の一番面白いところだという気がしています。ですから、もし建築に拘束力がなくなればなくなるほど、自由なアクティビティが獲得できると考えるとしたら、僕は違うと思うんです。空間というのは、必ず拘束力を持つわけですから、どういう拘束力をもっているかということを常にこちら側のメッセージとして表明していくことの方がより重要じゃないかという気がするんです。

――では、〈House TM〉のような個人住宅のつくり方に対してどう思われますか。

実際に見に行ったんですが、一種のオートマティズムじゃないかと思いました。このダイヤグラムが建築をつくるときの一種の免罪符のような働きをしているように思います。手法としては非常に面白いし、まさに並列コンピュータによる自動翻訳機のようなものだと思います。すべての可能性をチェックした結果がこれである、ということを表明しているような態度なんだと思います。彼等の共同設計の手法が最終的な意志表明を免れるような方向に向かうように、このオートマティズムのような方法もそれと同じ方向性を持っているようにも思います。それを免罪符と呼んだのですが、でも自分たちの意志を表明することをそんなに躊躇しなくてもいいと思うんです。

――山本さんは、建築のプログラムやシステム、制度を建築家側から提案していくことで、建築が社会に対して開いていくのではないかと言われます。建築家の提案によって、いじめ、暴力を実際に学校からなくすことができるのか。シーラカンスの都市に対するスタンスは、問いかけになっているのでしょうか。打瀬小学校にも、その可能性がありますか。

学校という閉じた単位の中で教育システムについて考えるのではなくて、地域社会に開かれたシステムを考えるべきであると、小嶋さんたちは考えたと思うんです。今まで我々はある与えられた枠組みの中で建築を考えるというような方法に慣れてきたように思います。だからもし、建築に何かもう少し可能性があるとしたら、その枠組みそのものを疑わないとなかなか先へは進めない。〈岩出山中学校〉の生徒たちを見ていて思ったんですが、今までの学校というのは生徒が社会に参加する契機をむしろ奪い取っていたんじゃないかとすら思いました。だから「社会に対して開く」という意味は、単に空間がオープンになるというだけではなくて、教育システムそのものが外側の社会に接続されていくことなんだと思うんです。そういった意味で、〈打瀬小学校〉はその可能性を十分に秘めていると思います。

――シーラカンスのスペースブロックなどの設計手法に、新しい空間の可能性はあると思われますか。

建築の手法としては面白いと思いました。従来までの平面図による説明だと、どうしても単に内部の機能の説明になっていってしまうと思うんです。建築と機能とをうまく結びつける媒体のような役割ができ上がると面白い。でも、シーラカンスだけの問題ではないですけど、我々にはそうした手法を超えた、強い意志のようなものが今、必要になってきているように思うんです。どこに向かおうとしているのか。それをあいまいにできなくなってきているような気がします。それを問われていると思うんです。そういう非常に強い意志を持った建築が、やはり建築としても面白くなっていくと思いますし、シーラカンスの組織が3つに分かれたということは、別にそこに齟齬があったということじゃなくて、多分その強い意志の表明に向かって、それぞれが方向を定めたからだと思います。

彼等は、そうした建築の中心を担う人たちなんだと僕は思っています。

●やまもと・りけん／建築家
（インタビュアー：編集部）

インタビュー6

伊藤恭行

インタビュアー：西沢立衛

いとう・やすゆき　Yasuyuki Ito
1959年　神奈川県出身
1984年　東京大学建築学科卒業
1986年　東京大学大学院修士課程修了
1986年　シーラカンス設立
1988-1997年　東京都立大学建築学科助手
現在、C+Aパートナー、名古屋市立大学芸術工学部助教授、博士（工学）

――まず伊藤さんは、シーラカンスにどのようなスタンスで関わってこられたかをお聞かせ下さい。

大学院の時に原研究室の同窓生、同級生たちと共同で事務所をつくって、小さい住宅を個人でやったり、国際平和センターのコンペあたりまでは共同で全員で設計をしていました。その後、僕は大学に務めることになって、一度設計からは離れ、景観解析のプログラムをつくるという研究を4、5年やっていました。その間は事務所には顔をちょこちょこ出してましたけれども、実質的な設計活動にはほとんどタッチしていませんでした。研究成果を論文の形にまとめた後、もう一度設計に戻ろうということで事務所に戻ってきたんです。そうした時に宇野、日色、僕のパートナー3人が名古屋に集まるという状況が重なって、昨年あたりから名古屋事務所としての実質的な活動を始めました。

――C+A全体のデザインがあって、片方で名古屋事務所では3人で仕事をされて、かつ個人のお仕事と、デザイン上のテーマのようなものは、今後どう考えられていますか。

場所が分かれたということで、それなりに仕事の独自性は今後それぞれ出てくると思います。僕個人については、空間的なテーマを事前に温めていてそれを当てはめる対象を探しているというよりも、設計している対象が持っている課題の中からテーマを発見しているような気がします。それが発見できないと、どうもうまく自分の確信を持ったかたちでのデザインができないのです。例えば〈西脇の住宅〉では、細長い空間を持った住宅で、どのような空間的可能性があるかということが始まりですし、〈愛知淑徳大学〉の設計では、将来のフレキシビリティを含めた多様な条件を合理的に成立させる架構や設備のシステムとはどういうものかという点に興味があります。このふたつのアプローチは、まったく異なるものですし、テーマはやっぱりその都度発見されるものかなと思います。

シーラカンス全体の場合では、テーマを共有するために非常に時間をかけるので、外から見ると一貫したテーマがあるように見えるのかも知れませんが、やはりそれぞれの課題に応じてテーマを発見してきたのだと思っています。

テーマについて、もうひとつ考えておきたいのは、毎回新しい発見をすればいいかというと、それも何かちょっと違うと思うんですよ。あるテーマがひとつのプロジェクトで発見されて、次にそれが別の形で現れてくるというのは、当然あるわけです。その時に重要なのは、そのテーマが示す図式がクリアであるということです。図式がクリアなら、それは多分建築に携わる人たちの共有の財産みたいになる可能性があるじゃないですか。

――論文発表の場合だと、論文の最後に引用元がどわーっと来るじゃないですか。ああいうのは、問題が共有されているというか、歴史が表れているのかなという気がするのですが。

先程お話したように僕も研究論文を何本か書いて発表していますけれども、研究発表の世界ではその論文を発表して、それがいろいろな人に読まれますよね。それがおもしろいソースだと判断されると、いろんな人が引用するんですよ。その引用された本数がある種論文の価値だという見方があって、今の建築の話で言えば、非常に鮮やかな図式を提示していて、その図式を基にいろんな人が考えを展開できるというものになっているのです。そういう意味で、単なる表層的なオリジナリティ争いよりは、何か原型的なもの、クリアな図式みたいなものをちゃんと提示できるかどうかを考えていきたいと思っています。

――図式というのは国籍があると僕は思うんですね。国内的な図式と世界的な図式、シーラカンス内図式と、各々違うと思うんです。でも、そういうのはパラレルな引用元としてあっていいと。

そうだと思いますね。

――伊藤さんは愛知淑徳大学の中で、システムということに言及されていますが、今までのシーラカンスの仕事も引用元としてあるのですか。

シーラカンスでは、アクティビティという言葉に着目して、建築の内部と外部が視覚的だけではなく、人間の活動領域として一体となる空間のつくり方にトライしていますが、架構や設備の問題だけではなく、このような空間のつくり方もひとつのシステムとして捉えられると考えています。この設計でも講義室が外部と一体になって、時間帯によっては、学生ラウンジや食堂のようになるような提案をしています。ここでは建物だけではなく、マスタープランの提示も求められていますが、このような考え方がキャンパス全体を更新していくときの、ゆるやかなシステムになると良いと思っています。

――今後、上手に運転していってもらえるような、最小限のシステムだけを提案するという感じでしょうか。

そうですね。マスタープランについて言えば、その最終形を示すということは、それが例えば数年でできあがるものだったならば、あり得ると思います。でも、20年とかというタイムスパンになると難しいと思うんですよ。だから、最終形の絵を示すのではなくて、常に過程の状態があって、その状態がつまりその時点での完成の状態だというような意識ですかね。システムの図式がシンプルならば、局所的な更新でもいろんな場所がクリアになっていきますよね。そういう形のシステムを提案したいなと思うんです。

――一方で、マスタープランと言うとスラムクリアランス的に全部リセットしちゃえ、みたいなタイプもありますよね。

スラムクリアランスというのは大学のマスタープランに限らず、都市の場合も、相当暴力的だと思うんですよ。たまたまこれは大学のマスタープランですけれども、都市計画に関しても、人と人との関係や内外部空間の関係のシステムみたいなものをつくっていくことが、すごく重要なんじゃないかなという気がします。

（1998年5月10日，於：C+A Tokyo事務所）

インタビュー7

宇野 享

インタビュアー：西沢立衛

うの・すすむ　Susumu Uno
1963年　岐阜県出身
1988年　東京電機大学建築学科卒業
1988-89年　阿久井喜孝計画研究室
1995年　シーラカンスのパートナーに加わる
現在、C+Aパートナー、大同工業大学非常勤講師

――宇野さんは1995年からパートナーになられたんですよね。まずそのあたりの経緯から聞かせていただけますか。

幕張の打瀬小学校の現場が、ほぼ終わりに近づいた時期に、そろそろ独立を考えているという話を小嶋に相談しました。話を重ねるうちにパートナーとして設計をしないか、という方向に変わってきたのでかなり悩みましたが、最終的にパートナーに加わり個人的な活動も同時にやっていくという方法を選択しました。

ただ、私はコラボレートがあまり得意ではないんですね。どうしても自分がこうしたいという部分が強くなってしまう。それが時には建築の可能性を限定することにつながる。設計をする際に自分の提案を客観視することも重要だと思うんですね。今の私にとって、組織のなかにパートナーという他者の視点があることは、とても意味のあることだと思います。

――C+Aは東京と名古屋の2ヶ所に事務所があって、宇野さん、伊藤さんと日色さんは重心を名古屋の方に移されましたよね。そうするとどういうふうに活動されているのですか。

今はまだ、その方法を事務所のなかでも模索している状態なんですね。これからどうやってコラボレートしていこうかと。現時点では、それぞれの場所と仕事がリンクしているので、事務所単位では今まで通りDM（デザイン・ミーティング）をして設計をしていますが、やはり名古屋と東京のパートナーの接点は減ってきてはいます。今後、どのように活動していくかは、コンピュータによるネットワークやメールのやり取りなど、さまざまな可能性が考えられます。現状は現場写真のやり取りをしている程度ですが、少なくともDMを、月1回くらいは交互に場所を移動してやってみたらどうだろうかという話はしています。

――シーラカンスって、ジャーナリスティックにはある程度まとまった表現をされていると思うんですよね。キーワードでまとめるとか。宇野さんが個人でやられた〈ガルウィング・ハウス〉などを見ると、比較的シーラカンス的言説からは離れているように見えるんですね。

キーワードでまとめる表現についてですが、もともとDMのなかで頻繁に使用されている言語が、キーワードとして浮かび上がってきたんじゃないかな。複数名でひとつの空間を設計するわけですから、何か共有できる言語は必要だと思います。ただ、そのキーワードだけで建築が語れるとは思っていません。〈朝日新聞社秋田支局〉の設計をしているときもDMでキーワードは出てこなかったと思います。まず、最初にその敷地で考えられる建築のヴァリエーションを洗い出し、取捨選択を繰り返す。ぼんやりした建築のイメージが私のなかにはあったのですが、うまく他のパートナーには伝えられなかったように思います。それは私自身が、あまりキーワードにこだわっていないからかもしれません。

秋田支局や〈ガルウィング・ハウス〉に限らず、設計を始めるときに必ず思考することが3つあります。ひとつは、ビルディングタイプをどう捉えるかという話でもありますが、例えば、オフィスであればオフィスとして何が新しいかということは重要だと思うんですね。ただ、それと並行してビルディングタイプや場所性、時間を横断するような普遍性が必要なんじゃないか。仮にその建築自体が消滅しても、残っていくようなものが発見できればと思っています。秋田支局では、主体の捉え方によってひとつの空間の機能が変化し、どれだけ自由度の高い建築を提案できるかということが、ある種の普遍性につながっていくことを期待しています。またそれとは別に、その敷地でしか実現できない、獲得できない建築や空間があると思います。何かとの関係の中で浮き彫りにされてくる部分ですね。そしてもうひとつ、これは直感に近いんですが敷地を見たときのこういう建築をつくりたいという欲求ですね。これらのバランスを、その都度自分のなかで決めながら設計をしています。

――〈ガルウィング・ハウス〉は、僕は非常に興味深く見ているんですけれども、これは固有性・普遍性と言うよりも、どうもそれだけだとあはならないという気もするんですけれども。

やはり、あれは一番最後のところの「これをやってみたいんだ」というのが、まず最初にあるんですね。あるんだけれども、それだけだと他者との回路がオフされた危険な世界に入っていくような気がします。〈ガルウィングハウス〉のある辺りは農村部なんですが、切り妻の風景の中にガルウィングが点在していくことで、集落みたいなものが現れるんじゃないかなと。

固有性、普遍性の話とはちょっとずれてしまいますが、例えば建築を設計している時に、船舶や自動車における技術、材料の横断があってもいいんじゃないかと考えています。

――うん、それは感じますね。ボーダレスと言うんでしょうか。そういうことは、シーラカンスの活動の中にも何か見て取れるところはありますか。

そういう意味でいうと、シーラカンスに入った動機に戻ってしまうんですが、もともとシーラカンスっていいなと思ったのは、当時『建築文化』の特集があって、建築だけでなくさまざまなアーティストとのコラボレートによるオブジェや照明を制作していて、何かボーダレスに創作活動をしている設計事務所に映ったんですね。それと、パートナーやメンバーが若かったので、自分にも食い込んでいくチャンスがあるんじゃないかと。だから個人的には物をつくることに関して、ボーダレスでありたいというスタンスは変わっていません。

――では、例えばパソコンをデザインしませんかとか、信号機をやりませんかとか、そういう話があったらどうしますか？

そういうのは積極的にやっていきたいですね。

（1998年5月14日、於：C+A Tokyo事務所）

インタビュー8

日色真帆

インタビュアー：西沢立衛

ひいろ・まほ　Maho Hiiro
1961年　千葉県出身
1984年　東京大学建築学科卒業
1986年　シーラカンス設立
1991年　東京大学大学院博士課程修了
1991-1995年　神戸芸術工科大学環境デザイン学科助手
現在、C+Aパートナー、愛知淑徳大学現代社会学部助教授、博士（工学）

――まずシーラカンスの中での日色さんのポジション、そして今までの経緯をお聞かせ下さい。

パートナーという立場で発足時から加わっていたのですが、その頃僕はとにかく自分の学位研究をまとめたい気持ちが強くて、シーラカンスでばりばり設計しようと考えていたわけではありません。それでも、せっかくまわりに設計をする人たちがいるのだから、一緒に何かしたいと思っていたのです。手はあまり動かさないのに、口出しはするという人です。僕がかなり関わったプロジェクトは、幕張新都心の住宅地計画で、特にその始めの段階です。1980年代の終わりだったと思います。

――幕張では主にどういったことを提案されたのですか。

この場合は、明確に闘う相手があったと言えます。新都心の住宅地なのだから団地でなく、街にしたいと考えました。そのためにグリッドパターンや7、8階建ての住棟が中庭を囲う集合形式を提案しました。このような形式は、日本の住宅地計画では同潤会以降、さほど試みられませんでしたが、海外も見れば昔からある比較的ありふれたもので、それだけにデザイン的な蓄積が豊富です。特にこの計画では、さまざまな設計者が関わり、時間もかかることが予想され、初期の計画意図はなかなか伝わらないことが懸念されました。そのような場合には打率の高い形式だろうと、僕は解釈していました。

グリッドパターンを提案したもうひとつの理由は、経路の選択性を高めるためです。団地では、歩いている人が何をしようとしているのかすぐわかります。彼は会社に行く、彼女は買物帰りなどと極めて定型的です。それでは街らしくない。通勤、通学や買物といった日常の移動のなかでも、通る経路を気分により選択できるのがよいと考えました。そのためには、グリッドパターンが向いていると考えました。この形式は、住宅地への入口が多く通過交通が発生するとして嫌われてきましたが、それは制御できるし、将来の変化にはむしろフレキシブルだとも思います。当時シーラカンスは、経路の選択性は多い方がよいというように、都市の状況を比較的ナイーブに肯定していたと思います。

――スペースブロックなどの概念は、その後どのように出てきたのですか。

1993年の「ハウジング・アンド・コミュニティ財団若手デザイナー助成」がきっかけです。立体的に複雑化した居住空間についての調査研究でした。そのなかで、リスボンのアルファマのように周囲を壁で取り囲まれた中庭的な空間が特に印象深く、そういった場のもつ雰囲気を調査に行っていない人に伝える表現方法を開発しようと思いました。ひとつは、そのような空間の中で見えるシーンを5、6枚の写真カードをネット状に配して表す方法でした。もうひとつが三次元的に表すスペースブロックの手法です。

――表れとしては、曖昧につながっているように見える対象をあえて分節していくというのか、単位にしてゆくということは、やはり何らかの形で対象から構造を取り出したいという考え方があるのですか。

エレメントとそれらの関係に置き換えようとする思考法ですね。これは、そうしなくては操作できないと考えたからです。たとえあり得ないものであっても、嘘でもいいから単位を分節して取り出せば、組み替えたり、加えたりして操作できる。そうすれば、専門家でない人も空間を操作できるかもしれないと思っています。空間を作り出すことは、建築家がすることの中でも最も大事にしまわれていることでしょう。それを身も蓋もなく扱ってしまおうという発想です。建築家のミステリアスな部分を批判的に捉えようとする意識はシーラカンスに共有されてきたことだと思います。共同で設計することはミステリアスであいまいな部分を言語化し、明らかにしようとしますから。

――一種の構造分析ですね。アレグザンダーのパターン・ランゲージみたいなものは、かなり近いと考えて良いのですか。

そうですね。アレグザンダーの場合は、言語的なモデルの面が特に強いですが、単位として取り出したものがネットを組むという、彼の枠組みを超えることは難しい。彼はパターンをポエティックな言葉で説明しますが、スペースブロックは、アレグザンダーのパターンの中でも形を与えやすいものに焦点を当てて、いつも形つきで扱おうとしています。一方で彼は、イベントのパターンについても指摘しています。イベントについてもヴィジュアルに扱えないか、たとえば絵文字のように、というのが僕の今後の課題です。

当然のことながら、アフォーダンスによって指摘されることには関心をもっています。角を曲がったり、階段をのぼるといったスケールでは、人にプランがあるのでなく、環境がアフォードするという説明にも何とか説得力があるように思いますが、もっと広域の移動に対しては、人がプランをもたないモデルを納得できないのです。きっと、人間と環境との関係、あるいは人間環境系にプランがあるという説明になるのでしょうが、それではどう操作しデザインしていいかわからない。それで、もうこうなったらスペースブロックの中にアフォーダンスを閉じこめてしまえ、なんて思ってます（笑）。

――スペースブロック内にアフォーダンスを入れるというのは、どういうことですか。

たとえば、交差点というスペースブロックをつくってみます。それは透明でピュアなものではなくて、壁には質感があり、風が吹き日が射して、人や車が行き交っているものです。いろいろなものが動いたり変化するのですから、時間的な継続も備えています。そのように、ある交差点という「場面」を取り出したものを、スペースブロックとして考えるということです。それは、スペースブロックの最初の意図でもあったわけです。

ところが、デザイン・ツールとして使おうとするとむしろ、ベーシック・スペースブロックのように、不思議な形と入っている人だけといったものの方が、建築を専門とする人にはイマジネーティブなんですね。

（1998年5月9日、於：C+A Tokyo事務所）

WHITE/BLUE 西脇の住宅

兵庫県西脇市　1998年
伊藤恭行／C+A

"White /Blue" House in Nishiwaki

Nishiwaki city, Hyogo, 1998
Yasuyuki Ito／C+A



この住宅は、幅4.5m、長さ21.5mの細長いプロポーションの中に、ふたつのチューブ状の空間を併合するという単純な図式で成立している。この細長いプロポーションが持つ空間的な豊かさの可能性を引き出すことが設計のテーマとなっている。

ふたつのチューブ*は白と青に塗り分けられているが、白いチューブ状の空間は2階の端から端まで平面的に屈曲しながら引き延ばされる。このチューブには居間とバルコニーが連続して配置されており、外部に対して開いた空間である。青いチューブは1階から2階まで断面的に形態が変化しながら連続する。この中には和室、浴室、トイレ、書斎、子供室、寝室が納められており、プライベート性の高い比較的閉じた空間となっている。各室は建具を閉めれば個室として分割されるが、全ての建具を引き込むことでひとつのチューブ状の内部空間を獲得するように計画されている。

ふたつのチューブ*の端部には、居間、和室、寝室などの人が滞留している状態が想定される空間が配置されており、ふたつのチューブが絡み合う中央部分はエントランス、階段、スロープと階段などの移動に関わる空間である。滞留する場所からは、基本的に最大限の見通し距離が得られるように計画されており、長さが持つ空間の豊かさを感じ取れるようになっている。中央の動線部分は視点の移動に伴って、手前／奥、上下の連続性、左右の広がり、閉じた空間から開いた空間への変化（あるいはその逆）など、さまざまな距離感を体験することができる空間となっている。（伊藤恭行）

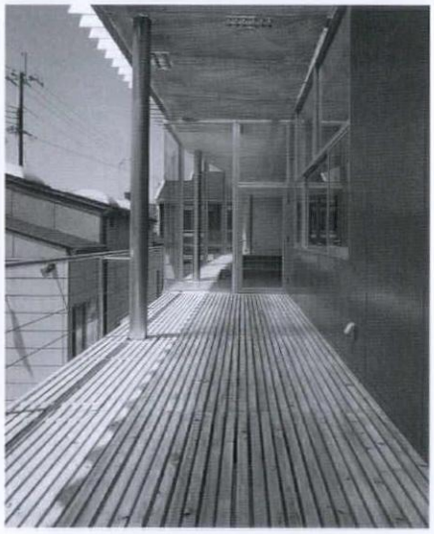


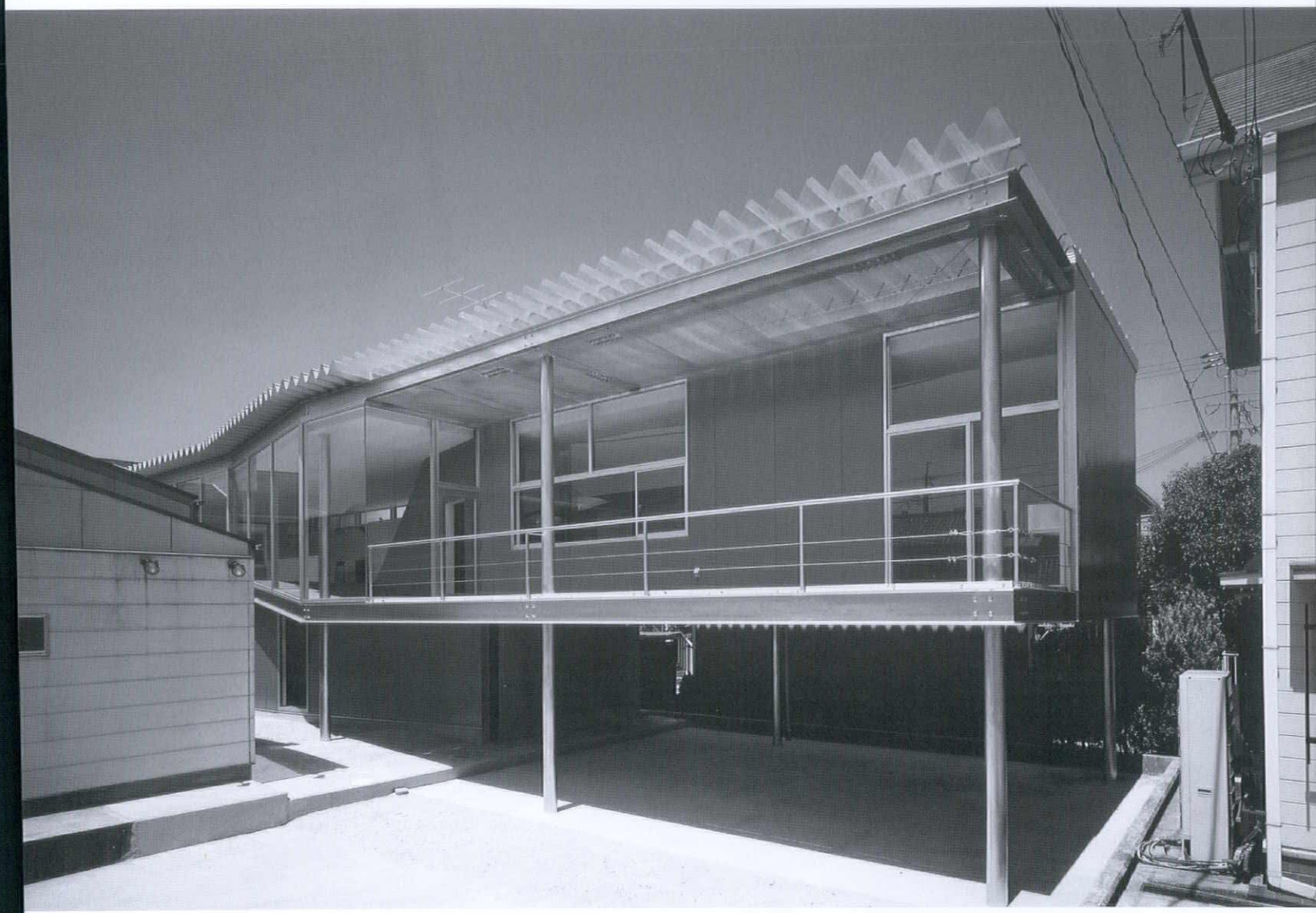
This house was designed using a simple scheme of two tubular spaces — one white and the other blue — arranged in a 4.5m-by-21.5m proportion, with the goal of drawing the rich potential out of the long and narrow site.

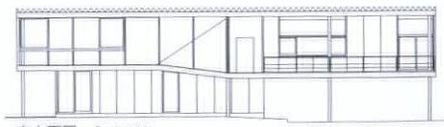
The white space, which winds horizontally from one end to the other on the second floor, is open, with a living room extending onto a balcony. The blue space, which continues intermittently from the first to the second floor, taking various shapes, is more closed and private, containing bedrooms, a child's room, a bathroom, etc. In the blue tube, a room is isolated from the rest of the space when its door is closed, but when all the doors are slid into the walls, one large space is formed.

At each end of the tubes are "static" spaces such as the living rooms and the bedrooms while "dynamic" spaces such as the entrance and the staircase are where the tubes meet in the middle of the house. The static spaces are designed to offer long and unobstructed interior views to enable the spatial depth to be appreciated. The dynamic spaces offer varying spatial senses such as the contrast between near and far, vertical and horizontal expanse, and the shift from a closed to an open space. (Yasuyuki Ito)

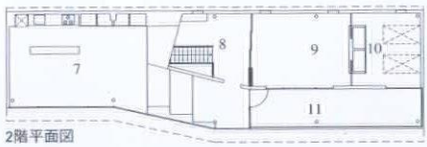








南立面図　S=1:400

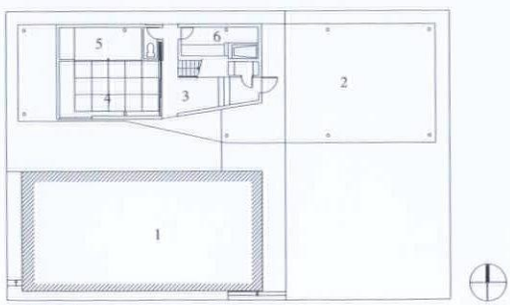


2階平面図



断面図　S=1:400

1：既存店舗
2：パーキング
3：玄関ホール
4：和室
5：収納
6：浴室
7：台所・居間
8：書斎
9：子供室
10：寝室
11：バルコニー



1階平面図　S=1:400





愛知淑徳大学新講議棟

愛知郡　1997年-
恭行+宇野 享／C+A

(Temporary Name) New Lecture Wing, Aichi Syukutoku University

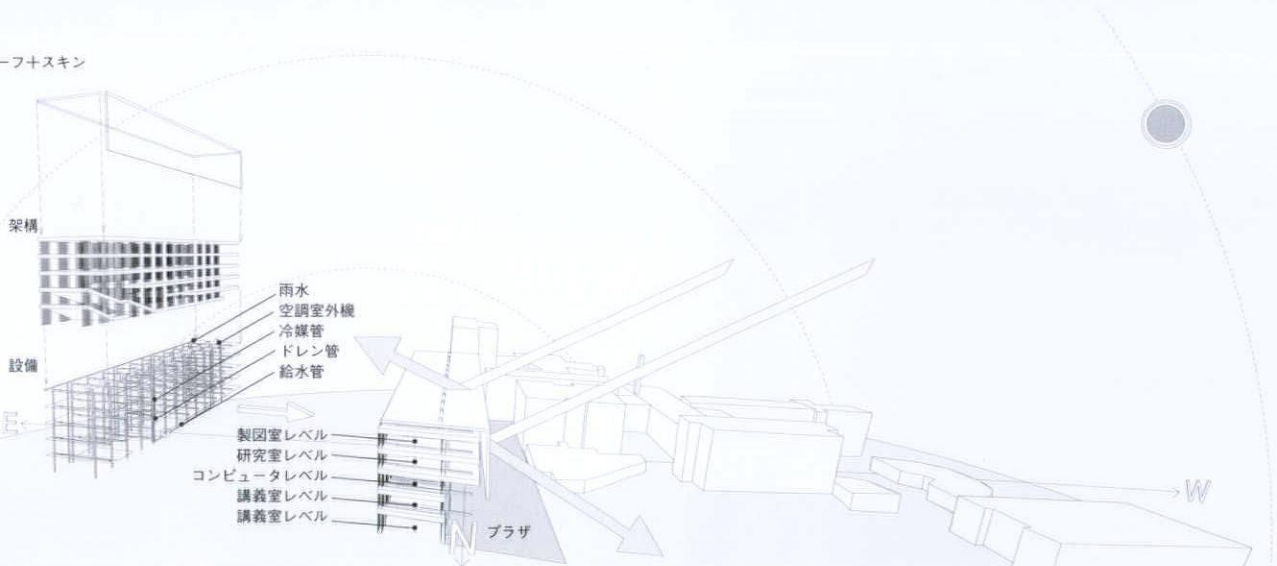
gun, Aichi, 1997-
-S. Uno／C+A

建築はふたつのシステム*に基づいて計画され。第一はキャンパス全体のマスタープランにる空間のシステムである。現況のキャンパスと建物の間に微細な空地を抱え込む都市的な成となっている。マスタープランにおいて、さな屋外空間を囲む建物の1、2階部分の開放め外構と一体的に整備することにより、現在が持っている潜在的な空間としての可能性をす提案を行っている。新講義棟では、1、2階定多数の人間が使用する講義室や通過動線をて開放性の高い空間として位置づけ、上階にした用途の部屋を配置している。新講義棟西長いオープン・スペースは大量の学生の移動をれる空間であると同時に、昼食時には隣接す、カフェおよび新講義棟の講義室と一体としされる屋外空間となることが想定されている。は、異なる用途、大きさ、熱負荷を持つ室空間を合理的に配置するための架構、設備、空間が一体となったシステムの提案である。ここでは大きさの異なる単位を効率的かつ合理的に配列するために幅18.5m（12.5mと6mに分割される）で高さ5層分の門型鉄骨フレームが3.75mピッチで90mにわたって連続する架構のシステムを選択した。3.75mピッチの架構は1スパン毎に設備系の縦シャフトとして利用される。このシャフトは将来の室用途や面積の変更、設備系の更新に柔軟な対応を可能とする装置でもある。また、屋根面と西側外壁面をダブルスキン*とすることで日射を遮蔽し夏季の空調負荷を軽減する方法を検討している。(伊藤恭行)

This lecture wing will be built to accommodate the planned student increase by providing additional rooms for lectures, research activities, computer education, etc. as the first phase of the university's entire-campus renewal project. The designer's task also includes the development of the master plan to show how this building will relate to the rest of the campus bearing in mind the entire project. Already, the location of the building has been decided based on its association with the other research and computer facilities. On the west side, a long outdoor space is planned to be used in conjunction with the adjacent cafeteria.

To arrange varying rooms, ranging from 20m² research rooms to large classrooms with 200 seats, in an efficient and reasonable manner, a five-story-high, 18.5m-wide, gate-shaped steel frame (with its width divided into a 12.5m and a 6m span) will be placed at every 3.75m point. To allow future changes in floor planning, a utility shaft will be provided at every other frame. (Yasuyuki Ito)





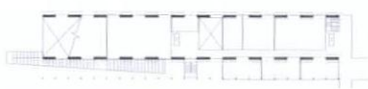




3階平面図(コンピュータレベル)



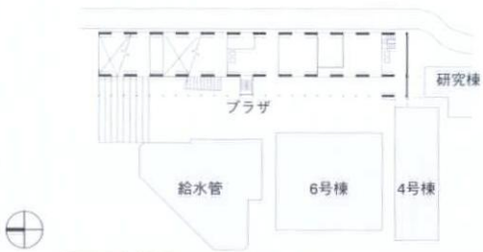
5階平面図(建築士コースレベル)



2階平面図(講義室レベル)



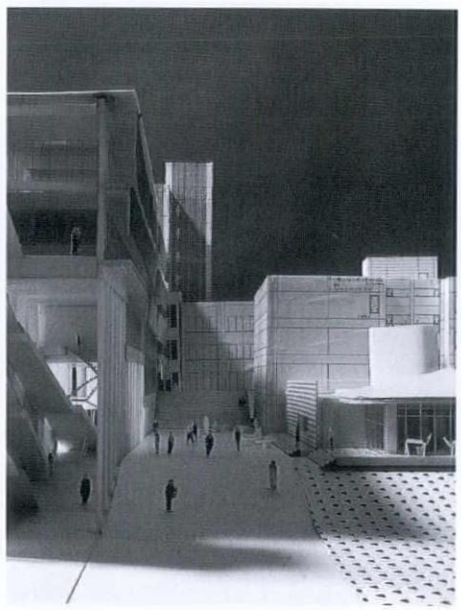
4階平面図(研究員・大学院レベル)



1階平面図(講義室レベル)　S=1：2000



断面図　S=1：2000

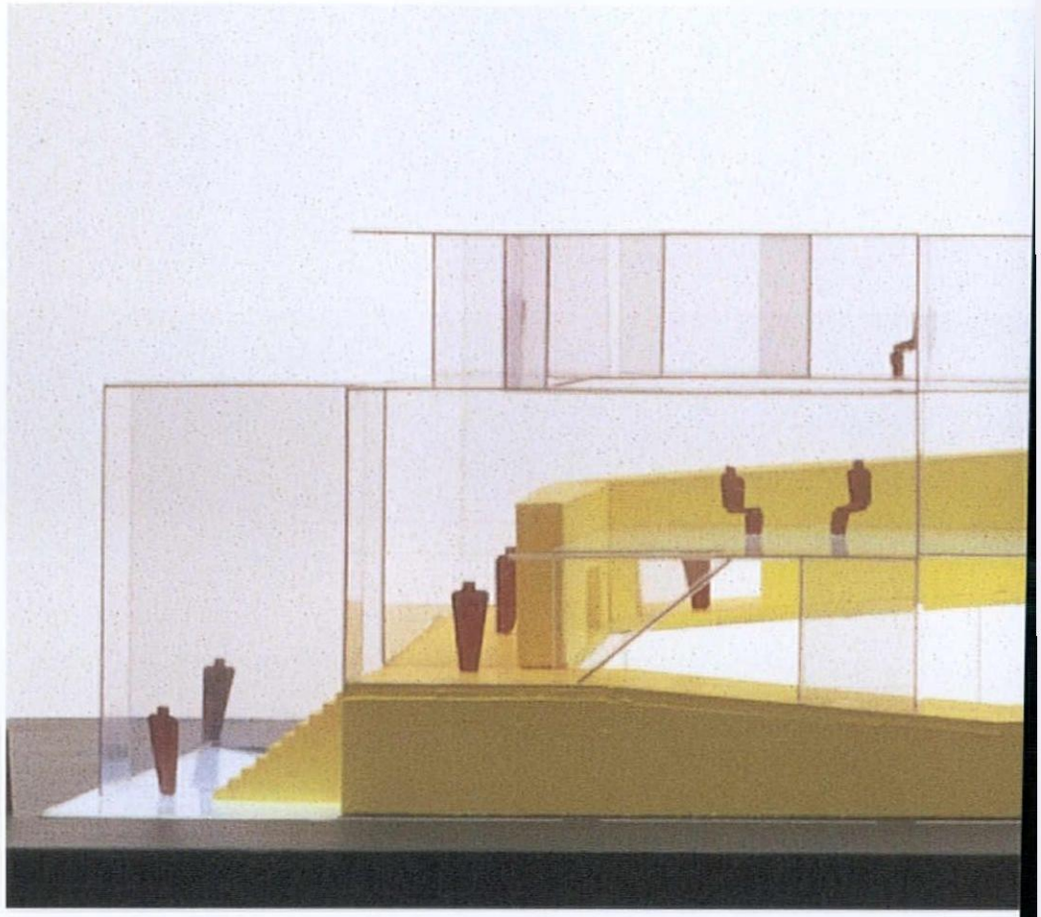


朝日新聞社秋田支局

秋田県秋田市　1997年-
宇野 享／C+A

Asahi Shimbun Akita Bureau

Akita city, Akita, 1997-
Susumu Uno／C+A



建築に要求される性能は多種多様である。ただ、当然のことだが実現できる空間はひとつしかない。これは、主体の捉え方により空間の機能が変化する建築の提案である。

敷地は秋田市内の官庁街に位置し、東北四大祭りのひとつである竿燈祭りの舞台となる山王大通りに南面する。グランド・レベルを緩やかな凹面として見通しのよい駐車場とすることで、ピロティ越しに見える北側の公園は、建築と一体化した街の風景となる。10人程度が勤務するオフィスだが、昼間は2、3名いるだけで夕方の締め切り前に徐々に人が戻ってくる。選挙や世論調査によるピークが年に数回あり、その際は100人近い人が活動する場となる。天井が高く見通しのよい空間はピーク時の人員増に対応した環境を提供し、少人数でも相互に人の気配が伝わり、寂しい空間とならない。

事務室を取り囲むスロープは、事務室にとっては「お城のお堀」のような役目を果たし、外来者にとっては「市民ギャラリー」として開放される。市民ギャラリーは、この建築に人を近づける機能と事務室から人を遠ざける機能を持つ。ただし、スタッフ専用のふたつの経路は直接事務室にアクセスできる。市民ギャラリーがただの通過動線とならないように、少人数での打ち合わせや休憩が可能なアルコーブ*を用意した。

水平方向にスライスされたような建築の隙間からは、内と外の多様なアクティビティ*が重なり合いながら見え隠れする。都市の中に蜃気楼*のように現れるこの建築は、近づけば近づくほど実体が遠のいていく。（宇野享）



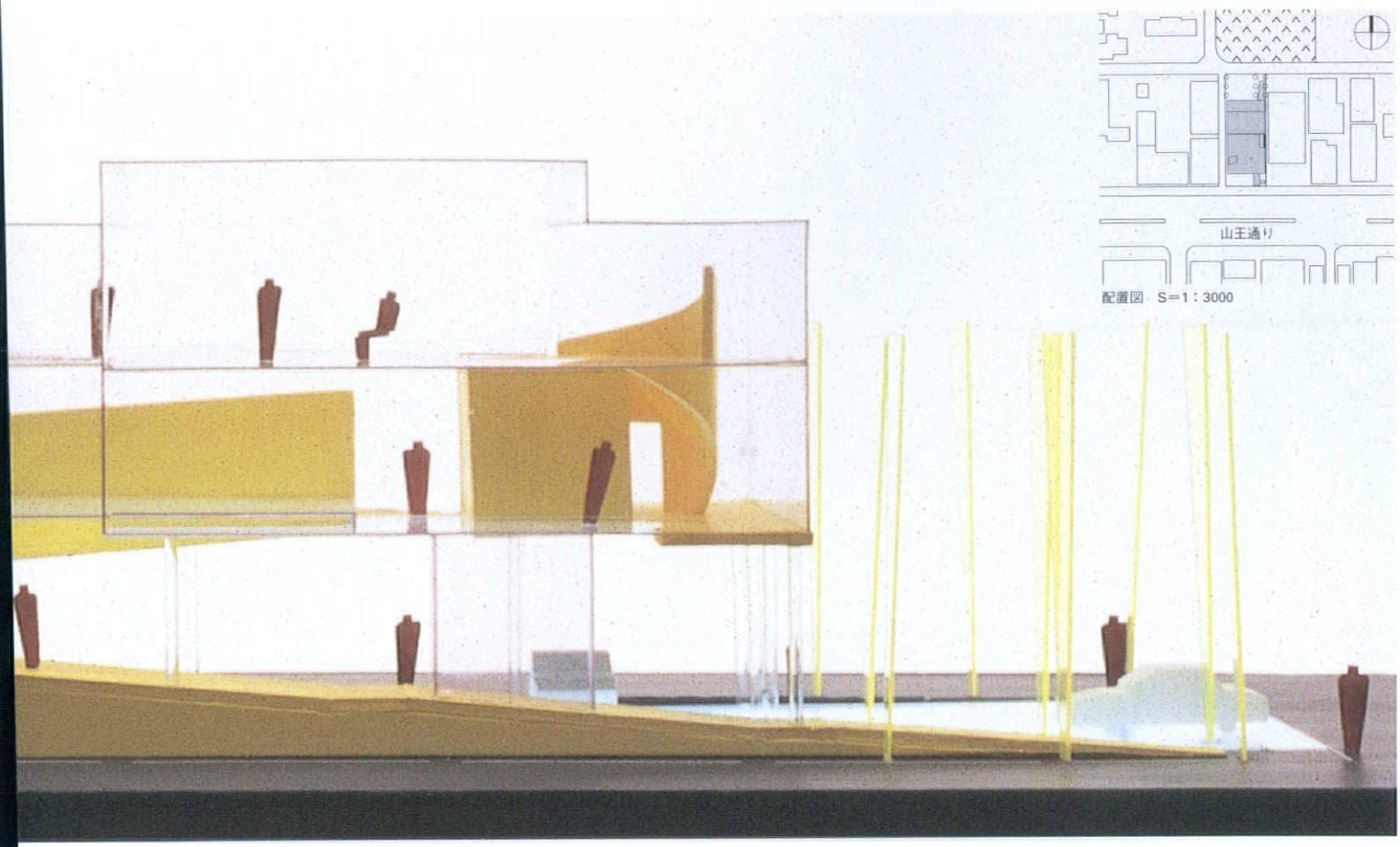
南北をつなぐストライプ状の動線

Any building is expected to be mutlifunctional, and yet can only be a single static shape. The objective here was to make a building that assumes different functions depending on the vantage point.

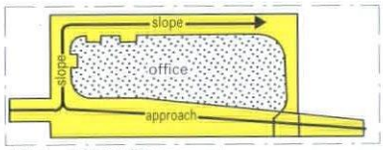
First, for the view from the street, an open parking lot is proposed on the ground level to show the park on the other side of the site. Secondly, inside the office, a high ceiling and an unobstructed view will prevent a feeling of a large empty office by allowing people to feel the presence of others. (Although the office will normally house only several people, it needs to be large enough for a hundred people for occasions such as a public election.) Thirdly, the slope around the office will serve as a "moat of one's castle" for the workers, and as a "public gallery" to visitors. To make it more than a mere walkway, alcoves are proposed.

Viewed from the street, the slope will slice the building horizontally, and through resultant triangular slits,exterior and interior activities will peek, creating a mirage-like image; the closer you get, the harder it is to grasp the substance of this building. (Susumu Uno)

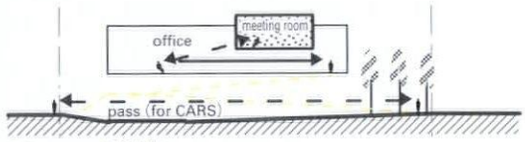




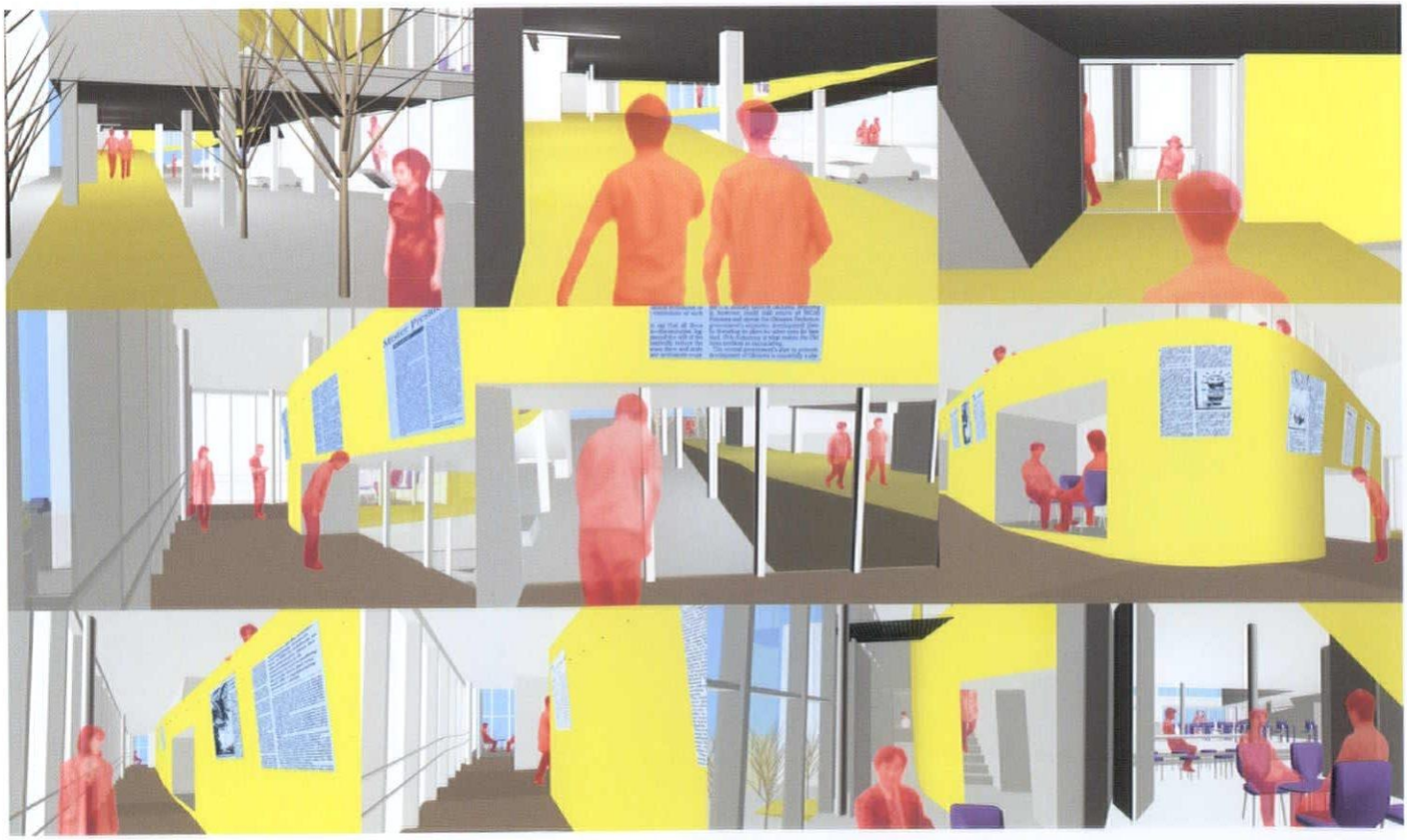
配置図　S=1：3000

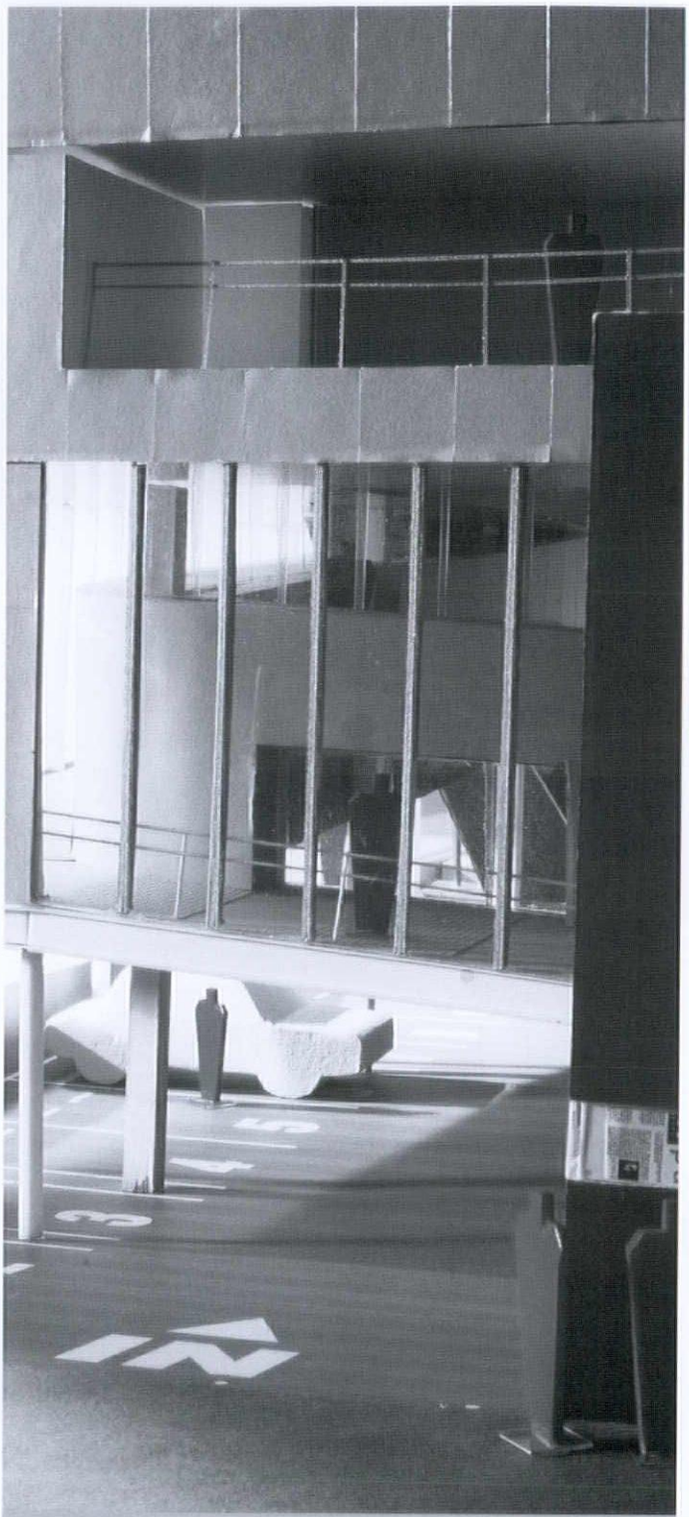


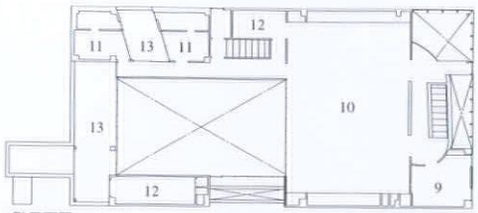
事務室・会議室を囲むスロープ



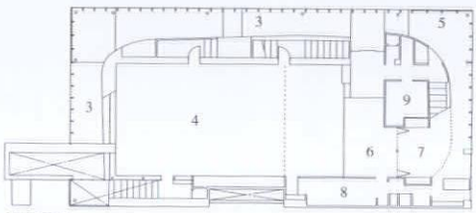
見通しのよい空間構成



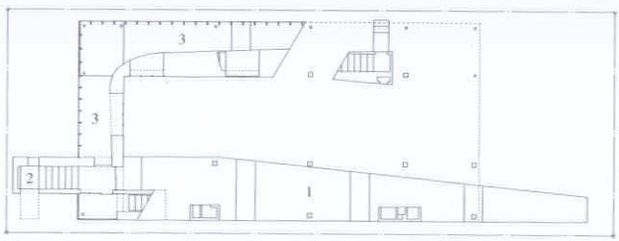




3階平面図

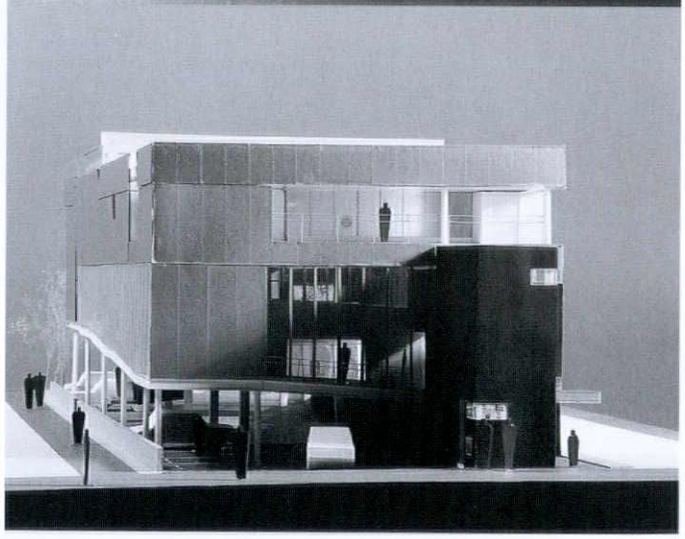


2階平面図



1階平面図　S＝1：600

1：スロープ
2：エントランス
3：市民ギャラリー
4：事務室
5：応接室
6：資料閲覧
7：休憩室
8：資料室
9：便所
10：会議室
11：仮眠室
12：倉庫
13：テラス





シーラカンス建築用語集

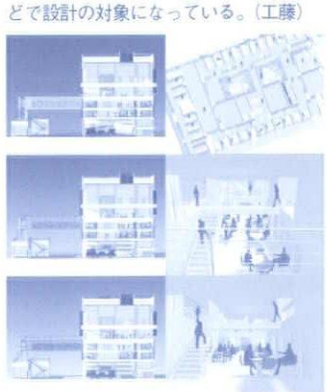
※各用語は巻頭論文(p.24〜25)および各プロジェクトの解説文の＊印を参照下さい。

赤いフレーム　[大阪市水上消防署] 視線の交差を許容できる場所を限定し、内部の様子をフレーム内に視覚化している。消防署では、地域にその存在を認識してもらう上でも消防車の赤というイメージカラーを用いている。(工藤)

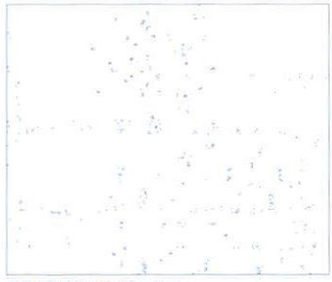


アクティビティ　主に多数の人間の同時多発的な活動を指す。個々の人間の行為の集積、というイメージ。(小嶋)　ビルディングタイプなどにより種類は異なる。建築内部だけでなく、外部を含めて展開される人の活動そのものを指す。その活動風景を見ることや見られることにより刺激を受けた人の活動が新たに発生していく。(宇野)　①[打瀬小学校]　学校の活動については『21世紀の学校はこうなる：千葉市立打瀬小学校』(国土社)として詳細な方法や内容が記録され出版されている。(小嶋)　②[プロジェクトTS]　広大な砂丘のエッジに約60mの正方形の広場としての床を計画。床は起伏し、人の視界は連続して変化する。砂丘全体の中で離合集散するための場所となる砂丘と、連続しながらアクティビティが発生するきっかけとしての床面。(堀場)　③[朝日新聞社秋田支局]　メディアを扱う企業は、セキュリティを配慮した上で地域に開かれた施設にする必要がある。秋田支局では、オフィスの活動ではなく、市民ギャラリーでの活動風景が街に映し出されることでさらにアクティビティが拡張していくことを期待している。(宇野)　④[K総合学科高校]　高校生のアクティビティの特徴は、時間ごとのメリハリが非常に大きいことだ。休み時間などの決められた時間には教室を移動する生徒たちで一斉に活動が活発になり、授業が始まると学校中がしんと静まり返る。たまたま視察に行った高校が授業中であったりすると、今日は開校記念日か何かで休校なのかと錯覚することすらある。放課後などには生徒たちが思い思いに好みの場所に陣取り、リラックスした雰囲気が漂う好ましい空間を見つけることもできるが、そのような好みの場所が見つかるような空間の質を備えている校舎は、残念ながら決して多いとは言えない。ここでは1日中そのような適度な人口密度を持ち、いつもどこかで人の活動の気配が伝わるような空間としたい。総合学科高校の新しいプログラムは、それ自体すでにそのような活動を誘発する可能性を持っている。2時間続きの実習では、その時の授業の進め方によって休み時間をずらすこともあり得るだろう。実習の途中で講義室から実習室に移動したりといったことも多い。こうした可能性を建築の力でもっと引き出すことはできないだろうか。例えば授業中も内部の様子が伝わってくるように、教室は開放的につくる。体育館や食堂のように管理上の問題から通常は隔離されてしまい、ごく一部の時間にしか利用されない施設を生徒たちが日常的に集まることのできる空間として利用する。専門色の強い実習室など、その系列の生徒以外は通常立ち入ることのない教室を一般の生徒がよく利用する昇降口のすぐ隣りに配置する。ひとつの室に複数の用途なり機能を担わせることで一部の生徒だけが使う空間を減らす。こうした新しい試みによって引き起こされる問題を可能な限り抽出することも重要である。回避可能か否か、それによるメリットとのバランスを考えると無視して良い程度の問題なのか。それらを見極め、さらに新しい可能性を探るためのスタディとしてアクティビティのシミュレーションは捉えられる。(三瓶)

24時間のアクティビティ　[大阪市水上消防署]　消防署の勤務は24時間をベースにローテーションしている。夜間に仮眠時間はあるが、常に緊急出動ができる体制を求められ、食事や入浴といった生活時間も、訓練や事務時間と同等なアクティビティとして、空間の配列などで設計の対象になっている。(工藤)



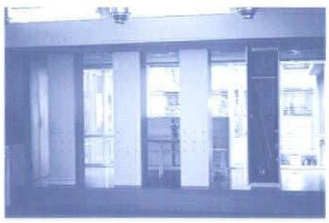
アクティビティのシミュレーション　[打瀬小学校]　設計時にコンピュータで、学校の約半分の領域について同時に300人程度の人を平面上で黒い点として動かすシミュレーションを行った。従来の学校だと点の移動は基本的に40人という単位になるし、教室の中の教員は識別できる。ここでは「蜘蛛の子を散らしたような」離散的で内部と外部でさえ識別できないような活動の分布がどのようにして実現できるかを考えた。最初はコンピュータでプログラムすることで300の点を動かすことを目指したが人間の動きに見えず、最後は他の学校の調査ビデオなどを見ながら、人は何によって動くのかを観察してひとりずつマウスで入力した。人は建築よりも家具、家具よりも他の人によって影響されていることが確認された。(小嶋)



児童の登校時のアクティビティ

アクティビティと空間　行為や移動の起点で、人はまず他の人や人の群に影響される。あるいはある空間の中で居場所を求めるときには平面や断面よりは家具やコーナーを手がかりにしている。それらに比して建築の空間が、人の行為に働きかける度合いはささやかなものである。100人がいたら100人に確実に働きかけるような圧倒的に強い働きかけだとファシズムの空間になってしまう。実際に設計する場合、この場所ではこうして欲しいという素朴なイメージに基づいて行為と空間を1対1に対応させて作業を進めることは、強制的か、さもなければ退屈な空間をつくってしまうだろうという点で危険である。〈打瀬小学校〉〈吉備高原小学校〉などで私たちは、個々の行為のきっかけの総体が発生させるパーソナルなアクティビティの総量が、全体のアクティビティを想像できないような多くの仕掛けを、ヒエラルキーを排除しながら設定している。それは行き止まりの場所(ヒエラルキーを発生させやすい)や音の干渉(距離か壁などの境界が必要になる)などの空間が明瞭な意味を伴って人に働きかけるケースを避けるための手続きと言っていいかもしれない。(小嶋)

アルコーブ　空間のスケールが人の活動範囲、単位(人数)や相互の距離に影響を与える。アルコーブは、壁やヴォリュームに入り込んだ小さく親密度の高い空間である。　①[打瀬小学校]　子供の成長過程に応じて3種類のアルコーブを用意した。低学年には、天井の低い隠れ家のようなスペース。中学年は教室の窓際に少し膨らみを持たせた水場とし、高学年はオープンスペースに属するインナーテラスのような場所とした。ほとんど間仕切りがないオープンスペースと教室の平均天井高が3mを要求される小学校において、小さなスケールの空間は子供たちにとって重要な場所となる。





高学年(上)と低学年(下)のアルコーブ

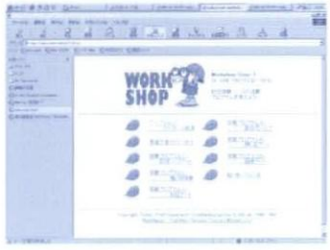
②[朝日新聞社秋田支局]　見通しのよい大きな空間に対して、簡単に小さな空間にシフトできるようにアルコーブを用意した。市民ギャラリーの使用頻度を考慮して、スタッフが日常使用しやすいようにオフィスと市民ギャラリーの境界に配置し、オフィスからは身近な外部のような場所として、ギャラリーにとっては、たまり場となるように配慮した。(宇野)

アンブレラ　クリストのプロジェクト。自然の中でアンブレラによって空間が離散的かつ流動的に獲得されていく様は〈打瀬小学校〉の空間イメージの原点のひとつとなった。(小嶋)

イナクティブ　活動＝アクティビティに対することば。不活発な状態を示す。アクティビティを考えていると、建築が常に何かの行為を誘発するような、問いかけの多い建築になってしまいがちで、それを回避する意味でも有効な考え

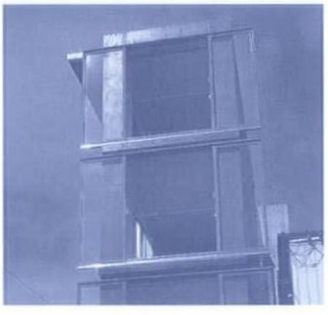
方。現代の生活にとって、じっとしていられる時間は大変貴重であると考えている。作用の少ない空間を導くための手がかり。(工藤)

インターネット [プロジェクトTS] ヴァーチャル・ミュージアム、建設プロセスの公開などを行う他に計画関係者との情報などのやりとりに利用。インタラクティブなメディアとしていろいろなレベルで公共施設づくりのプロセスに影響を与え始めている。(堀場)



インナーシティ [博多小学校] 肥大する都市の中心部。かつては多くの人が住みにぎわっていた地域が、今では急速な人口減によるインナーシティ問題が深刻になっている。〈博多小学校〉では、学校を新しくすると同時に住環境の整備と合わせて、都心の再生を行おうとしている。(工藤)

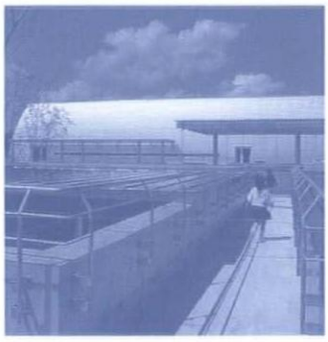
引用 研究の世界なら当り前の、出典を明記した既往事例の引用。設計した建築を発表する場合は「What is new?」が問われるわけだが、すべてをオリジナルにしようとして差異のゲームになってしまっている。むしろ、部分的なアイデアやディテールは出典を明記してどんどん用いたらという考え方。 ①[スペースブロック上新庄]〈富士裾野の山荘(石田敏明)〉の開口部。〈ハスネワールドアパートメント(アトリエ・ワン)〉のエントランスの鏡。



②[吉備高原小学校] 〈御杖小学校(青木淳)〉の黒板壁のアイデア。〈白石第2小学校(北山恒+芦原太郎)〉の可動黒板、体育館の開口(オーバー・スライダー)の転用(ポリカシャッター)など。(小嶋)

ヴァーチャル・ミュージアム [プロジェクトTS] ハコ(施設)に先行して中身をコンピュータ上の仮想空間として立ち上げる。これをインターネット上で公開することで、広報となる以外に、施設での活動のアイデアや展示品も集まる可能性がある。また、仮想空間特有の新たな活動が考えられる。それが現実に立ち上がる建築にも影響を与えるかもしれない。待ち望まれてから施設をオープンすることができる。こうしたプロセスで集積したものは、データベースとして、砂丘や砂漠などの世界各地の乾燥地情報の拠点となるかもしれない。(堀場)

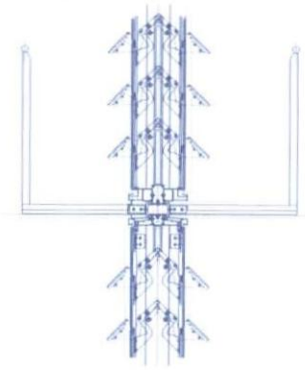
上の道 地表ではない空中のレベルの経路を廊下ではなく道のように設定すること。小嶋と日色が参加した〈茨城県営松代団地(大野秀敏)〉で6階建集合住宅の4階レベルにつくったのが最初。その原点は「スパンゲンクォーター」など。「立体街路」の1形態。(小嶋) ①[吉備高原小学校] 違った経路の重ね合わせ+平面的に広がる空間に対しての上からの視点+距離空間のジャンプ+防火区画+雨水経路となる大きな樋。(赤松)



②[K PROJECT] 大規模な集合住宅内の移動経路の立体化。(小嶋)



エアタイト・ダブルジャロジー [出雲市地域交流センター] 外側と室内側の両方向に同時に開く二重のジャロジー状の横桟のない開口部で、〈出雲〉のガラス壁面のために開発。1枚のガラスは1200×250。コンピュータで雨、風力、風速などのファクターをキャッチして呼吸するように開閉する。開放時にガラス面の反射を消すことができる。(小嶋)



家具 小学校のオープンスペースは、そこにいろいろな種類の家具(校具)が置かれていることで多様な学習活動が喚起される。調査を行い、必要な家具は設計した。家具だけを校舎敷地に並べることで空間の様相が浮かび上がるから、平面図に先行して家具配置をスタディした。CADを用いることで簡単にスタディできる。(小嶋) ①[打瀬小学校] ②[吉備高原小学校]

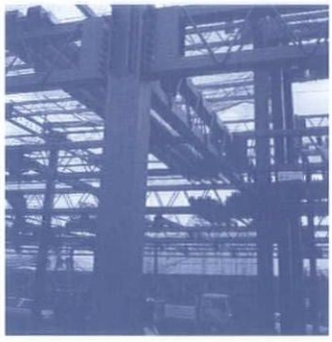


〈打瀬小学校〉家具レイアウト



〈吉備高原小学校〉

仮設 [大阪市水上消防署仮設庁舎] 仮設であることで年月の耐久性を考慮に入れなくてもよくなり、実験的な試みが可能になる。また、家具のような軽快さが期待できる。商業的な仮設の他にも、震災時や難民住宅のように(坂茂氏の計画など)社会的な意味をもつケースもある。ここでは再利用と経済性を考え、既製品を利用した即物的な仮設建築。壊しやすいディテール、軽量化、解体時のごみ、リサイクルについて配慮。今は仮設ではない建築で、建築資材や部品の生産工程、流通過程にもう少し地球環境、エネルギー消費等についてのトータルな視点が必要とされている。日本では一般的に建築の寿命、特に公共建築のそれはもう少し長くなるべきで、そのためのソフトと技術が必要。(堀場)

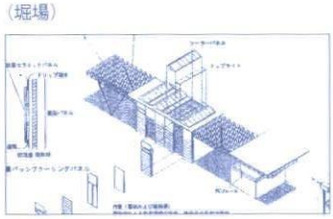


学校はまち、まちは学校 [博多小学校] 学校は様々な機能を備えて、子供たちの一日の生活を支えている。保健室は病院、工作室は工場、給食室やランチルームはレストラン。メディアセンターは図書館で、放送室はテレビ局など。学校は子供たちが生活している「まち」の縮図のようなものである。逆に子供たちが通ってくる「まち」の中には、さまざまな生きた教材が存在していて、まち自体が学校となっている。(工藤)

可動ルーバー ①[大阪市水上消防署] 強い日射を遮るために用いられていたルーバーを可動にすることで、光と風も導き入れながら視線をカットすることが可能になる。ファサードに変化ある表情をつくりだす。(工藤) ②[広島市西消防署コンペ案] 環境を制御し、建築内の活動を街へ視覚化する。(小嶋)

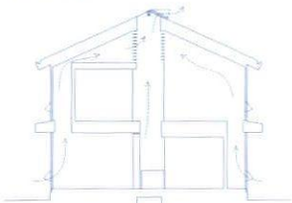
環境 〈大阪ガス NEXT21 303住戸〉は、特異な設計条件を持つプロジェクトだった。スケルトン/インフィルの考え方による空中の敷地が与えられた。「自立家族の家」としてプログラムの方向も示された。私たちは図式的なプランと建具の仕掛けで提案を行った。ここではもうひとつ建築全体で環境を考えるということがテーマであった。このとき共同した高間三郎氏とは、その後のほとんどのプロジェクトで共同している。高間氏と共同する中で、「空気を設計する」とい

うことが光に代表される視覚的なものだけではなく、物理的な空気そのものであり、実際に空間を体験するときにもその物理的なファクターが影響する度合いが大きいことを再確認した。多くの新しい公共建築の外部環境と全く隔絶した内部に疑問を感じはじめた。OMソーラーなどへ関心を持つようになった。様々な公共建築（〈出雲市地域交流センター〉〈埼玉環境科学国際センターコンペ案〉など）のコンペで、自然エネルギー利用の提案を行った。以降のプロジェクトでは空気の設計は、かたちの生成や表層のつくり方に影響を与えてきている。〈大阪市水上消防署〉では、すべてのルーバーを可動にして、光と風と視線の制御を実現した。また、それ自体がかたちを伴って顕在化しないところにもいろいろな試行を行っている。内外の入り組んだボーラスな環境で、親自然的な建築を考える〈出雲〉〈埼玉〉〈吉備高原小学校〉〈広島市西消防署コンペ案〉〈麻布大学キャンパス計画コンペ案〉などの一連の提案のバックボーンとなる。（小嶋）　①［埼玉環境科学国際センターコンペ案］屋根面を利用して太陽電池組み込み空気式集熱ソーラーパネルを床暖房に利用。外壁には、蓄熱壁とセラミックパネルとの間に中空層をもった規格化されたパネル（パッシブ・クーリングパネル）を考案した。（堀場）



②［HOUSE TM］主空間に冷房のない空気の対流と輻射だけで熱環境を制御する住宅をつくった。OMソーラーの住宅の実現。　③［吉備高原小学校］寒冷地でオープンなプランを実現するための大型石油ヒーターを用いた空気を循環させる暖房。（小嶋）　④［外ヶ岡交流拠点施設］南側に緩側的なゾーンを設け、日射の制御として利用。（工藤）　⑤［プロジェクトTS］換気のための中空層を併せ持った屋根スラブ。（堀場）　⑥［博多小学校］視覚と輻射に関して、屋上や垂直緑化を計画。（工藤）

環境工学　空気の流れや日射の取得・遮蔽といった環境工学的な視点から、屋根形状や開口部、吹き抜けなどの空間の構成要素や配列を決めていくことで、新たな空間の可能性を広げられるかも知れない。構造的な観点から空間の可能性を捉えた「構造デザイン」という言葉同様、「環境工学デザイン」といった言葉が成立するのではないかと考えている。（小泉）



〈ハウスジャパン〉光と風の筒としてのコア

キューブ　［那須の別荘］　一般に建築はソリッドではなく、薄い面の組合せで立体を構成し内部に空間が存在する。ここでは可能な限り外部に現れる面としての表情を消して、ワン・ヴォリュームに見せる操作をした。金属の葺き分けのみで内部の空間の文節を示し、屋根も壁もすべて同一素材にして、建築の部分ではなく幾何学としての立体感のみを感じさせる。（工藤）



居室、コア、動線　住宅内のスペースをその機能的な側面から還元して捉え直すと、(1)中に住まう人間の実際的な活動スペースである「居室」：居間、個室　(2)その居室での活動をサポートするためのスペースである「コア」：水廻り諸室や収納、設備機器設置スペース　(3)居室へアクセスするためのスペースとしての「動線」：廊下、階段の3つに分類できる。住宅に限らず、これら3つの比率の設定、組み合わせで建物の構成は決まってくる。この単純化して建築を捉え直そうという発想は、数多くの収納物や複雑な要求を整理するためのツールとして生じたが、ここではその整理ーソーティングの結果を、そのままの図式で空間化することを目指した。　①［空の中庭］　②［ハウスジャパン］（小泉）



居室、コア、動線の配列



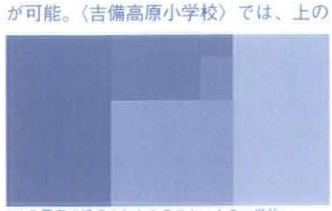
〈ハウスジャパン〉平面図式

空間の再生　［スペースブロック上新庄］時間のデザイン。プログラムと空間の持つ可能性のサポート。構造躯体以外の界壁をコンクリートブロックとする。構造体を傷つけることなく撤去可能。設計当初は1住戸＝ベーシック・スペースブロック（BSB）1ユニットのワンルームの設定であるが、この壁を撤去し、2つ3つのBSBをつなげていくことで、新たな空間を構成することができる。通常の平面的な間仕切り壁の撤去とは違い、XYZの3次元方向にランダムに接続していくBSBは、3〜4階にまたがる住戸をつくることもできる。また、新たにBSBを付加することで隣地をも取り込んで増殖し、無限に拡張していく可能性を秘めている。（赤松）

空気　建築の設計を「空気を変える」こととして捉える。日本語では「スペース」は「空間」となるが、「空気」にはもう少し「雰囲気」といったニュアンスが入ってくる。あいまいになることは避けられないが、「どんな空気をつくりたいか」が初期のデザイン・ミーティングではよく議論された。〈大阪国際平和センター〉頃までは「空気」＝「光の状態」と捉えていたが、その後空間の中の（温度、湿度、対流、あるいは音、アクティビティなどを含む）物理的な空気の状態を含めて検討するようになる。「スペースブロック」はそうしたものを含む空間。（小嶋）

空地のヴォリューム　［大阪市水上消防署］建築に囲まれることで見えてくる外部空間のヴォリューム。署庭の取り方を検討する時に、「空地のヴォリューム」の取り方が、逆に建築のヴォリュームを規定していった。（工藤）

クラスセット　教室、ワークスペース、アルコーブ、中庭、パスのまとまりをワンセットとした単位。教室を閉じた場所としてではなく、周囲まで含めた領域として捉え、教室廻りの領域を豊かにする考え方にもとづく。結果として接地性の高い教室ができる。「従来の片廊下型小学校＝団地型」に対する「〈打瀬小学校〉＝庭付き戸建て」のような配置が可能。〈吉備高原小学校〉では、上の道を重ね合わせて立体的な領域をつくっている。（赤松）



5つの要素で構成されたクラスセットの一単位

黒と白　「黒」は特定の用途や意味に対応する空間。「白」はそこに現れるアクティビティによって空間の意味が変容していくような抽象度の高い空間。通常の住宅や学校などは室名の与えられた「部屋」とそれらを結ぶ「廊下」の集合であることが多い。「部屋」も「廊下」も特定用途にしか用いられないから、建築全体が真っ黒ということになる。一方建築家が設計した建築では、特定用途にのみ対応しているのではなく意味がいくつか重ねられた大きい空間が入ることが多い。こうした「白」の比率を増やすことで、流動的で建築全体の気配が感じられる空間を生み出すことができる。ミースのユニバーサル・スペースはコアとなる黒と、その廻りの白の組み合わせが明確であり、黒比率を最小化しようとしていると言える。真っ白の建築やそれに近いものは活動を喚起しない。白と黒の配分には適当な比率があると思われる。①［苦楽園プロジェクトG5］建て売り住宅であることから個室などの部屋を設定せずに「黒と白」で平面を構成。



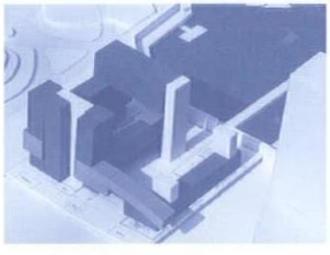
黒と白の平面ダイヤグラム

②［K総合学科高校］フレキシブル・ラーニング・エリア（FLA）を確保し部屋と廊下のプランニングを解体していく時に、黒となるものをあらかじめ抽出して大きい空間に分布させることで、単調な空間になりすぎないように計画。（小嶋）　③［プロジェクトTS］内部空間を概念として「黒」と「白」の2種類のスペースに分けた。「白」は流動的で明るく外部とつながった、限定されない親自然的な空間。エントランスを通って連続したスロープは行き止まりがなく、様々なレベルで「黒」の空間と接触し、巡り歩くことができる。「黒」は目的的で人工的にコントロールされる空間で、展示で言えば映像や演出的なものが可能。（堀場）

経路　都市・建築の空間を体験する主体の側から考えるとすべて経路によってつながっている。空間を構成で考えるのではなく経路で結ばれたものと捉えると、あらゆる建築は経路の一部だ。私たちの設計した建築は、経路に行き止まりがなく小さな部屋でも複数の出入り口を持つことが多いのは、こうした考えに基

づいている。動線や廊下ではなく「経路」と呼ぶのは、移動空間として明示されていない空間も「経路」となるからである。①[大阪国際平和センター] ミュージアムの動線は通常一筆書きになるが、ここではネットワーク状で交差点をいくつか持つ選択可能な経路を考えた。学校からの見学などで、集合時間を決めて解散し子供たちが自由に動き回れることを想定していた。 ②[打瀬小学校] ネットワーク状の経路が体育館のキャットウォークレベルなども含めてすべての部分に張り巡らされている。複雑な建築で視察者などは迷いやすいが歩いていればそのうち目的には到達できる。(小嶋)

建築のヴォリューム [大阪市水上消防署] 建築を屋根や柱や壁といった構成要素で捉えるのではなく、一塊のヴォリュームとして捉える。大きなヴォリュームは柱状のヴォリュームの組合せで構成され、そのいくつかが外部に細長い建築ヴォリュームとして空間を囲んでいる。(工藤)



限定的な視線の抜け ①[外ヶ岡交流拠点施設] 細長い建物に設けられた海や山に向かうスリット状の通路によって、敷地全体のストライプが強化される。少し暗い通路の向こうには伊豆地方の風景を特徴づける青い海と光を受けた北斜面が明るく見える。 ②[K PROJECT] 板状の建築の隙間から反対側の住棟の明るい壁が知覚されることで、板状の大きな建築が意識されにくくなる。これと同じような効果は、ヨーロッパの中世城郭都市や山間を走る道路などでも体験できる。(堀場)





公開プロポーザル 公開プロポーザルは、とかく閉鎖的な公共施設の建設前段階としては画期的なプロセスである。〈プロジェクトTS〉では、一般の市民200人以上が集まり、5人の建築家がスライドを使って各々20分説明を行った。閉じた建築の世界での説明ではなく、わかりやすさが求められ、建築家側も鍛えられる。建築の面白さや魅力をもっと一般の人たちと共有する必要がある。そうした社会でないと建築家の存在意義は乏しくなり、魅力ある公共建築は生まれないのではないか。(堀場)

構造・架構 建築の設計であるから、初期から関心がなかったわけではない。初期には賃貸集合住宅の仕事が多かったから、耐火建築ということもありRC壁構造が多かった。それでも〈桜台アパートメント〉ではヴォイドスラブと斜め柱の組み合わせを試みたり、〈大阪国際平和センター〉ではHPシェルなどを含むいくつもの構造を共存させたりということはやってきた。〈打瀬小学校〉もこの系列に入るだろう。ここまでは、雑多なものが高密度に集まった日本の都市の直喩であったとも言える。構造・架構がもう少し建築的なテーマになったのは〈出雲市地域交流センター〉以降かもしれない。 ①[出雲市地域交流センター] 私たちとしては初めて耐火鋼を用いた鉄骨造の建築を計画。



②[吉備高原小学校] 集成材を用いた木質構造の新しいかたちにチャレンジ。③[プロジェクトTS] 地形のような起伏をもった連続した床面を実現するためにプレストレスジョイスト梁を用いて計画。 ④[スペースブロック上新庄] 在来RC壁構造を用いたものでも、立体的な力の伝達を考えて、壁構造の新しい展開を示した。いずれも優れた構造家とのコラボレーションの成果。(小嶋)

黒板壁 [吉備高原小学校] 壁仕上げとして黒板用鋼板を使い、黒板として使える壁。外部はRC壁に不透明な黒の撥水剤を塗る。各教室のメイン黒板としては、可動の上下スライダー式黒板を用意し、黒板壁との組み合わせによって様々なシーンに対応可能である。従来、「黒板=正面」という法則は、学校建築に於いては当然のこととして捉えられていた。前を向くという行為は、先生の方ではなく、黒板のある面を向くことを指す。従来の一斉画一授業では、効率的な法則であったと言える。が、近年の教育方針の変化に伴う建築の多様化の中でも、固定黒板の存在はそのままであった。ここでは黒板壁を配置し、そこに屋根をかけ、教室となる場をつくる。内外が一体となって教室ゾーンを形成し、そこに可動黒板を置いて教室が完成するというように、従来の「黒板=正面」の概念を払拭する装置として黒板壁がきわめて重要な意味を持っている。(赤松) 〈御杖小学校〉で青木淳が用いたことば(概念)から着想。(小嶋)



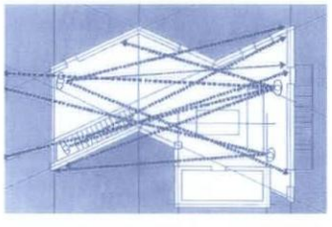
砂丘コミッティ [プロジェクトTS] 施設内容や展示、運営に関する議論、検討を行うための会議。様々な分野の専門家や地元の方や自治体関係者などで構成される。施設計画にその議論の内容を反映し、建築と施設内容が一体となることを目指している。将来的には砂丘そのものの問題について市民レベルでの議論の場となるといい。(堀場)

シーラカンス・シティ 模型を中心にスタディをしていると膨大な量の模型が集積する。それを雛壇上に積み重ねて記念写真のようなものを撮ると、そこに東京のどこかにありそうで実はフィクションの街が出現する。いろいろなスケールの模型が混ざっている。どの部分が何のプロジェクトか判然としなくなる。1988年に『建築文化』でシーラカンスの特集が組まれたときに撮影したのが最初で、1988年、1990年、1992年のヴァージョンがある。(小嶋)



シェルター [ART HUT SD] 建築を考えていく上では、予算が許す限り大きな気積を確保したい。大きな気積さえ確保されていれば、細かな機能についてはあとからでも対応が可能である。そう考えると、様々な設計条件、要求に細やかに対応することから離れて、外界から身体や物品を護るという、始原的な意味合いに還元して、いかにシンプルで大きなシェルターを確保できるかが重要だといえる。(小泉)

死角 ①[HOUSE TM] ヴォリュームをモデリングしていくときに、死角が生じるようにすることで小さな空間に拡がりを与えることができる。ここでは、さらに出角に開口を加えて、内外が反転してつながるように設計し、マグリットの絵のような効果を期待した。 ②[那須の別荘] ベーシック・スペースブロック(BSB)立体L型の特徴として、どこにいても全てを一望できないことが挙げられる。(小嶋)

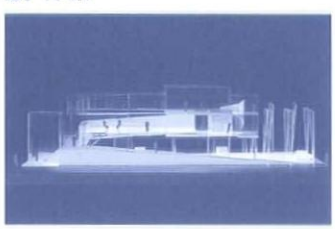


システム システムという用語をコンピュータのOS(オペレーションシステム)のような文脈で捉えたいと考えて

いる。コンピュータのOSは、その上で様々なアプリケーションが展開可能な枠組を与えるものだ。OS上では実に多様なアプリケーションが展開するが、人間の構想することが全て実行可能なわけではない。逆説的に言えば、システムとはある限定された目的をより良く実行するための枠組なのである。都市や建築の文脈に置きかえれば、ある空間的特徴を獲得するための思考方法、空間配置のルール、設備や架構の方法などの様々なレベルでの広義の枠組をシステムと呼んでおきたい。当然のことながら、それは独善的な美学によるものではなく、論理に裏付けられた共有可能な枠組でなければならないはずである。 ①[幕張新都心の都市計画] 街区型の住棟を配列することにより都市的な街路空間をつくりだす枠組を提示。 ②[麻布大学キャンパス計画コンペ案] 樹木と建築が一体となってキャンパス全体のオープンスペースを規定する方法を提案。 ③[プラモデル住宅] 狭隘な住宅地の中で室内に最大限の明るさをもたらすための外壁（光り壁）の実現。 ④[愛知淑徳大学新講義棟] 架構と設備を一体として計画し、限定された中で最大限のフレキシビリティを獲得する方法を検討。(伊藤)

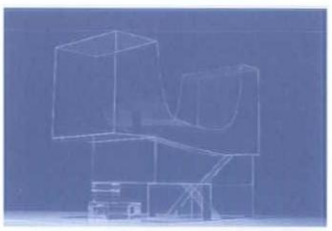
視線の交錯 高さに変化のある空間や距離のある空間には、見る人と見られる人の関係が常に生じる。(工藤)

蜃気楼 人と人、人と建築の距離をどのように設定するか。カーテンウォールなどにより透明度の高いファサードの建築を外部から見たときには、内部の空間構成が認識できる。建築に近づき内部に入ると現在自分のいる空間しか認識できなくなり、空間相互の関係を見失う状態を蜃気楼に例えている。それはセザンヌの点描画に近づきすぎると色彩しか見えなくなり、遠く離れると実像が浮かび上がることにも似ている。 [朝日新聞社秋田支局] 外観からはオフィスと市民ギャラリーのレベル関係が認識できる。だがセキュリティを建築的に担保するため市民ギャラリーを歩いている人にはオフィスの様子がわからないように配慮。(宇野)



スペース [那須の別荘] 建築には室名という記号化があるが、人の行動は室名で規定されるわけではない。空間を捉える上では、逆にデメリットとなる場合がある。部屋の使い方は使う人間や季節によってもっとダイナミックに変化すべきであり、使い方を規定する室名付きの建築を避けるために、スペースという言葉を用いる。(工藤)

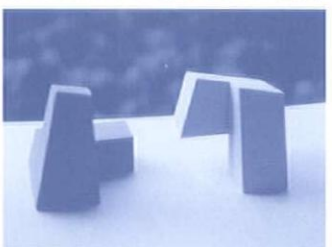
スペースブロック 壁などに囲まれてひとまとまりに捉えられる空隙部分を、中にある家具などのしつらえ、樹木、人間などをふくめて取り出し、積み木のように扱う空間の表現方法。93年度のハウジング・アンド・コミュニティ財団若手デザイナー助成の中で着想された。これは、内部にも外部にも適用できる。また、切れ目ない空隙部分を切り分けるので、架空の境界面が生じる。これまでに模型とコンピュータ・グラフィックスとで実現を試みてきた。この方法を使うと、空間デザインがスペースブロック自体の決定と、出入口どうしをつなぐスペースブロックの編成との2種類に分けられる。(日色) 空間を記述する方法のひとつとして、ネガポジ反転した空間の思考として重要。現実の設計対象は、空気の塊を囲う「もの」だが、空気を設計するという考え方。空気の塊のかたち、状態が設計のテーマ。2次元の図面ではわかりにくいことが、自然に立体的な思考につながる。(堀場) 研究費を得て「高度に立体化した複雑な空間の記述方法」をテーマに海外調査を行った。シーラカンスは研究もできる場所というイメージを持って生まれたが、初めて研究を本格的に実行できた。そこから「スペースブロック」という概念が抽出された。これは空気の塊を設計する感覚であり、空間を記述する方法から、建築を考え設計のためのツールとして利用することまで可能である。スペースブロックにはいろいろな展開がある。最初はすでにある「いい空間」を採集し、記述する方法あるいはツールだった。私たちが設計したものもいろいろこのモデルで再現してみた。(〈スペースブロック・ワールド〉) 空間をマッスとヴォイドのヴォリュームの関係として意識し始めたのは、(ais)からであったが、そこでのヴォイドなヴォリュームの捉え方が、スペースブロックという思考方法のヒントになっている。ネガとポジの空間が反転しヴォイドスペースが形となって見えてくる時、スペースブロックはより鮮明になる。それ以降実際の設計でも用い始めた。(小嶋)





(ais)

①[那須の別荘] この別荘では、立方体を4つ連結した立体L字型というスペースブロックが2つ組み合わされている。それぞれのスペースブロックは、居間とキッチンをもつ主室ゾーン、浴室を含めた寝室ゾーンに対応する。ここでは立方体のスペースブロックをベースに、屋根と壁に勾配を付けることで変形させている。これは落ち葉の多い立地条件で陸屋根が採用できないことと、内部の空間的効果をスタディした結果である。(三瓶)



②[HOUSE YG] チューブ状のヴォリュームを、モデリングして用いた事例。③[スペースブロック上新庄] ここではベーシック・スペースブロックを用いているが、こうした展開はパートナーの一部が大学の研究室などで継続しフィードバックするという新しい進め方だった。現在も様々に展開してリサーチを継続している。HOME PAGE:http://www.bekkoame.or.jp/~derin/ (小嶋)



ソースとリフレクター 光が入ってくる部分を「ソース」、入ってきた光が反射して視覚化される部分を「リフレクター」と呼ぶ。光のスタディは空間内の「リフレクター」の分布のスタディとなる。 ①[CREVASSE]「リフレクター」を、インサイドトップライトと名付けた下階へ光を透過させるスリガラスと兼ねた。 ②[大阪国際平和センター] シェル屋根部分では天井を「リフレクター」とするために、内庇で自然光をリバウンドさせている。また東側階段室スカイライトの上に西日を受けて下へ落とす反射板を設けたが、これはある時間だけ生じる「ソース」のための仕掛け。③[HOUSE TM] 模型の屋根に「1年間の水平面日影曲線」の図を貼り、基準の長さの棒を立てて、自然光のもとで季節で移ろう光の状態をスタディし、「ソース」となるスカイライトと、「リフレクター」となる折れ曲がる壁の関係を決定。(小嶋)

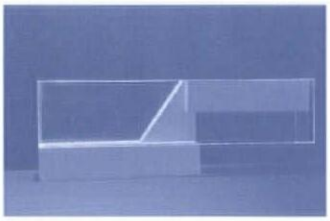
外の教室 「1本の木があれば学校になる」(L. Kahn) インドで木陰に集まって先生の話に耳を傾けている子供たちの1枚の写真がきっかけになり、教室とは何かを考え直す中で外の教室は生まれた。そもそも、天気の良い日には外が一番気持ち良いのだから、そのような時には外で授業ができるような道具を準備しておけばよい。 ①[博多小学校] 都心にあるからこそ外と一体で利用できる教室を考える。汚れることを気にせず、元気に子供の発想で使える教室。(工藤) ②[吉備高原小学校] 外と中の教室が等価に現れるような全体を設計。(小嶋) ③[打瀬小学校] 埋め立て地には存在しない自然石をイメージして、石のボールを点在させ、黒板を置いた。(工藤)



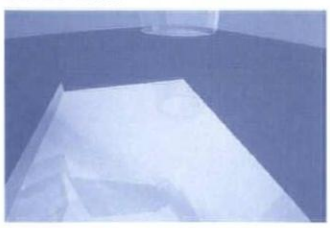
ダブルスキン ①[プロジェクトTS] 広場としての床面（屋根）を二重にし、中空層を設けて通風を確保するとともに、小さな中庭やトップライトなどによって、あたかも呼吸するような床面を計画。 ②[外ヶ岡交流拠点施設] 眺望と日当たりのよいデッキに面した南側の幅約3mのゾーンを縁側のように扱

い、内部の環境を制御するためのバッファーゾーンとしている。そして、上部は通風のため解放できる。冬は日射のエネルギーを利用し、夏は日差しを直接内部に入れない。(堀場)

チューブ 単純化して言えば、広さ、高さ、長さは空間の豊かさの基本的要因である。チューブ状の細長い空間は長さによる豊かさをつくりだす装置のひとつである。この装置は、曲げる、折りたたむなどの操作により、実際に計測される距離以上の長さの感覚を生み出すことができる。基本的にチューブ内部の移動は連続的に変化する自立性の高い空間体験となる傾向が強い。 ①[WHITE / BLUE 西脇の住宅] 断面方向に屈曲する閉じたチューブと平面方向に屈曲する開いたチューブのふたつチューブにより同一の距離の中で異なる長さの感覚を得ることができる。また、ふたつのチューブの間では、非連続に異なる空間に移動するという関係が組み込まれている。(伊藤)



②[HOUSE YG] 2、3階フロアにアクセスするための階段をチューブのように扱うことで他と区分。天井の一部は乳白ガラスで室内の光を間接的に導き、白く塗られた内部は光の状態を敏感に反映。屋上からの光の筒が、3階のガラス床を通じて2階玄関部分のチューブを狙う。これらの仕掛けは、建物全体をひとつの大きな採光装置のように見立てることができる。(堀場)



ティーム・ティーチング (T.T) (1)協力教授方式。(2)複数の教師が協力して教材の準備、学習、評価などに当たる教授方式。(3)2〜数クラスがチームを組み、学習の方法や狙いに応じた新たな学習集団を編成する。(以上『建築設計資料集成』、日本建築学会編)従来の、クラス全員が同じ学習をする一斉授業に対して、クラスの枠組みをはずし、各個人の進み方や理解度にあわせて勉強方法を選択し勉強する方式。T.Tとオープンスクールの計画とは相互に関連している。 [打瀬小学校] 学年同一時間割制、共同担任制を導入している。学習進度が同じなため、T.Tを必要に応じてとり入れることができ、1週間の学習時間のうち7割前後をT.Tで実施している。(『21世紀の学校はこうなる:千葉市立打瀬小学校』より)(赤松)

東京タワープロジェクト 1987年に『SD』誌主催で行われた展覧会。私たちは、実在の東京タワーを素材にしたリプレゼンテーションをテーマとして与えられた。東京タワーと街の中の赤い色を重ねて写真に記録するという方法で、タワーというモノではなく都市の見え方や体験をテーマにした。(小嶋)

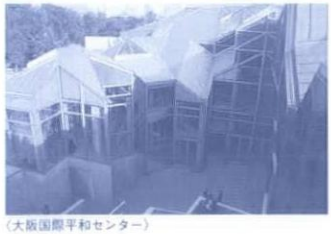


ネガとポジ ふたつの空間AとBがあったとする。スペースAにいる人がドアのむこうのスペースBに移動し、スペースAが逆に閉じたヴォリュームとして見える時に、空間の反転を強く感じる。これは、ヴォイドがヴォリュームとして建築化された時にのみ感じる体験。連続する空間にのみ依存し、線や面や素材の要素がいっさい影響しない時にのみ、感じる空間体験である。(工藤)

光り壁 [プラモデル住宅] 壁としての性能を有しながら、光を透過する壁。開口部と壁との中間的な性質の建築要素。具体的にはペアガラス、断熱材、中空ポリカーボネードシートからなる大判パネルで構成されており、断熱性能、プライバシー、脆性など、それぞれの材料がもつ弱点を補うように組み合わされている。光を透過する壁面は、壁全面が発光面となり、光を室内に呼び込みつつ、外界の陰影を映し出すスクリーンとして機能する。(小泉)



光とルーフ 空間は光や空気の状態である。初期のプロジェクトでは、光をどのように内部に取り入れるかを主題に模型で設計を進めていた。結果として屋根形状に特性が現れたのが〈桜台アパートメント〉や〈CREVASSE〉で、光をリフレクトするものの方に焦点を当てたのが〈TRANS〉や〈マインズ北堀江〉だった。〈大阪国際平和センター〉にルーフのかたちに特徴が現れるという設計のピークがある。異質な空間の共存をそのまま異なる光=異なる屋根と捉えてできあがったのがあの複雑なかたちだ。光というテーマはその後も〈HOUSE TM〉や〈ART HUT SD〉〈那須の別荘〉の光のモデリングとして展開されている。他のすべてのプロジェクトでも最も注意深く扱われていることがらだが、最近は光そのものを屋根のかたちとして、建築全体の表象にすることは少ない。(小嶋)



〈大阪国際平和センター〉

光のヴォリューム 光を内部に導き入れるにあたって、光を受ける面—リフレクターを設定して反射光を利用するという考え方に対し、入ってくる光そのものでヴォリュームをかたちづくろうという考え方。リフレクターという考え方では受照面が空間の中で浮かび上がり、空間が引き寄せられるが、光のヴォリュームとしてとらえたときには、均質で柔らかい光が水槽に水を満たすように、あるいは風船を膨らませるように室内に満たされてヴォリュームが作られる。 [ART HUT SD] 倉庫という機能上、少ない光の量とすることが要求されたが、わずかな光を斜めの壁の隙間から室内にそそぎこみ、光のヴォリュームを生み出している。(小泉)



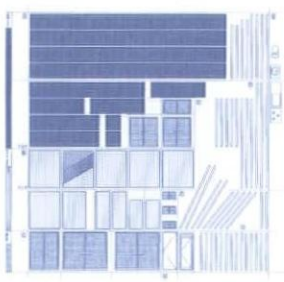
森の中に置かれた光のヴォリューム

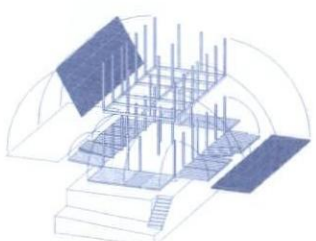
引き出し [ハウスジャパン] 例えば、1日の中で洗面所で過ごす時間がそれほど長くないのであれば、利用するときに家具状の間仕切りを引っぱり出すことで洗面のスペースを確保し、不要なときにはしまい込んでしまえばよい。つまり引き出しである。そうすれば利用していないときのスペースをオープンスペース側に供用できる。建築の各室、各部分に限定的な機能が与えられ、単一の目的にしか用いられなくなることに対して、平面上の用途・機能を重ね合わせていくことで、限られた活動領域を最大限に利用しようという意図である。(小泉)





プラモデル 建物各部をパーツ化して捉え、実際の建物でもそのパーツが組み上がっていく過程を可視化した状態として表現すること。すなわち、プラモデルを組み立てるような感覚で、各部材を集合、連結させ建物を構成していく。(小泉)





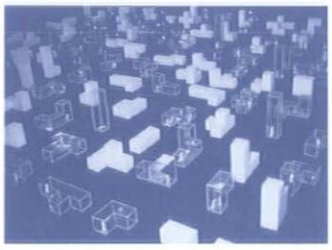
〈プラモデル住宅〉部品リスト(上)と組立図(下)

フレキシビリティ ［プロジェクトTS］展示室は大きく砂丘と砂漠のふたつに分かれていて、さらに2層ある展示室は、テーマごとの部屋に分かれている。それらは白の空間（エントランスホールからつながる明るい空間）からアクセスできるため、割合自由に間仕切ることが可能。展示替えに対応するために壁は乾式とし、空調ダクト、電気設備の配管は床下を利用し、移動可能なPSを設けている。（堀場）

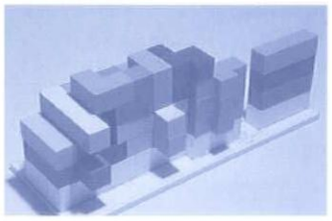
フレキシブル・ラーニング・エリア（FLA） ［K総合学科高校］生徒たちの教室以外の居場所。自発的な学習の場。生徒相互のコミュニケーションを促す場。通常は廊下などに充てられる共用面積を利用し、そこで様々な活動が行われるように建築的な操作を加えた空間。FLAは学校中のあちこちにつくられ、どの生徒もいくつかのFLAを自分の学校生活のパターンに従って使い分ける。 (1)休み時間や放課後などの生徒の日常的な居場所。ロッカーが置かれ、専用の机を持たない生徒たちは休み時間の度にここに戻ってきて次の授業に備える。 (2)生徒同士のコミュニケーションを図るための空間。FLAに置かれたテーブルで秋の文化祭のイベントについて打ち合わせたり、部活動のミーティングなどに利用される姿がイメージできる。実習ゾーンのFLAにはその系列の仲間たちが集まる。2時間続きの実習では、休み時間に一息入れる場所がすぐ近くに欲しい。学習の成果を発表したり展示できるギャラリーとしても機能する。 (3)自分で時間割が組める自由なプログラムにより、生み出される空き時間などに、自発的な学習を行う場所。特に図書室や情報処理室といったメディア系の諸室との連携をとることで、いつでも自由に触れることができるコンピュータを活用した学習の場となることを想定している。このようにFLAは、総合学科高校のもつプログラムにうまく対応することができるが、その特殊性からのみ導き出されたものではない。今までの作品に共通して見られる空間の質を備えたものとなっている。フレキシブルで様々な用途に利用でき、常に誰かに、しかも一部の限られた人でなく、多くの人々に利用される空間（＝「白」）。日常の主動線やトイレ、倉庫などの機能空間（＝「黒」）とのスムーズな連絡などによって、わざわざそこに行かなくても自然に人が集まり、活気のある空間となるような細かな仕掛けが施される。もちろん学習の場として落ち着ける雰囲気も重要である。（三瓶）

プログラム 公共建築は一般に与条件としてのプログラムが固定的である。必要諸室が示されることが多いが行為・目的別に部屋として空間が切り分けられている。そのまま建築として設計すると廊下と部屋の集合になってしまう。できあがった建築は利用頻度の少ない部屋が多くある。建築家が活躍するのはシンボリックであることを要望されることの多い外観のパッケージ・デザインとエントランスなどのホールやアトリウムくらいでいい、という本音が見え隠れしたりするし、それに応えただけのような建築も世の中に多くある。豪華で大きいロビーの陰に主要なアクティビティが押しやられてしまう「ロビー建築」はつくりたくない。そこで私たちは、必要諸室表からその中の行為を読みとり、切り分けを崩し、全体が生き生き使われる建築へとプログラムを組み替えている。「アクティビティのシミュレーション」や「黒と白」はそうした検討作業の中で用いている論理である。（小嶋） ［K総合学科高校］総合学科制／系列／アグリビジネス・エンジニアリング（自動車・土木）・福祉教養・情報科学・人文国際・自然科学／普通科＋専門学科／実践的な授業／実習と座学／単位制／3年間で80単位／産業社会と人間／自分で科目を選択／自分で時間割を組む／系列をまたがって履修可能／教室数が多い／教員数が多い／生徒の移動が多い／空き時間の活用／地域開放／異なる分野の共存／生徒の居場所の確保／教員の居場所の確保／自発的な学習／コンピュータ／履修者が5人だけの講座／大教室と小教室（三瓶）

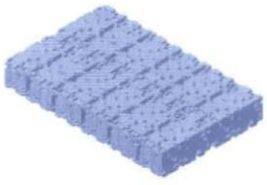
ベーシック・スペースブロック（BSB） スペースブロックを規格化した立体パズルが、ベーシック・スペースブロックである。これは、2.5mキューブ3、4、5個からなる39通りに折れ曲がった空間を、100分の1の模型でつくったものである。透明と白があり、透明には人間の模型が入っている。透明／白の対比は、内部／外部、プライベート／パブリックなどに読み替えて利用できる。立体L型のBSBを2個組み合わせて利用したのが〈那須の別荘〉で、〈スペースブロック上新庄〉ではワンルームマンションの各部屋に適用した。（日色）



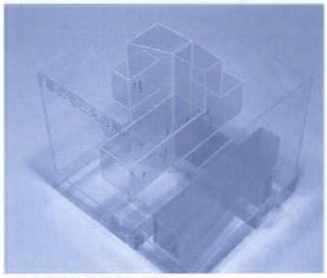
①［スペースブロック上新庄］1辺2400mm（内法2180）の立方体3～6ブロックの組み合わせを1住戸とした、ワンルーム形式の集合住宅。うち、0.5～1ブロックが水廻りスペース。上記の住戸22戸の集合体が〈スペースブロック上新庄〉。（赤松）



②［九龍城砦モデル］香港に存在し、今は取り壊された九龍城砦は世界で最も高密度な建築群だった。これを高密度居住空間のモデルとして、BSBを用いて空隙率の高いポーラスなモデルに変換して設計し直すというスタディを東京理科大学の研究室で継続している。（小嶋）



ポーラス 多孔質。ひだの多い表面。〈広島市西消防署コンペ案〉で外部と内部の関係を考える中ではっきり現れてきた方法で、温暖な地域では建築ははめ殺しガラスのカーテンウォールなどで外界から隔絶されているよりは、外皮の部分や建築のヴォリューム全体としても、外と中とで空気や光にとどまらず活動の気配まで含めた交換があった方がいいという視点。〈打瀬小学校〉や〈出雲市地域交流センター〉で庭をはさんでつながる平面や、〈出雲〉のジャロジー窓もそうした考え方の萌芽。〈吉備高原小学校〉の中庭を多くとって将来樹木で覆われるような空間で初めて実現した。〈麻布大学キャンパス計画コンペ案〉も同じ思考に基づいている。（小嶋）



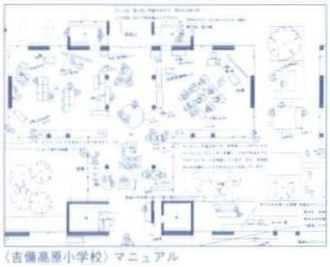
＜広島市西消防署コンペ案＞

マウンド ［出雲市地域交流センター］〈打瀬小学校〉までの建築が壁の多い不透明な構成の隙間に視線の軸を挿入していく方法をとっていたのに対して、〈出雲〉で用いた起伏のある床面は、ガラス貼りの透明な建築の視線を制御し、人の活動の気配だけを伝達する仕掛けである。あまり多くの人が入っていないときに寂しくならないために提案。同時に外部と内部を連続させる効果。東西方向は放物線、南北方向はトロコイドカーブでモデリングし、すべて三角形に分割して座標化している。（小嶋）



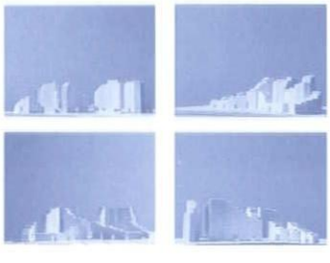
マニュアル 新しい提案の多く入った建築の設計の意図や意味を伝えるのに使用。建築の竣工後に「使い方マニュアル」をつくったのは〈打瀬小学校〉が最初だった。各所に小学校としては前例のない設計を行っていた。新設校だったから、設計過程で教育委員会などと充分な打ち合わせは行っているが、もし赴任してきた先生たちがこの建築に拒否反応を起こしてしまったら、私たちの設計した空間は、アクティビティを喚起するものどころかたいへんな制約に感じられるだろうというのがマニュアルをつくった直接の動機だった。幸い〈打瀬〉では、空間を積極的に用いてくれる先生方の登場のおかげで心配は杞憂で済んだ。それでもマニュアルを用いて説明会を実施した。建築が引き継がれていくときにも役に立っている。それ以後、〈スペースブロック上新庄〉ではアパートに入居する

人たちのためにマニュアルをつくった。〈吉備高原小学校〉でも同じようなものを作成し、約1ヶ月間学校の立ち上げにも協力した。(小嶋)

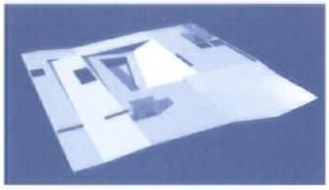


〈吉備高原小学校〉マニュアル

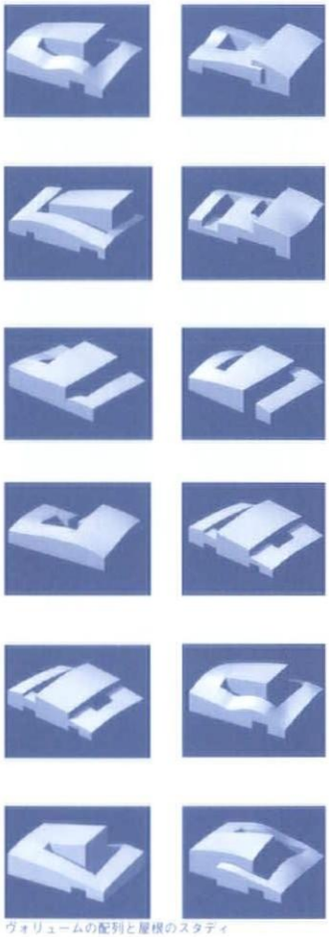
モデリング 最初は〈HOUSE TM〉や〈ART HUT SD〉といった小さいワンヴォリュームに近いプロジェクトで試み始めた。コンピュータを3Dにはじめて使い始めたのがこの頃だった。未完の〈K PROJECT〉は1500戸のハウジングだったが、タワー型超高層を使わないで高容積に日照・日影に配慮しながら住戸を配置していくシミュレーションは、日影ソフトでのモデリングによってしか生成しようがないかたちをつくり出した。このプロジェクトは、私たちが設計したものの中で最も純粋にパラメータだけを頼りにしたものだろう。〈鴻巣市文化センター〉や〈プロジェクトTS〉はこうした方向が展開した設計だ。いろいろなかたちを検討して、かたちの生成のプロセスや決定の方法を明快にしている。計画的な課題をかたちによって解決できないかを考える作業でもある。(小嶋)　建築の形態をつくり出す上では、その形態を導き出す過程、決め込んでいくためのロジックが重要だと考えている。特異な形態であっても、恣意的・直感的な過程ではなく、あくまで説明可能な、他者がたどることが出来るようなプロセスを経て決定していきたい。設定したロジックの下で、形態が必然的に発生するといってもよいかも知れない。この形態を導き出す過程とそこで行われる操作をモデリングと我々は呼んでいる。(小泉)　①[K PROJECT] 住棟への日照時間をパラメーターとした建築ヴォリュームの配置と変形を行った。



②[ART HUT SD] スタディの時は単純な直方体のスタイロフォームのヴォリュームに順番にいくつかの単純な操作を加えて変形させた。　③[プロジェクトTS] 砂丘の中につくられた、ひとつの大きな床(広場)にいくつかの操作を加えている。入り口のための切断。眺めに応じた切れ込み。押し上げ、下げ。めくり。床を歩く人の視界の変化と周辺の砂のレベルをパラメータとして屋根面のレベルを決めている。但し、細かい直線のプレストレスジョイスト梁を連続させることで起伏をつくるため、変形のさせ方には幾何学的な原則がある。(堀場)



④[鴻巣市文化センター] ヴォリュームに対するスタンスは、〈大阪国際平和センター〉に代表される部分の集積といった考え方とは異なり、ヴォリューム全体をひとつの形態として扱おうというもの



ヴォリュームの配列と屋根のスタディ

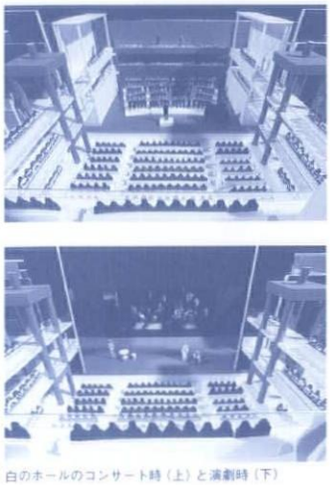
である。だから、一部の修正が、必ず全体へと影響を及ぼすことになる。この部分と全体とのダイレクトかつダイナミックな関係が、新たな形態の可能性を開くのではないかと考えている。(小泉)

光のモデリング 室内の空間のヴォリュームを満たす光の状態に焦点を当ててヴォリュームそのものをモデリングする。　①[HOUSE TM]　②[ART HUT SD](小嶋)



〈HOUSE TM〉光の状態のスタディ

櫓客席 [出雲市地域交流センター] ホールの客席。櫓構造と呼ぶ鉄骨組柱と同じモチーフで小規模ホールに立体的に客席を配置し、市民ワークショップで要望された増加分の人数(100人)を吸収。同時にステージ袖舞台上にもM2階、2階に客席を持つ可動部分を設置し、演劇と音楽では全く異なるレイアウトを実現。櫓客席部分の椅子は一列で通常のホール椅子のように固定せず数種類の椅子に自由にかけられるようにすることで、視線の見切れを回避し同時に市民利用主体のホールのくつろいだ日常的な空間を実現する。ここで行った計画は小規模だから法規的にも実現可能なアイデア。(小嶋)



白のホールのコンサート時(上)と演劇時(下)

ワークショップ 〈打瀬小学校〉でマニュアルをつくったのは、ユーザーと直接対話できない公共建築のつくられ方からだった。〈出雲市地域交流センター〉ではプロポーザルのヒアリングでワークショップを提案した。ヒアリングそのものも市民やテレビカメラが入っている公開の場で行われた。設計期間中に何度もワークショップを行った。市民ワークショップを続ける中で新しいホールのかたちが発見できた。今後、工事期間中には使い方のワークショップを継続する予定だ。他のプロジェクトでも可能な限りこうしたスタンスをとっている。公共建築で、市民が知らない間に立ち上がった建物が「ハコモノ」と呼ばれるのを避ける手だて。(小嶋)　①[博多小学校] 既存4校の統合小学校だから地元の人々が全面に出ている。教育委員会の新たな教育環境のモデル校にしようと積極的である。開校準備会議には常に40人を越える代表者が集まり、在宅ボストイット会議には児童が参加し、東京と市役所と学校を結んでのテレビワークショップでも活発な意見交換が行われている。(工藤)　②[プロジェクトTS] 建設プロセスを公開し、開館後の運営を担うような人たちとの交流にもつながる。〈プロジェクトTS〉では砂丘での自然観察や体験の基地となる砂丘体験ベースと呼ぶ部分の計画を中心に、すでに5回行っている。建設予定地からの眺望の確認や砂丘を歩く体験をしたり、建物の位置や必要な部屋の種類や設備、またどのような活動を行うのかなど、ハード、ソフト両面のワークショップを行った。今後も建物の原寸確認や仕上げの部分の共同制作などを考えている。(堀場)

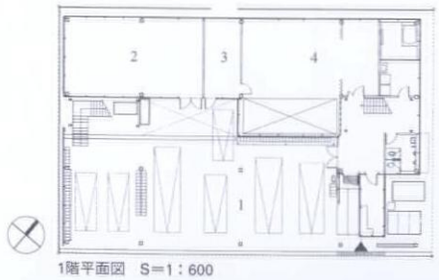


大阪市水上消防署仮設庁舎

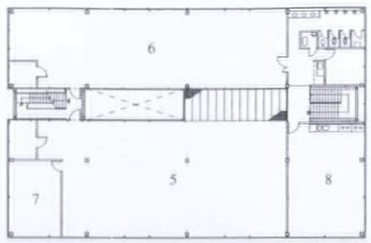
大阪府大阪市　1996年
シーラカンス

Suijo Fire Station of Osaka City Temporary Building (Marine)

Osaka city, Osaka, 1996
Coelacanth Architects



1階平面図　S=1：600



2階平面図

1：車庫
2：倉庫
3：救急待機室
4：講堂
5：事務室
6：待機室
7：所長室
8：食堂



老朽化した庁舎建て替えのために一時的に利用する建物。仮設*でありながら建物の性格上、耐震性の高いものとすること、今後市内各地で行われる建て替えにも再利用するといった設計条件に対して材料、構法的に回答したモデリング*とは反対の即物的な建築。

壊しやすさを考えて基本的に部材をドライジョイントとし、フレーム、外壁、屋根、床、間仕切壁、設備機器といった部位ごとに部品化したり、部材に検討を加えた。ユニット化は避け、再建時の部材補給を考えて一般流通部品を使用して在来工法の枠内で計画した。

建物の軽量化、部品点数の削減、運搬しやすい形状、寸法の単純化、統一を考えた。フレームは、2階足下をピンとしたラーメン構造として、再利用時の平面形の自由度を高め、ラチス梁を採用することで設備配管を容易にすると同時に空間に広がりをつくり建物の高さを押さえた。このプロジェクトを通じて建築においての廃棄物削減、資源の有効利用といった環境に対する観点を見直すことになった。
(堀場弘)

The objective in designing this building, which now serves as the temporary office during the rebuilding of the fire station, was not to create a certain esthetic shape, but to offer material reusability and high earthquake-resistance through specifically devised materials and construction methods.

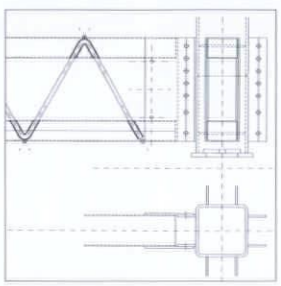
The building was made by dry-joining discrete parts of framing, walls, roofs, floors and utilities for later disassembly and reuse. To enable the recycling of parts in other temporary offices, parts are commercially available, and the construction uses only conventional techniques. Light weight structure, reduced number of parts, shapes suitable for transportation, and dimensional standardization are emphasized.

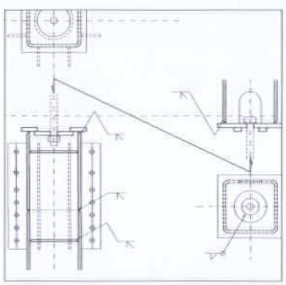
The moment-resisting frame with pin joints below the second floor provides greater freedom in floor planning, and the lattice beams add extra overhead space, while keeping the overall building low. The project offered a wonderful opportunity to reconsider waste control, effective use of resources and other environmental aspects of architecture.
(Hiroshi Horiba)









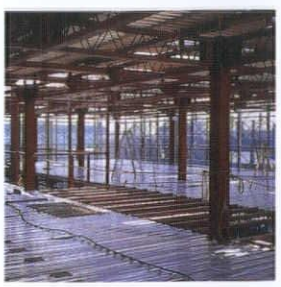


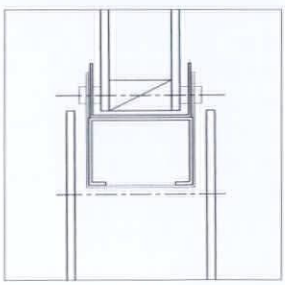




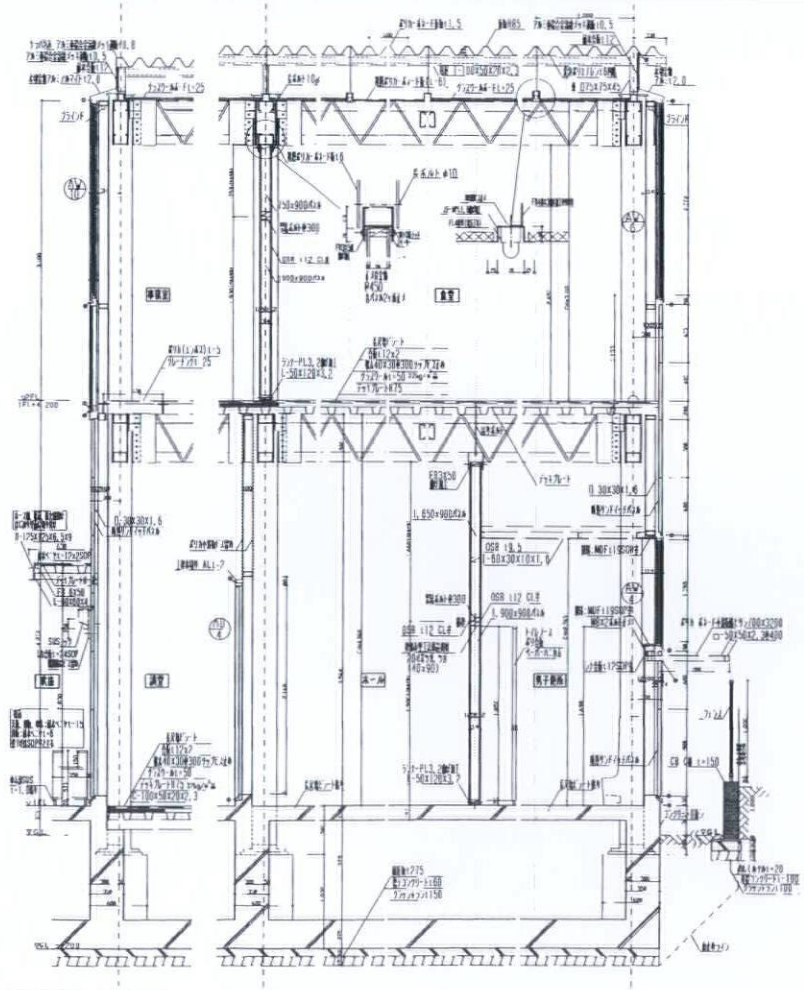












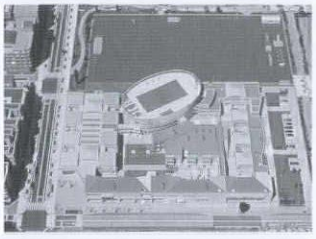
断面詳細図　S＝1：75

千葉市立打瀬小学校

千葉県千葉市　1995年
シーラカンス

Utase Elementary School

Chiba city, Chiba, 1995
Coelacanth Architects

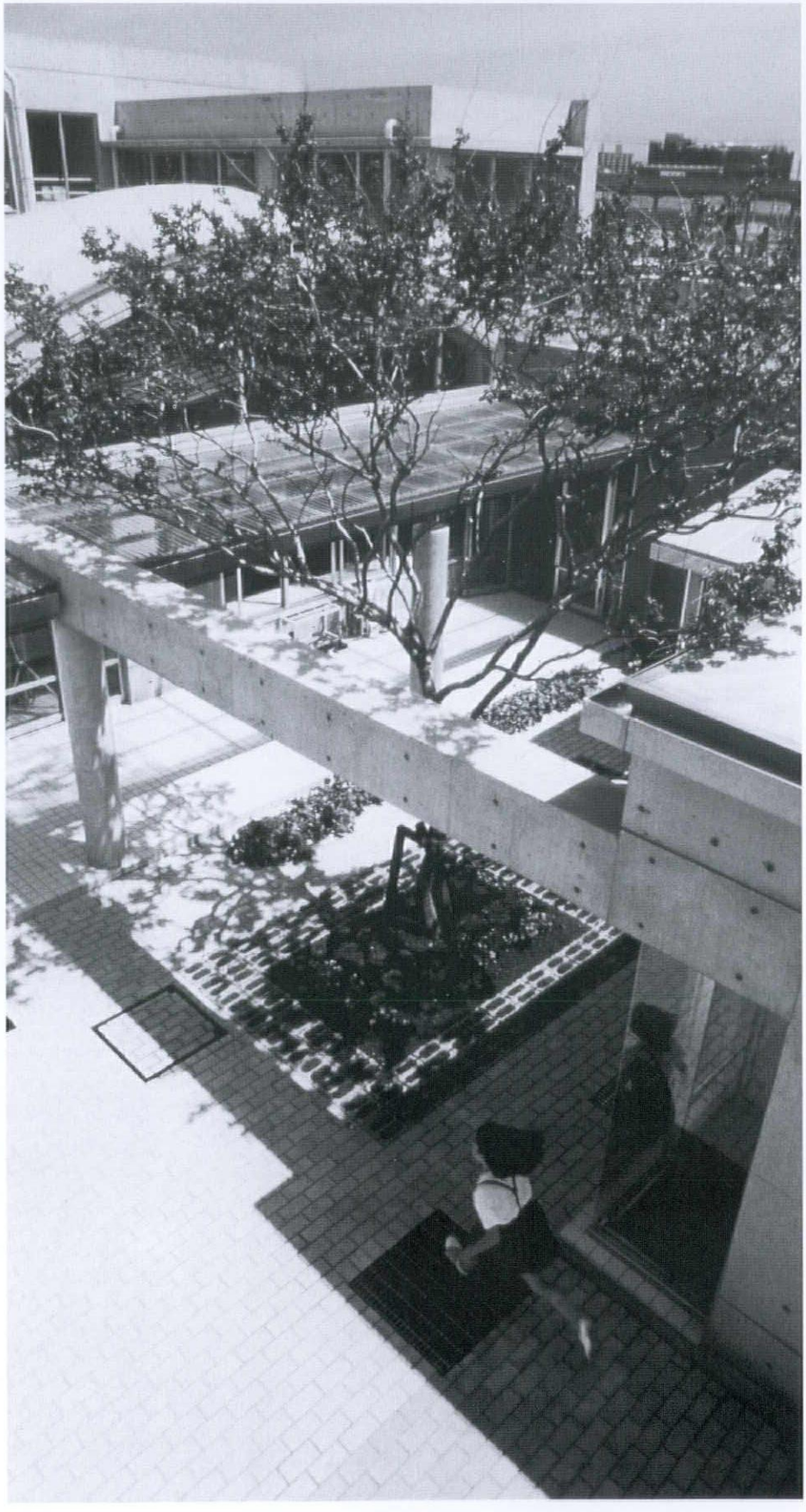


東京近郊の新しい街に建つこの建築で、私たちは学校そのものだけではなく、その空間でくり広げられる学習、アクティビティ* が、どう街に働きかけ、また街を取り込んで行くかを考えた。

空間をどこまで「内部と外部」あるいは「部屋と廊下」ではない流動的なものにできるか。また、「部屋」として切断されない領域をどのように校舎敷地に配置するか。「クラスセット*」を均等に配置し、コーナーによって、子供の居場所を多くつくり、行き止まりのない経路* をめぐらせる。「内部」と「外部」を等価に扱う。そこから新しい「アクティビティ」を創り出そうと試みた。

「クラスセット」は教室廻りの空間を豊かにし、校舎敷地を横切る「パス」は近所の人が出入りしやすい場所になっている。運営では「ノーチャイム」を実施し、子供たちが腕時計で時間を自主管理する。時間が流動的であることの自然さは、「授業」ではない自発的な「学習」を視覚化している。

開校後3年が経過し、ティーム・ティーチング* は理想的に行われている。内外にセットされた家具* やコーナーが行為のきっかけとなり、設計時に考えたパーソナルなアクティビティのシミュレーション* が、子どもたちの活動となってあらわれている。
（工藤和美・小嶋一浩）



When we designed this school for a newly-developed town near Tokyo, we aimed to design the relationship between the school (or activities therein) and the community.

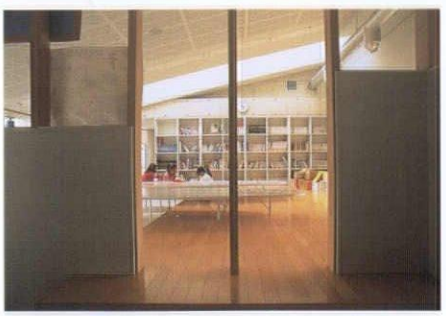
We did not separate spaces to "indoor" and "outdoor," or "rooms" and "corridors," but made vaguely defined domains. Such domains, named "class sets," were placed evenly throughout the site, along with little corners for children to "hang around" in, which were all connected with routes without any dead ends. Outdoor and indoor spaces were treated as being equivalent. All of this was to induce teachers' and students' spontaneity.

The "class sets" resulted in a interesting peripheral space. The paths across the premises opened the school to local residents. The operation of the school was also designed to induce spontaneity: Unlike in other Japanese schools, no chime is rung to encourage students to manage their own time.

Three years since then, the then-proposed "team teaching" is being carried out successfully, and pieces of furniture and little corners are triggering children's activities just as were simulated during the design phase.
(Kazumi Kudo, Kazuhiro Kojima)



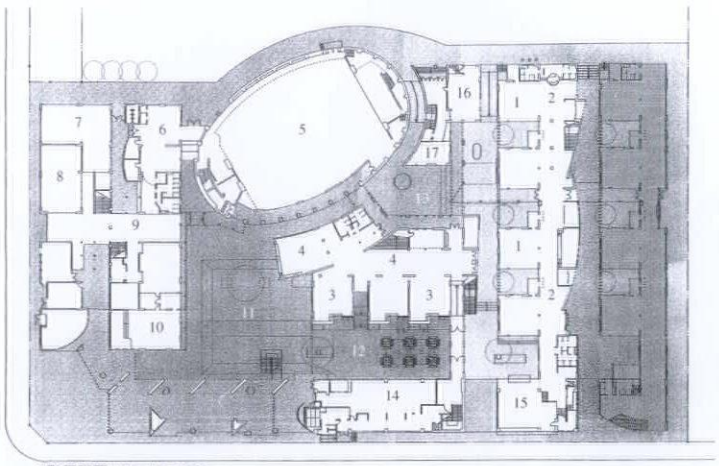




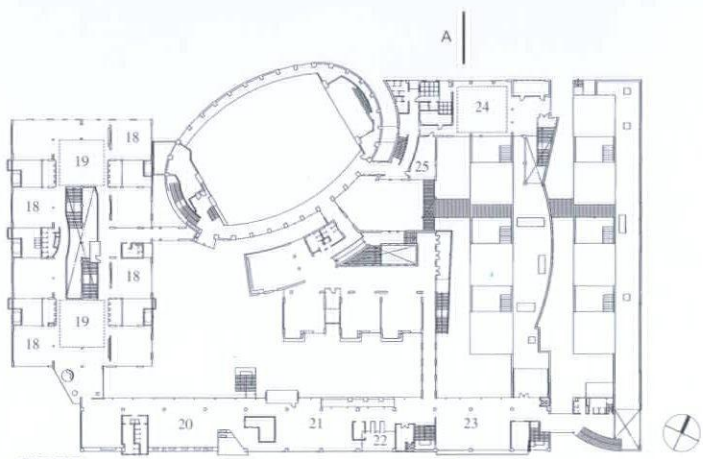








1階平面図　S=1：1500



2階平面図

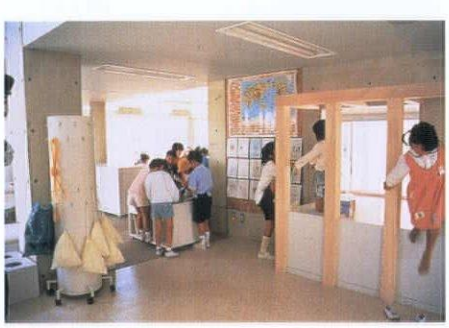
1：低学年クラスルーム
2：低学年ワークスペース
3：中学年クラスルーム
4：中学年ワークスペース
5：アリーナ
6：交流広場
7：家庭科室
8：コンピューター室
9：パサージュ
10：音楽室
11：冬の庭
12：ランチの庭
13：夏の庭
14：調理室
15：工作室
16：保健室
17：事務室
18：高学年クラスルーム
19：高学年ワークスペース
20：理科室
21：多目的室
22：図書コーナー
23：図画室
24：職員室
25：校長室

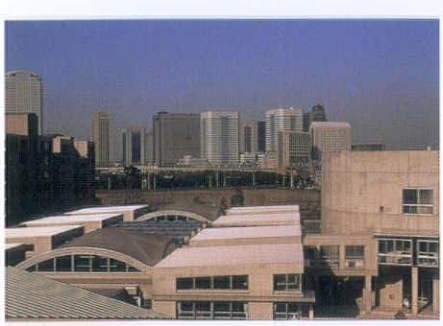


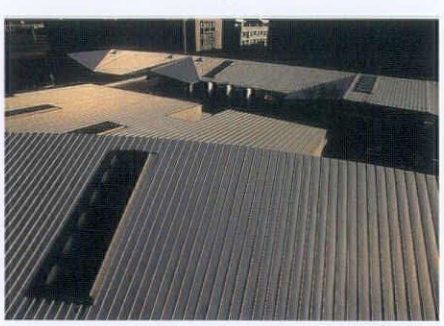
A-A' 東側断面図

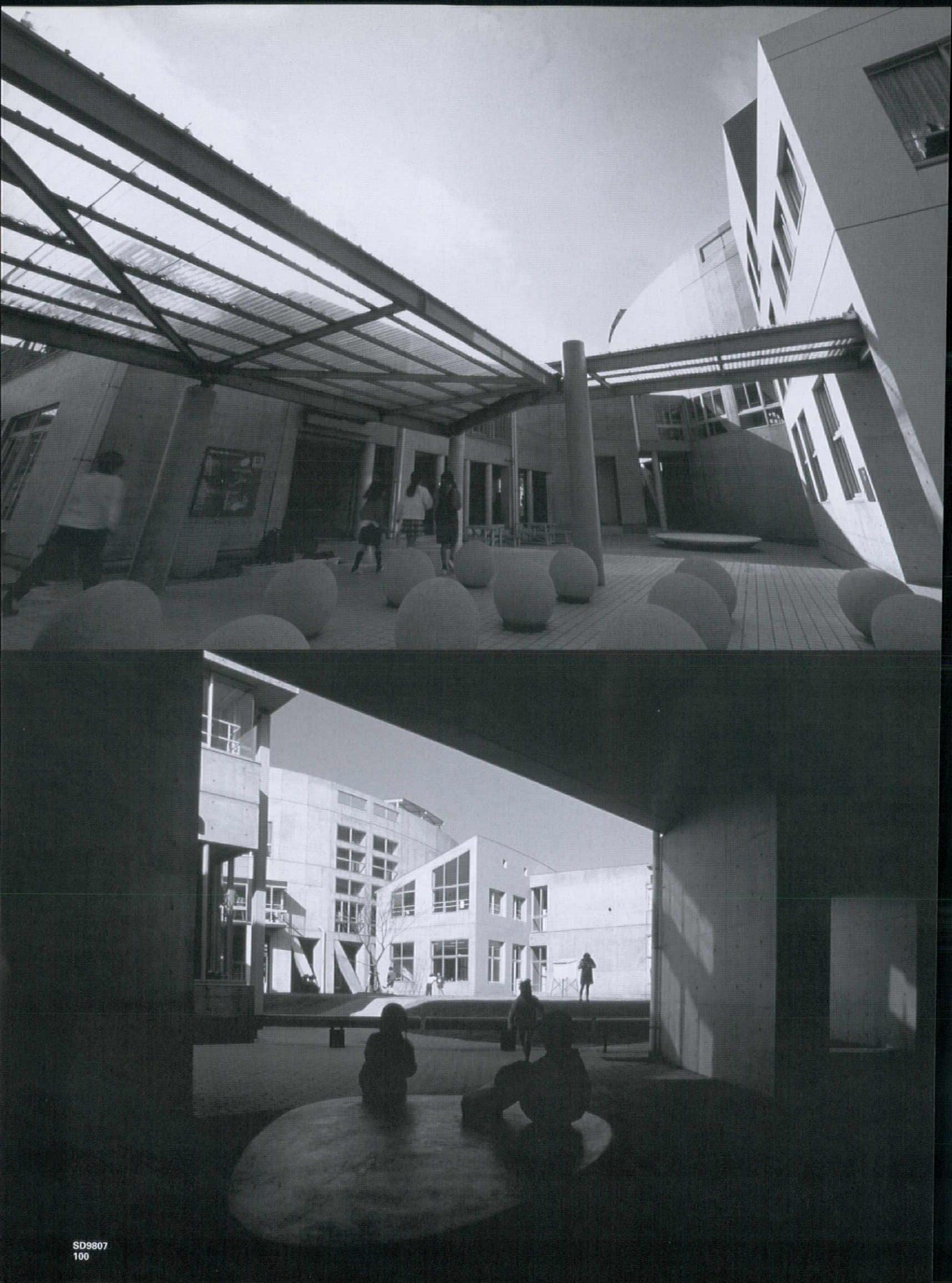


A-A' 西側断面図







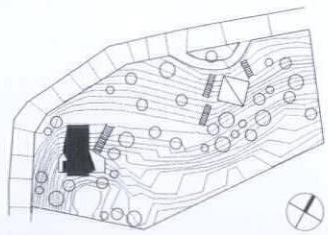


ART HUT SD

長野県小県郡　1994年
シーラカンス

Art Hut SD

Chiisagata-gun, Nagano, 1994
Coelacanth Architects



配置図　S=1：2000



菅平高原の敷地内には既存の別荘があり、写真家と美術館オーナーである夫妻が長期にわたって利用してきた。別荘が試めに、限り狭になったので、樹木が生い茂る急斜面に倉庫と作業場を兼ねるこの建物が計画された。

倉庫・作業場としての機能を満たすために、限られた予算の中でいかに大きなヴォリュームを獲得できるかが課題となった。周囲や既存別荘からそのヴォリュームがどう見えるかということへの配慮が重要となり、高低差の大きい敷地内での様々な位置からの建築形態の現われ方をスタディした。

まず単純な柱梁の門型フレームでできた直方体のヴォリュームを斜面に置く。積雪に対応して切妻屋根をかけ、ヴォリュームを斜面に沿って屈折させる。切妻屋根をずらして庇をつくる、というような操作を重ねた。

そして、建物の性格上外界の影響を最小限とすることが必要とされ、ヴォリュームを折り曲げたことで生じた斜めの壁面の凹凸下部から壁に沿ってわずかな自然光を導きいれ、空間全体を柔らかい光で満たしている。いうなれば斜面におかれた光のヴォリューム*をつつむシェルター*である。（小泉雅生）

This building was built in the Sugadaira Highlands for a husband and wife as a warehouse and studio. The couple, who are a photographer and an art museum owner, had a cottage on the same site, but it had become too crowded. The main design task was to create sufficient space within a limited budget, while considering the building's appearance from the existing cottage and the neighborhood.

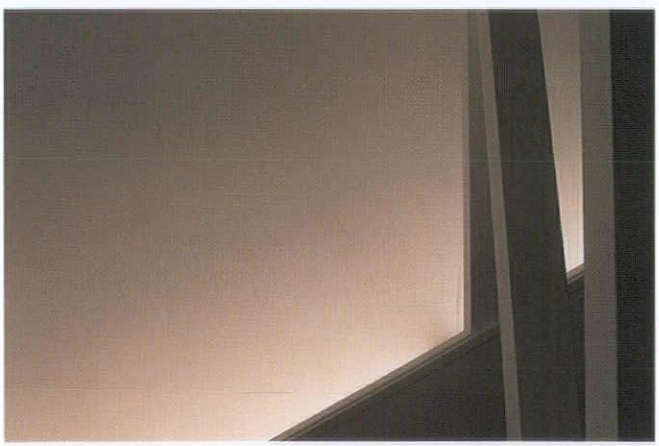
We began the design process with a rectangular box with moment-resisting frames, and modified it by adding a gable roof for snow, bending the box to fit the slope of the land, and shifting the roof to produce eaves. Considering the building's intended use, just the right amount of light is taken in through the openings at the bottom of the creased wall where the building is bent to fill the space with soft light.

We believe that this design approach allowed us to give the building the image of a shelter which, while sitting lightly on the slope, encapsulates a "volume of light."
(Masao Koizumi)

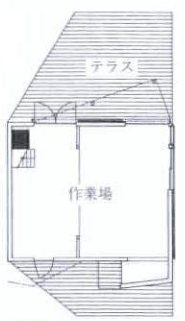




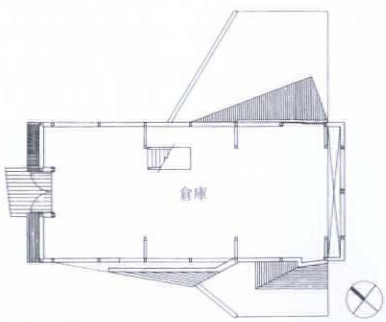




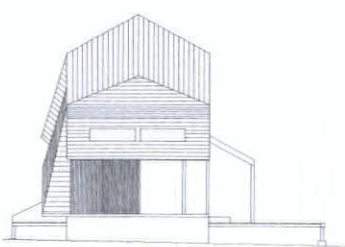




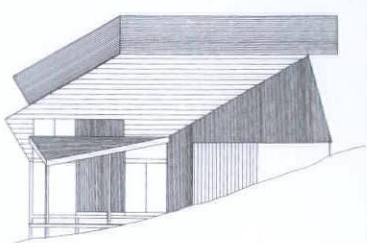
1階平面図　S＝1：300



2階平面図



南立面図　S＝1：300



東側立面図

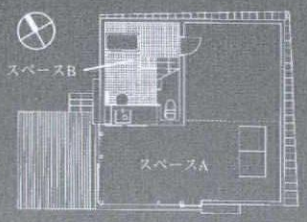


那須の別荘

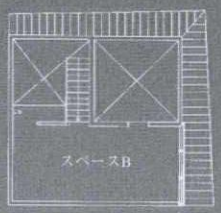
栃木県那須郡　1996年
シーラカンス

Villa in Nasu

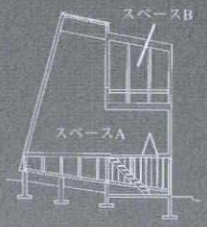
Nasu-gun, Tochigi, 1996
Coelacanth Architects



1階平面図　S=1：300

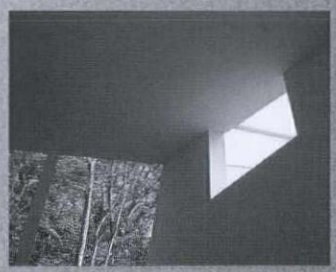


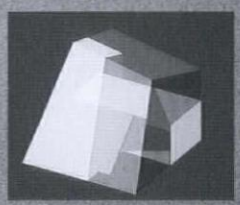
2階平面図



断面図







ふたつのヴォリュームの組合せによるこの小さなキューブ* は、家族が週末を過ごすための森のスペース* である。標高1000m辺りに広がる高木の森の中に、斜面に馴染ませるように微妙な傾きを持ちつつ、キューブそのものの置き方を注意深く検討した建築である。都会での溢れんばかりの情報と、豊かな物に満ちた生活から抜けだし、ぼんやりする時間を大切にするためのスペースを、どう実現するかがテーマとなった。

都市の生活をアクティブとするなら、森での過ごし方はまさにイナクティブ* な生活である。内部からは、自然を強く感じるように、あえて開口を絞り込んでいる。ふたつのヴォリュームをA・Bとするならば、Aは高さを獲得した空間であり天井全面のトップライトからの光が、閉じた空間に光の移ろいを視覚化させている。Bは深さを持つ空間で、底には浴室としての機能を満たしつつも、ひとつのヴォリュームとして空間がつながっている。このA・Bの立体的なL型の空間ヴォリュームを行き来することによって、空間がネガとポジ* のように反転する。

さらに、A・Bをつなぐ小さな開口によってその関係が、確認できるようになっている。外観は閉じた状態を意識しつつ、わずかな差異である目地の違いによって、内部のふたつのボリュームを感じさせるように、可能な限り要素を減らしている。
(工藤和美)

This small cube in the Nasu Highlands is a weekend house for a family. The design objective for this house was to create a space where time can slip by, away from the busy city life filled with too many distractions.

The house is inclined so that it fits to the slope of the land, and has purposely few windows so the views of the woods are accentuated. The building consists of two volumes. One of them is a "tall" space with its top entirely made into a skylight, the light through which tells the passing of time to a person inside. The other volume forms a "deep" space, which is continuous although there is a bathroom at its lowest point. Together, the two volumes form a three dimensional L-shaped space. As one moves from one volume to the other through a small door, one's perception of the two volumes is reversed as in a photographic positive and negative.

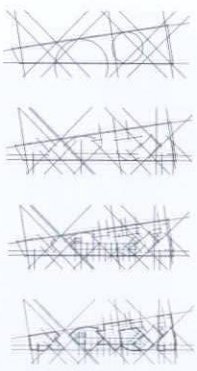
The building's outer surface is designed with as few elements as possible to create a contained look, and to allow the difference between the joint patterns of the two volumes to be seen. (Kazumi Kudo)

氷室アパートメント

大阪府枚方市　1987年
小嶋一浩⊂シーラカンス

Himuro Apartment

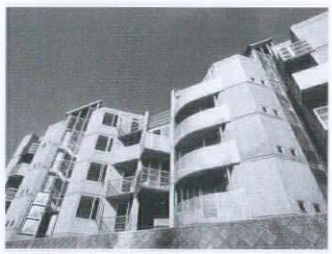
Hirakata city, Osaka, 1987
Kazuhiro Kojima ⊂ Coelacanth Architects



芯線図。複雑な平面を幾何学的に生成する



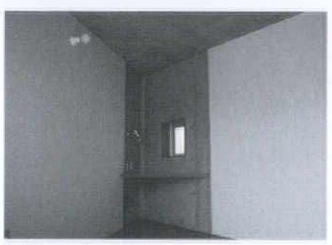
18戸からなるアパート。廻り階段を最小にして踊り場毎にアクセスするため、住戸は4分の1フロアずつスキップする。玄関から室内が見渡せないための折れ曲がり



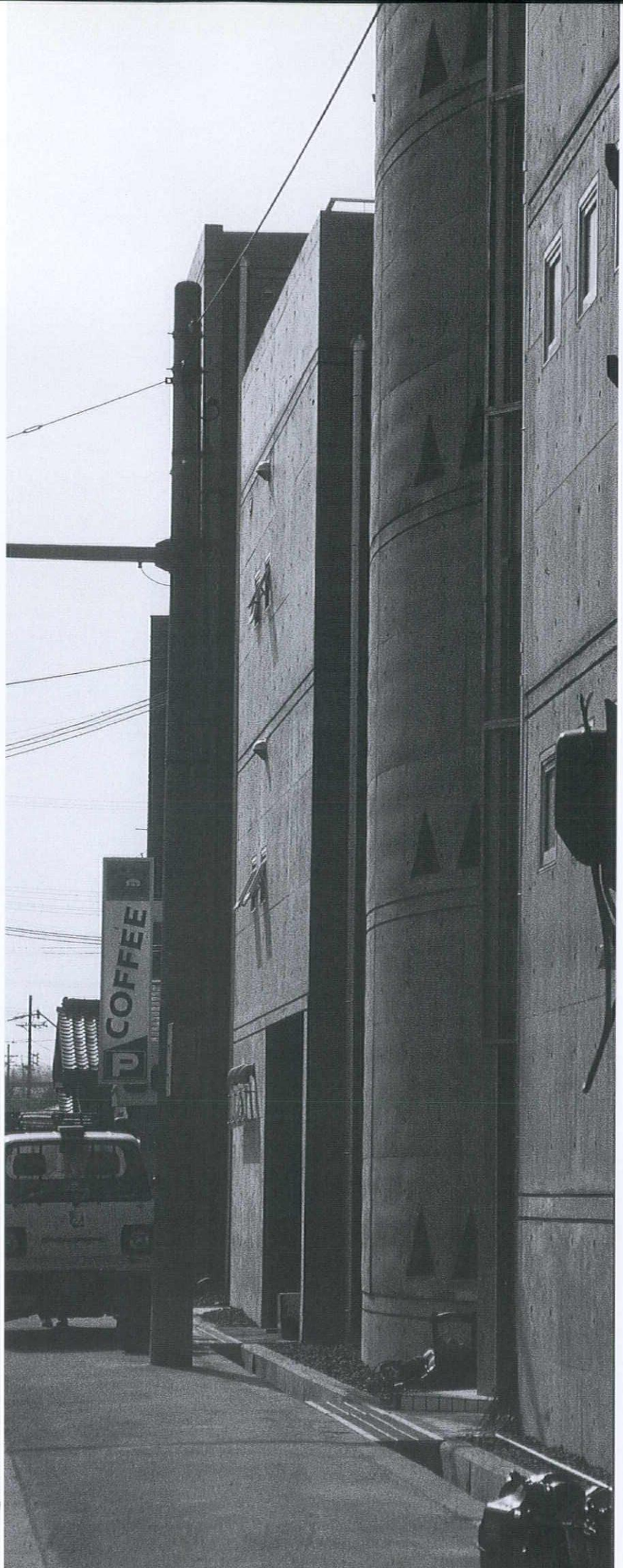
河川側見上げ



室内。最小限の要素によるキッチン



部屋のコーナーの造り付けテーブル



電気様のように現れる壁の連なり。道路側は閉じた表情

BUOYANT（伊豆の別荘）

静岡県伊東市　1987年
小泉雅生⊂シーラカンス

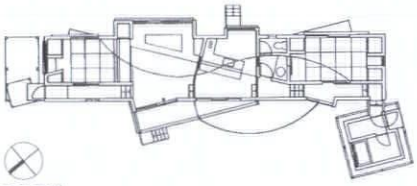
Buoyant-Villa in Izu

Ito city, Shizuoka, 1987
Masao Koizumi ⊂ Coelacanth Architects

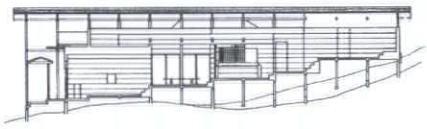




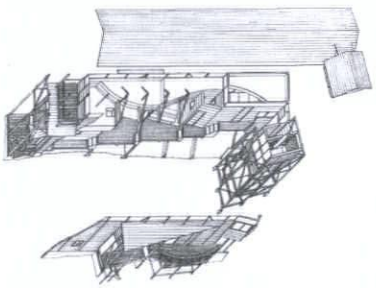
浮いた屋根



1階平面図



断面図



アクソメ図



微地形に対応した下部の壁



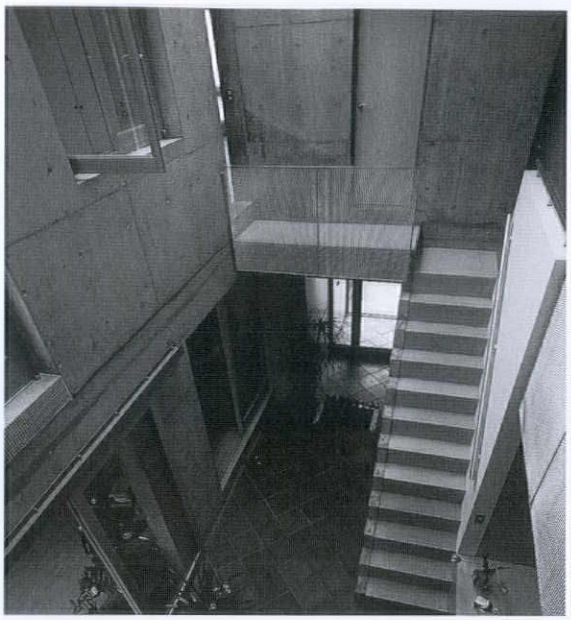
斜面に沿って、段床が上がっていく週末住宅。最上段の樹間のレベルに浴室がある

永福の住宅

東京都杉並区　1989年
堀場 弘⊂シーラカンス

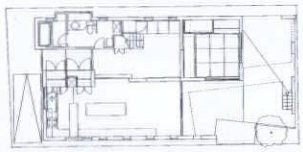
House in Eifuku

Suginami-ku, Tokyo 1989
Hiroshi Horiba ⊂ Coelacanth Architects





敷地の奥行を感じる室内から連続した外部のスノコテラス



1階平面図。土間的スペースを中心に各室が配される

外部とつながったトップライトのある土間的スペース

下鴨の住宅

京都府京都市　1987年
シーラカンス

House in Shimogamo

Kyoto city, Kyoto, 1987
Coelacanth Architects



変形敷地そのままの平面



中央スリット部分断面図



下鴨神社に接する敷地は路地の奥で周囲に開口がとれないため、３つの異なるスカイライトで空間を獲得

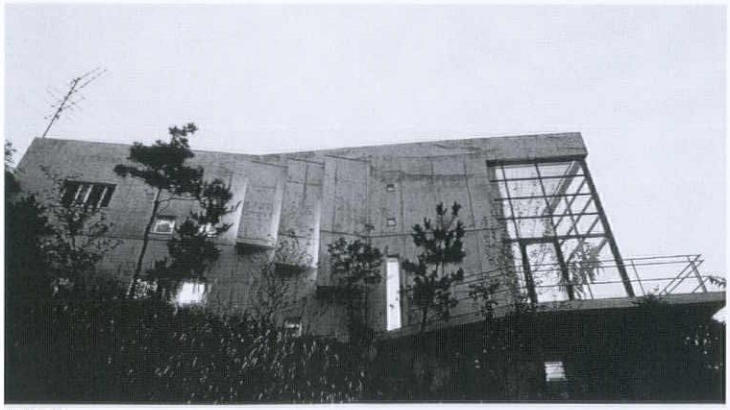
鎌倉の住宅

神奈川県鎌倉市　1987年
伊藤恭行⊂シーラカンス

House in Kamakura

Kamakura city, Kanagawa, 1987
Yasuyuki Ito ⊂ Coelacanth Architects

シーラカンス初期のRC造住宅、北向きの崖地の上に建つ、スクエアな平面の中にコートを設け、北側の大きな開口部を通して、鎌倉の山並が望めるように計画されている



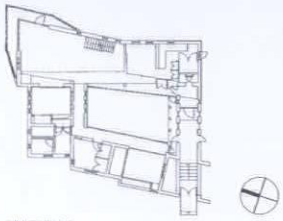
東側全景



2階廊下から吹き抜け居間を見る



北側テラスから居間を見る



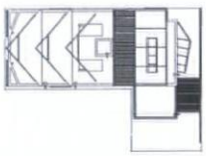
1階平面図

北山コンドミニアム

京都府京都市　1987年
シーラカンス

Kitayama Condominium

Kyoto city, Kyoto, 1987
Coelacanth Architects



屋根伏図



立面図



1階に2テナントと2～5階に11住戸が入る。最上階のハイサイドライト見上げ



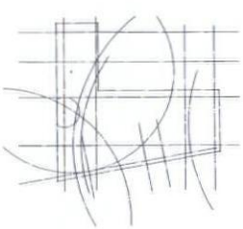
大きな三角の屋根がサインとなっている

GIMMICK（計画案）

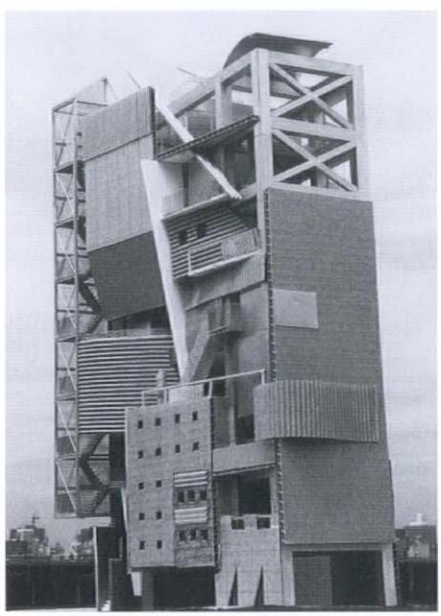
東京都新宿区　1987年
シーラカンス

Gimmick

Shinjyuku-ku, Tokyo, 1987
Coelacanth Architects



屋根伏図



通り越しに見るファサード。
都市の断片が映し出されたような表情をもつ



さまざまなファサード操作

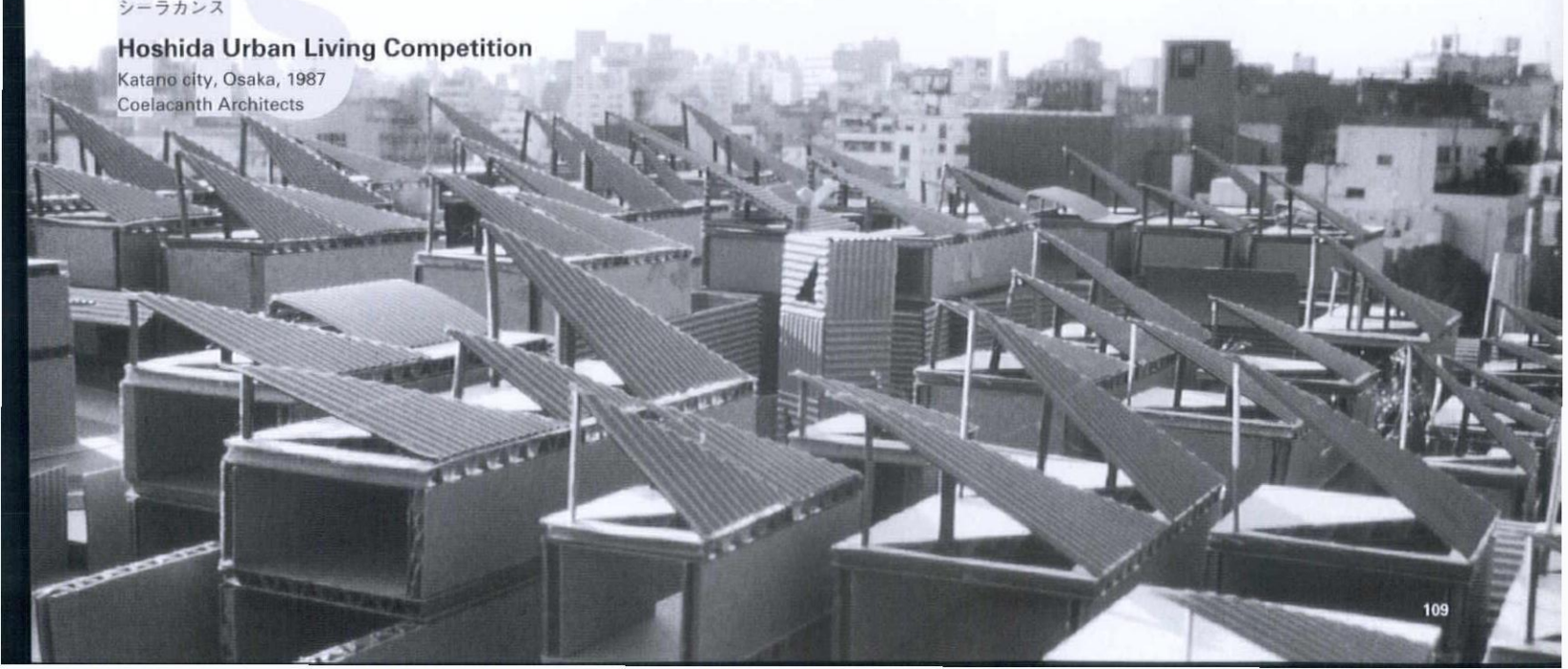
星田アーバンリビングコンペ案

大阪府交野市　1987年
シーラカンス

Hoshida Urban Living Competition

Katano city, Osaka, 1987
Coelacanth Architects

シーラカンスではじめて提出したコンペ案。個人住宅の集合化というテーマに方向性を持つ屋根の繰り返しで風景を創り出すことで応答した



CREVASSE (井草プロジェクト)

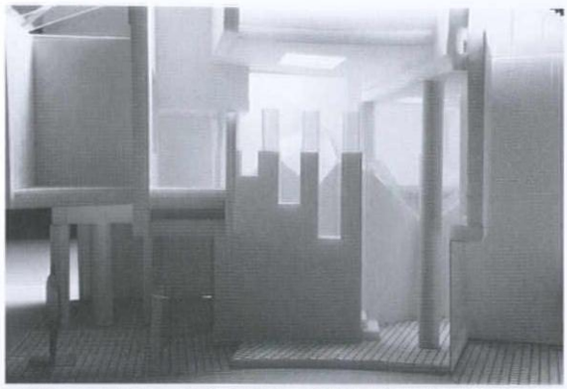
東京都杉並区　1988年
シーラカンス

Crevasse (Igusa Project)

Suginami-ku, Tokyo, 1988
Coelacanth Architects



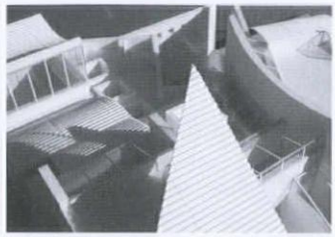
スカイライトとリフレクターにもなる
インサイド・トップライト



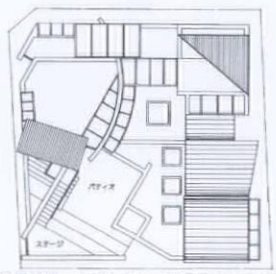
断面模型。方々から入った光がリフレクターで拡散される。時間を光で記述する。単純化への無関心



断面図



内部の光の状態だけをスタディして生まれた複雑な屋根



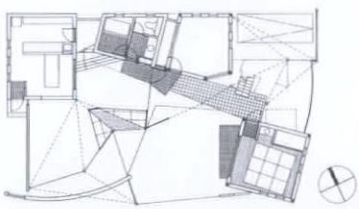
屋根伏図。おびただしい数のスカイライト

ハウスオブカップコンペ案

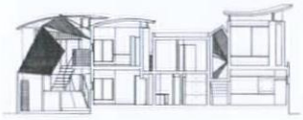
東京都杉並区　1988年
シーラカンス

House of Cup Competition

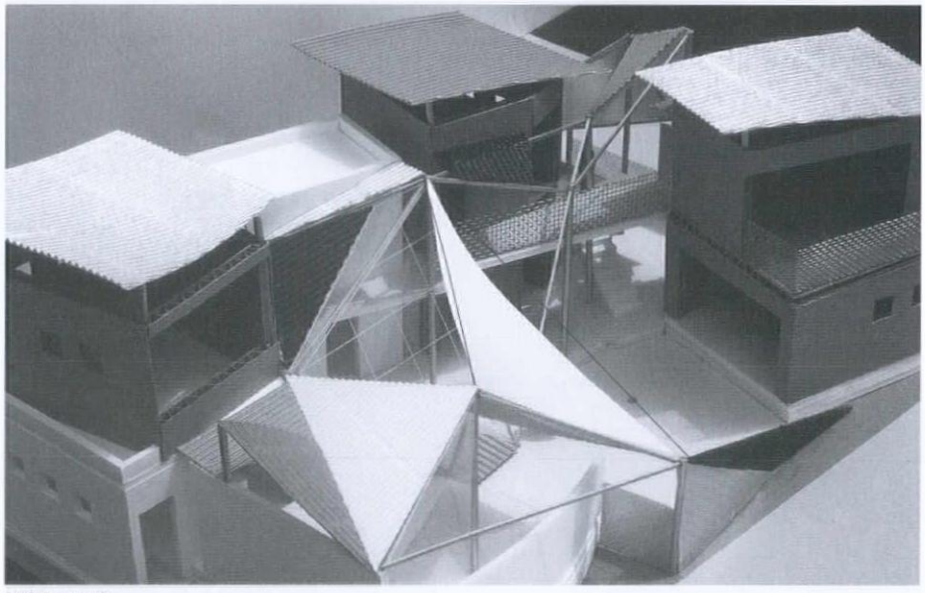
Suginami-ku, Tokyo, 1988
Coelacanth Architects



1階平面図



立面図



初期のコンペ案

インスタントシフト (東高現代美術館展覧会)

東京都港区　1990年
シーラカンス

Instant Shift (Toko Contemporary Museum)

Minato-ku, Tokyo, 1990
Coelacanth Architects



実際に5つのストリートから採集した東京路上のアクティビティを透明な板上に模型でプロットして重ね合わせてみる。ある通りにいながら別の場所に意識がインスタントにシフトしているということが頻繁に発生する現代都市の生活のリプレゼンテーション。製作した人の模型は約2万人分

西麻布WHOOPEE！

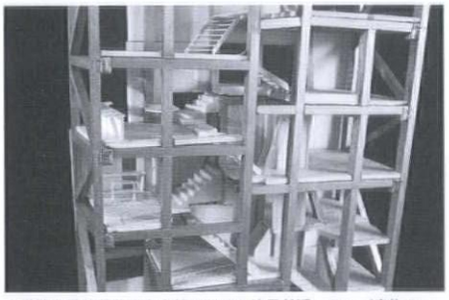
東京都港区　1991年
シーラカンス

Nishiazabu Whoopee!

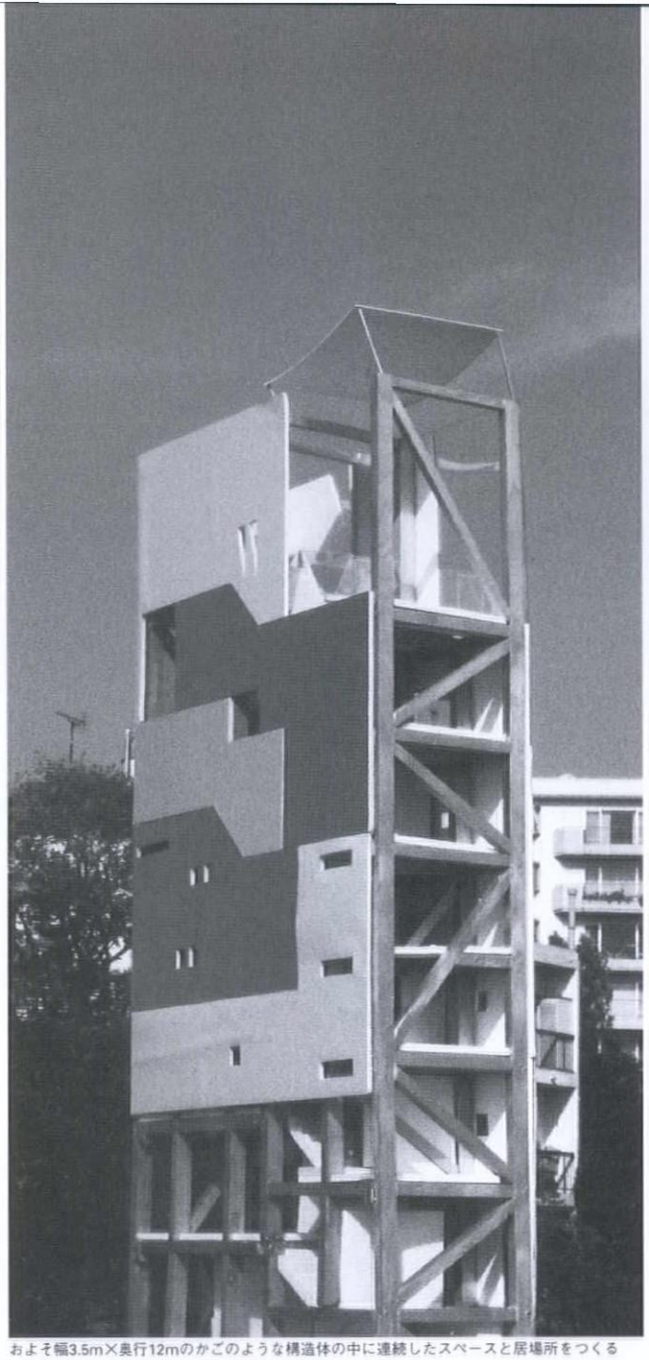
Minato-ku, Tokyo, 1991
Coelacanth Architects



断面図。スキップフロアでつながる計画



上層階の居住フロアと店舗フロアの境目付近。サル（家族の一員）のための特別なルートも用意している



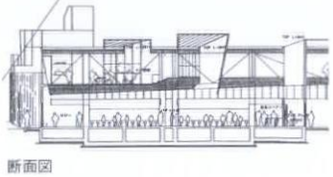
およそ幅3.5m×奥行12mのかごのような構造体の中に連続したスペースと居場所をつくる

パチンコパーラーコンペ案

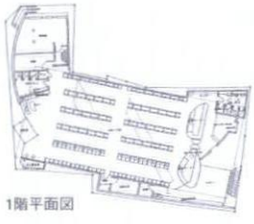
茨城県日立市　1991年
シーラカンス

Competition for Design of Pachinko Parlor

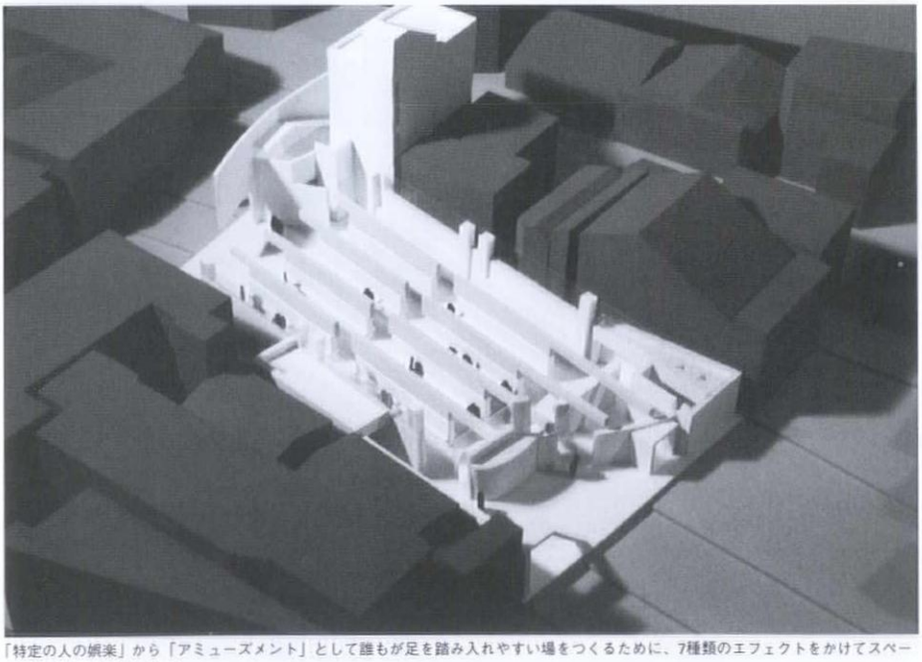
Hitachi City, Ibaragi, 1991
Coelacanth Architects



断面図



1階平面図



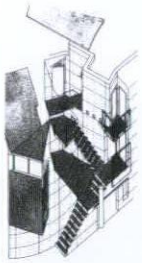
「特定の人の娯楽」から「アミューズメント」として誰もが足を踏み入れやすい場をつくるために、7種類のエフェクトをかけてスペースの状態の変化を提案した

江古田アパートメント

東京都練馬区　1989年
シーラカンス

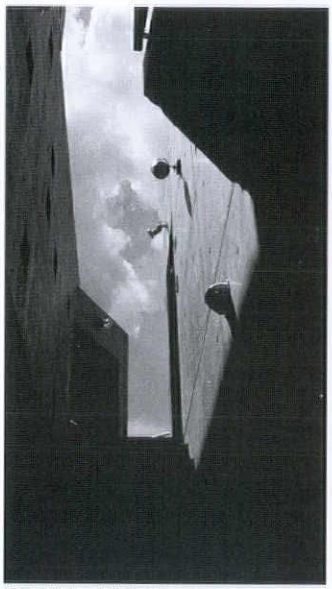
Ekoda Apartment

Nerima-ku, Tokyo, 1989
Coelacanth Architects





道からつながる路地のような各住戸へのアプローチ



住戸に挟まれた階段スリット



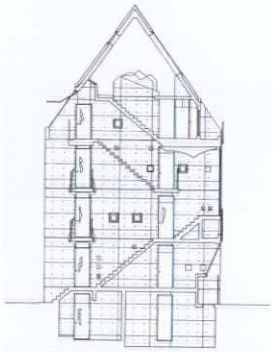
15戸のワンルーム。いくつかのヴォリュームが集合して付近の低層住宅に違和感なく溶け込んでいる

TRANS

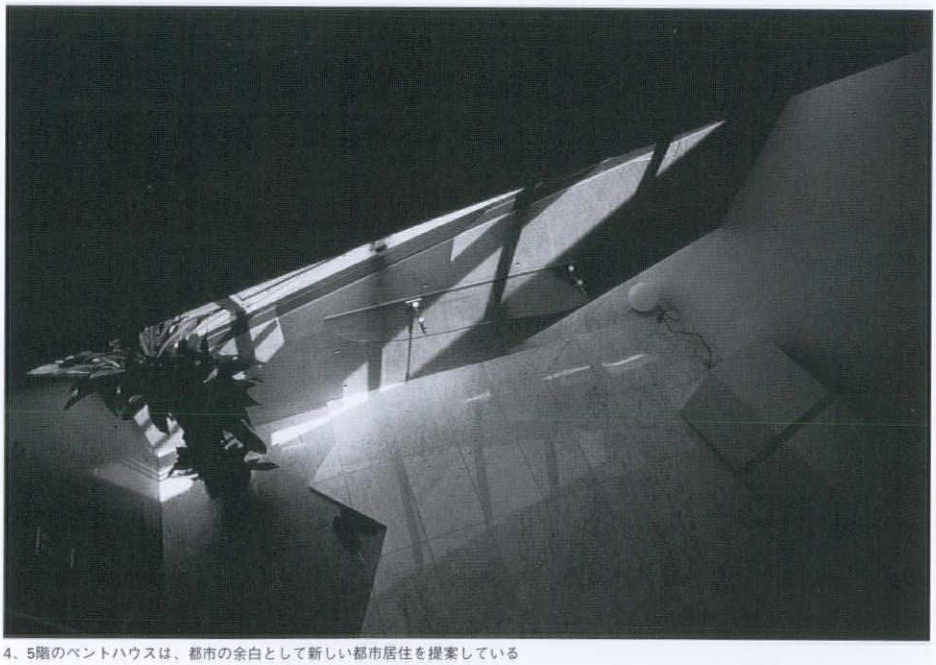
東京都台東区　1989年
シーラカンス

Trans

Taito-ku, Tokyo, 1989
Coelacanth Architects



光をトランス(TRANS)する階段室



4、5階のペントハウスは、都市の余白として新しい都市居住を提案している



第2の道として、階段が街に対して開かれる



都市では屋上レベルに生活ゾーンが姿を表している

都心に住み続けるために、戸建て住宅を賃貸オフィスビルに建て替え、そのペントハウスにオーナーが住んでいる。トップライトからの光を階段部分に落とすことでオーナーとテナントとの関係を結びつけている

桜台アパートメント/SELFISH

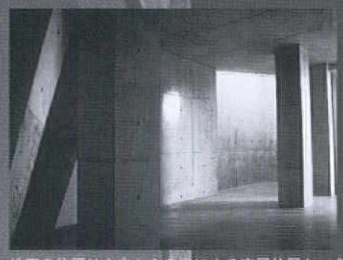
東京都練馬区　1990年
シーラカンス

SA

Selfish-Sakuradai Apartment

Nerima-ku, Tokyo, 1990
Coelacanth Architects

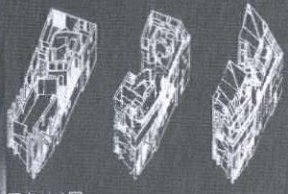




地下の住戸は上方からの光による穴居住居という設定



立面図



アクソメ図

全12戸からなるワンルーム集合住宅。中層のビルが多い周辺にあって、その屋上程度のレベルである地上12mを第二の地盤面と見立てた。この住戸のように地盤面の上は一戸建てのように独立性が高く、地盤面の下は地下住居という設定



PC

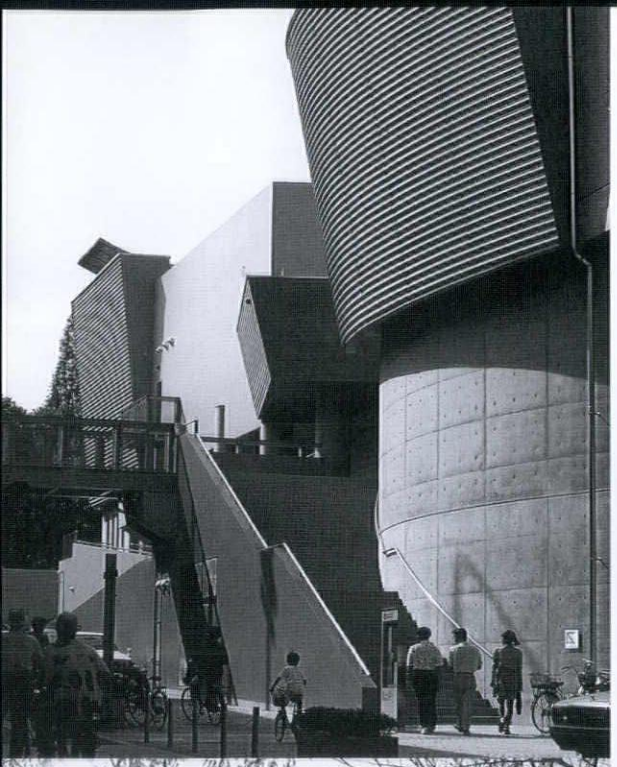
大阪国際平和センター
(ピースおおさか)

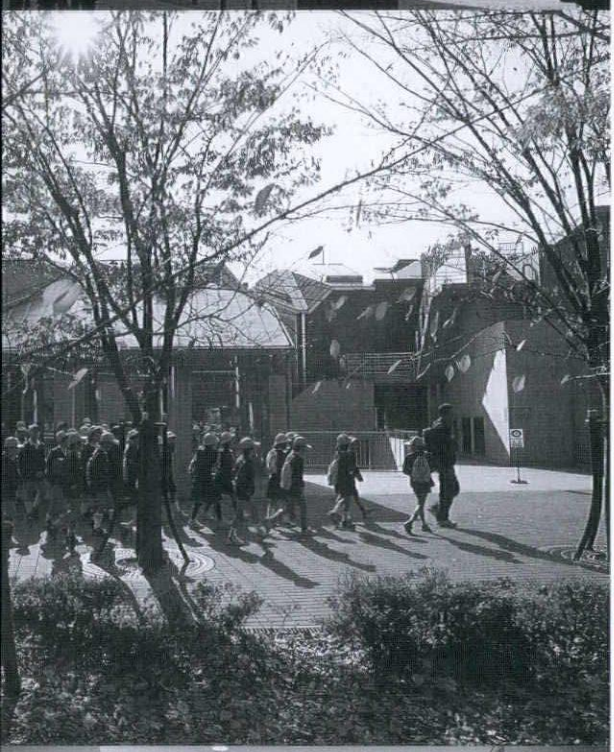
大阪府大阪市　1991年
シーラカンス

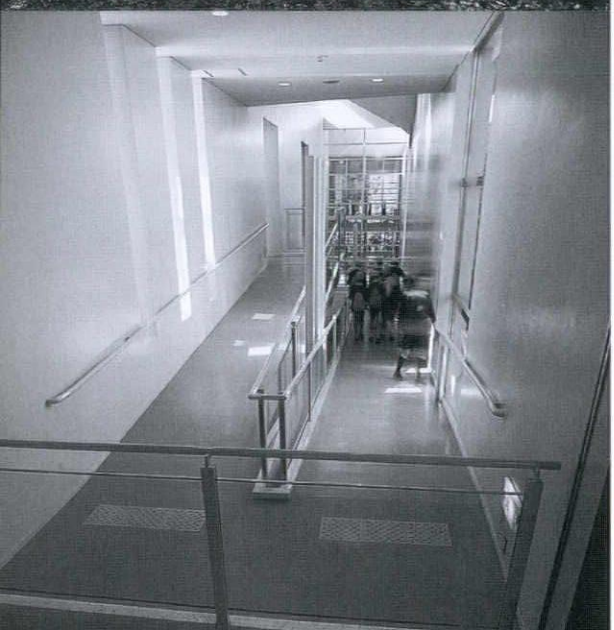
Osaka International Peace Center

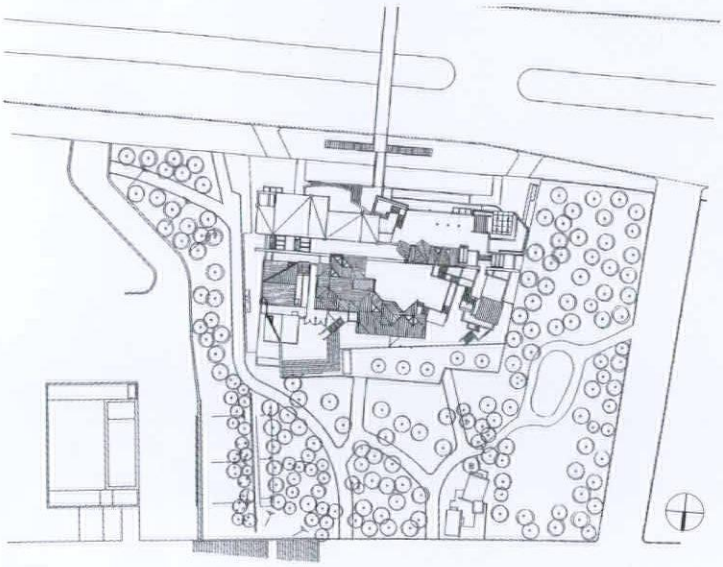
Osaka city, Osaka, 1991
Coelacanth Architects



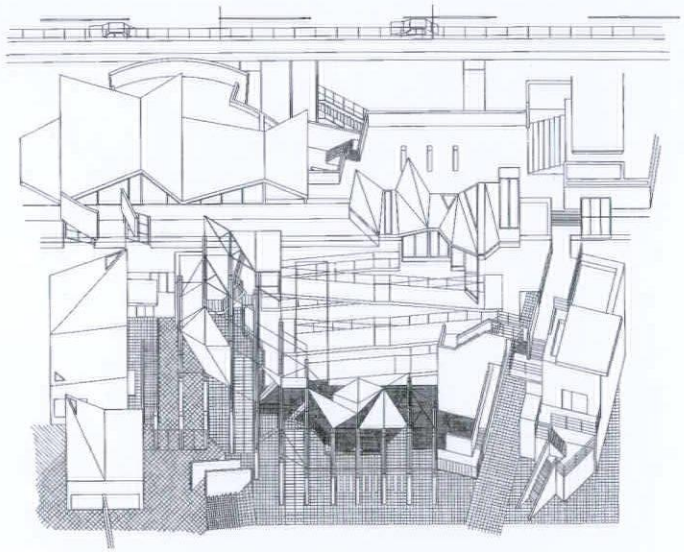








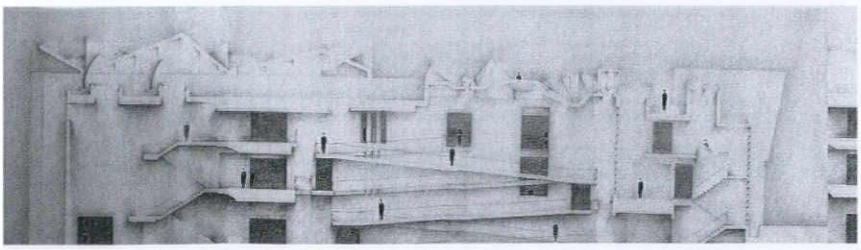
配置図



アクソメ図



立面図



スロープ断面図



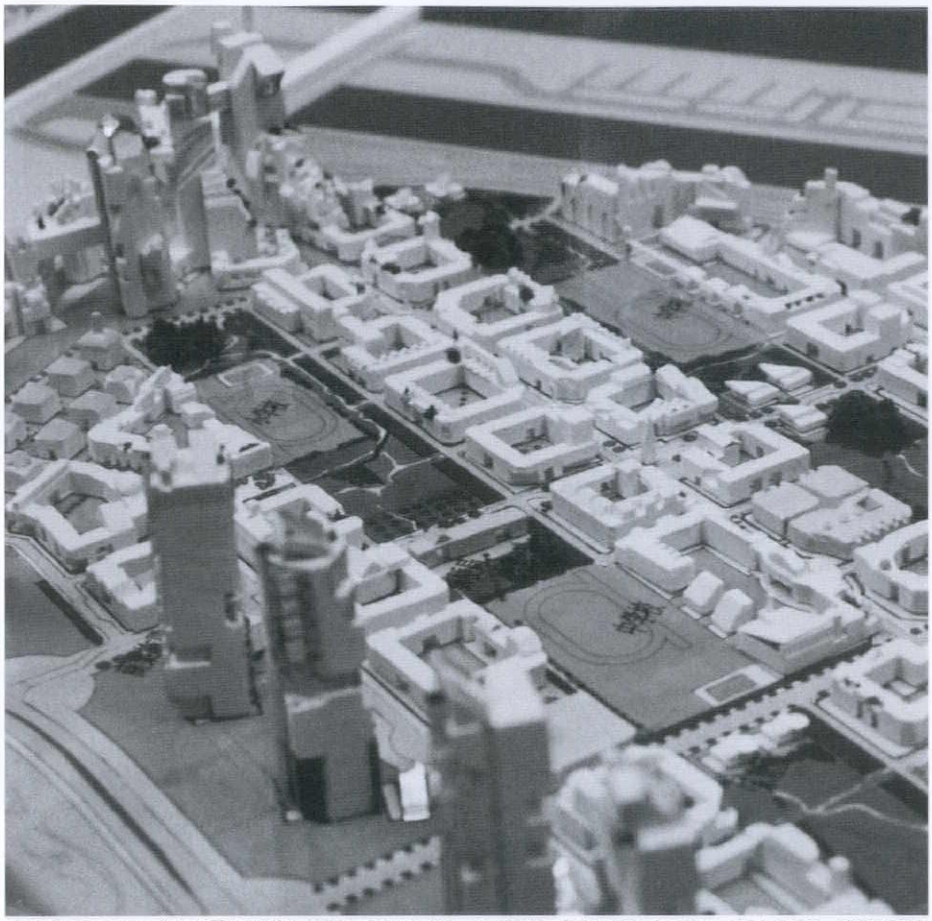
大阪城公園内に建つ、平和と戦争に関する資料の展示・収集を行う施設。異なるものの共存として平和をとらえ、さまざまな光の状態をひとつの建物に作り出している。

幕張新都心住宅地基本構想+基本計画

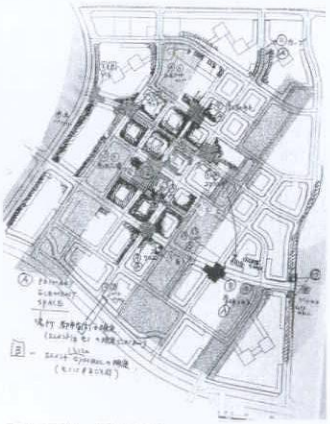
千葉県千葉市　1989年
シーラカンス

Makuhari New Inner City Residential Area Basic Plan

Chiba city, Chiba, 1989
Coelacanth Architects



都市に隣接する84ha、約8100戸の住宅地を「団地」ではなく「街」として整備することを示したマスタープランの模型。浴道型の囲みタイプの中高層住棟を特色とする



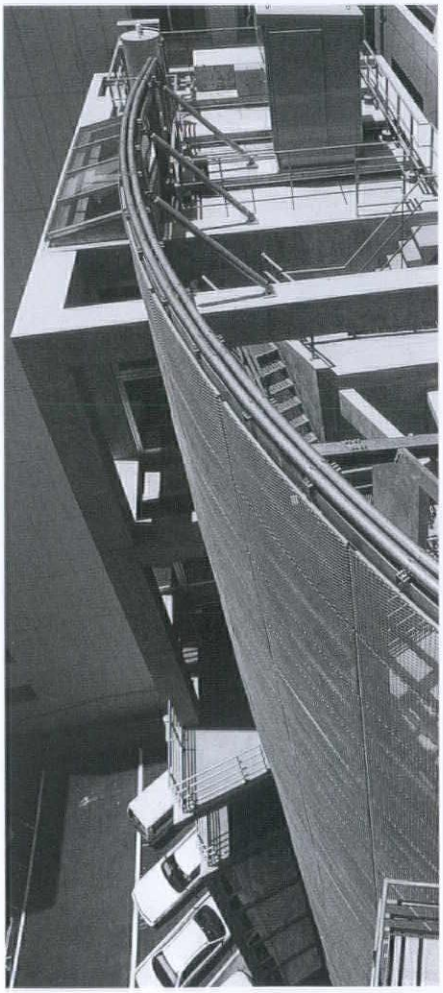
プライマリーエレメント
人工的な埋め立て地の街並みに変化やにぎわいのきっかけをつくるために交差点やストリートに積極的に仕掛けを準備する

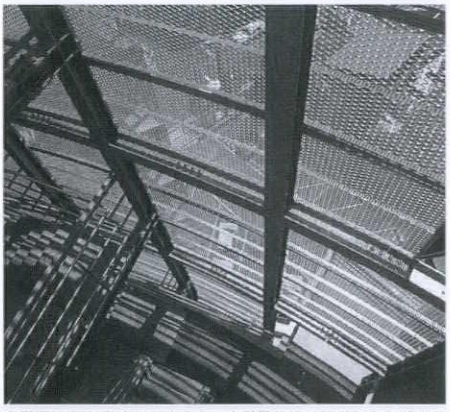
マインズ北堀江

大阪府大阪市　1991年
シーラカンス

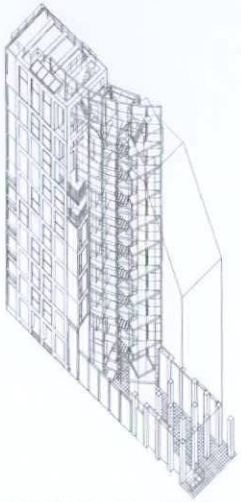
Mines Kitahorie

Osaka city, Osaka, 1991
Coelacanth Architects





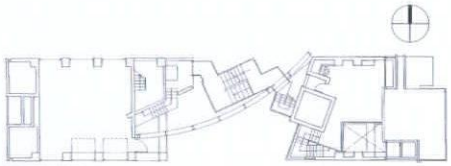
上層階はエキスパンドメタル。下層階はさらにパンチングメタルを2重に貼っている。透過、反射の効果を持つ建物のスパイン



各階の事務所のアプローチでは必ずエレベーターを出てメタルカーブと出会う



光の状態で表情を変えるメタルカーブ



10階平面図

密集した建物の間に階段を囲んだR=15mのメタルカーブが走る

小松フォークリフト神戸工場

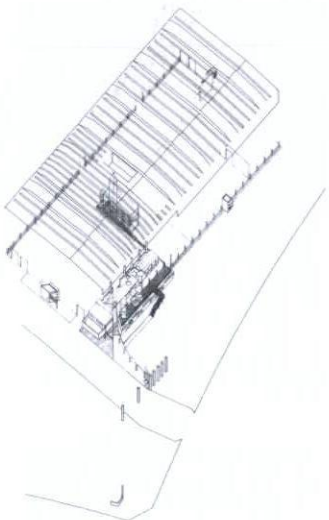
兵庫県神戸市　1991年
シーラカンス

Kobe Factory / Komatsu Forklift

Kobe city, Hyogo, 1991
Coelacanth Architects



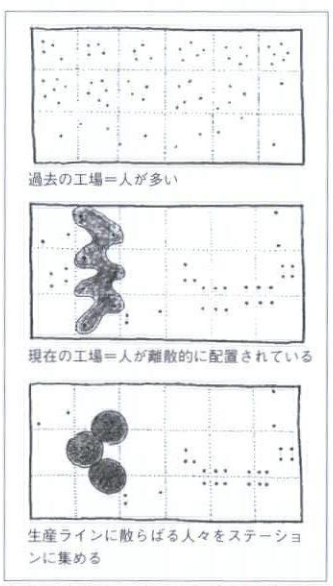
南側にオフィスと休憩デッキ



アクソメ図



入口側



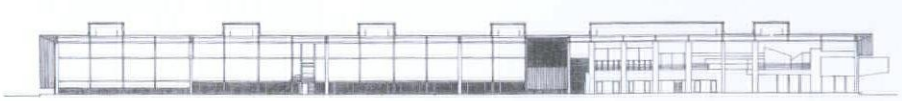
工場のアクティビティのダイアグラム。10,000㎡に20人というハイテク工場ゆえ、少ない活動の分布をスタディ。「働きたくなるスペース」をテーマに、組立ラインを検討し、人の分布にメリハリをつけて休憩所フォリーをつくった



休憩デッキ



梁下有効７ｍの室内はスカイライトとリフレクターの配列をスタディした結果とても明るい



断面図



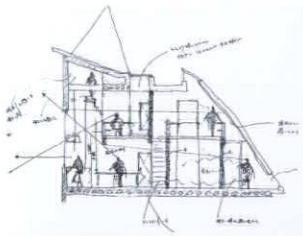
屋根と壁を一体でつくる。工種を減らしてコストダウンと工期短縮に対応

SELFISH（恵比寿プロジェクト）

東京都渋谷区　1991年
シーラカンス

Selfish-Ebisu

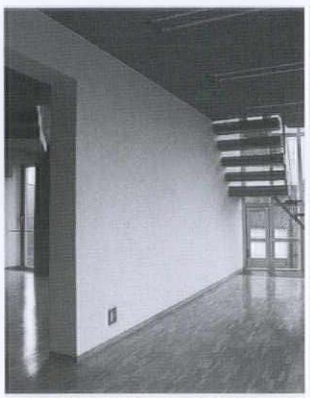
Shibuya-ku, Tokyo, 1991
Coelacanth Architects



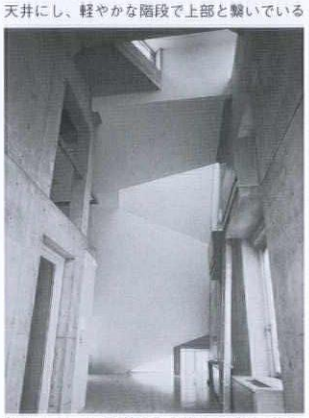
最上階断面図



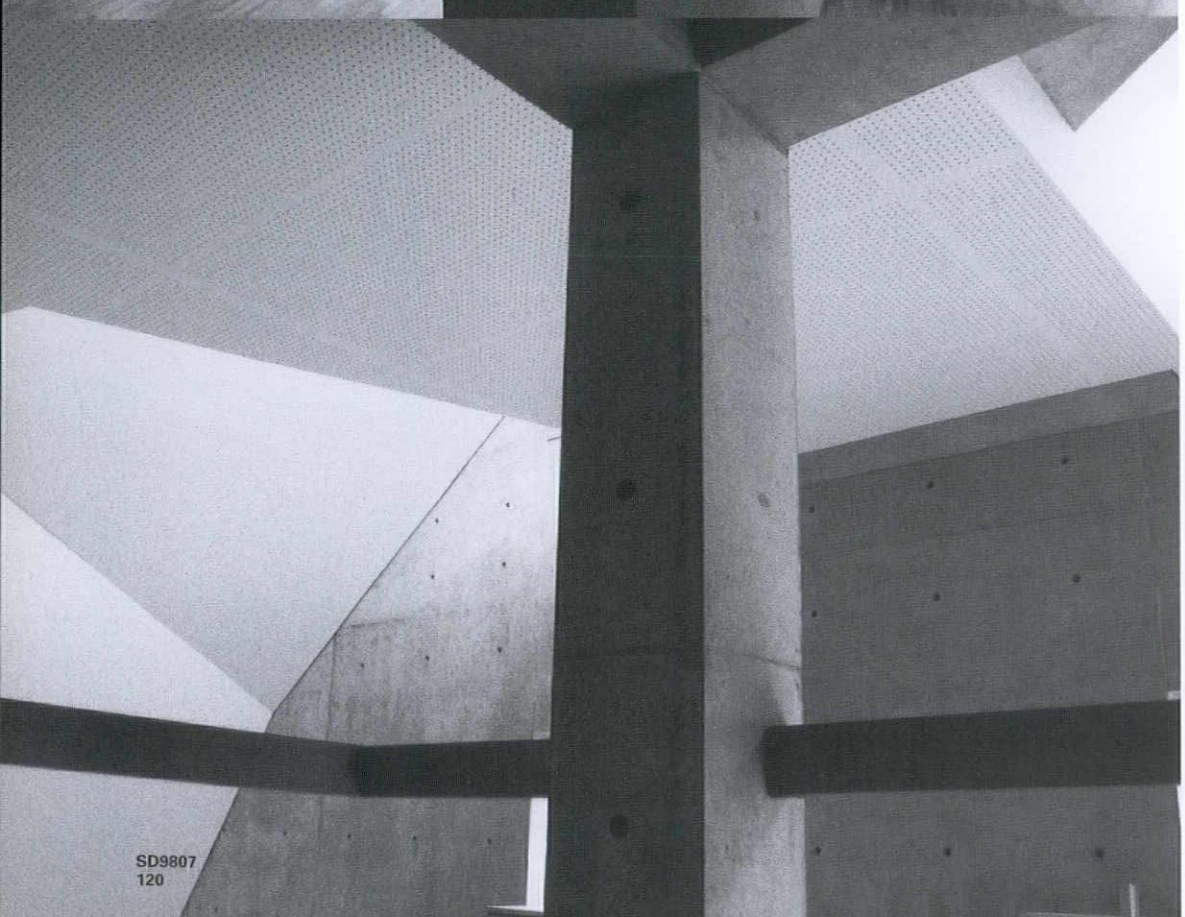




高さを押えたメザニンの下部はフラットな天井にし、軽やかな階段で上部と繋いでいる

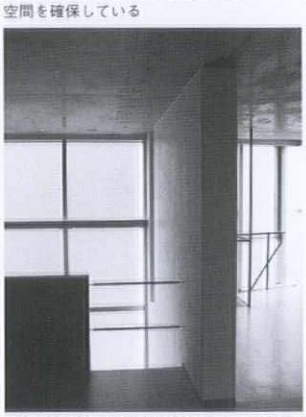


折れ上がった屋根のすき間から光をリフレクトしている





断面方向の操作によって高さに変化のある空間を確保している



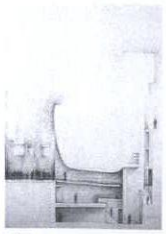
2層を貫く壁が複線を制御し柔らかく境界を実現している

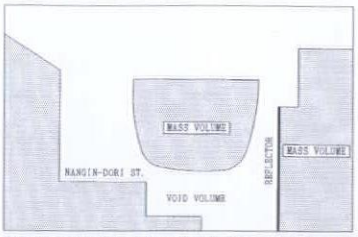
ais（アイス）

埼玉県大宮市　1993年
シーラカンス

a.i.s

Omiya city, Saitama, 1993
Coelacanth Architects


断面ドローイング

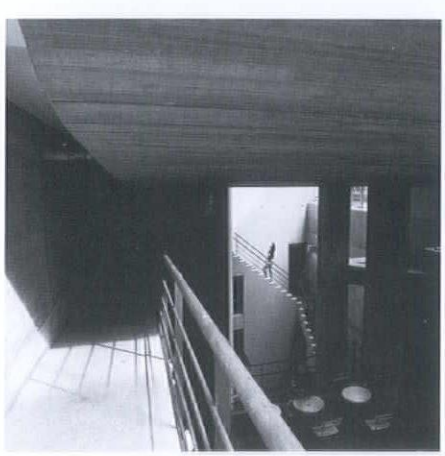


断面ダイアグラム：囲い込まれたMass Volumeによってvoid Volumeの空間の塊を意識した断面構成


南銀座通りから見上げたファサード



大宮で一番の繁華街のど真ん中に建つ商業施設。通りに面する1階の最も有利な場所を大きなヴォイドとした。建築の中に都市を引き込み街を拡張する。建物中に客動線を行き渡らせることで、商業施設としての収益を高めることを目指している。地下のヴォイドはオープンな客席として利用されるほか様々な用途に用いられる


奥の白い壁を自然光のリフレクターとし、通りを行く人の眼を引きつける


地下ヴォイドで行われたコンサートイベント

大阪ガス NEXT21 303住戸

大阪府大阪市　1993年
シーラカンス

Osaka Gas Experimental Housing Next 21, 303

Osaka city, Osaka, 1993
Coelacanth Architects


住棟の3階に空中敷地があり、各個室が立体街路に面している


跳ね上げ式の壁のような扉

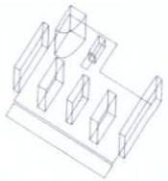

個室の小さな扉でスペースAと出入りする



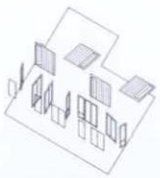
構造のフレーム



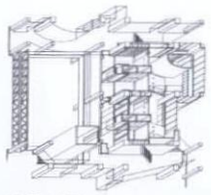
床面の分割



間仕切りのヴォリューム



間仕切り建具



アクソメ図



個人の選択によって利用するスペースA



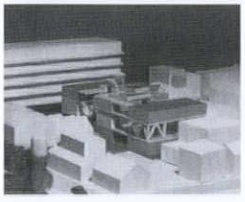
「自立家族の家」というテーマに対して、関係を示すプランとスペースの性格を変える建具を提案した。寝室でもあり、玄関でもある4つの個室が均等に並ぶ

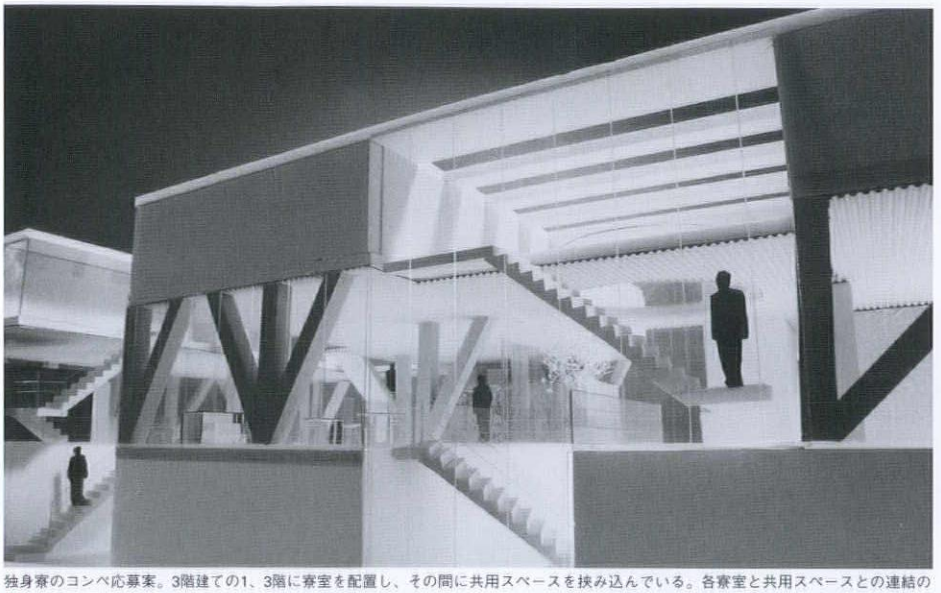
ヤクルト独身寮コンペ案

東京都八王子市　1992年
シーラカンス

Yakult Bachelor's Dormitory Competition

Hachioji city, Tokyo, 1992
Coelacanth Architects





独身寮のコンペ応募案。3階建ての1、3階に寮室を配置し、その間に共用スペースを挟み込んでいる。各寮室と共用スペースとの連結の仕方がテーマとなっている

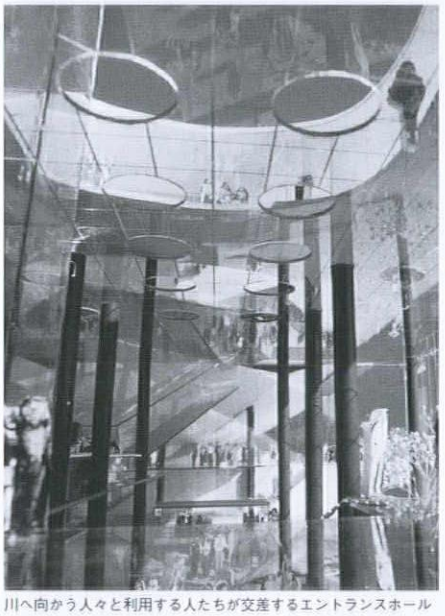
新潟文化会館コンペ案

新潟県新潟市　1993年
シーラカンス

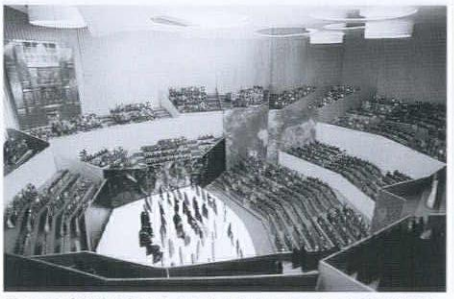
Niigata Cultural Center Competition

Niigata city, Niigata, 1993
Coelacanth Architects

3つのホールのヴォリュームがひとつのかたまりになるように、川沿いに並列に配置した。ヴォリュームのすき間はホワイエやエントランスホール、市内から川へ向かう通り抜けのパスになっており、アクティビティが集約される



川へ向かう人々と利用する人たちが交差するエントランスホール



柔らかな自然光を取り入れるためのリフレクターを兼ねた反射板をもつアリーナ型の音楽ホール

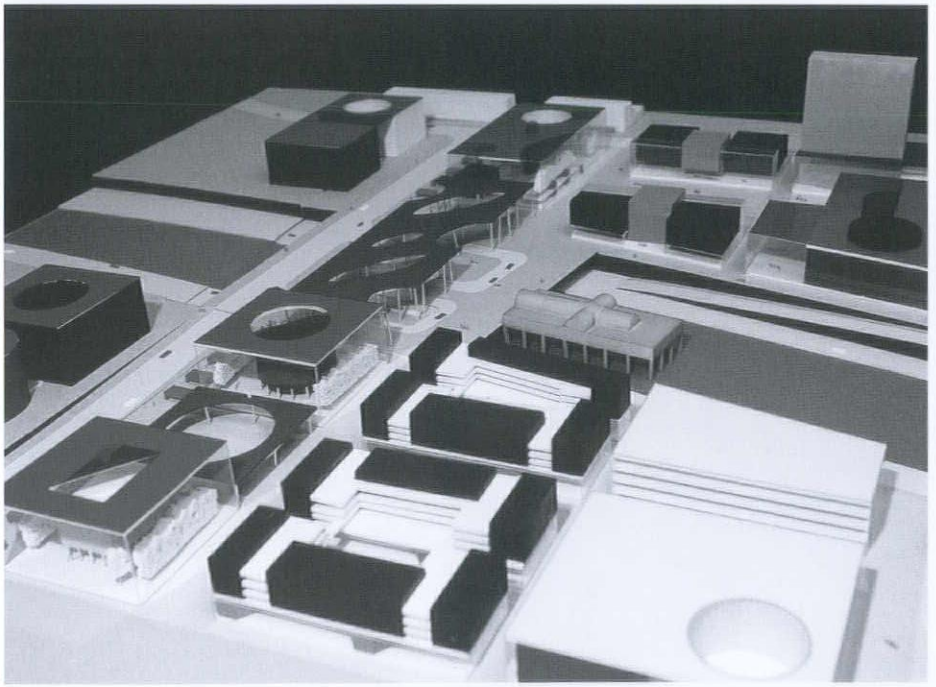
千葉ニュータウン7-8駅圏都市景観計画策定調査

千葉県印旛郡　1994年
シーラカンス

Urban Environment Research for Chiba New Town 7-8 Station Area

Inba-gun, Chiba, 1994
Coelacanth Architects

579ha、64,000人のためのニュータウンの景観形成計画。既定土地利用計画にオーバーレイする方法として、一定方向のストライプを設定し、このストライプ上に多様な景観形成の仕掛けを導入している

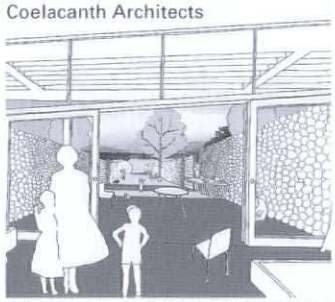


大田区区民休暇村+校外施設コンペ案

長野県小県郡　1994年
シーラカンス

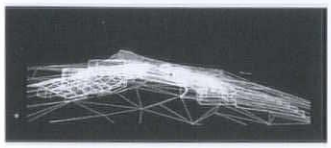
Ota Ward Citizens' Village Competition

Chisagata-gun, Nagano, 1994
Coelacanth Architects



宿泊スペースより、敷地から産出する自然石を利用した個別のガーデンセットを通して自然の広がりを感じる





都市生活者と自然との新しい出会い方を提案した。微地形を生かした施設配置とし、ガーデンセットを宿泊棟と石の広場がストライプ状に拡がる（上）

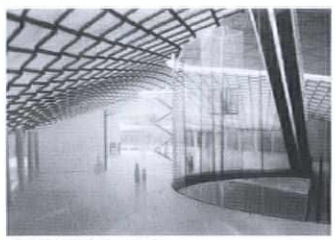
微地形と建築の接点をコンピュータでシュミュレーションしている（左）

横浜大桟橋コンペ案

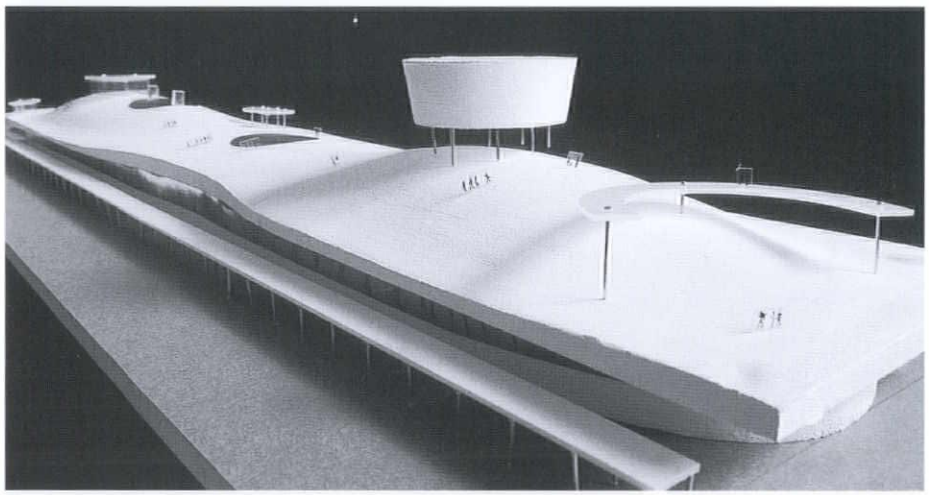
神奈川県横浜市　1994年
シーラカンス

Yokohama Main Pier Center Competition

Yokohama city, Kanagawa, 1994
Coelacanth Architects



網目状の構造体の連続



海に浮かぶ緑の芝生の島のような屋根



埼玉環境科学国際センターコンペ案

埼玉県北埼玉郡　1995年
シーラカンス

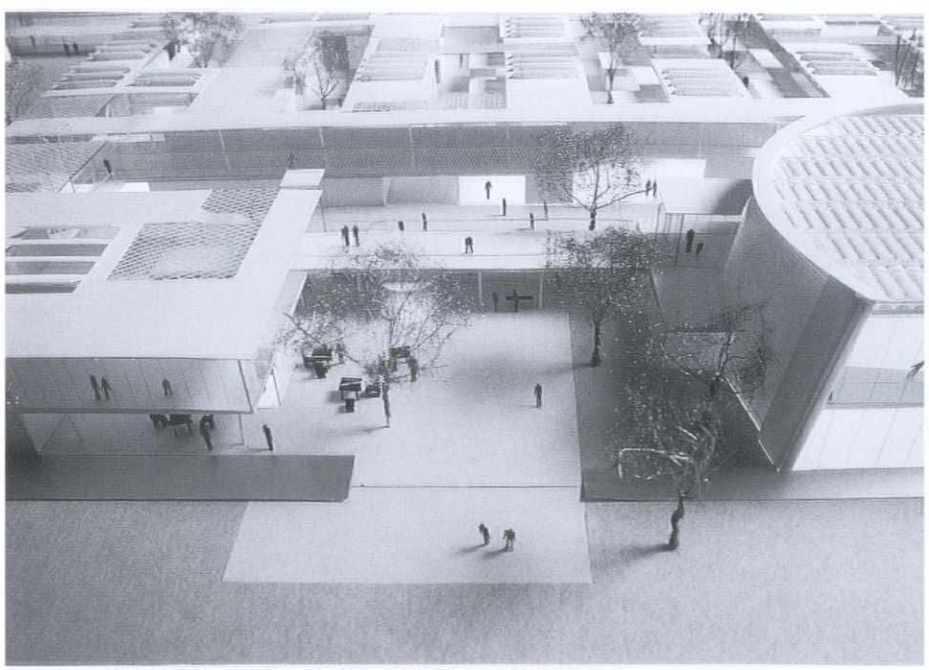
International Environmental Science Research Center Competition

Kitasaitama-gun, Saitama, 1995
Coelacanth Architects



軽快なラチスフレームによる屋根架構

一部展示を含む研究施設。平坦な敷地全体を利用し、外部とセットになった親自然的な研究室の配列とフレキシビリティのある架構を計画した



敷地全体に広がる平屋の屋根や、ひだの多い壁を利用して自然エネルギーの利用を提案した

HOUSE TM

神奈川県横浜市　1994年
小嶋一浩⊂シーラカンス

House TM

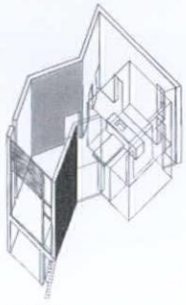
Yokohama city, Kanagawa, 1994
Kazuhiro Kojima ⊂ Coelacanth Architects



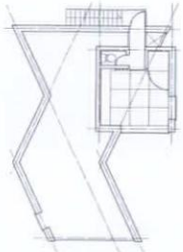
屋上の芝生が前面の丘へと反転してつながる。天井高のある空間照明はスカイライト上部から行う



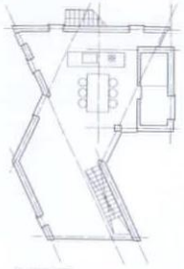
外観



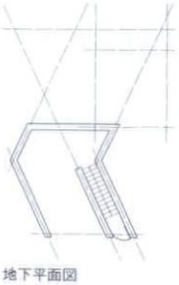
アクソメ図



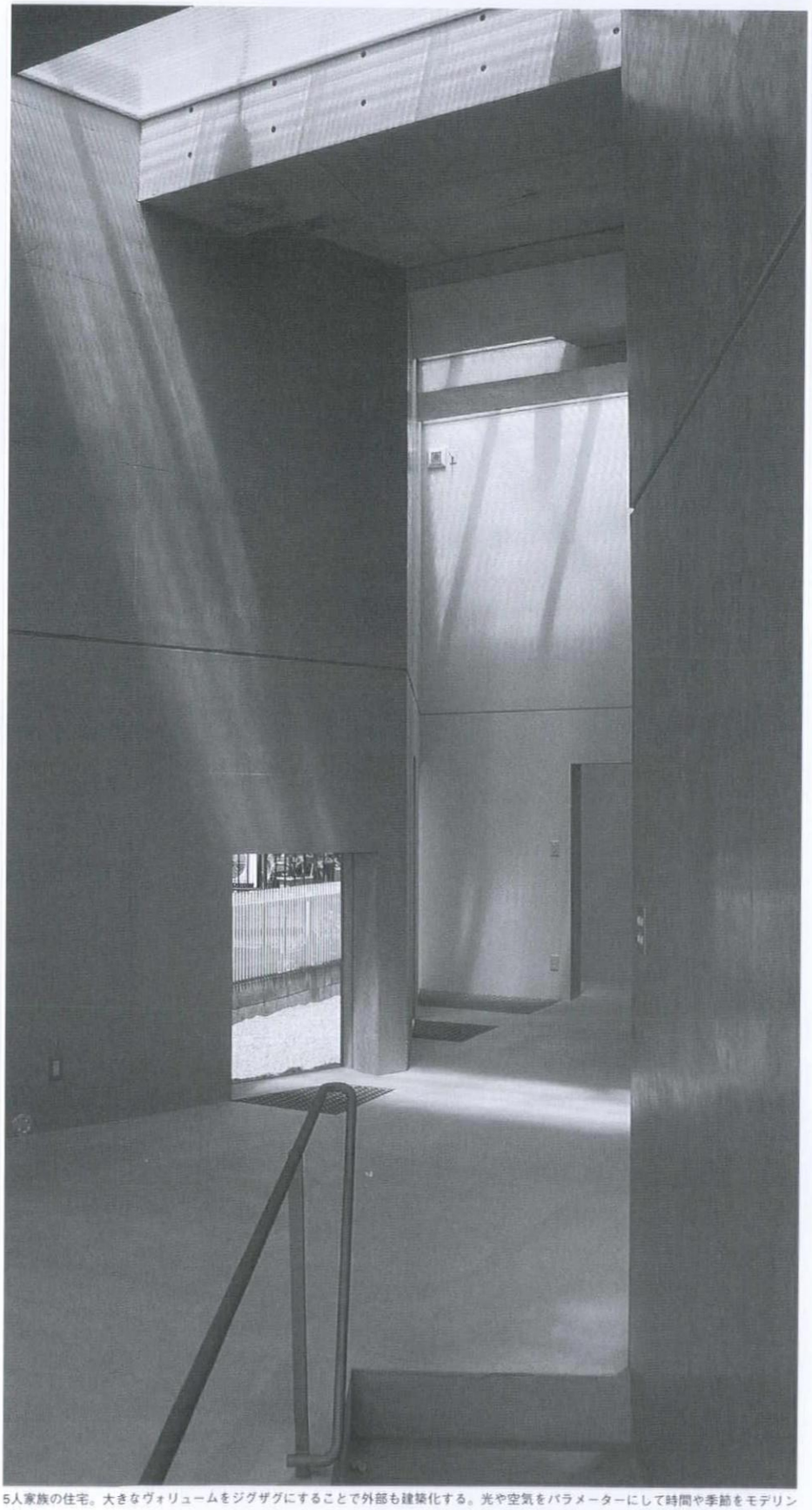
2階平面図。視線の距離の確保と死角の生成で広がりをつくる



1階平面図



地下平面図



5人家族の住宅。大きなヴォリュームをジグザグにすることで外部も建築化する。光や空気をパラメーターにして時間や季節をモデリングした



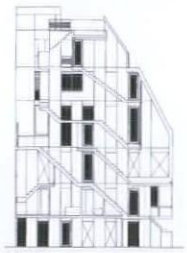
道にいるように生活する。斜面の道の延長がジグザグの空間として住居になる。主室に冷房はない。遮熱と通風で環境をコントロールする。床の孔は地下との空気や光のサーキュレーションの仕掛け

空の中庭

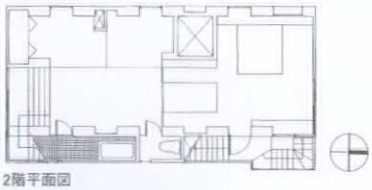
東京都文京区　1994年
小泉雅生⊂シーラカンス

Yushima Project

Bunkyo-ku, Tokyo, 1994
Masao Koizumi ⊂Coelacanth Architects



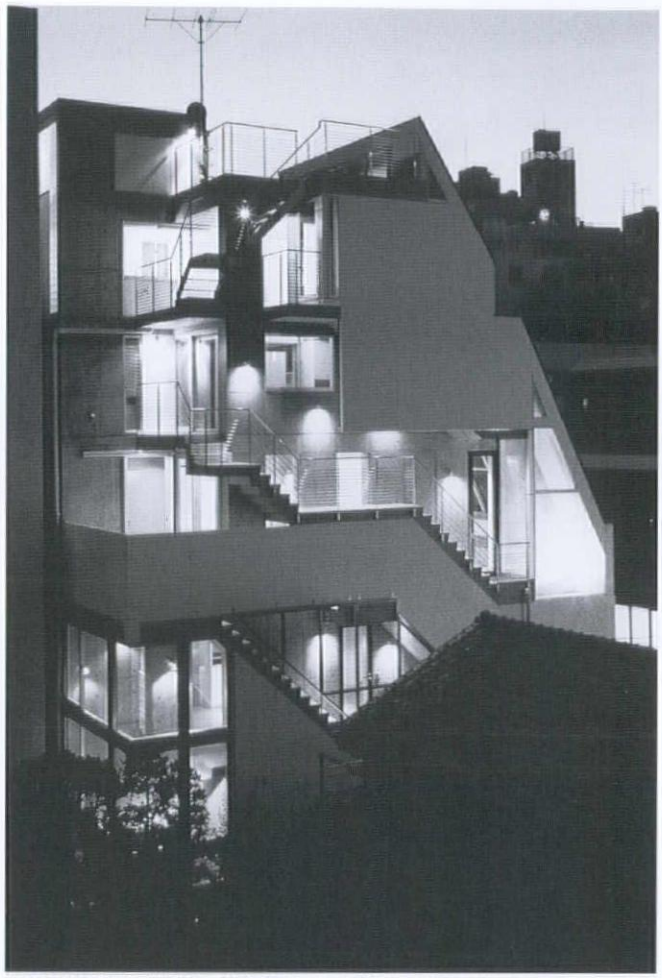
断面図



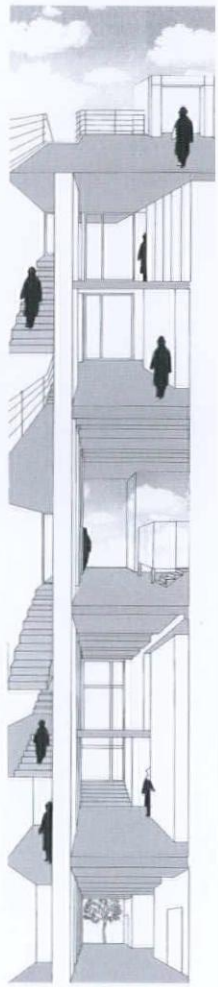
2階平面図



4階空の中庭。
2世帯間に挿入された
空間の半外部空間



縦に6層に積まれた2世帯住宅。動線・居室・コアに整理された平面を積み重ねていく

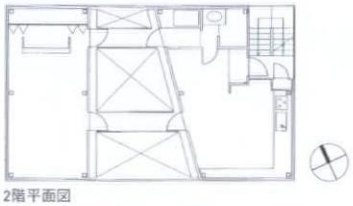


狛江の住宅

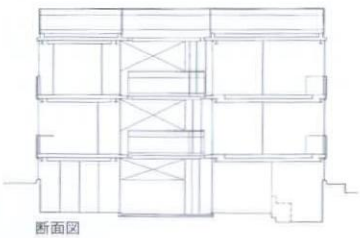
東京都狛江市　1996年
小泉雅生⊂シーラカンス

House in Komae

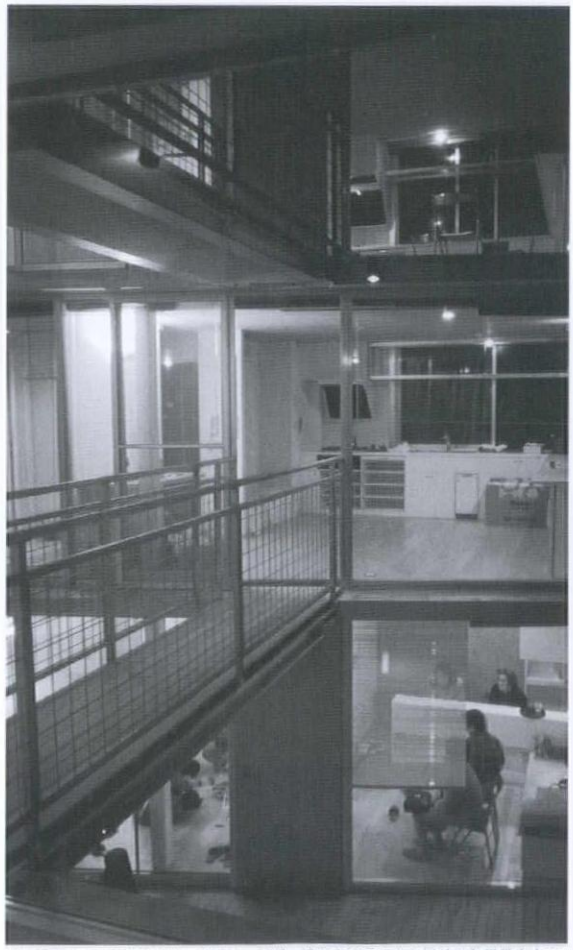
Komae city, Tokyo, 1996
Masao Koizumi ⊂ Coelacanth Architects



2階平面図



断面図



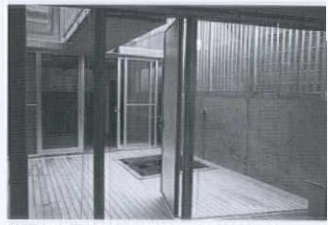
縦に積層された3世帯住宅。中庭は、日照・通風を確保すると同時に各世帯を上下につなぐ役割を果たす



南側外観



半層堀りこまれた中庭



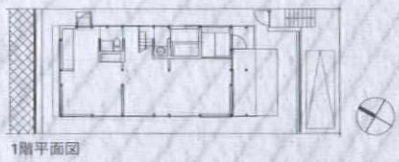
個室と主室は外部のブリッジで結ばれる

プラモデル住宅

神奈川県川崎市　1995年
小泉雅生⊂シーラカンス

Plastic Model House

Kawasaki City, Kanagawa, 1995
Masao Koizumi ⊂ Coelacanth Architects



1階平面図





1階の光を透過する壁

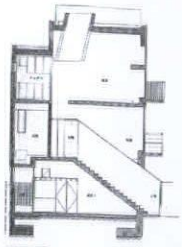
光り壁。ガラスを組み合わせたパネルによる外壁。夜になると壁面が発光する

HOUSE YG

東京都豊島区　1995年
堀場 弘⊂シーラカンス

House YG

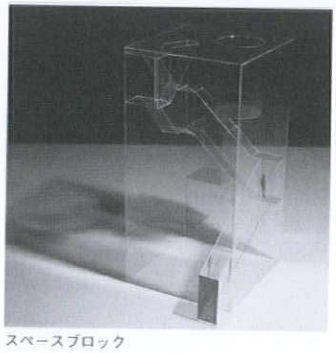
Toshima-ku, Tokyo, 1995
Hiroshi Horiba ⊂ Coelacanth Architects


断面図

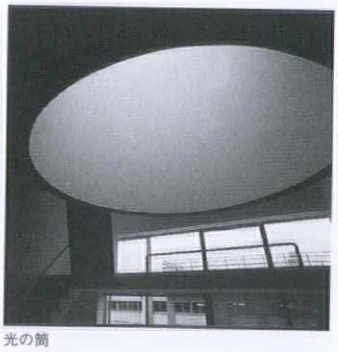

2階のチューブ内部。間接的に光が差し込む



路地奥の狭小な敷地に建つ3階建ての住宅（1階にアパート2戸、2、3階各1戸）。2、3階の住戸に個別にアクセスするために階段を囲い、1階から屋上まで各層を貫くチューブとして扱った。このチューブの扱いとそれにまつわる光の操作がテーマ


スペースブロック


階段（チューブ）とそれをねらう光の筒

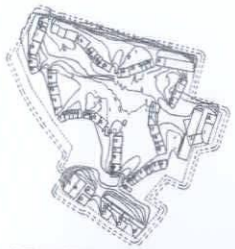

光の筒

K-PROJECT 基本計画+基本設計

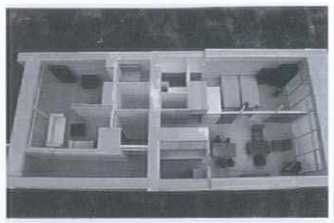
1995年
シーラカンス

K-project

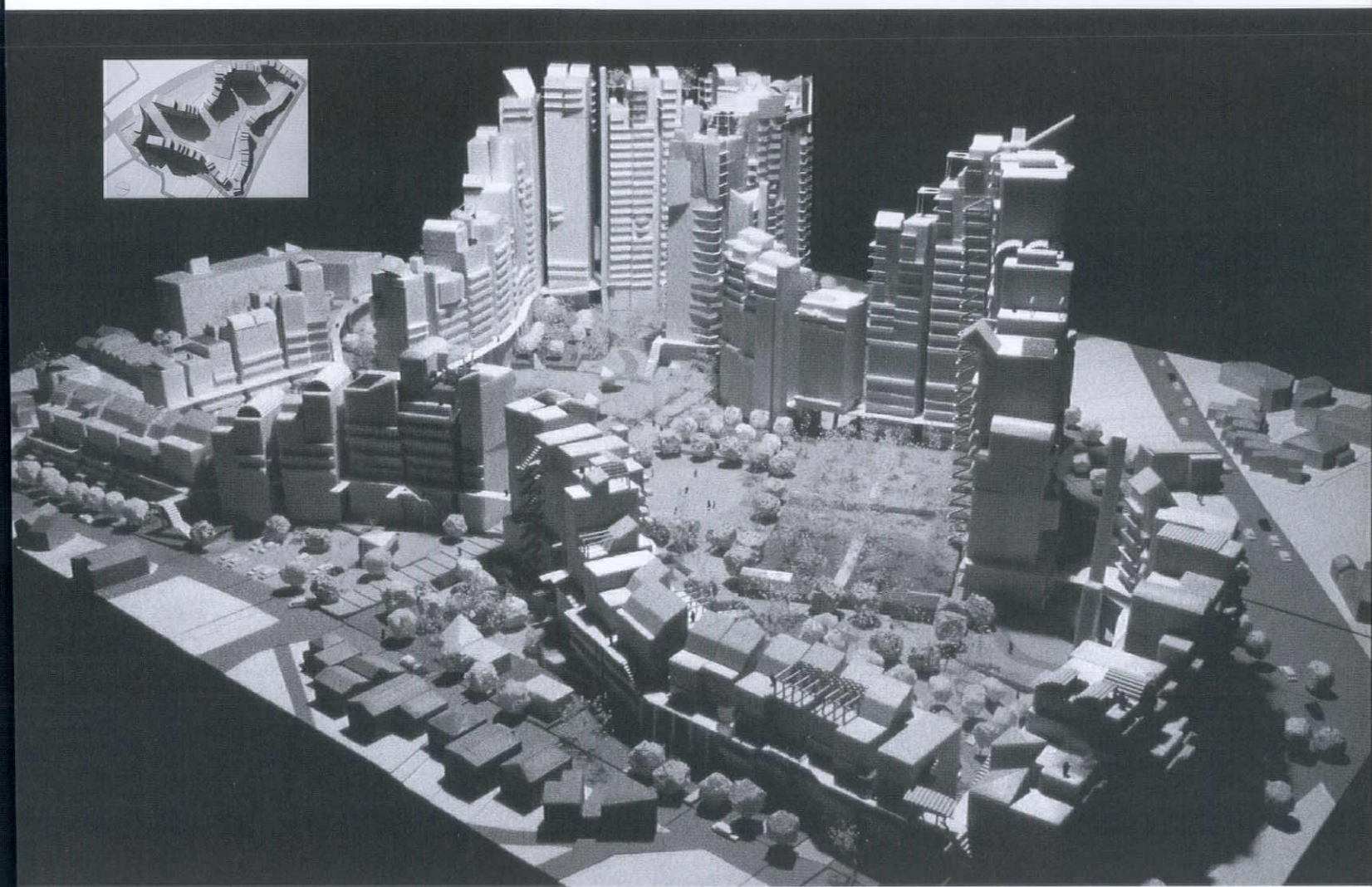
1995
Coelacanth Architects



冬至の日影図



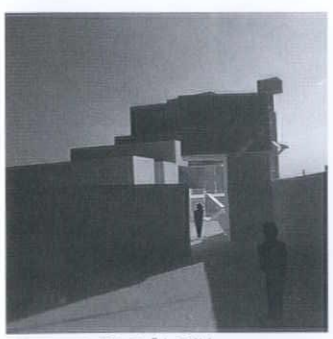
両面採光の住戸プランの1例。部屋を仕切る大きな建具



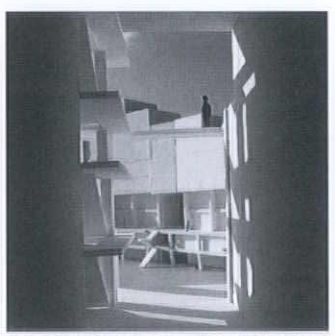
1500戸の住戸の日照時間をパラメーターとしたコンピューター・シミュレーションで導きだされた住棟配置。北側が住居専用地域であることに配慮し、タワー型超高層住棟を入れずに高密度な居住を積極的にとらえた設計をした



連係する壁状の住棟



4階レベルで1周する「上の道」



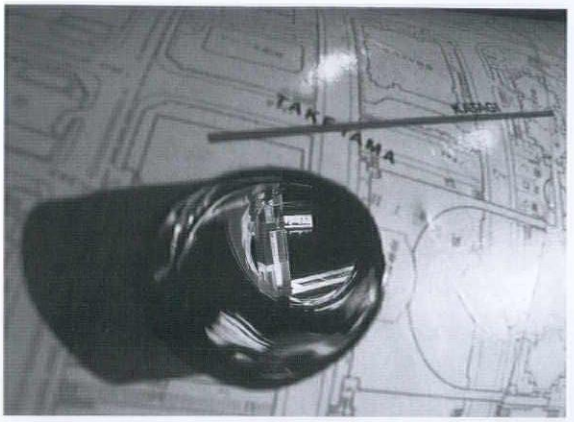
住棟のすき間から見ると、明るい住棟の壁が近づいて見える

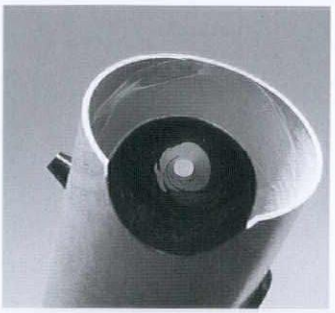
-スコープ ミラノトリエンナーレ1996出品

イタリア、ミラノ　1996年
シーラカンス

-scope/ Triennale di Milano 1996

Milan, Italy 1996
Coelacanth Architects







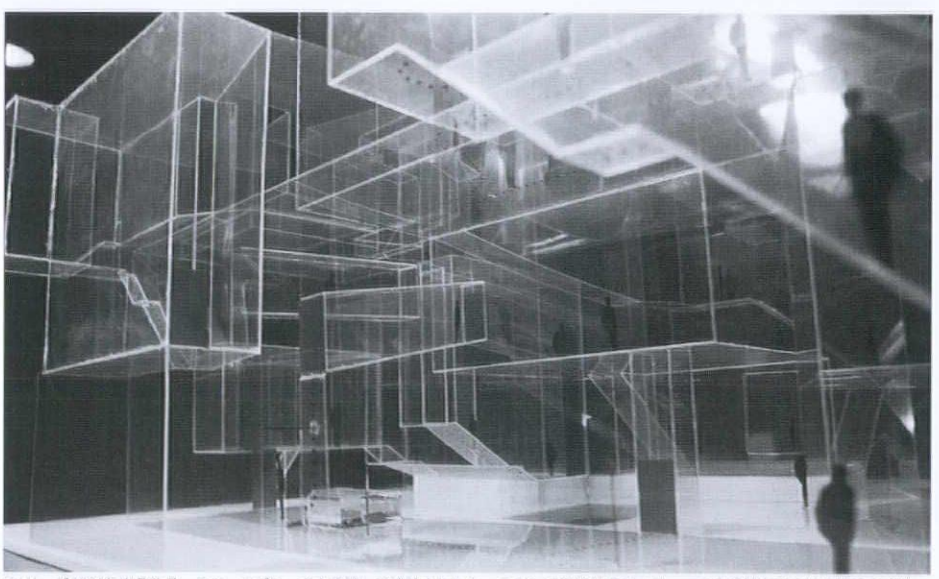
第19回ミラノトリエンナーレの出品作品。「パブリック・ボディ・イン・クライシス」という問題意識のもとに、21世紀の都市ビジョンとして、「都市の中で交差する相互に見えない関係を視覚化する装置」として提案した

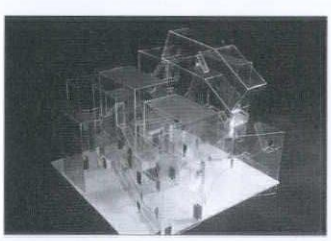
GJ LEAGUE 94
(スペースブロック・ワールド)

東京都渋谷区　1994年
シーラカンス

GA Japan League 1994
(Space Block World)

Shibuya-ku, Tokyo, 1994
Coelacanth Architects





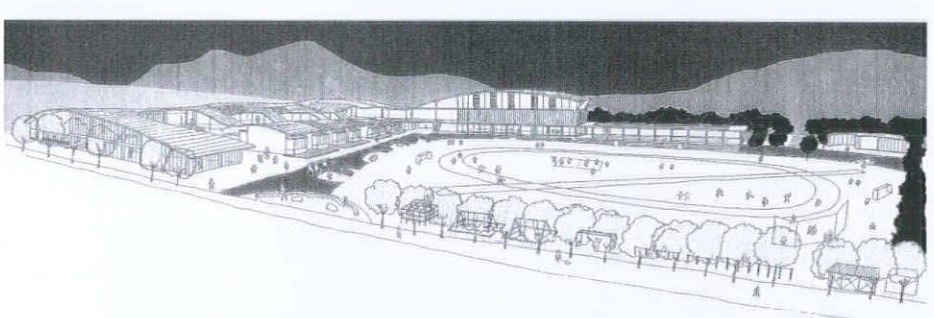
GJリーグ1994年出品作品。スペースブロックを意識して設計されたシーラカンスの作品のヴォリュームを透明なアクリル板でつくり、内部空間が連続するように連結して、ひとつの空間モデルを作成した

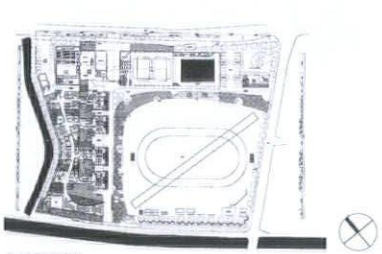
下山田小学校コンペ案

福岡県山田市　1997年
シーラカンス

Shimoyamada Elementary School Competition

Yamada city, Fukuoka, 1997
Coelacanth Architects





全体配置図



小学校のコンペ応募案。木造格子のゆるやかにわん曲する屋根面により全体を覆っている。周辺の山並みと呼応する大きな屋根面の下には、子供のスケールに合わせた微細な空間が埋め込まれている

広島市西消防署コンペ案

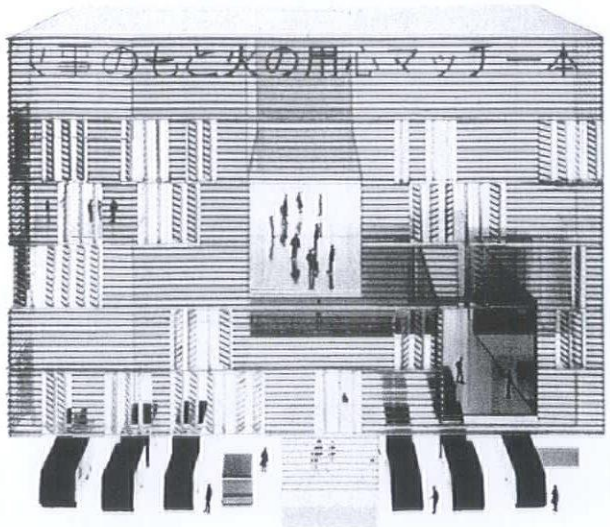
広島県広島市　1996年
シーラカンス

Hiroshima-Nishi Fire Station Competition

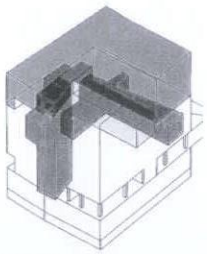
Hiroshima city, Hiroshima, 1996
Coelacanth Architects



1階平面図　車両配置で平面が決まる



平和大通り側。回転式ルーバーで覆われたヴォリュームへの3つの「にわ」と呼ぶヴォイドが貫入。
ルーバーの開閉と「にわ」によって消防署の活動が市民へ視覚化される



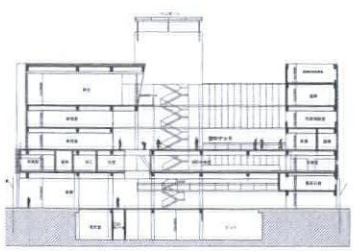
アクソメ図
立体的な「にわ」の配置

浪速消防署コンペ案

大阪府大阪市　1997年
シーラカンス

Naniwa Fire Station Competition

Osaka city, Osaka, 1997
Coelacanth Architects



断面図



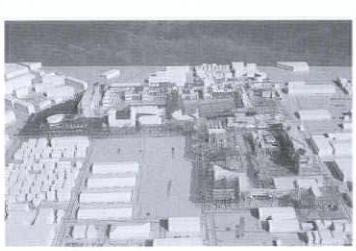
大阪の消防署コンペ応募案。密集した都市の中の消防署への提案として、消防署の活動を支える署庭を3階レベルに持ち上げた。この庭は街に対する消防の活動を見せるための舞台ともなる

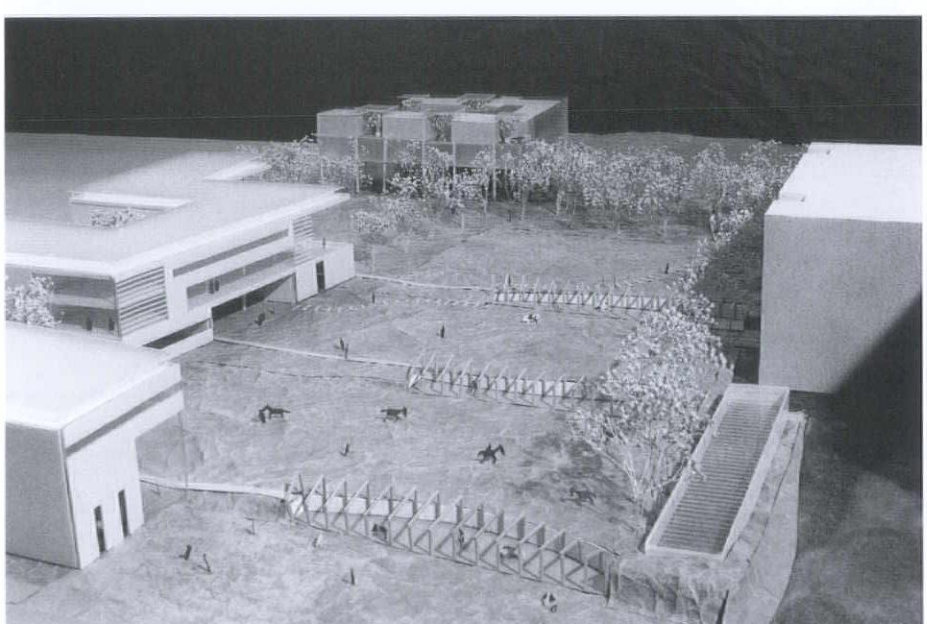
麻布大学キャンパス計画コンペ案

神奈川県相模原市　1996年
シーラカンス

Azabu University Campus Plan Competition

Sagamihara city, Kanagawa, 1996
Coelacanth Architects





ランドスケープアーキテクトがコラボレートする建築家を指名して行われたプロポーザルコンペ案。グランドレベルだけでなく空までも外構ととらえ、4層の異なる建築と外構の関係を提案した。ササキ・エンバイロメント・デザインオフィス（SEDO）と協同

掲載作品建築データ

略称	名称	設計クレジット＋担当者	所在地	用途	構造	階数
HI	氷室アパートメント	小嶋一浩⊂シーラカンス	大阪府枚方市	単身者用集合住宅	RC造（一部S造）	地上4階
EI	永福の住宅	堀場弘⊂シーラカンス	東京都杉並区	住宅	RC造（一部S造）	地上2階
KAT	鎌倉の住宅	伊藤恭行⊂シーラカンス	神奈川県鎌倉市	住宅	RC造	地下1階　地上2階
IZ	BUOYANT（伊豆の別荘）	小泉雅生⊂シーラカンス	静岡県伊東市	別荘	木造	地上1階
KY	北山コンドミニアム	シーラカンス　小嶋　工藤	京都府京都市	店舗付集合住宅	RC造	地上5階
EN	GIMMICK（計画案）	シーラカンス　堀場　小嶋　工藤　伊藤	東京都新宿区	事務所ビル	SRC造	地下1階　地上8階
SH	下鴨の住宅	シーラカンス　小嶋　工藤	京都府京都市	住宅	RC造（一部木造）	地上2階
HS	星田アーバンリビングコンペ案	シーラカンス　小嶋　工藤　堀場	大阪府交野市	住宅地計画	RC造（一部S造）	地上2階
IG	CREVASSE（井草プロジェクト）	シーラカンス　小嶋　工藤	東京都杉並区	住宅	RC造*（一部S造）	地下1階　地上3階
OK	TRANS	シーラカンス　工藤　小嶋　堀場	東京都台東区	事務所＋ギャラリー	RC造	地下1階　地上5階
MK	幕張新都心住宅地基本構想＋基本計画	シーラカンス　工藤　小嶋　日色　堀場	千葉県千葉市	都市計画	—	—
EK	江古田アパートメント	シーラカンス　工藤　堀場	東京都練馬区	賃貸集合住宅	RC造（一部S造）	地上3階
MCH	ハウスオブカップコンペ案	シーラカンス　小泉　伊藤	東京都杉並区	住宅	RC造＋S造	地上2階
SA	桜台アパートメント／SELFISH	シーラカンス　小嶋　三瓶　工藤　堀場	東京都練馬区	店舗＋賃貸集合住宅	RC造	地上5階
KH	マインズ北堀江	シーラカンス　堀場　小嶋　工藤	大阪府大阪市	賃貸オフィス	SRC造	地下1階　地上10階
PC	大阪国際平和センター（ピースおおさか）	シーラカンス　堀場　小泉　小嶋　工藤　伊藤　宇野　三瓶	大阪府大阪市	資料館	RC造（一部S造）	地下1階　地上3階
EB	SELFISH（恵比寿プロジェクト）	シーラカンス　工藤　堀場	東京都渋谷区	集合住宅	RC造	地下1階　地上6階
OG	大阪ガス NEXT21 303住戸	シーラカンス　堀場　工藤　小泉　小嶋　三瓶	大阪府大阪市	実験集合住宅	RC造＋SRC造	地下1階　地上6階
KO	小松フォークリフト神戸工場	シーラカンス　小嶋　小泉　工藤	兵庫県神戸市	工場＋事務厚生施設	S造	地上2階
OM	ais（アイス）	シーラカンス　工藤　三瓶　小泉　小嶋　堀場	埼玉県大宮市	商業テナントビル	RC造（一部S造）	地下2階　地上5階
AZ	西麻布WHOOPEE！	シーラカンス　堀場	東京都港区	店舗＋事務所＋住宅	S造	地下1階　地上5階
MKS	千葉市立打瀬小学校	シーラカンス　小嶋　工藤　小泉　堀場　宇野　三瓶	千葉県千葉市	小学校	RC造（一部SRC造）	地上2階（一部3階建）
KW	K-PROJECT 基本計画＋基本設計	シーラカンス　堀場　宇野　三瓶　日色　工藤　小嶋　小泉	—	集合住宅地（再開発）	—	—
MCH2	パチンコパーラーコンペ案	シーラカンス　工藤　三瓶	茨城県日立市	店舗＋事務所	—	—
YU	空の中庭	小泉雅生⊂シーラカンス	東京都文京区	専用住宅（2世帯）	RC造（一部S造）	地上6階
TM	HOUSE TM	小嶋一浩⊂シーラカンス	神奈川県横浜市	住宅	RC造（一部木造）	地下1階　地上2階
YK	ヤクルト独身寮コンペ案	シーラカンス　小嶋　堀場　三瓶　工藤	東京都八王子市	寮	—	地下1階　地上3階
NC	新潟文化会館コンペ案	シーラカンス　堀場　小嶋　宇野	新潟県新潟市	ホール	SRC造	地上7階
COM	狛江の住宅	小泉雅生⊂シーラカンス	東京都狛江市	共同住宅	S造	地下1階　地上2階
SD	ART HUT SD	シーラカンス　小泉　小嶋　堀場　工藤	長野県小県郡	倉庫、作業場	木造	地上2階
YG	HOUSE YG	堀場弘⊂シーラカンス	東京都豊島区	専用住宅＋賃貸住戸	RC造	地上3階
TZ	プラモデル住宅	小泉雅生⊂シーラカンス	神奈川県川崎市	住宅	木造	地上2階
CNT	千葉ニュータウン7-8駅圏都市景観計画策定調査	シーラカンス　工藤　伊藤	千葉県印旛郡	景観計画	—	—
OT	大田区区民休暇村＋校外施設コンペ案	シーラカンス　工藤　堀場　小嶋　三瓶　伊藤	長野県小県郡	休暇村	RC造	地上2階
OS	横浜大桟橋コンペ案	シーラカンス　堀場　三瓶　工藤　小嶋	神奈川県横浜市	客船ターミナル	—	—
IZM	（仮称）出雲市地域交流センター	小嶋一浩＋小泉雅生＋宇野享／C＋A	島根県出雲市	劇場を含む複合施設	S造＋RC造	地下1階　地上2階
KA	スペースブロック上新庄	小嶋一浩／C＋A	大阪府大阪市	店舗＋賃貸集合住宅	RC造	地上5階
SK	埼玉環境科学国際センターコンペ案	シーラカンス（堀場　工藤　伊藤　三瓶　小嶋）	埼玉県北埼玉郡	研究、展示学習施設	S造	地上2階
NS	那須の別荘	シーラカンス（工藤　三瓶　小嶋　宇野　堀場　小泉）	栃木県那須郡	別荘	木造	地下1階　地上2階
SSK	大阪市水上消防署仮設庁舎	シーラカンス（堀場　三瓶　工藤）	大阪府大阪市	消防署	S造	地上2階
SS	大阪市水上消防署	堀場弘＋工藤和美／シーラカンスK&H＋三瓶満真／C＋A	大阪府大阪市	消防署	SRC造（一部S造）	地上6階
YA2	WHITE / BLUE　西脇の住宅	伊藤恭行／C＋A	兵庫県西脇市	住宅	S造	地上2階
KB	（仮称）鴻巣市文化センター	小泉雅生＋三瓶満真／C＋A	埼玉県鴻巣市	ホール	SRC造（一部RC造＋S造）	地下1階　地上4階
HN	広島市西消防署コンペ案	シーラカンス（小嶋）	広島県広島市	消防署	—	地下1階　地上6階
KKS	吉備高原小学校	小泉雅生＋小嶋一浩／C＋A	岡山県御津郡	小学校	RC造（一部S造＋木造）	地上1階（一部2階建）
AZU	麻布大学キャンパス計画コンペ案	シーラカンス（伊藤　宇野　小嶋）	神奈川県相模原市	大学	—	—
SYD	下山田小学校コンペ案	シーラカンス（宇野　伊藤　工藤）	福岡県山田市	小学校	—	地上2階
TS	プロジェクトTS	堀場弘／シーラカンスK&H	—	博物展示施設	RC造	地下2階　地上1階
NW	浪速消防署コンペ案	シーラカンス（工藤　三瓶）	大阪府大阪市	消防署	—	地下1階　地上6階
HJ	ハウスジャパン 中間実証住宅-C棟	小泉雅生／C＋A	千葉県浦安市	実験住宅	木造	地上2階
KKY	吉備高原幼稚園	小泉雅生／C＋A	岡山県御津郡	幼稚園	木造	地上1階
AA	朝日新聞社秋田支局	宇野享／C＋A	秋田県秋田市	事務所	S造（一部RC造）	地下1階　地上3階
KHS	K総合学科高校	小嶋一浩＋三瓶満真／C＋A	—	総合学科高等学校	RC造＋S造	地上2階
SHP	（仮称）外ヶ岡交流拠点施設	工藤和美＋堀場弘／シーラカンスK&H	静岡県下田市	博物館（駐車場）	S造＋SRC造＋RC造	地上4階
HKS	福岡市立博多小学校	工藤和美／シーラカンスK&H	福岡県福岡市	小学校、公民館	SRC造＋RC造	地下1階　地上5階
AS	（仮称）愛知淑徳大学新講義棟	伊藤恭行＋宇野享／C＋A	愛知県愛知郡	大学	S造	地下1階　地上5階

※黒い帯のプロジェクトは、コンペ案および計画案

敷地面積	建築面積	延床面積	施工	設計・施工期間	協力事務所
189.64m²	122.40m²	395.80m²	井上組	1985年1月～87年3月	T.I.S. & PARTNERS／創設備設計事務所
153.24m²	76.50m²	151.16m²	双葉建設	1986年4月～89年4月	佐野建築構造事務所
395.90m²	143m²	287.40m²	勝村建設	1986年10月～87年10月	T.I.S. & PARTNERS／創設備設計事務所
663.57m²	95.25m²	86.61m²	稲本建築	1986年11月～87年9月	信和設備工業／小柳出工業
221.65m²	150.48m²	619.40m²	藤田工務	1986年12月～87年12月	T.I.S. & PARTNERS／創設備設計事務所
184.65m²	162.83m²	921.80m²	—	1987年2月～87年10月	T.I.S. & PARTNERS／創設備設計事務所／フェイズアソシエイツ
193.57m²	84.10m²	189.20m²	藤田工務	1987年3月～87年12月	—
—	—	—	—	1987年9月～87年10月	—
220.86m²	126.76m²	220.22m²	—	1987年11月～88年3月	T.I.S. & PARTNERS
95.84m²	78.84m²	366.96m²	北野建設	1987年11月～89年6月	石本建築事務所／T.I.S. & PARTNERS／創設備設計事務所
—	—	—	—	1987年12月～88年12月	—
273.07m²	136.36m²	344.73m²	森川技建	1988年1月～89年3月	T.I.S. & PARTNERS／創設備設計事務所
235.55m²	90.40m²	184.20m²	—	1988年3月	—
235.20m²	202.67m²	700.10m²	河端建設	1988年7月～90年3月	T.I.S. & PARTNERS／創設備設計事務所
234.76m²	171.21m²	1,469.96m²	モリタ建設	1988年10月～91年5月	T.I.S. & PARTNERS／創設備設計事務所
—	1,783.98m²	3,483.78m²	大林組	1989年1月～91年7月	大阪市都市整備局営繕部／T.I.S. & PARTNERS／創設備設計事務所／TLヤマギワ研究所
101.70m²	78.69m²	404.86m²	日建工業	1989年6月～91年7月	T.I.S. & PARTNERS／創設備設計事務所
—	—	140.15m²	大林組（美・フォルム）	1990年1月～93年9月	科学応用冷暖研究所+大林組設備設計部／KBI計画研究所／集工舎
66,000m²	11,043.77m²	11,587.33m²	小松建設工業・三井建設JV	1990年3月～91年9月	小松建設工業
259.14m²	214.31m²	1,147.92m²	佐伯工務店	1990年4月～93年8月	T.I.S. & PARTNERS／創設備設計事務所／設備設計室スガヤ／L.P.A.
54.90m²	48.43m²	310m²	—	1991年3月～91年7月	T.I.S. & PARTNERS／創設備設計事務所
16,500m²	5,010.65m²	7,584.86m²	錢高組・松栄建設JV	1991年8月～95年3月	上野淳／T.I.S. & PARTNERS／創設備設計事務所／GAヤマザキ／ギア設計
約7ha	約1500戸	—	—	1991年9月～95年7月	S.E.D.O.／科学応用冷暖研究所／K.S.P.
—	—	—	—	1991年10月	—
99.33m²	79.09m²	321.40m²	古久根建設	1992年1月～94年6月	松本構造設計室／創設備設計事務所
129.27m²	51.71m²	84.85m²	親松工務店	1992年6月～94年7月	T.I.S. & PARTNERS
890.90m²	605.25m²	1,778.50m²	—	1992年11月～92年12月	—
—	7347.50m²	19,981m²	—	1993年1月～93年2月	—
148.69m²	59.37m²	172.44m²	佐藤秀	1993年6月～96年10月	K3構造設計室／新田建築設備設計事務所
898.62m²	62.66m²	94.40m²	矢島工務店	1993年6月～94年9月	—
69.89m²	40.30m²	110.12m²	葛工務店	1993年8月～95年3月	K3構造設計室／科学応用冷暖研究所
150.12m²	59.94m²	112.16m²	上島工務店	1994年5月～95年7月	—
—	—	—	—	1994年5月	—
約18ha	6,820m²	7,850m²	—	1994年6月～94年9月	—
—	17600m²	47952m²	—	1994年11月～94年12月	—
5,531.85m²	4,871.78m²	4,865.38m²	鴻池組・今岡工業・岩崎建設JV	1994年12月～	本杉省三／オーク構造設計／科学応用冷暖研究所 ／設備技研／S.E.D.O.／L.P.A.／永田音響
364.93m²	218.07m²	723.93m²	真柄建設	1994年12月～98年2月	中田捷夫研究室／創設備設計事務所
1,800m²	—	7,900m²	—	1995年8月～95年10月	佐々木睦朗構造計画事務所／科学応用冷暖研究所
641.17m²	57.13m²	84.45m²	藤和那須リゾート	1995年8月～96年10月	—
600m²	499.37m²	974.35m²	川口建設	1995年12月～96年12月	平田建築構造研究所／末松設備総合コンサルタント
2,239.89m²	約1,100m²	約4,200m²	大日本土木	1996年3月～	平田建築構造研究所／末松設備総合コンサルタント／L.F.A.
368.18m²	129.98m²	162.46m²	ヨリフジ建設	1996年5月～98年4月	松本構造設計室
13,370.29m²	4,480m²	7,800m²	—	1996年6月～	本杉省三／オーク構造設計／科学応用冷暖研究所／設備技研／S.E.D.O.／永田音響／AA Lab
1,718m²	—	5,200m²	—	1996年7月～96年8月	オーク構造設計／科学応用冷暖研究所
19,337.47m²	4,871.84m²	4,583.58m²	大本組	1996年9月～98年3月	上野淳／エアーアーキテクツ／中田捷夫研究室／科学応用冷暖研究所／設備技研
—	—	—	—	1996年10月	S.E.D.O.
22,948m²	4,241.97m²	5,972.62m²	—	1997年2月	東京都立大学上野研究室
—	約3,700m²	約6,000m²	—	1997年2月～	井出添建築設計事務所／佐々木睦朗構造計画事務所／科学応用冷暖研究所／設備技研／S.E.D.O.／AA Lab
—	799.83m²	3,518.63m²	—	1997年5月～97年6月	—
—	83.44m²	139.47m²	まつもとコーポレーション	1997年5月～98年2月	科学応用冷暖研究所／設備計画
1,794.46m²	529.62m²	451.44m²	—	1997年9月～	上野淳／中田捷夫研究室／設備技研
868.10m²	520.85m²	1,160.86m²	中田建設	1997年10月～	構造計画プラスワン／科学応用冷暖研究所／設備計画
56,300m²	14,170m²	19,480m²	—	1997年10月～	上野淳／オーク構造設計／科学応用冷暖研究所／設備計画／オンサイト計画設計事務所
約12,000m²	4,360.50m²	6,811.80m²	—	1997年12月～	オーク構造設計／科学応用冷暖研究所／設備計画／L.F.A.
9,283m²	約3,600m²	約13,000m²	—	1998年1月～	長澤悟／オーク構造設計／科学応用冷暖研究所／森村設計／GAヤマザキ
83,488m²	1806.42m²	約7,743m²	—	1998年2月～	構造計画プラスワン／科学応用冷暖研究所／設備計画

シーラカンス略歴

1985年9月　シーラカンス活動開始
1986年5月　シーラカンス アーキテクツ一級建築士事務所設立
1986年12月 (株)シーラカンス設立
1998年2月　シーラカンスK&H(株)と(株)C+A（シーラカンス アンド アソシエイツ）に改組

受賞歴

1985年　SD Review 85　第2回朝倉賞（氷室アパートメント）
1986年　SD Review 86　入賞（永福の住宅）
1987年　SD Review 87　第4回SD賞〈GIMMICK〉
　　星田アーバンリビング・コンペティション佳作入賞
1988年　"MCH House of Cup"指名コンペティション入賞
　　SD Review 88　入賞〈TRANS〉
1989年　〈大阪国際平和センター〉国際公開設計競技最優秀賞
1990年　吉岡賞〈桜台アパートメント〉
　　東京建築士会住宅建築賞〈桜台アパートメント〉
1991年　〈千葉市立打瀬小学校〉プロポーザル・コンペティション当選
1993年　BCS賞〈大阪国際平和センター〉
1995年　東京建築士会住宅建築賞〈HOUSE TM〉
　　〈(仮称)出雲市地域交流センター〉プロポーザル・コンペティション最優秀
　　千葉市優秀建築賞〈千葉市立打瀬小学校〉
1996年　千葉県建築文化賞〈千葉市立打瀬小学校〉
　　日本建築学会作品選奨〈大阪国際平和センター〉
　　「(仮称)鴻巣市文化センター」コンペティション最優秀
1997年　日本建築学会作品選奨（千葉市立打瀬小学校）
　　日本建築学会賞〈千葉市立打瀬小学校〉
　　「砂丘博物館（仮称）」公開プロポーザル・コンペティション最優秀
　　「(仮称)宮城県栗原総合学科高校」プロポーザル・コンペティション最優秀
　　「(仮称)外ヶ岡交流拠点施設」プロポーザル・コンペティション最優秀
　　「福岡市立博多小学校」プロポーザル・コンペティション最優秀(K&H)

COELACANTH Architects Biography

1985 Began joint activities as COELACANTH Architects
1986 Established COELACANTH Architects Inc.
1998 Reorganized Coelacanth K&H Inc. and C+A (Coelacanth and Associates Inc.)

Awards

1985 2nd Asakura Prize, SD Review 1985 (Himuro Apartment)
1986 Prize, SD Review 1986 (House in Eifuku)
1987 4th SD Prize, SD Review 1987 (Gimmick)
　　Special Mention, Hoshida Urban Living Competition
1988 Prize, MCH House of Cup Competition
　　Prize, SD Review 1988 (Trans)
1989 1st Prize, Osaka International Peace Center Competition
1990 Yoshioka Prize (Sakuradai Apartment)
　　Housing Prize, Tokyo Architects Society (Sakuradai Apartment)
1991 1st Prize, Utase Elementary School, Chiba Proposal Competition
1993 BCS Prize (Osaka International Peace Center)
1995 Housing Prize, Tokyo Architects Society (House TM)
　　1st Prize, Izumo-City Area Exchange Center (Temporary Name) Proposal Competition, Prize for Excellent Architecture, Chiba-City (Utase Elementary School, Chiba)
1996 Cultural Prize of Architecture, Chiba Pref. (Utase Elementary School, Chiba)
　　Selected Architectural Designs of the Architectural Institute of Japan (Osaka International Peace Center)
　　1st Prize, (Temporary Name) Konosu-City Cultural Center Competition
1997 Selected Architectural Designs of the Architectural Institute of Japan (Utase Elementary School, Chiba)
　　Prize, the Architectural Institute of Japan for Design (Utase Elementary School, Chiba)
　　1st Prize, Dune Museum (Temporary Name) Open Proposal Competition
　　1st Prize, (Temporary Name) Kurihara Comprehensive High School, Miyagi Pref., Proposal Competition, 1st Prize, Sotogaoka Exchange Forum (Temporary Name) Proposal Competition, 1st Prize, Hakata Elementary School, Fukuoka-City, Proposal Competition (K&H)

シーラカンス元パートナー
Former Partner, Coelacanth

坂田佳之	Yoshiyuki Sakata

シーラカンス元メンバー
Former Members, Coelacanth

森瑞恵	Mizue Mori
安井雅裕	Masahiro Yasui
鈴木幸呼	Sachiko Suzuki
高木実	Makoto Takagi
岡部裕子	Yuko Okabe
増田祐子	Yuko Masuda
村上美賀	Mika Murakami
奥村俊慈	Shunji Okumura

●シーラカンスK&H Coelacanth K&H

代表	**Co-Presidents**
工藤和美	Kazumi H.Kudo
堀場弘	Hiroshi Horiba
アソシエイツ	**Associates**
一條太郎	Taro Ichijyo
伊藤敬	Takashi Ito
大河原慎史	Shinji Okawara
米谷早苗	Sanae Kometani
菅原雄一郎	Yuichiro Sugawara
鈴木敦夫	Atsuo Suzuki
鈴野浩一	Koichi Suzuno
高橋良和	Yoshikazu Takahashi
林寛行	Hiroyuki Hayashi
松谷仁雄	Kimio Matsuya
向山博	Hiroshi Mukoyama
安田章子	Shoko Yasuda
弓場章史	Akifumi Yuba
吉永健一	Ken-ichi Yoshinaga
協力者	**Collaborator**
松崎隆志	Takashi Matsuzaki
経理事務	**Accountant**
鈴木早苗	Sanae Suzuki

●C+A東京 C+A Tokyo

パートナー	**Partners**
小泉雅生	Masao Koizumi
小嶋一浩	Kazuhiro Kojima
三瓶満真	Mitsumasa Sampei
メンバー	**Members**
加藤峰雄	Mineo Kato
赤松佳珠子	Kazuko Akamatsu
片木孝治	Koji Katagi
吉村奈穂	Naho Yoshimura

スタッフ	**Staffs**
阿品智子	Tomoko Ajina
岩崎健一郎	Ken-ichiro Iwasaki
大西直子	Naoko Onishi
岡野奈美	Nami Okano
北原摩留	Maru Kitahara
久保美奈子	Minako Kubo
佐藤裕	Yutaka Sato
新堀学	Manabu Shimbori
松戸二郎	Jiro Matsudo
光本直人	Naoto Mitsumoto
與田憲真	Norimasa Yoda
元スタッフ	**Former Staffs**
都留理子	Michiko Tsuru
堀岡勝	Masaru Horioka
広報	**Public Relations**
塚田みどり	Midori Tsukada
経理事務	**Accountant**
平田文子	Fumiko Hirata

●C+A名古屋 C+A Nagoya

パートナー	**Partners**
伊藤恭行	Yasuyuki Ito
宇野享	Susumu Uno
日色真帆	Maho Hiiro
スタッフ	**Staffs**
金子敬輔	Keisuke Kaneko
講神泰史	Yasushi Kojin
田中昭成	Akinari Tanaka
都築滋雄	Shigeo Tsuzuki
寺下浩	Hiroshi Terashita
森豊史	Toyoshi Mori
元スタッフ	**Former Staff**
堀田真樹	Maki Hotta
編集協力	**Editorial Cooperation**
塚田みどり	Midori Tsukada
柏木由人	Yoshihito Kashiwagi
長坂常	Jyo Nagasaka

プログラム制作 (p.65)　**AA Lab**

濱野慶彦	Yoshihiko Hamano
文進希	Jinxi Wen
劉慶林	Qinglin Liu

翻訳 (p.23および作品解説)　**Translation**

前島美緒	Mio Maeshima

●フォトクレジット Photo Credits

アーバンアーツ　Urban Arts　p.96上
淺川敏　Satoshi Asakawa　p.58-60、p.97-100（p.58上段、p.99左下は除く）
大橋富夫　Tomio Ohashi　p.114-117
輿水進　Susumu Koshimizu　p.122-123（見開き）
坂口裕康　Hiroyasu Sakaguchi　p.119（中段上から2番目は除く）
佐藤有　Tamotsu Sato　p.56左下、p.57、p.64-65
新建築写真部　Shinkenchiku-sha　p.54-55（見開き）、p.55右上、p.93-95（上段全て）、p.104-105（見開き）
彰国社写真部　Shokoku-sha　p.96下
平井広行　Hiroyuki Hirai　p.5-22、p.50-53、p.61-63、p.76-79、p.133上段
藤塚光政　Mitsumasa Fujitsuka　p.132上段左
山田脩二　Shuji Yamada　p.118下段（マインズ北堀江）

MITSUBISHI
SOCIO-TECHの三菱電機

みんなが待ってたエレベーター。



三菱中低層共同住宅用エレベーター

メルワイド新登場

三菱の中低層共同住宅用エレベーター〈メルワイド〉なら
設置のための制約が少なく、自在な建築レイアウトが可能。
そのうえ、誰にでも快適に利用できる工夫もいっぱいです。
住む人、建てる人、設計する人、
みんなが満足できるエレベーター。
それが、三菱の〈メルワイド〉です。

new 三菱中低層共同住宅用エレベーター
MEL WIDE
メルワイド



みんなが待ってたうれしい特長

マシンルームレス 巻上機を昇降路内に設置するので、ペントハウスが不要。設置レイアウトの自由度も向上。

ワイドなかご室 ダブルベッドもラクラク運べる。間口900mm×奥行1400mmのワイドなかご室。

二方向出入口 かごの前後2方向に出入口が設置可能。乗った方向のまま降りられ、車いすでの利用にも便利。

省エネ+省コスト 省エネタイプなので、一般の住宅用エレベーターに比べ、維持コストも非常に経済的。

【基本仕様】●用途:中低層用共同住宅用●駆動方式:トラクション方式●積載荷重・定員:320kg・4名●定格速度:45m/min.●制御方式:インバーター制御方式●停止箇所:最大5ヵ所●昇降行程:最大13m●ドア形式:電動2枚戸片引き式●かご内法:間口900mm×奥行1400mm●出入口寸法:間口800mm×高さ2000mm●電動機容量:2.7kW

三菱電機株式会社

お問い合わせ・資料のご請求は……三菱電機株式会社 〒107-6150 東京都港区赤坂5-2-20(赤坂パークビル) 本社ビル事業部 TEL.(03)5573-3793

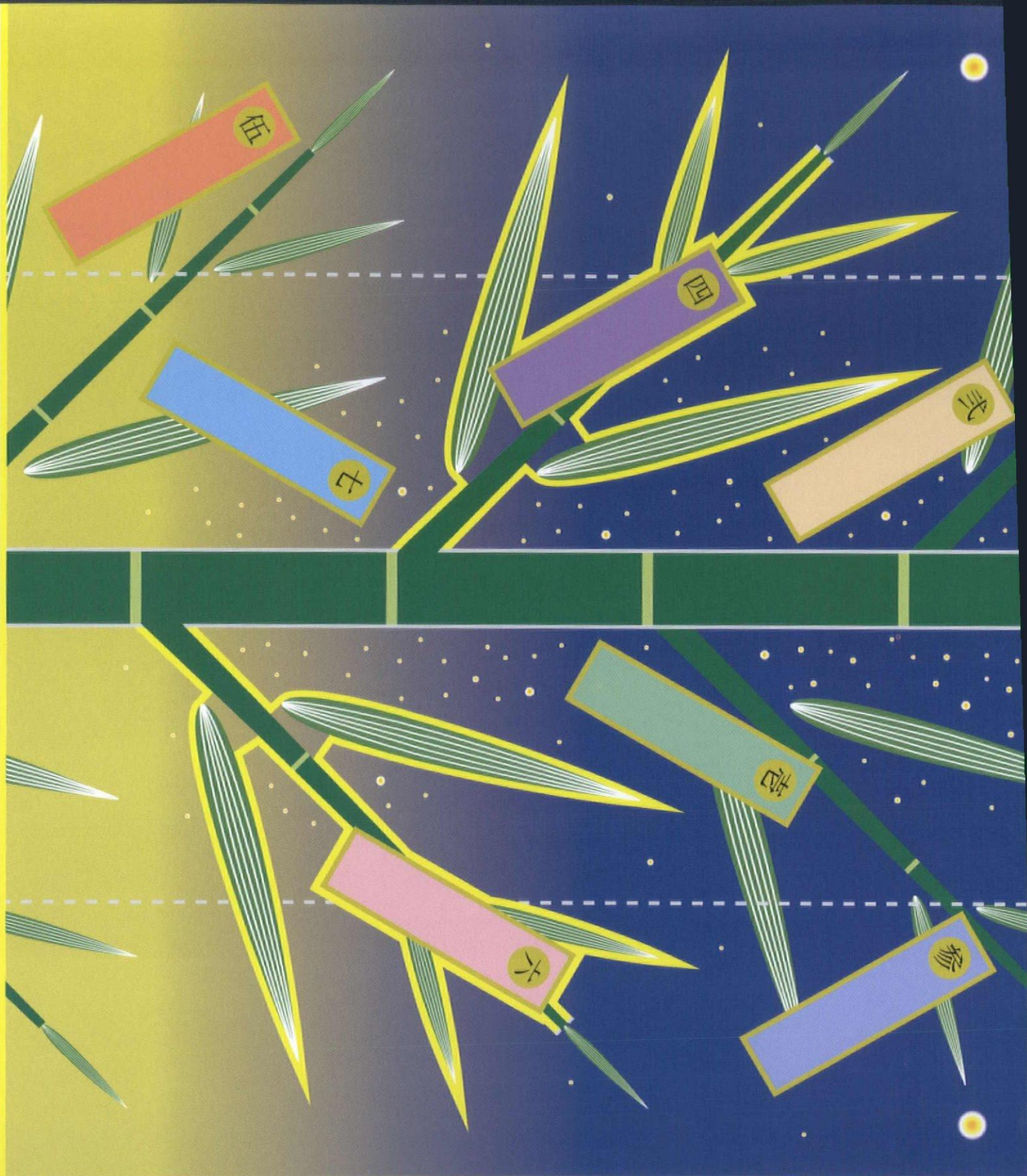


連載❼森島紘史の起こし繪図

日本のかたち紙考

七夕

「たなばた」の語源は棚機（たなはた）であった。古来日本では旧暦7月15日の盆の夜、祖先の霊が地上に降り立ち、わが家に戻ってきて寝食をともにし、また天上に戻ると信じられてきた。村々では聖なる娘が選ばれ、祖先の霊が天下る川や海や湖のほとりにしつらえられた水辺の機屋で祖霊に捧げる衣服を機で織り、用意された棚に置くことを禊（みそぎ）とした。この棚に機で織った衣服を供える風習を「たなばた」と呼んでいたのである。また一方には畑作の収穫祭として「たなばた」を迎える古来の信仰があった。神の乗り物として胡瓜の馬、茄子の



●起こし繪図

切り抜き線

山折り線

谷折り線

牛を供えた。この収穫祭と盆迎えの禊の行事に、中国から伝わった牽牛、織女の天の川伝説が混じり合って行く。

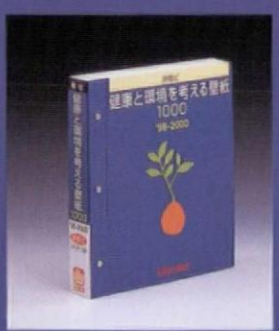
やがて仏教が伝来すると旧暦7月15日の仏教行事、盂蘭盆会と重なり、棚機は盂蘭盆会の準備をする日として7月7日に繰り上げられることになったのである。平安時代には「7」という聖数にこだわり、縁起がかつがれるようになる。7本の針に絹糸を通し機織りが上達することを祈る乞功、7度食事をして7度水浴びをする、7つの食物——桃、梨、茄子、瓜、大豆、鯛、干鮑を供えるなどである。

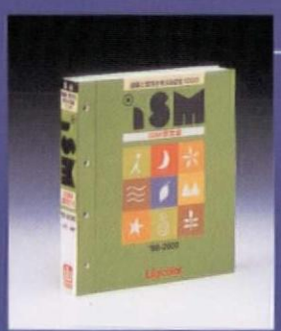
7の魔力を信じる思想は室町時代に受け継がれ、7首の歌を7枚の梶の葉に書く、7遊——歌、鞠、碁、花札、貝合わせ、楊弓、偐などが流行する。更に時代が下ると笹竹を立て、芋の葉の露で墨を溶き梶の葉に7首の歌を書いて下げる風習が現われる。そして笹竹は長い青竹になり梶の葉は短冊にと代わり、願い事も裁縫、詩歌の上達から合格、幸福、成功、恋愛成就へと移り現代の七夕となったのである。

●もりしま・ひろし／名古屋市立大学芸術工学部教授

健康と環境を考える壁紙1000
'98-2000

リリカラは、1996年4月、業界に先駆けて
壁紙にRAL品質基準を導入するなど、
健康と環境を守る製品づくりにいち早く取り組んでいます。
現在、90%をこえる商品にRALあるいはISMマークを表示。
今後、廃棄物の処理法や量の削減などの新たなテーマに挑み、
さらに、人と環境にやさしいものづくりをめざします。





収録商品

- 土に還る壁紙［生分解性樹脂使用］
- ジオエース［水性樹脂使用］
- エコール［リサイクル紙使用］
- エコール・汚れ防止タイプ
  ［リサイクル紙／エバールフィルム使用］
- 紙
- 無機質系素材

壁紙・カーテン・カーペット・タイルカーペット・フローリング・クッションフロア

ひとにうれしい　地球にやさしい

リリカラ

〒160-8315 東京都新宿区西新宿7-5-20 Tel.03-3366-7865

連載：世界の現代美術館探訪

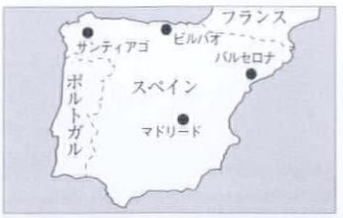
美術館は生まれ変わる

第 11 回

都市に息吹を吹き込む美術館／丹下敏明

現代芸術ガリシアセンター＋グッゲンハイム美術館ビルバオ

■W. O. M²（21世紀美術館調査隊）
太田泰人／神奈川県立近代美術館学芸員
水沢 勉／神奈川県立近代美術館学芸員
渡辺真理／建築家、法政大学教授
松岡智子／倉敷芸術大学芸術学部講師





グッゲンハイム美術館ビルバオ

グッゲンハイム美術館ビルバオ

メイン・アクセスは河とは反対の街の中心に向いている。敷地レベルはこの通りから16m低いところにあり、遠景からの巨大で金属色を放つ異様な姿はこちらからは小さくしか見えず、それよりは青いペンキ仕上げのどちらかといえば落ち着いた管理棟がまず見えてくる。敷地内に入ると、オープン・スペースに出るが、ここからゆるい大階段を降りながら館内に入るという仕組みになっている。

エントランス・ホールからロック・コンサートも企画されたアトリウムに続いているが、ここに55mの高さの吹き抜け空間がある。垂直なのはエレベーター・シャフトのみ。しかも外側にはアルミ材があらゆる方向に取り付けられ、この唯一の垂直性さえもカモフラージュされている。

アトリウムから各展示スペースへと振り分けられているが、展示スペースのなかで最大なものは全長130mあり、これがこの建物の外観上の大きな特徴を作っている。リチャード・セラの作品「ヘビ」がこの中央に展示されている。他は30～40m²程度の部屋からさまざまな形の、さまざまな採光システムは使った展示スペースが全部で19ある。

輝き、しわのある外装

建物として見た場合、なにが一番面白いかというとやはり彫刻的なこの外装がいかにして施工されたかということだろう。構造は鉄骨。メインフレームは内部空間、外部の表現とともになるべくこれに近い形で組まれた。使われた鉄骨の数は約30万、これをタイプ別に分けると25万種類になったといわれている。フレームにはさらに水平方向に角棒が3mごとに取り付けられる。

この水平部材にC型鋼がファサードの面と垂直に取り付けられ、これで奥行きの調整がされ、先端にはパイプが水平方向に付けられメインフレームの直線からよりカーブに近い形に置き換えられていく。具体的には無数の曲線で構成される最終的な形を3mの長さに対して最大4種類の径に絞っていくというのがこの2次部材の果たす役となっている。

3次部材は60cm間隔で垂直方向に取り付けられる。2次部材も3次部材も工場でカーブが付けられ、これを測量器で位置出ししながら取り付けていくというものだ。このプロセスのなかで活躍したのが普通は航空機などのように微妙な形を要求されるデザイン設計に使われるコンピュータ・プログラムCatiaで、この彫塑的で複雑な面を解析している。

構造材が組み立てられた後、2mmの亜鉛メッキ板が張られ、この内側には断熱材外側には防水層、そして仕上げの0.039mm厚のチタンが張られる。

チタンはアメリカ製、これをイタリアで加工している。チタンを仕上げ材として選ぶまでにゲーリーは鉛、銅、アルミ、亜鉛版など、またはさまざまな色も研究したが最終的に色彩、テクスチャー、光に対しての反射性、そして対候性、加工性など、この材料のもつ特性を選択の基準にした。この取り付けは鉛、亜鉛版などが中世からカテドラルの屋根仕上げ、コーニスの雨仕舞いとして使われる時の工法と基本的に変わらないが、二方向に逃げなければいけないためにパネル化し、亜鉛版にネジ止めされた。このパネルもCatiaを使って1枚1枚形状が決められた。

スペインの美術館

スペインの美術館史は啓蒙主義時代にフェルナンド7世が1819年に作ったプラド美術館(Museo Nacional del Prado)[*1]から始まり、文化庁が出している『スペインのミュージアム』[*2]からすると現在900を超えるミュージアムが施設として場を持っていることになる。しかも、このところまだ美術館建設ブームが続いている。

このリストにない近年の主な美術館をあげるなら、まず、ラファエル・モネオがメリダに設計し1986年にオープンしたローマ博物館(Rafael Moneo, Museo Nacional de Arte Romano, Mérida, 1980-1984)があるだろう。これは古代ローマ時代、イベリア半島は行政上4州に分割されていたが、その西端の州ルシタニアの首都であったメリダ(古代名Augusta Emérita)に作られた考古学博物館で、正式名称は国立ローマ美術館。モネオは発掘現場に屋根を架けることでこれを保護し、敷地に隣接する円形劇場へアクセスをつくるという建築的要求に応じている。彼は「このミュージアムは古代ローマ建築の厳格な模倣に落ちることなく、入場者にかつてメリダの町がもっていたスケール感を知ってもらうこと」を設計の趣旨として計画している。[*3] 結果的にはローマのオーダーをあくまで現代建築として適用し、「建築とは壁で、間をとること、プロポーション、隙間、というものがキーになる。」[*4]と彼自身が言っているように、材料の質感さえ押さえ、レンガ積みというこの国での一番ニュートラルな工法で空間構成している。

また、この時期バルセロナでは100年少々前に建てられた初期モデルニスモ建築の代表作であるモンタネール・イ・シモン出版社(Lluís Doménech i Montaner, Editorial Montaner i Simón, 1880年)を改装し、タピエス・ファンデーション(Luís Doménech, Fundació Antoni Tápies, 1985-1990年)がオープンしている。この建物はスペインで最初の、水を美術館の内部に使ったこと、ファサードにタピエス自身のオブジェが置かれたこと、タピエスの膨大な東洋文化に関する書籍コレクションが図書室として公開されていることなどが特色となっている。市の保有する現代では効率が必ずしもよくないが、建造物として保護指定されているものを美術館に転用している。

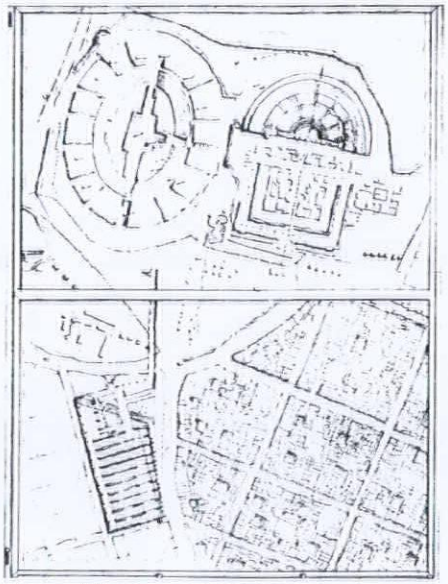
同じ時期に1929年万博の政府館内にある、カタルーニャ美術館の改装があった。ここはロマネスクの壁画コレクションを中心に展示しているが、ガエ・アウレンティが改装を担当している(Gae Aulenti, Museo de Arte de Catalunya, 1985-1993年)。この美術館は改装計画のスタート当初、カタルーニャの古代から現代までの総合的な美術の殿堂になるはずであったが、計画進行中新たに現代美術館の建設の話が持ち上がり、また、他の美術館との移権問題がからみ総合的な展示内容にはできなかった。

バルセロナ現代美術館(BACBA)がこの美術館(Richard Meier, Museu d'Ars Contemporánia, 1987-1995年)で、リチャード・マイヤーがデザインしている。これはラバル地区一帯の再開発計画の一環として考えられている。この辺りには現代文化センター(Piñón+Vilaplana, Centre de Cultura Contemporánia de Barcelona, 1990-93年)も建設されていて、バルセロナの文化施設を集中させ地域開発をするという目的のもとに計画された。マイヤーがこの設計のために最初にバルセロナを訪れたのは1987年の10月で、この時には住民から罵声さえ投げかけられた。[*5] 現在では周辺に画廊もでき、気の利いた店、レストランなど雰囲気はすっかり変わり、オープン・スペースも確保され成功を見せている。

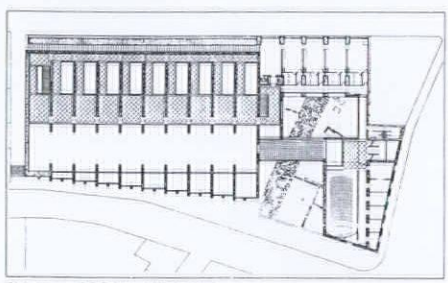
マドリッドではレイナ・ソフィア国立美術センター(Museo Nacional Centro de Arte Reina Sofia)が1986年オープンした。これは王妃の名前が付いているぐらいだから、国家事業としてスタートした一大プロジェクトである。しかし設立の案件は国会を通過したがプログラムは決まっていなかった。カルロスⅢ世の命によって建設され、サバティーニによって設計された旧サン・カルロス病院(1849年以降病院としては使われていない)をミュージアムに変え、スペインの現代美術のコレクションを一堂に見せるということだけが決まっていた。[*6]

この美術館のサイトはアトーチャという都心の一区画で、高度成長期に作られた立体交差[*7]が都市景観を損なうというのでこれを取り壊し、また、隣接するインダストリー・アルケオロジーに分類されるマドリッドを代表する鋳鉄とガラスでできた駅舎の補修修復など、アトーチャ一帯の再整備が決まっていた。[*8] このアトーチャ地区の再開発が始まった時に同地区にあるこの歴史・芸術モニュメントとして国から指定されていたこの巨大な建物の行方が議論されたのだ。

この前身ともいえるスペイン現代美術館(MEAC)の19世紀末から現代にいたるコレクションを1990年移動吸収し、ピカソ、ダリ、ミロ、タピエスなど巨匠の作品を加え、企画展の展示スペースと図書館、20世紀のドキュメント・センター、現代アートのセミナー、現代音楽のコンサート、詩の朗読などの活動の場として運営されている。ここではピカソのゲルニカ[*9]が最大の見世物となっているが、隣接のティッセン美術館(Museo



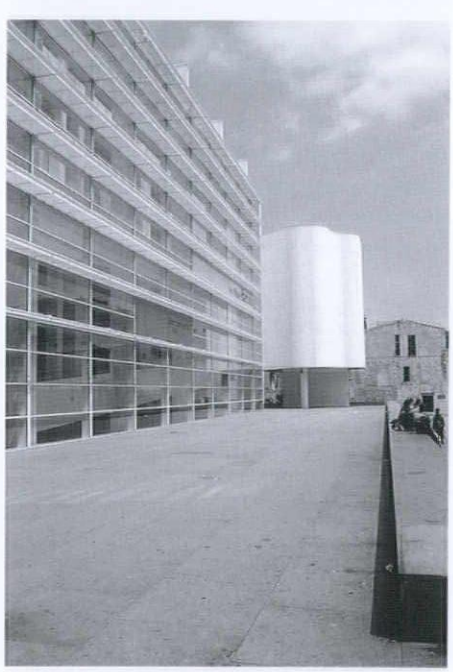
国立ローマ博物館とローマ円形劇場　配置図



国立ローマ博物館　2階平面図



タピエスファンデーション



バルセロナ現代美術館(BACBA)

Thyssen Bornemisza)、プラド美術館とともにゴールデン・トライアングルとして住民はじめ観光客を動員している。

磯崎新のラ・コルーニャの人体科学博物館(DOMUS, 1993-95年)のケースは地方都市にある科学博物館が手狭になり、しかも最近の人体に対する関心に対応して人体博物館が作られることになった。既存のミュージアムを増築するのではなく、観客を広すぎる展示スペースで疲れさせないため、また町に一度ならず、何度も来てもらうという狙いで、町の別な場所に独立した新たなものを作ることになった。

プラド増築コンペ

こういったスペイン美術館近史の中での最大のスキャンダルはプラド美術館の増改築コンペだろう。これは社会党政権最後のビッグ・プロジェクトとされ、公開コンペ形式で設計者を決めることになった。全世界から540案(内スペインから154案)*10が応募され、第1次で10案、第2次で最終的な決定がされ設計者が決まることになっていた。El País紙9月7日号には「審査員の建築家、政治家はプラド増築コンペを該当者なしと決定——スペイン・チーム*11とスイス・チーム*12が佳作。モネオは入選に残る」と始まって、3頁にわたって関連記事を載せた。同日のLa Vanguardia紙は「プラド増築のアイディア・コンペは失敗、当選者なし」、「政府は大プラドをいつ誰が行うのか明解にせず」と2頁をさいている。全応募案が一般公開されたが、El País紙の96年10月10日号を見ると「2kmにおよぶアイデアがプラド増築に寄せられ、マドリッドで展示——磯崎新、サエンス・デ・オイサ、パレン、ハディド、モルフォーシスなど481案」とある。

世界中から500案以上も寄せられたのに当選案がないというのはおかしい。これが審査結果への大半の感想だった。その後、主催者側の反省としては展示プログラムが明示されていなかったことなどあったが、コンペ審査時に政府は増築案を議会で通した社会党政権が倒れ、次いで第1党となった保守党(PP)はプロジェクトを推進する興味が全くなかったというのが本音だろう。これを裏付けるように、前政府下のもと1984年10月20日には増築をするという全体構想が発表されていて、6年後の11月23日にはプラドの常任建築家フランシスコ・ロドリーゲスによって作られた基本構想も作られ、着々と下準備はされていた。

大規模都市改造

スペインの1992年の大プロジェクトが企画された時期というのは、労働者社会党(PSOE)が与党になった時でもあった。フランコの独裁政権が終わり、過渡期を担った中道派(UCD)がこれを見事に乗り越えて分解し、逆に民主政権が軌道に乗りはじめたこの時期の社会党は都市改造にのりだした。書記長、副書記長はじめ社会党幹部がアンダルシア出身だということも関係したかもしれないが、立ち後れて貧しいアンダルシアの首都セビリアでの万博は市内のインフラの他、マドリッドとを結ぶTGVを敷設した。

バルセロナはもともと独立気運もあり、産業に支えられ経済力もあり、資金面でもかなりの部分を自力で補っての都市開発事業をやってのけた。

これまで見てきたスペインの美術館は1992年のセビリアの万博やバルセロナのオリンピックのような大規模な都市開発のプログラムには入っていないが、いずれも地域の活性化ということではかなり一貫した共通性を持っているといえる。

これ以外のスペインの地方都市でも都市改造は社会党政権下、色々な形で行われている。例えば、歴史都市のサンティアゴ、造船、重工業都市のビルバオなどの場合で、これをもう少し詳しく見てみる事にしよう。

歴史都市サンティアゴ

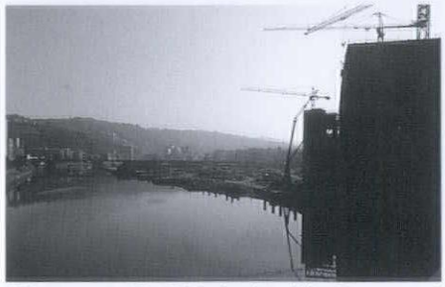
半島の北西端にあるサンティアゴという町は巡礼都市として12、13世紀以降キリスト教世界の聖地として発展してきた。地理的には西欧世界の終端という辺境にありながらも500年の歴史を持つ大学をはじめ、また何よりも巡礼都市として宗教、文化を都市に刻み付けてきたところだ。町は標高264mという小高い丘に、アーモンド状に市域はひろがっている。町の中心にはむろん巡礼の最終目的地であるカテドラルが双塔を聳えさせている。この前の広場を中心にして中世的な規模と都市構造を持つ市街区が広がっている。それでも、時代を乗り切るには何らかの再生を考えなければいけない都市だった。

現在の市長が建築家ということもあり、活性化の構想は旧街区の整備、市街区の拡張にともなう周辺地区の「境界」の整備が中心に新しい都市づくりをするという全体構想から、建築家の選択、デザインまでかなり具体的なヴィジョンを持っている。例えば旧市街の町の看板からネオン、プラスチックを取り外させ、住民が高年齢化している旧市街に若い層を呼び寄せる魅力をつくり、クライフスには体育館、グラッシには学校、ヘイダックには公園の温室、フォスターにはテレビ塔、磯崎新には大学公園を設計依頼している。


バルセロナ現代美術館内部


サンティアゴのカテドラル


サンティアゴ市街


開発されつつある元工業都市ビルバオ。中央に見えるのが、グッゲンハイム美術館



グッゲンハイム美術館ビルバオ　展示室。中央に見えるのはリチャード・セラの作品

シザの現代美術館

これら一連のプロジェクトのひとつで、歴史的にはガリシア文化圏から発展したポルトガルのアルヴァロ・シザが現代美術館を設計している。正式名称は現代芸術ガリシア・センター。古い町並みはユネスコの世界文化遺産に指定されているほどだが、時代を呼び込むために現代美術館がつくられた。サンティアゴの巡礼道が中世までは最果ての地に西社会の文化・伝統伝達の太いパイプとしての役を果たしていたのを再生しようというポリシーがここにある。国際人でガリシアにとって近親感もあるシザはそういう意味でも最適の人選だった。

シザは「ポルトガル人がミーニョ河を越えガリシアを旅すれば、おもしろい経験になる。(中略) シーフードも違うものがある、牡蛎はここにもあるし、つまみもある。通りにはたくさん人も出る。(中略) 御影の存在感、永久性,そのテクスチャーあるいはそのスピリッツ。少し違う。より黄色ががっていてたり、緑がかっていたり、少し黒かったりする。」[*13]と書いている。

敷地は旧サント・ドミンゴ修道院の庭にあたり、一方にはこの修道院の付属教会堂（現在はミュージアムになっている）があり、裏手には墓地が広がっている。通りに面して平行に正面ファサードをつくり、これを21度ずらして墓地に平行に展示室を作っているから全体ではV字型になっている。周辺の市街区への配慮は外壁をサンティアゴ産の御影をマッスに積んでいることでも分かる。内部の展示室はすべてイレギュラーなプランとなり、シザらしいフラージルなおさまりでポエティックな空間がさまざまなところに見える。

工業都市ビルバオ

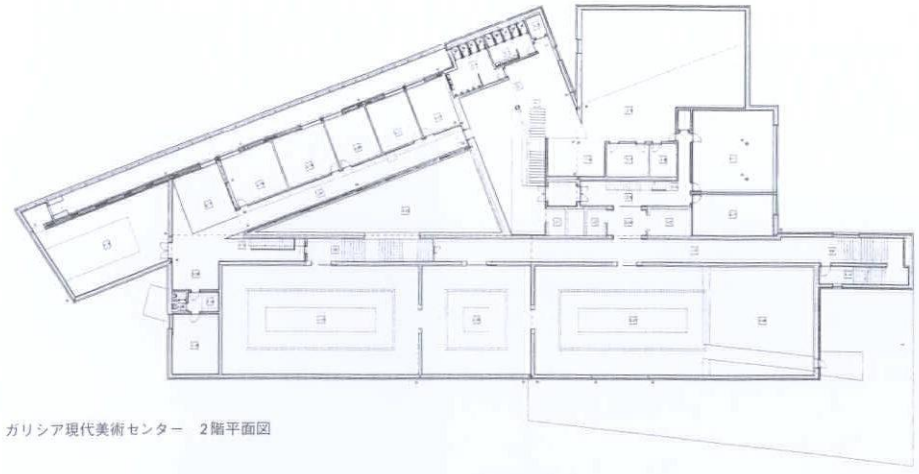
スペインの北西部に位置するバスク地方の主要都市ビルバオにはネルビオン河（Nervión）が流れ、さすがに悪臭は薄らいでいるが、これが市域を越えて河口まで延々と工場が建ち並んでいる。この河はリアス・デ・ビルバオ（Rias de Bilbao）とも呼ばれ、地理的にはリアス式海岸が内陸へ深く切り込み河につながっているから、大型船が16kmの内陸にあるビルバオまで入り込める。このため造船業、製鉄業が産業革命期以降栄えた。しかし、谷間のような狭い場所に大型の工場が建ち並ぶためもあって、スペインで一番住みにくい町として知られている。

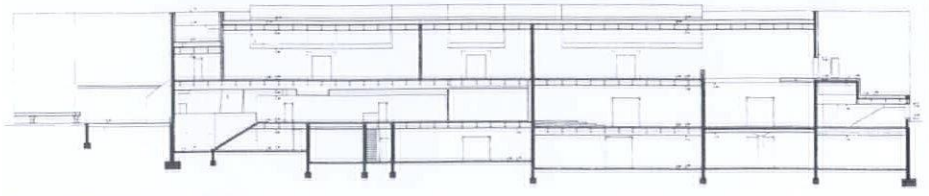
このビルバオに1997年10月17日一般公開を始め世界中に話題を振り撒き、また間違いなく現代建築の代表的な作品として歴史に残るだろうフランク・O. ゲーリーのグッゲンハ


ガリシア現代美術センター室


街並みに静かに溶け込みこんでいる外観


エントランス


ガリシア現代美術センター　2階平面図


ガリシア現代美術センター　断面図

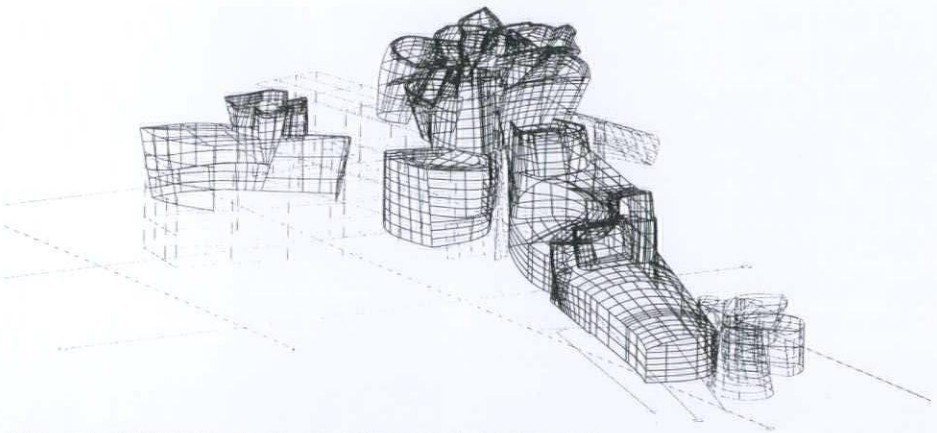
イム美術館がある。

地元のEl Diario Vasco紙の1992年3月8日号にはトーマス・クレンンツがバスク地方政府との契約にビルバオを訪れたとき、「多国籍ではなく国際的なものを作る」という発言をしていた。これはマクドナルドなどの多国籍企業と同じような事業をクレンツが始めようとしているということへの弁解であったのだが、本当のところはゲーリーのグッゲンハイムのデザインとマクドナルドのデザイン・ポリシーの区別に困ったのではないか。しかし完成してみると重工業都市から、サービス産業へ移り変わるというビルバオに一歩を踏み切るきっかけになったのは間違いがない。グッゲンハイム美術館ビルバオにはコンテナ・コンテンツ議論も市民からは起きていない。

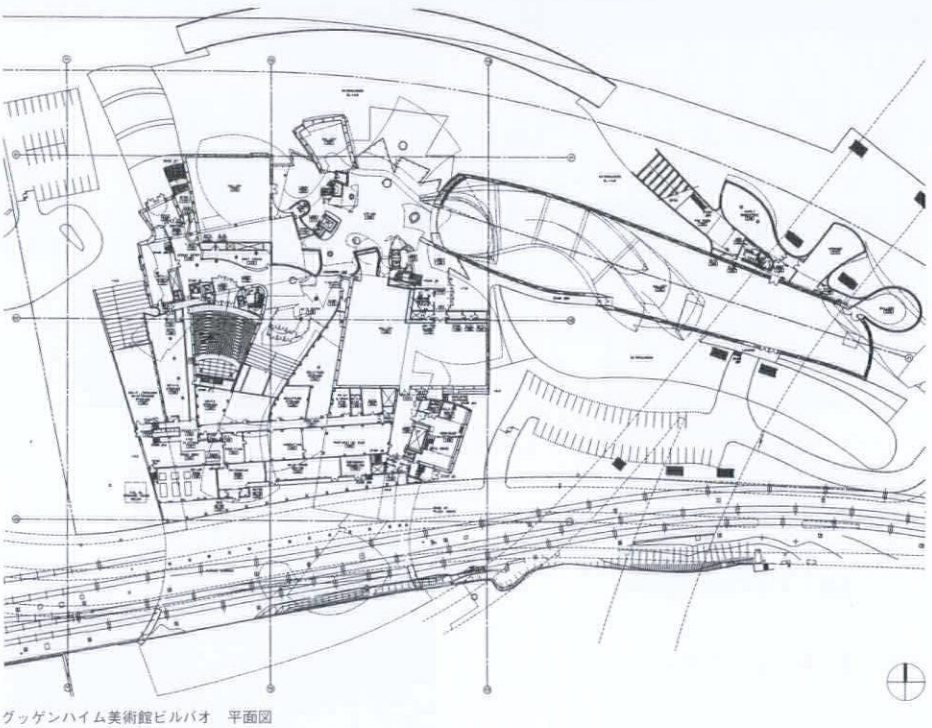
町は、この異色な美術館の建設というだけでなく、既にノーマン・フォスターの地下鉄、サンティアゴ・カラトラバの歩道橋を完成させていて、カラトラバの空港ターミナルも建設中、グッゲンハイム周辺の都市計画もシーザ・ペリによって構想が作られている。

スペインでの近年の美術館建設は町の構造を変えようとする力をもっている。

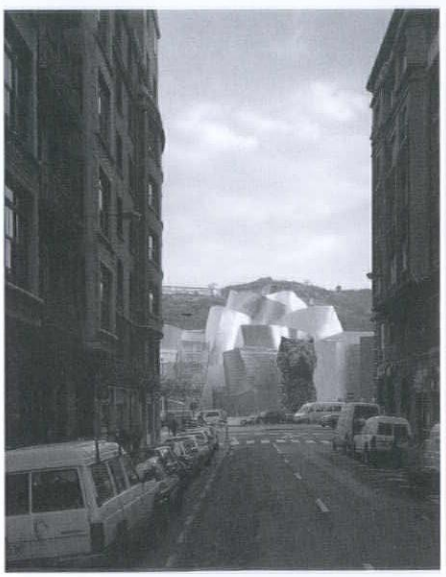
●たんげ・としあき／建築家、在バルセロナ



グッゲンハイム美術館ビルバオ。コンピューター・グラフィックスによるドローイング



グッゲンハイム美術館ビルバオ　平面図



美術館データ

●現代芸術ガリシア・センター
（Centro Galego de Arte Contemporánea）
竣工年＝1993年
設計＝アルヴァロ・シザ・ヴィエイラ（Álvaro Siza Vieira）
所在地＝Valle Inclán s/n Santiago de Compostela, Spain

●グッゲンハイム美術館ビルバオ
（Guggenheim Museum Bilbao）
竣工年＝1997年
設計＝フランク・O.ゲーリー（Frank O. Ghery）
敷地面積＝32,500m²
延床面積＝24,000m²
所在地＝Av. Abandoibarra, 2 Bilbao, Spain
ホームページ＝http://www.bm30.es/guggenheim

写真＝鈴木久雄（p.141、pp.144～146）

註

*1　設計はJuan de Villanuevaで自然科学博物館として計画されたが、ナポレオンの侵略以降、それまで各所に散らばっていた王室の美術品を一個所に集めて管理しやすいようにと美術館に変更された。

*2　Ministerio de Cultura, Museos y colecciones de España, Madrid, 1986

*3　Arquitectura española contemporánea, Madrid, 1989, P.493

*4　同上

*5　El País紙1987年10月21日号

*6　もっともクエンカにアブストラクト美術館（Museo de Arte Abstracto Español, Cuenca）があり、1966年オープンしている。スペインの現代作家のコレクション。

*7　Glorieta de Carlos Vで、フランコ政権の都市計画を象徴するような立体交差であったため、社会党政権はあえて壊すということに力を注いだともいわれる。

*8　近郊電車専用の新駅と構内総合計画はラファエル・モネオで1985～88年に行われ、その後旧駅舎はマドリッド・セビリア間を結ぶAVE（スペイン版のTGV）の待ち合いスペース兼市民のオアシスとして巨大な温室に変えられている。

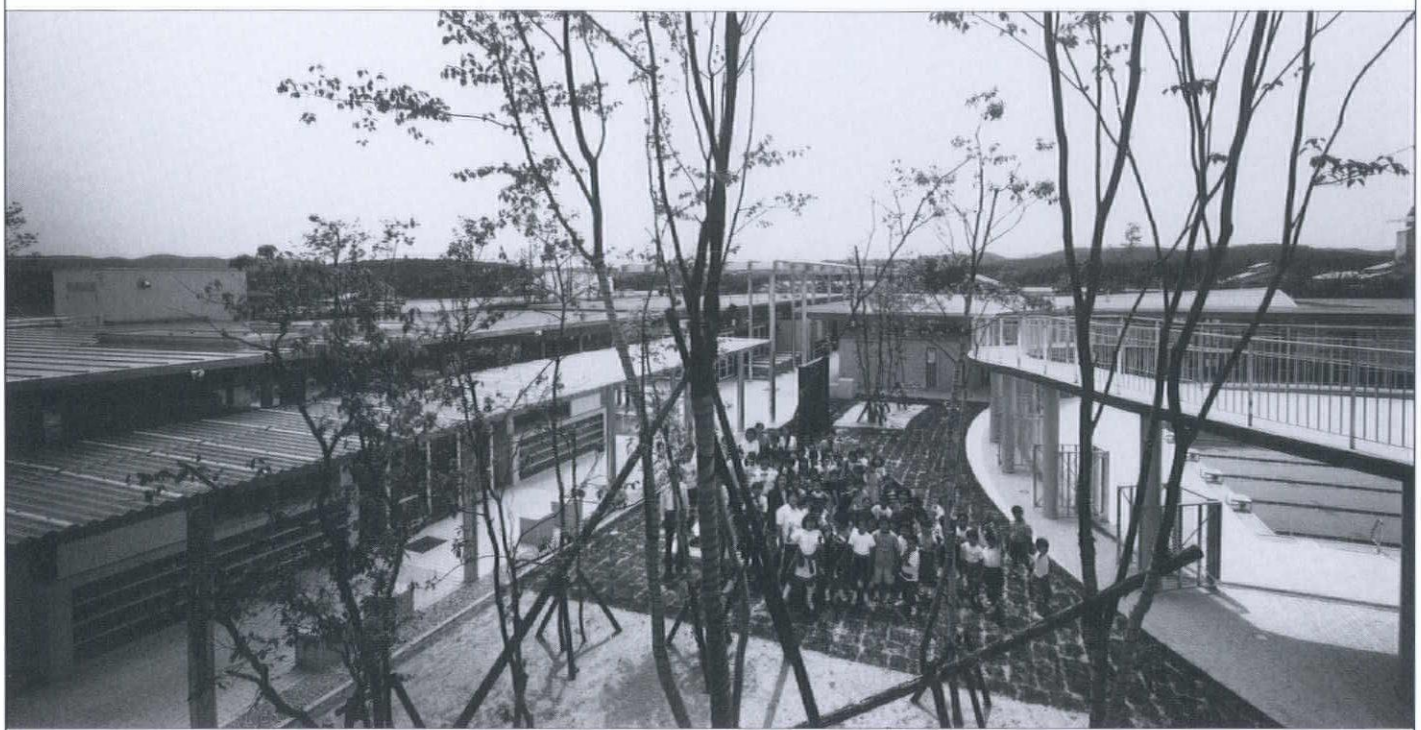
*9　1992年7月27日にプラド美術館別館からゲルニカは移動された。

*10　ボンビドゥ・センター・コンペ応募案は681で、こちらは増築だということを考えれば参加者はかなり多かったのではないか。

*11　マドリッドの建築家夫婦 Beatriz Mateos, Álberto Martinez Castillo

*12　Jean Pierre Durig, Philippe Rami

*13　Alvaro Siza, Centro de Arte Contemporánea de Galicia Arquitecto, Santiago de Compostela, p.11



吉備高原小学校　設計：㈱シーラカンス

ROOF CULTURE.

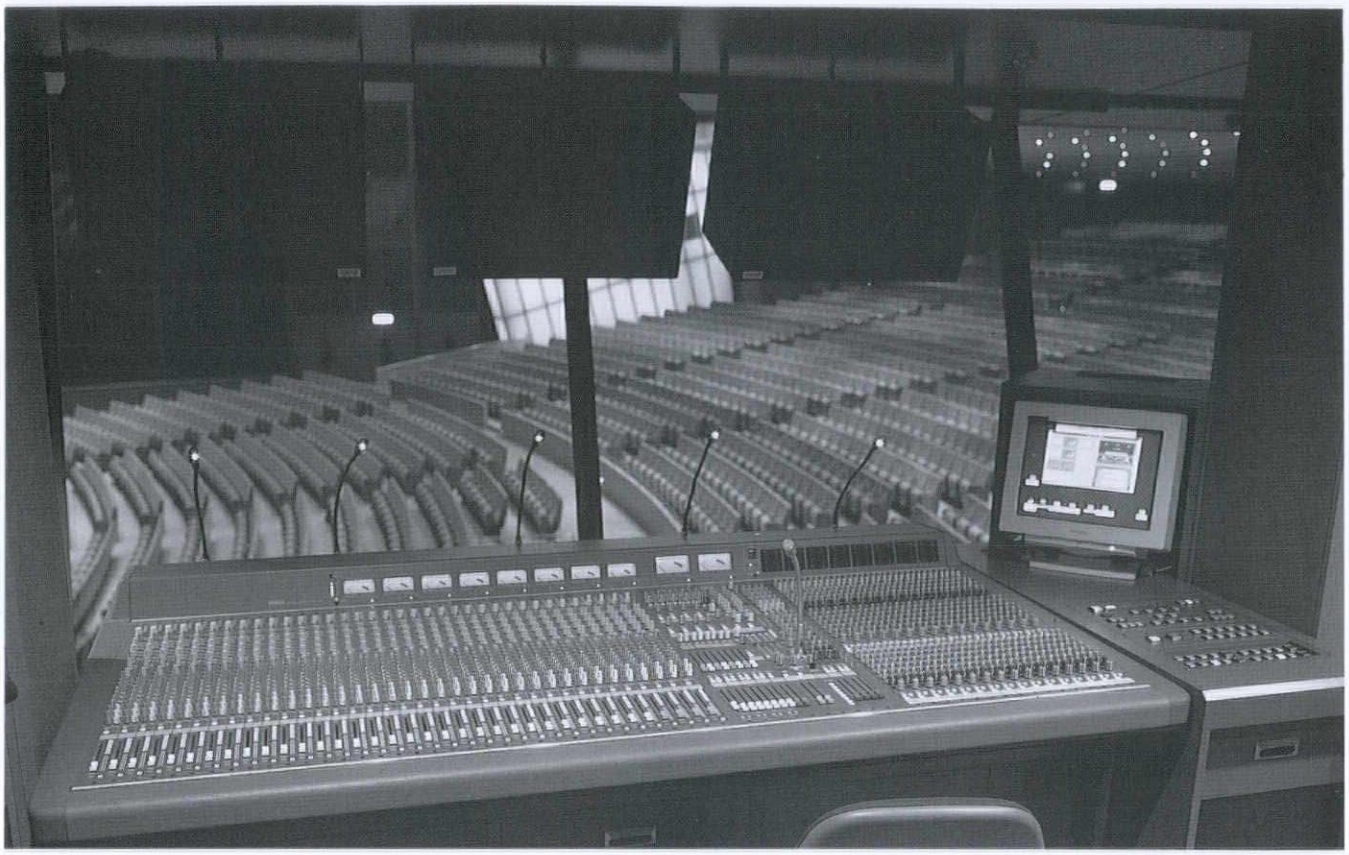
ステンレス防水工法は、屋根を超えた屋根。

P&Pステンレス防水工法が登場した1980年代から、数多くの建築家が、フラットだった建物の屋根を、アートな感性でさまざまな形に表現しはじめました。例えば、屋根の複雑な曲面が、たおやかにウェーブしたフォルムやドーム。ときには鋭く天を突きさしたメタルアートの彫刻のように重々しい屋根など、その形状は多種多様です。なかには、建物の全体を一枚の防水メンブレンで覆ったものまで、まさにP&Pは、建築家が、時代が求めた防水工法として、屋根をアートの領域まで、深めました。

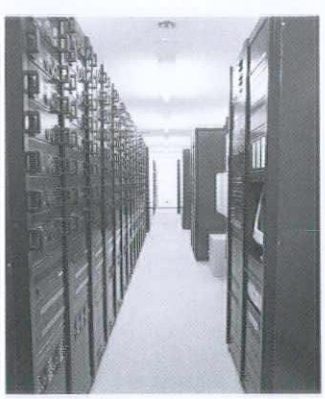
P&Pステンレス防水工法

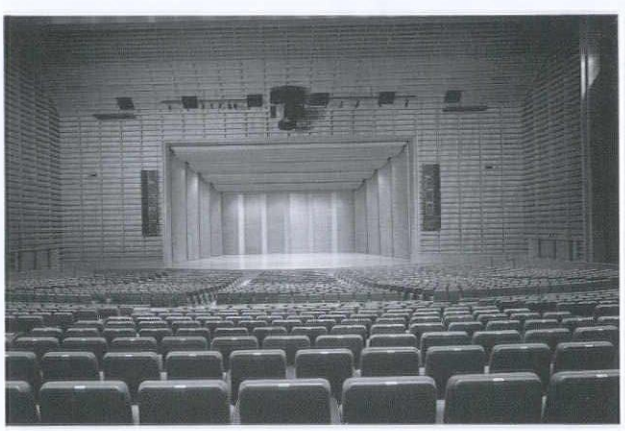
住友金属建材株式会社

本　　社　〒550-0002
大阪市西区江戸堀2-2-1　江戸堀センタービル　　TEL.06-447-2830
東京本社　〒103-0001
東京都中央区日本橋小伝馬町7-2　古賀オールビル　TEL.03-3660-1901



思わず触れたくなるようなそんな音を創っています。





写真：東京国際フォーラム

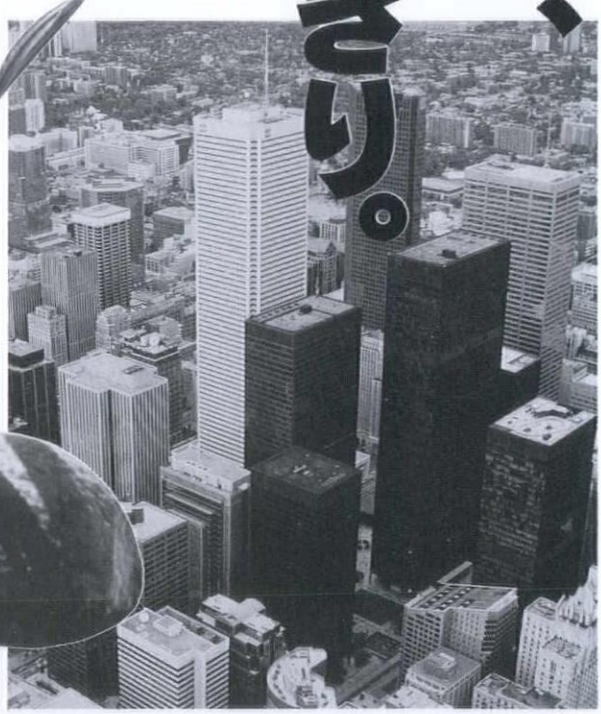
「音の心」を伝えます。

ヤマハサウンドテック株式会社

本　　社／〒103-0014 東京都中央区日本橋蛎殻町1-24-8　TEL(03)3639-2221㈹ FAX(03)3639-3433
関西支社／〒532-0011 大阪市淀川区西中島4-7-18　TEL(06) 305-2221㈹ FAX(06) 305-3760
名古屋営業所／〒460-8588 名古屋市中区錦1-18-28　TEL(052)222-6566㈹ FAX(052)203-5906
九州営業所／〒812-0011 福岡市博多区博多駅前2-11-4 ヤマハビル　TEL(092)476-3264㈹ FAX(092)472-5329
浜松出張所／〒435-0054 浜松市西塚町313-4番地　TEL(053)460-9186㈹ FAX(053)466-0616



この世に雨の、降るかぎり。



自然が私たちに雨と光を与えてくれる限り、
今日もどこかで新しい生命が芽生えます。
私たち日新工業の防水材料も、
人々が快適な暮らしを望む限り、
建築と共に今日もどこかで生まれています。
多様化する都市空間の生活環境づくりにおいて、
日新工業はつねに新しいトレンドを見据え、
時代のニーズにフレキシブルに応える
防水材料・工法を開発しつづけています。

アスファルト防水 | 合成高分子シート防水 | 塗膜防水 | 改質アスファルト防水 | 土木防水 | シングル葺き

マルエス 日新

総合防水メーカー

日新工業株式会社

営業本部■〒103-0005/東京都中央区日本橋久松町9-2 ☎ 03 (5644) 7211 (代表)

札幌 ☎011(281)6328(代表)
仙台 ☎022(263)0315(代表)
大宮 ☎048(642)5811(代表)
東京 ☎03(5644)7221(代表)
千葉 ☎043(227)9971(代表)
横浜 ☎045(316)7885(代表)
名古屋 ☎052(933)4761(代表)
金沢 ☎0762(22)3321(代表)
大阪 ☎06(533)3191(代表)
高松 ☎0878(34)0336(代表)
広島 ☎082(294)6006(代表)
福岡 ☎092(451)1095(代表)



書評

『DISCONT不連続統一体──吉阪隆正+U研究室』

評者=古谷誠章

吉阪隆正をめぐる断片



『DISCONT不連続統一体──吉阪隆正+U研究室』
アルキテクト=編
B5変形　652頁
丸善　7000円

1974年5月、入学したての僕は、新入生オリエンテーションのために初めて八王子の大学セミナーハウスに行き、吉阪建築のまさに洗礼を受けた。早稲田に入って以来数々の建築家の名前を耳にし、それでも少しばかりは名作と言われる建築の知識を持ち始めていたが、この建築ほど、いわば大学で学んだ建築の原点として、その後の僕の考え方に影響を与え続けているものは他にない。しかもそれは瞬時に理解される啓示のようなものではなく、むしろ親の小言か冷や酒のようにずっと後になってから効いてくる種類のものだった。地形とは何か、人の集まりとは何か、長い時間をかけて徐々につくるとは何か……。

当時の吉阪の学部の講義は住宅に関するものだったが、ある日の授業で各自のノートにたくさん正方形を描くように言われた。続けてそれを思いつく限りの方法でふたつに分割せよと言う。みんなしばらくは縦だの横だの斜めだのとまじめに考えていたが、そのうちもう他の方法が思いつかなくなって飽きてきた。吉阪はずいぶん長いこと机を廻ってみていたが、時間が来ると何の説明もなく、じゃあ今日はこれで終わりと出ていってしまった。その後も一切の種明かしはなく、僕の謎解きはなんと現在にまで及んでいる。今思うとまったく禅問答のような講義だ。しかしだからこそいまだに突然、こんなやり方もある！なんて別の解を思いついたりする。

吉阪の方法は、そのもとに集まる人々のそれぞれの力を十二分に引き出すことから始まるように思う。ただ引き出すだけでなく、共同することでどんどん成長し革新していくとでも言おうか。本の表題にある「不連続統一体」は、建築の形象に関してだけでなく、そのような共同作業のあり方にも確実に現れている。互いに異なった個性を持つ人々が相乗的に何かに取り組むとき、やりとりするメッセージは一見完全に筋の通ったものより、断片化された未完のものの方が喚起力がある。言葉は荒削りのまま素直に発せられた方がいい。

この本はそのような「吉阪+U研」の本質を見事に描き出している。決して生涯の仕事の全容をつまびらかに解説するものでもないし、完璧な図版で作品をくまなく写し出すものでもない。しかし彼らの携わってきた建築が、これからの将来に向けて、これから建築を志す未来の人たちに向けて、その想像力を喚起するであろう断片がゴソゴソ詰まっている。

本文中にある、大学生時代に遭遇したという内モンゴルの泥づくりの家の話、このほんの短い紹介文が触発するイメージもものすごく大きい。その後いつまでも心をとらえ続けたが、二度と再び発見することができなかったというこの家は、一種の原点である。しかし、おそらくこれは茫洋とした草原にあって、吉阪の目によって瞬時に読み解かれ、初めて原点化されたのではないか。営々と続けられてきた生活の形を、それに惹きつけられた目で汲み上げて、さらに抽象化することによって初めて建築的原形となったのである。吉坂とその仲間たちの発見的手法はすべからくこうした力を基にしている。

自邸での「1年近く、バラックの中からこの部屋にも何もなっていない重層の土地を眺めて暮らした」の下りも極めて示唆的だ。原因は資金的な不可抗力であるにせよ、それを得難い本質的な価値に転化する力もなかなか余人の及ぶところではない。僕が早稲田の助手として本庄高等学院の設計を手伝っていたとき、不意に部屋にやってきて「君、これを一遍に建てちゃいけないよ。最初の年は2クラス分だけ、そして彼らと一緒に考えて毎年少しずつ増やしなさい」と言われた。その教えはまったく実行に移せなかったが、できていれば結果はだいぶ違っていただろう。

先日「DISCONT展」第二期の座談会のために久しぶりに八王子に行った。随分と増殖もし、変化もしていた。シンポジウムの最後に大竹十一さんが黒板いっぱいにセミナーハウスの建具の原寸を描き、まるで昨日のことのように熱弁を奮ってそのデザインの趣旨をひとつひとつ説いて聞かせてくれたのが印象的だった。

眼前にあるものをただ眺めているのではなく、その核心を読み解こうとすることに無限の新しい可能性がある。この本は著作としての吉阪隆正集とも異なり、いわゆる一般的な作品集とも異なり、文字どおり「吉阪+U研」をめぐるさまざまな事物が不連続に統一された「束」のような本である。あたかも吉阪がそこにいるかのように感じられるのがいい。

●ふるや・のぶあき／建築家、早稲田大学教授

Book Review

書評

『コンピュータ・グラフィックスの軌跡』

評者＝竹内オサム

コンピュータ・グラフィックス創造主の博覧会



『コンピュータ・グラフィックスの軌跡』
藤幡正樹＝監修
A4変形　224頁
ジャストシステム　12000円

コンピュータ・グラフィックスと言えば、ほんの数年前までは大変高額な投資と専門知識によってのみ実現される、いわばインテリで金持ちにだけ許された研究的ビジュアル表現だったはずである。ところがどうだろう、最近では、そこそこの3Dグラフィックスがつくれてしまうソフトウェアが、入門用のパソコンのおまけに付いて来るほど身近な存在になっている。モデリングやレンダリングといった言葉さえ知らずに、何気なく3Dグラフィックスを創ってしまうパソコン初心者さえ少なくないであろう。

このような時代に3Dグラフィックスを中心に、これまでのコンピュータ・グラフィックスの変遷を紹介する本が出版された。この本の監修にあたっている藤幡氏は間違いなく日本のコンピュータ・グラフィックスの第一人者である（私をはじめとして、藤幡氏の無機質でかつ有機的なフォルムを持ったビジュアル表現に刺激を受けた者は少なくないはずである）。

編集内容は、藤幡氏が、最もコンピュータと格闘されていたであろう、80年代から90年代にかけて（コンピュータ・グラフィックスが視覚的なリアリティーを確立する少し前の時代）の作品を中心に、実際の作品とその作品を制作した技術者や研究者、そしてアーティストの言葉によって紹介してゆく、といった実にシンプルな構成が採られている。藤幡氏は作品の順を「球体からはじまって、球体で終わるという構成をとった」と記されているが、それに関しては便宜上のことで、最後に別の作品が来たところで大きな影響はないようにも思える。一見オムニバス的で、作品単体ごとの関連性は無いのであるが、当時、革新的な技法やアイデアを用い制作された、70点近くの作品はどれも個性的で実にチャーミングである。コメントも作者によって様々な価値観やこだわりがあり、当時の苦心やエピソードなども、とても興味深く読みとることが出来る。

それにも増して興味深いことは、技術者にしろ、アーティストにしろ無から有を産み出すために、様々な障害を克服することで、今まで得ることの出来なかった動きや、質感に到達していることだ。つまり、意識するしないにかかわらず、コンピュータという閉じられた世界の中で作者が一様に創造主としての役割を果たし、作品にある種の命を吹き込んだということである。彼らは挑戦者であり、開拓者であったがゆえに創造主になり得たのだ。

この本はこういった構成をとることで、直接的に論じるのではなく読者に創造性に対する意識の重要性を持たせることに成功しているように思う。これは監修にあたっている藤幡氏の創造性に対する意識が非常に高いレベルにあることの現れであろう。

もうお解りであろうが、この本はいわゆるHow To本ではない。むしろ誰にでもわかりやすく書かれた伝記モノといった本に近い。もちろん制作者の言葉などには専門的な用語も使用されていたりするのだが、巻末には用語解説集なども付いていて、ある程度のコンピュータの使用経験がありさえすれば、実際それほど障害になることもない。ただ最初のうちは、用語やレンダリングに関するアルゴリズムの解説など目白押しなので、いささか難解ではあるが、そこさえクリアすれば、後はそれほど苦にはならないはずである。実際ここで紹介されている技術やアルゴリズムは、今ではごく一般的に使われているものなので、その効果や応用範囲も比較的イメージしやすい。

私個人にとって、この本は思っていた以上に興味深いものであった。ここで取り上げられている作品の多くは私が当時リアルタイムで感銘を受け、また脱帽した作品に他ならなかったからである。もしこの本が6、7年前に出版されていたとすれば、現在とは違う意味を持ち得たであろうことが、少し残念ではある。ただ、この本は私のような者に読ませるために出版されたものでは無いのだろう。では読者のターゲットはだれなのか？　藤幡氏はあとがきで次のように記している。

——コンピュータ・グラフィックスがもたらしてくれた驚きと発見を、どのような形で次の時代をつくるために役立てることができるのかは、私たちの側の問題です——

創造、発展期を過ぎたコンピュータ・グラフィックス世代の創造性に期待したい。

●たけうち・おさむ／グラフィック・デザイナー

Book Review

メトロポリタンライブラリー

1998年の評者＝
渡辺武信／太田佳代子／港 千尋

今月の評者＝渡辺武信



『本気で家を建てるには』 村瀬春樹＝著
新潮社　1400円（税別）



『「家をつくる」ということ』 藤原智美＝著
プレジデント社　1800円（税別）



『世界で一番住みたい家』 赤池学＋金谷年展＝著
TBSブリタニカ　2000円（税別）

建築家抜きで語られる住宅論に接して

マイホームを建てようとする人の参考書を3冊読み比べてみた。この種の本は、建築家や住居学の研究者などの専門家によって数多く書かれているが、今回の3冊は、専門家ではないジャーナリストが、住宅の生産現場を取材して書いた点で共通している。私も住宅設計者の立場からいくつかの本を書いているし、その内容にはいささかかの自負を持ってはいるが、それでもこれらのようにまったく違うスタンスから書かれた住宅論から学ぶことも少なくなく、建築家仲間の書いたものよりもむしろ面白かった。もちろん本の内容に対する反発や懐疑も少なからずある。しかし、これらの著者たちは、住宅についてはアマチュアでも物書きのプロだから、建築家が通常は接触しない住宅メーカーの経営者、開発担当者、下請け専門の工務店などからの情報収集が上手だし、そうして得た材料の読ませ方もよく心得ているので、「なるほど」とか「それはないだろう」などと対話をしながら、またたく間に3冊読破してしまった。

『本気で家を建てるには』は「主夫」の先駆的体験を綴った快著『怪傑！ハウスハズバンド』(晶文社、1984年)の書き手によるもので、刊行当時この本に感銘を受けていたので最初に目をつけた。前著のとき子育ての真っ盛りだった著者は、ふたりの子供がハイティーンに達して住まいが手狭になった90年、夫婦双方の親を含む3世帯住宅を建て始める。今回の著書の中心はその時の建築主体験だ。この夫婦は前の家をアメリカから材料一式を輸入し、自分たちの労力も提供して建てているから、いわば建築主のセミプロである。したがって、ペアガラスの断熱効果とか通風の大切さなどについて実践的知識を持っているし、建築の専門用語を分かり易く解説する手際もいいので、これから住まいを建てようとしている人には役立つだろう。しかし、そういう建築家に分かっている部分はとりあえずどうでもいいとして、分からないというか、不思議なこともたくさん書かれている。例えば「工事中に、あなた(＝建築主・引用者註)がしなくてはならないこと」が詳述されていて、それはそれで一般の方の参考になるのだろうが、「基礎配筋のチェック」「コンセントとスイッチの位置決め」などを「しなくてはならない」のは不思議である。これらのことは、建築家が設計すれば設計監理の一部だし、設計施工でもちゃんとした工務店がやれば施工責任のはずだ。また竣工直後に排水が詰まる事故があり、それをきっかけに「契約図面に給排水の配管図がない」ことに気がついた、というのも、私たちの世界では考えられないことである。これらの記述は、日本の一般住宅の施工レベルがいかに低下しているかを実感させるが、かと言って、すべての住宅を建築家に設計させろと言うのも非現実的なことは承知しているので、具体的な対策も思いつかぬまま呆然とした。

『「家をつくる」ということ』は、芥川賞作家が商品化住宅の分析を通して現代の日本人の平均的な住まいの「好み」を探ったものである。中心はミサワホームの「蔵のある家」という商品の分析で、実際の流通過程(下請け構造)にメスが入っていないのは物足りないが、企画開発の担当者からの直接取材は新鮮で、市場動向を探ることがおのずから日本の住文化論につながっていくのを知ると、メーカー側にも建築家と違う視野を持つ優れた人材がいることが分かる。さらに面白いのは、著者のファンである精神科医が対話の相手として参加していることだ。この医師は欧米的個人主義の信奉者で、例えば「情報というのは言葉だ」「日本の家族が情報化時代に対抗するためには、気配に頼る習慣を脱し、語ることを始めなければならない」と言う。それが住宅メーカーのそれなりに鋭い現実追随とは違う視点を提示し、中間の立場の著者を戸惑わせるのが面白い。ちなみにこの「言葉」観は、私が最近『SCIaS』5月号(朝日新聞社)の特集「21世紀的住まいの人間学」に書いた小論にも通じる。

『世界で一番住みたい家』は題名の印象とは異なり、欠陥工事、ハウスシック、廃棄物など住宅をめぐる諸問題を相互に関連させつつトータルに論じた好著だ。取材対象が北海道の地場産業の「木の城たいせつ」というメーカーに偏っているのが少し気になるが、住まいの獲得の際に私的欲望を公共性とバランスさせよ、という基調は新鮮であり、「根源的な、当たり前の欲望に目覚めた時、家が変わり、地域が変わり、今より持続可能な地球が築ける」という結論には説得力がある。

それにしても3冊を通じて、住宅問題が建築家をまったく登場させずに論じられていることには、今更ながら私たちの職能の限界を感じて憂鬱になる。これが日本の経済社会構造の必然的反映だとすれば、卑屈になる必要はないが、かと言って声高に職能論を展開しても効果はなかろう。結局、私としては、志は高く姿勢は低く、というこれまでの生き方を続けるしかないのかと思うのだが、ご同業の諸兄はいかがお考えでしょうか？

●わたなべ・たけのぶ／建築家



岡山県 吉備高原小学校　設計／シーラカンス





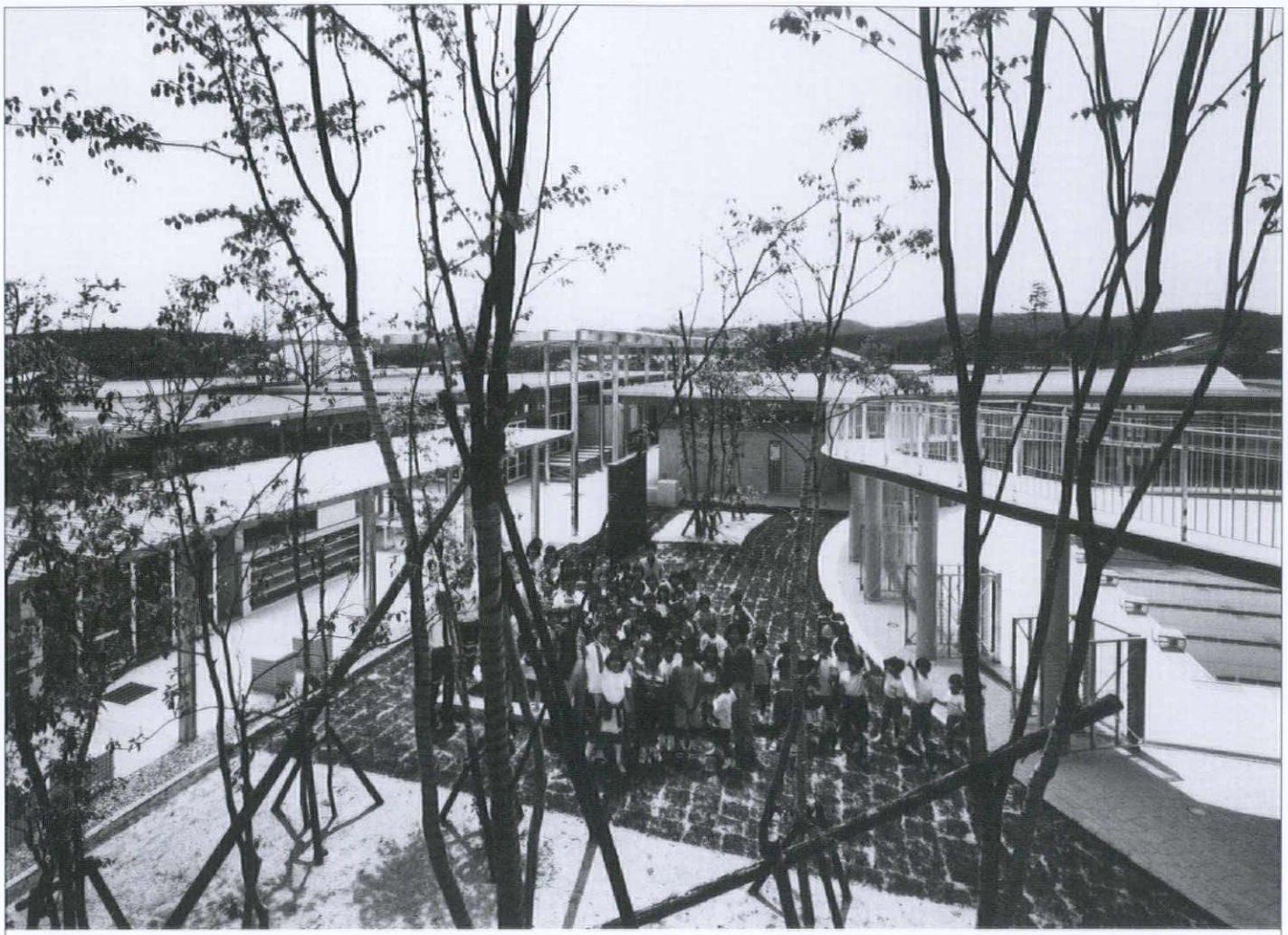
個性化教育には、
個性的な家具がふさわしい。
コクヨはそう考えます。

児童の個性や能力を伸ばす指導のもと、
よりのびのびとした環境で学習させる
オープンスクールが全国規模で増えています。

コクヨはこれら新しい学校形態にもトータルに対応。
スペース効率、質感、意匠、価格と
すべてにわたって高いクオリティを発揮し、
のびのびとした「学び舎」づくりに貢献します。

コクヨ株式会社　BC営業本部 営業開発部　〒100-0013　東京都千代田区霞が関3丁目3番2号　TEL(03)5510-4186

お問い合わせ、ご相談はフリーダイヤル(全国共通)
お客様相談室 0120-201594
お客様相談室FAX 0120-060660



吉備高原小学校

未来のおとな達へ…

君たちは今はまだ子供だけれど、おじさんたちが皆で作ったこの立派な小学校で、しっかり勉強して立派な大人になってほしい。
君たちには未来に向って「心の扉と窓」を、あけはなってほしい。
テクノ・ナミケンの願いです。

ORIGINAL & ORDER SASH of TECHNO NAMIKEN

TECHNO NAMIKEN

テクノ・ナミケン株式会社

550-0013 大阪市西区新町1丁目4-26 栄泉四ツ橋中央ビル
TEL.06-533-3855(代)　FAX.06-533-3852

海外レポート

ベルリン発、コールハース オランダを語る

from Berlin

上原雄史

4月20日から5月末日まで、ベルリンのアエデス・オスト・ギャラリーでOMAの在独オランダ大使館基本設計の展覧会が開催されていた。ベルリン遷都を視野に入れたタイムリーな企画なのでレクチュアの内容などを併せてここで紹介しよう。まず、コールハースを公募で選びベルリンで起用する背景を探り、そして彼の提案とその建築的な効果を私の建築家としての10年間(OMA、WEST8、LIBESKIND)の経験を通して吟味しよう。まず展覧会の様子は、ほぼ100m²の会場の中央に1/50の大きな模型がひとつ、それを取り巻く約20枚の図面をL字型に展示、1/100のスタディ模型とカタログを添えた簡単な会場構成だ。閲覧の途中パネルの裏側に滑り込めることに気付けば、意外な発見をする。壁まで1m程の隙間には、彼が赤ペンチェック風の意図説明を「裏書き」しているもう一通りの平面図がある。これを分析して彼の設計方法の詳細に入ろう。

まず都市の位相に注目すると、鋭利で批評的な都市計画者であるコールハースを再発見できる。敷地はベルリンを横断するシュプレー川の北岸、元の東ベルリンにある。汀に建つ大使館は水と低地の国を思わせるがもう少し複雑な背景もある。ここには西欧的都市計画規制が不在なのだ。敷地はブロックの角が欠けた部分。普通、ベルリンの批評的再構築主義は四角くブロックを閉じる。しかし、コールハースはまずへこんだ角に部分を利用して、内側に建築をつくってブロックを閉じる。つまり、大使館員の住まいとなる細長いL字平面のガラス張りの建築をブロック内側の敷地境界線上に沿って建てる。壁面にテラスとして穴をあけ巨大な壁画を納め、メディア・スクリーンを意識した鏡面を置き、本来の奥を都市に開く意図だ。この結果、残りの敷地は広場になる。その敷地の角に立方体の大使館を置くと、それは広場に建つフリー・スタンディングな公共の領域となる。

建築の位相でも政治を建築に翻訳する大胆な作業がなされている。まず箱と凵型の建築の間の地上部に螺旋状の広場を挿入する。ここから大使館の内部に市民プロムナードが展示・会議施設等に開かれつつ続き、執務室や社交室、大使次官の住居等深刻に国家的な機能の間を縫って屋上庭園にまで上がれる信じ難い設計だ。この内部は全て鏡面金属板仕上げで、反射するイメージによって、そこは開かれた場所に見える。裸の床スラブは環境設備を統合。外壁は全てガラス。それは無形でセンシャルで多様な効果を生み出す。大使の会議室はガラス箱から突き出た片持ち梁で、親密な雰囲気のこの部屋には金属布を用いた柔らかな外壁を構想する。さらに見ると館内には構造らしき要素がない！ これは上下階で交差する壁の剪断力を用いる主構造計画で、ガラスのマリオンすら構造材であるからだ。これは「ある開かれた国」を文脈とする新しい大使館を構造化する一連の作業である。デザインを意図しない彼の建築の本領がここにある。

都市ベルリンの文脈批評の位相では現代人の嗜好を正面に打ち出す。例えばガラス。「閉じ」て「由」とする政治家ハンス・シュティマンの批評的再構築の軌範は19世紀の都心、現在のミッテにある。建築家クライフス等は、ベルリンでは石の壁に穴を穿ったロック(loch)ファサードが「文化的に正しい」(!?)と言う。ジャン・ヌーベルは複合建築ラファイエットでガラスの可能性を追求しているが批判も強い。曰く、「ガラスは商業建築の素材だ」(!)。しかしコールハースにとってガラスは、撓み、反射し、錯覚を起こす構造材である。

近代都市史の位相に於いて、コールハースは社会性を問いかける。彼は「ポツダマープラッツ国際都市計画設計競技」の審査員として招かれた折りに、「壁」の間を歴史事実として残す事を審査基準として提案したところ、前述のシュティマンが「文化的な問題を無視している」と批判し対立した。その後コールハースは、「建築家の意図する『壁』の間を公園として残す考察や現代都市の中心の描写と言った人文学的包含を無視して、過去の都市を再構築しようとする審査過程」と、イタリアの『カサベラ』とドイツの有力な新聞誌上で論じ、一般の反響を呼んだ。私がさらに驚いたのは、彼がミースも計画した歴史的広場アレキサンダー・プラッツの国際コンペへの招待を断った時だ。それは何故か。この文脈の再構成が本計画の基盤ではないのか。

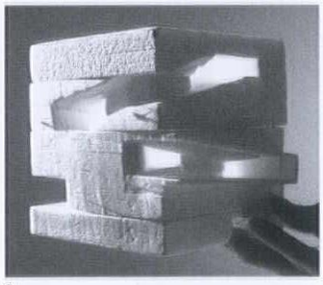
こう言った多くの位相を読めば、ベルリンでの建築は政治を無視できないことに気付く。コールハースは、権力の紋章やダーティ・リアリズムと言った建築の境界を乗り越える現代の建築を考察しているという印象を持つ。彼は力の論理の隙間に自由を模索する現代人なのだ。こうしてみるとこの展覧会は、小さいながらも一現代人が「自由」と「公共」を静かに提案する非常に秀逸なものであったという感想を持つが、それは私一個人の感想なのだろうか。

●うえはら・ゆうし／ダニエル・リベスキン事務所勤務

資料提供＝OMA



1



2



3

1. ベルリンのシュプレー川河岸に魅力的な公共建築がまたひとつ加わった。ここを訪れる人々でにぎわう様子が期待できる
2. スケールを感じさせないコンセプト
3. 現代的で親しみのわく新しいオランダ大使館の外観

海外レポート

ブロッブ・ケンチク
——〈ニューヨーク長老教会〉

from New York

桑原茂

今回ニューヨークからは、現在施工中のニューヨーク長老教会(New York Presbyterian Church)を取り上げ[*1]、設計組織形体の在り方、デザイン過程、施工とあらゆる面でコンピュータによる構造への認識変化に注目してみたい。

「21世紀は生物学の時代」と言われ、創造の歴史である科学史に変流が生じているのは、コンピュータの進歩に伴い、還元論者が単なる雑音と処理してきた複雑な現象が検証され、根源的な創発性の仕組みに対する新認識の表出によると思われる。こうした動きは我々の世界観を、トップダウンのツリー構造からリゾーム(あるいは流動体からボトムアップに自己成長するような)構造的なモノへと移行させ、形態学にとっては、形態の裏に隠れた構造に注目し、「形態は構造の現れた結果であり、それによって機能は喚起されている」と主張させるに至っているようだ。では同様に形を扱う建築分野にて、このような広義に認識されつつある思想は、反映されているのであろうか？視覚発達の著しい人類は、生活環境に対して認識論的対応をし、表層シルエットを重視する外観的幾何学形体で世界を生め尽くし、今や外観への執着を拒否しなくては建築家は存在し得ない飽和状態へと達し、固定概念の直接引用による「Non-Design Form」と再定義された屋根もない四角い箱を、さらに丁寧にその形容を否定するような材質によって覆われた建築に救いを求めている。しかし、こうした対応は依然として先世代世界観に属した羊の皮を着た狼的な外見変異種と言えるだろう。今日我々が探しているのは、これまでとはまったく異なった形態生成に対する思考である。

この長老教会は、ニュージャージー、シンシナティー、シカゴと本拠地も散開的に独立した3事務所間を、コンピュータ・ネットワークで結ばれた7人が日々、CADファイル、CGイメージ、模型写真等の情報交換を行うことで設計され[*2]、また新しいデザインの場として、xyzの座標軸+時間軸の4次元的な環境を持つアニメーション・ソフトが初期段階から導入されている[*3]。具体的なデザイン思考は、常識的に敷地、既存建物、新要項との解析から始められ、最重要課題の既存に納まりきらない規模の礼拝堂空間は、既存構造の垂直方向への拡張能力に注目し、屋上を新しい床とそれを別構造の大屋根で覆うことで確保する方針がまず決定された。屋根形状は、コンピュータ上で既存梁個々が新たに荷重する空間的ヴォリュームを単位化した物を、個々に関連した(時間と共に変容する)建築プログラムが局部的に作用変形し、連続的空間として水銀個体同志の如くに融合させた新組織体の形容であり、その統一的で円滑な外皮の下に、非対称的な平面を含むことになった。次に生じる礼拝堂への新アクセスの必要性には、既存柱に反発力を持たすプログラムにより、これらを避けながら自己形成的に目的同志(駐車場と礼拝堂、事務室、教室、旧入口等)を繋げる複雑に絡まった蛇行する通路組織として回答されている。その一部垂直移動要素のエレベーター塔面に十字を持たせて初めて、外観的な観点が少しばかり顔を出し、一連のボトムアップ的コンピュータ・デザインは、物質的段階へと移っている。つまり、3D光造形装置の使用によりコンピュータ・モデルを直接摘出し、従来的な外観点からの考察が最終段階にまで持ち込まれているといった具合だ。そして、こうした物質化工程の単純な延長線上に施工段階は位置しているのである。

こうしたデザイン過程は、ID分野ではむしろ常識化しつつある事に注目したい。現在米国の好景気経済を支えるのは、コンピュータが生んだ第三次産業的新情報流通ビジネスだけではない、第一次産業(建築も当然含まれるべき)の多大な改革である。例えば、NIKEや復活しつつある米車産業にとって、人間工学に基づく情報などが直接形態を左右する媒介項目として表現できるソフトの出現は、コンピュータ上でデザイン考察することを自然なこととし、生産、流通過程までがデジタルで直結したシステムを完成させ、競争力を持つに至った。こうして生み出される形態は、むしろ感覚的にも新しい美意識としてさえ定着しつつある。

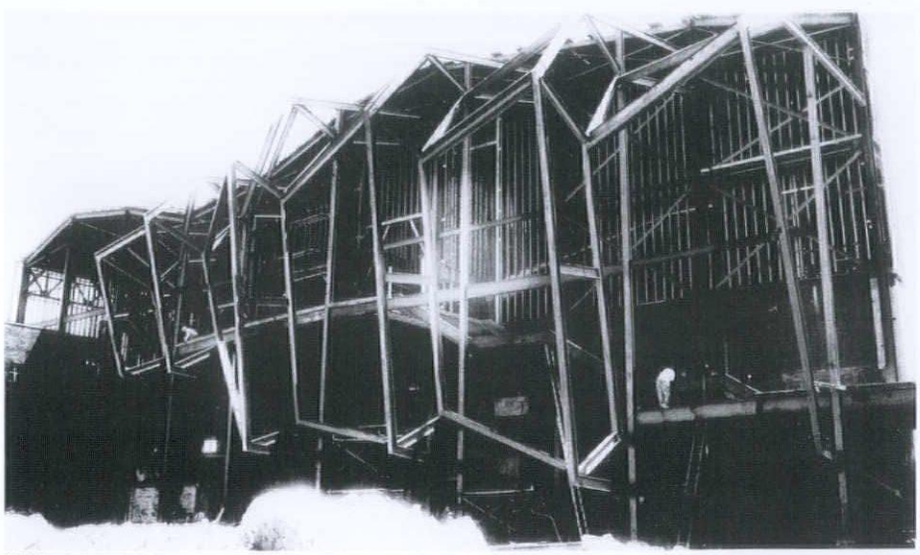
●くわはら・しげる／Greg Lynn Form所属

＊1：3人の建築家、Greg Lynn, Michael McInturf, Douglas Garofaloによる協同設計。ニューヨークのクィーンズ地区、田園都市サニーサイドガーデンの境界を走るロングアイランド鉄道線路に沿う産業地域内に位置し、かつては「アメリカ一場違いな記念碑」と評されるほど美しく対称的な立面を持つ(マンハッタンに向かう人々の視線を意識している)廃工場から三千人の礼拝堂、カフェ、結婚式場、日曜学校教室、視聴覚室、事務室等を含む教会へと改築する計画である。

＊2：ネット上で仕事の中心地は、個々の適度にばらつく経験と専門分野間を自由に循環し、常に設計体制は変化している。リゾーム構造組織形体に依って初めて可能となった小規模事務所の大規模計画への対応。

＊3：形状に対し非常に柔和な姿勢が持てる点を使用理由として挙げている。つまり、時間的変容の考察が可能となる事。その環境下では、デカルト的な状況さえspline surfaceの位相が作る一例として定義され特別な価値感は付随しない事。また状況は、多種多様な数値的媒介項目によって操作可能であり、構造的にはそれによって支配されている事等がある。

写真＝浅田創(3点とも)



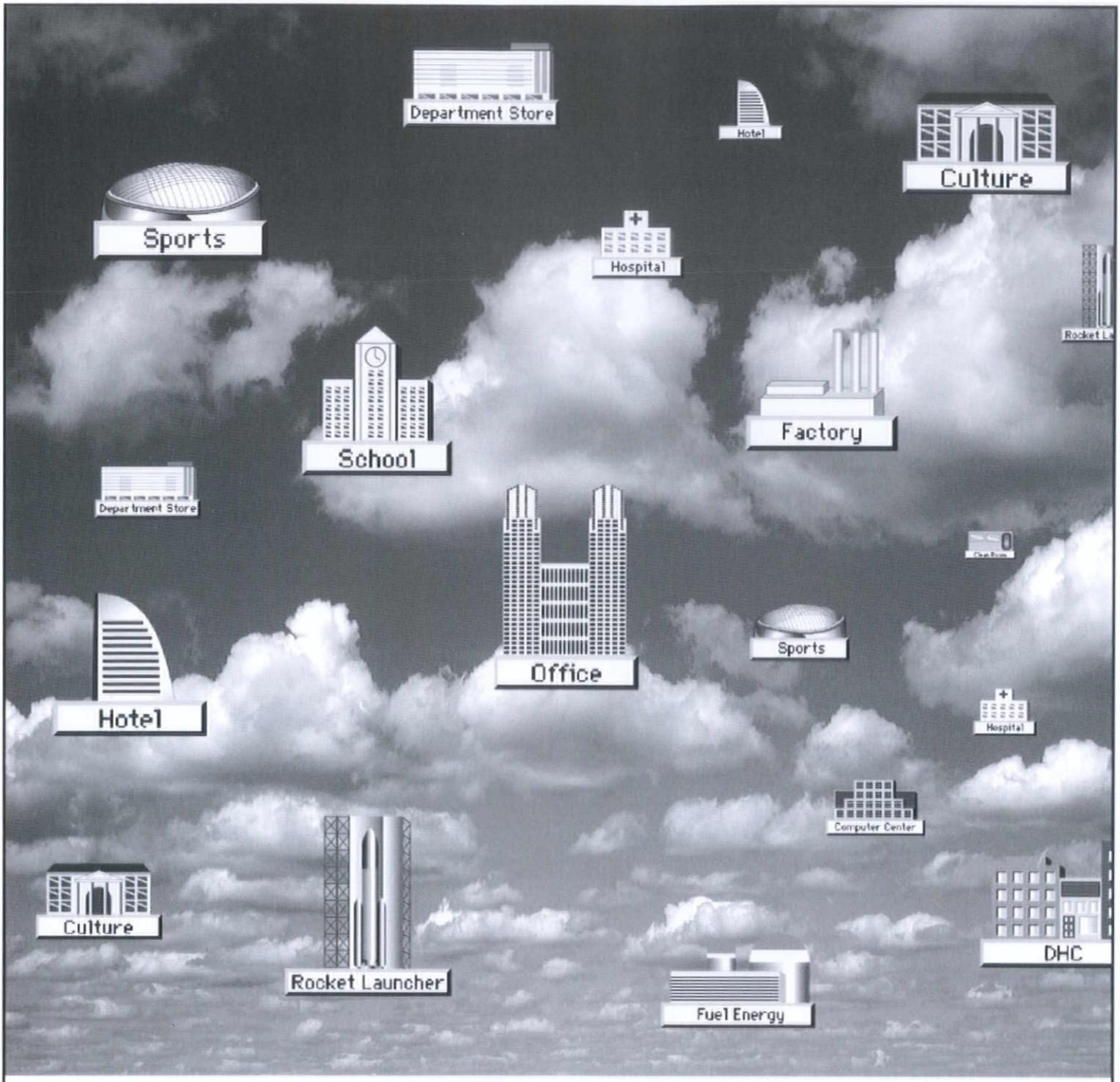
礼拝堂の内部空間構成要素が、新アクセスの必要性により外部に表出している。局部的状況への対応



既存建物とそれに覆い被さる礼拝堂の対比。遠方にクライスラーとエンパイヤーが見える



エントランス、十字を掲げるエレベーター棟、半透明素材の壁面によって新しい立面が構成されている



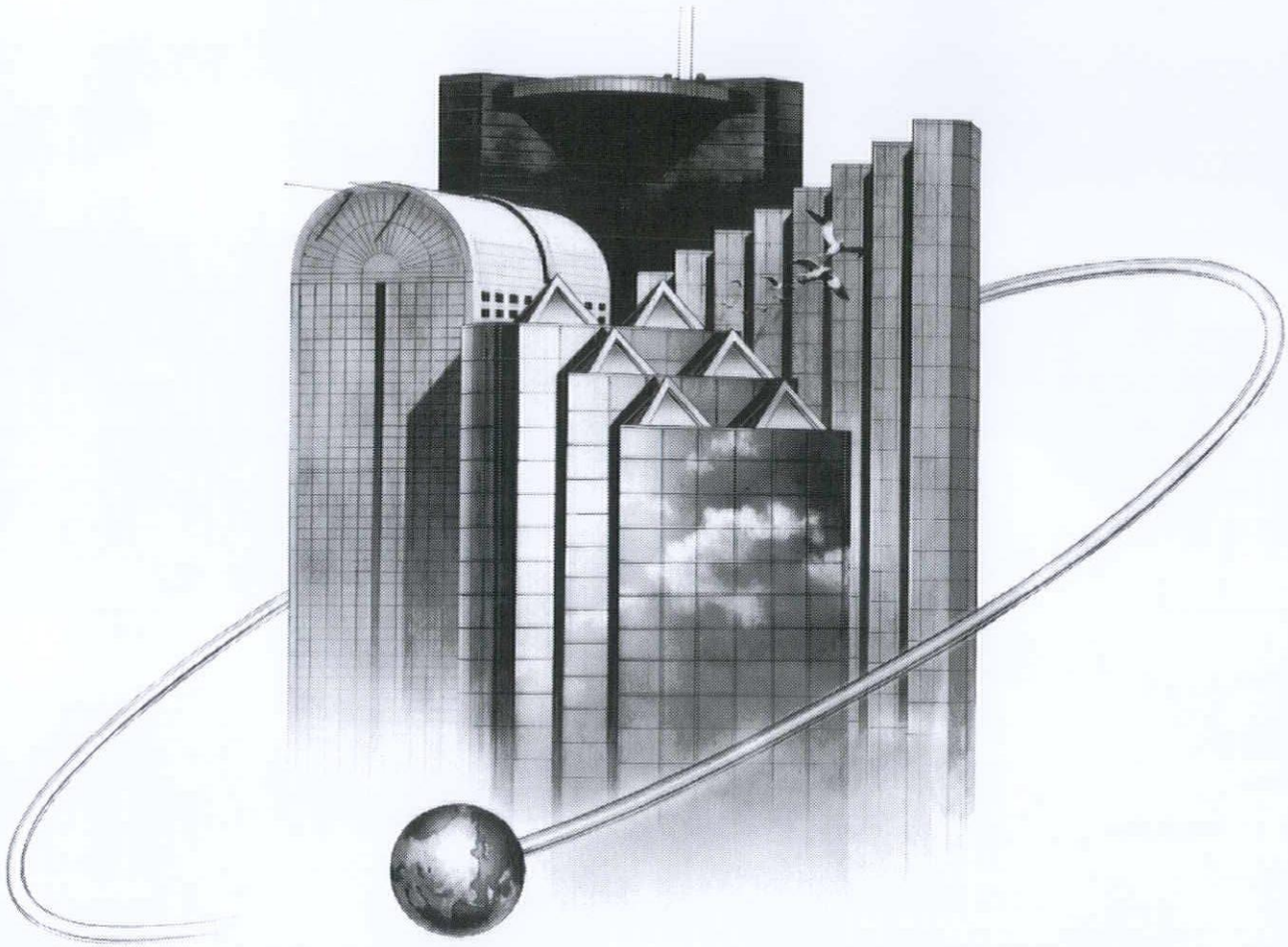
空気のメニュー。

オフィス、工場、学校、病院…。それぞれの建物には、もっとも適した空調システムがあります。
新菱冷熱は「さわやかな世界を創る」という思想のもとに、
用途に合わせたオーダーメイドの空調システムを、設計・施工しています。
バリエーション豊かな私たちの空気のメニューから、21世紀の新しい都市環境が始まります。

新菱冷熱
SHINRYO CORPORATION

本社：〒160-8510 東京都新宿区四谷2-4 ☎03-3357-2151(代)　支社：札幌・仙台・千葉・横浜・名古屋・大阪・富山・広島・福岡

快適創造



人と自然と機能が調和した理想の快適環境を。

人と自然、そして機能が調和した新しい快適環境を創造する。
それが三機工業のめざす総合エンジニアリングです。
都市、コミュニティ、産業施設…人をとりまくさまざまな環境について考え、
その理想を追いつづけている三機工業は、
いま、地球環境という視点にたって、すばらしい未来にむけての新しい環境のかたちを提案しています。

三機工業株式会社

〒100-8484 東京都千代田区有楽町1-4-1 TEL.03(3502)6111

海外レポート

都市計画とランドスケープ・デザインに境界はない

ボルネオ・スポールンブルグ島開発

from Amsterdam

吉良森子

ランドスケープ・デザインと都市計画は概念的にひとつであるだけでなく、プロフェッションとしてもひとつであるということを歴史的にも初めて実行することができたのは、West8のアードリアン・ヒューズなのではないだろうか。

アムステルダム東部港湾地区の再開発では、これまでの市当局を中心としたトップダウンの都市計画とは異なり、アムステルダム市都市計画課、アーバンデザイナー、アーキテクト、ディベロッパー、建設会社など、異なるプロフェッションを集めてプロジェクト・チームが形成された。その結果、これまでのような市の都市計画課がつくったマスタープランに沿って建築家が建物を設計し、ディベロッパーが販売するという伝統的かつ硬直した開発ではなく、プロジェクト・チームに加わることによってこれまで対立関係に陥りやすかったそれぞれのプロフェッションは、プロジェクトにコミットしたパートナーの関係になり、その結果、マーケットのニーズに対応し、それぞれのデザイナーの個性を生かすことのできるフレキシブルな開発の可能性が試されることになった。

ヒューズは、このアムステルダム東部港湾地区再開発の第三のプロジェクト、ボルネオ・スポールンブルグの都市計画を担当し、この新しいシステムにおいて彼は実質的に、市当局、建築家、ディベロッパーを統括する、都市づくりのプロデューサーの役割を果している。ここで、彼は高密度低層というこれまでにはないまったく新しいアーバン・ストラテジーを提案した。これは彼によれば、東京の住宅地ぐらいの人口密度と建物のヴォリュームだと説明しているが、オランダ的視点では市街地の人口密度でありながら郊外的なヴォリュームである。結果として生成する街並みは、郊外一戸建て住宅のエリアでも、市街とも異なるオリジナルなランドスケープである。さらに、このストラテジーは建築家に勝手にオブジェを作らせるのでもなく、あるいは都市計画家の絵に沿って設計させるのでもない。1haにつき100戸という密度と3層という条件によって、アーバンデザイナーはスカイラインなどのランドスケープをコントロールし、建築家は都市計画にありがちな博覧会的な外装の個性の露出に陥ることなく、むしろ内部の住空間の個性を重視した設計を行った。マスタープランが何をコントロールし、何をコントロールしないのか、ということを考えた時に、このストラテジーは単純に都市計画課と建築家の領域をはっきり線引きするのでも、どちらかがどちらを支配するのでもなく、ひとつのストラテジーのもとにお互いに協力しながら、最も個性的で望ましいランドスケープと建築の結果を追求することができる。そしてそれを可能にしたのがプロジェクト・チームという新たなシステムであり、ここでヒューズは、ランドスケープと都市計画を統合する新たな都市作りの可能性を示して見せたと言えるだろう。

アムステルダム東部港湾地区のプロジェクトはKNMS島、ジャワ島、ボルネオ・スポールンブルグ島という、まったく性格の異なる3つのエリアからなる、かつてのアムステルダム港の再開発である。アムステルダムの旧市街中心地から2kmあまりしか離れていないこのエリアには、313haの面積に8500戸の住宅が計画された。90年代のオランダの都市開発のテーマは、「コンパクトシティ」である。これは都市の周辺に郊外をどんどんつくっていくのではなく、都市のインフラを充実させることによって都市のエリアを拡大し、都市人口を増加させるという考えである。80年代郊外に人口が移動することによって生じた交通渋滞の問題と、都心部の空洞化の改善を目指したものであり、東部港湾地区もコンパクト・シティをテーマとして、市の中心部に直結する高速トラムが導入されるなど、郊外としてではなく、アムステルダム市の一部として開発された。

どのプロジェクトも先に述べたプロジェクト・チームによって開発されたわけだが、KNMS島のアーバン・デザインが建築家が自由にオブジェをつくるものであり、ジャワ島が旧市街のイメージというマスタープランが建物のデザインを規定するものであることを考えると、この新しいシステムを最大限に生かしてランドスケープと都市計画の融合を示し得たのが、West8のアードリアン・ヒューズによるボルネオ・スポールンブルグ島のプロジェクトであることは明らかである。

●きら・もりこ／Schroevers-Kira事務所主宰



ジャワ島の集合住宅



ボルネオ・スポールンブルグ島のノイトリング設計の集合住宅



KNMS島の集合住宅

ニュース

第2回 設計方法シンポジウム「建築設計におけるネットワークコラボレーションの可能性」

日時：1998年5月28日(木)
会場：建築会館ホール
主催：建築計画委員会設計方法小委員会
情報システム技術委員会高度情報社会研究小委員会
情報システム技術委員会情報・CAAD教育小委員会

今回のシンポジウムは、ネットワーク・コラボレーション(NC)をテーマに長く研究を続けているウィリアム・J.ミッチェル氏を招いた基調講演、および同氏に加えて門内輝行（早稲田大学)、大江匡(プランテック総合計画事務所)、渡邊朗子(慶應義塾大学)、仲隆介(宮城大学)の5氏によるパネルディスカッションの2部構成となっている。司会は両角光男(熊本大学)、趣旨説明に吉田邦彦(愛知淑徳大学)、沖塩荘一郎(宮城大学)がまとめを行った。

W.J.ミッチェル氏は、1992年からMITの建築・計画学部の教授を務め、情報技術の進歩を建築設計の技術的・意匠的向上に結びつけることと、教育現場での活用を試みている。講演では、NCの有用性を説き、MITのNCの運営や技術開発の様子がリポートされた。

ミッチェル氏は、「NCは時間と場所という制限を克服し、遠隔にいる人々が容易にコミュニケーションすることを可能にし、今後さらに一般化するだろう」としている。私達はネットワークの便利さをすでに強く実感しているが、今後さらに裾野が広がっていくことは確実だろう。

このNCをサポートする技術としてまず、画像、音響、流体といったデータのシミュレーションがある。遠く離れたクライアントなりパートナーなりに、イメージを明確にかつ簡単に伝えるために特に重要だと指摘されたのだが、その目的はかなりな部分で達成されているように思われた。現在この技術は非常に進んでおり、実際、シミュレーション画像と竣工後の写真との差といえば、前者の床が光り過ぎていたことくらいだろうか。

次に、異なるネットワーク環境で仕事をする場合、円滑な進行のための「ヴァーチャルスタジオ」が必要である。このスタジオが、統一されたフォーマットのCADデータベースや書き込み自由なホワイトボード、ビデオ会議モニターを提供する。

その他MITでは、建築データを加工、3D化する「Rapid Prototyping」、複雑な曲線を持つデザインの建材の寸法を計算、切断するための「Cutting Technology」、ポリマー溶液をレーザー照射して形をとり、1層ずつ精巧な模型をつくる「Stereo Lithography」といった技術開発を行っている。

こうした技術を複合的に利用して、ケンブリッジにあるMIT建築設計計画学部とカリフォルニアのXerox社、あるいはポルトガルのリスボンとオポルト、MITを結んだ大学間などで都市開発などさまざまな共同プロジェクトが進められている。学内では、遠隔地にいる教授に、ハンディカメラから作品の映像を思いの角度で送り、リアルタイムで講評してもらうという風景が日常的に見られる。

ミッチェル教授は最後に、「設計におけるNCは日々重要度を増しており、今後必要不可欠となっていくだろう」と語った。

ただし日本では、NC以前にコラボレーション自体、一般的になっていると言い難い面が残っている。大江氏がディスカッションで触れたように、コラボレーションという形態においては、デジタル、アナログという場にかかわらず、マスター・アーキテクトを頂点とした一方向の流れではなく、縦横無尽に意見交換を行い、弁証法的に解を出していくといった考え方が求められる。

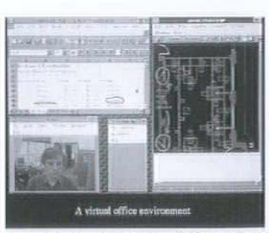
また、現在のNCは比較的限定されたグループで行われていることが多いが、この枠組みがより広がり、例えばそのプロジェクトで初めて組むようなメンバー同士の場合、特にネットワークの管理や文化、言語といった問題が発生する。こうした問題にこれといった解がないのが現状である。この点については渡邊氏が、コラボレーション・マネージャの役割を示唆していた。

今回のシンポジウムに際しては、70頁弱の冊子が作成され、シーラカンスK&Hが博多小学校の設計説明会の際にテレビ電話システム「フェニックス」を利用したことや、ゼネコンの取り組みといった社会的な動向をリポートしている。建築の分野だけでなく、インターネットを使った消費者とのコミュニケーションは各業界メーカーが盛んに行っている。ここで取り上げられた事例を見ても、ネットワークを介した協働が今後ますます増えていくのは必定である。そのときに建築がどう変わっていくのかあるいは変わらないのか、期待をもって見たい。(R.I.)





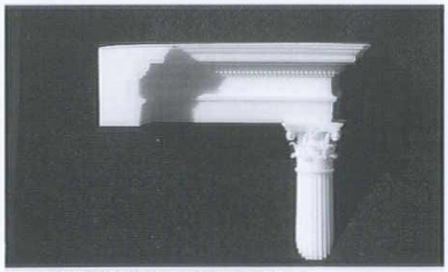
MITの建築学部のスタジオの改修。上が改修前に作られた施工後のイメージ画像。下がその結果



ホワイトボードやビデオ会議システムを提供する「ヴァーチャル・スタジオ」



CADの設計データから部材のサイズを即座に計算、裁断する。プロトタイプ作成までの時間が大幅に短縮された

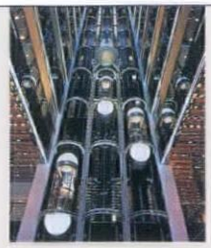


コーニスの模型も細部まで精巧に再現される

HITACHI

超高速エレベーターから、ホームエレベーターまで。

Office Building







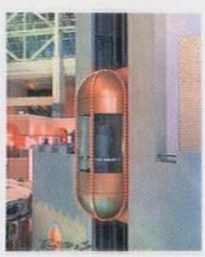








Hotel & Residence







Public Space







Shopping Center







広がる生活空間を、
やさしく、
速やかに結びます。

地上数百メートルの超高層ビルから一戸建ての住宅まで。日立は、ますます多層化する暮らしを、より快適にするエレベーター・エスカレーターの研究・開発を続けています。たとえば、定格速度810m／分の〝超高速エレベーター〟や、身近な暮らしの中で利用される〝車いす用ステップ付きエスカレーター〟、〝ホームエレベーター〟など、施設に応じた設備で、誰もが住みやすい街づくりをサポートします。

日立エレベーター・エスカレーター



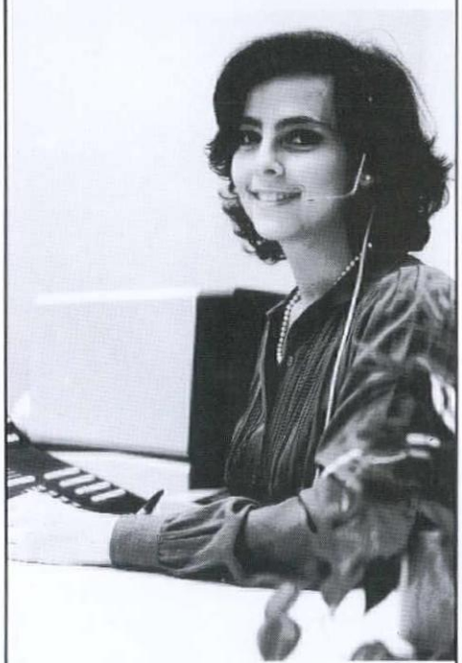


株式会社 日立製作所

お問い合わせは＝電機システム事業本部 昇降機事業部/電機システム統括営業本部 〒101-8010 東京都千代田区神田駿河台四丁目6番地
電話/(03)3258-1111(代表) または最寄りの支社へ 北海道(011)261-3131・東北(022)223-0121・横浜(045)451-5000
北陸(0764)33-8511・中部(052)243-3111・関西(06)616-1111・中国(082)223-4111・四国(0878)31-2111・九州(092)852-1111

きーだい地球を、まぁるくつつむ。
日立電線

情報とエネルギーのネットワークをつくる
日立電線



情報やエネルギーを伝える技術を中心に、
人と人、人と世界を結ぶグローバルなネットワークをつくり、
「私達の住む地球をまぁるくつつむ…」。日立電線は、いま、
快適で豊かなくらしの創造をめざして多彩な活動を展開しています。
21世紀に向かって、ますます進展する情報化社会——
たえず革新を続ける情報・通信、エレクトロニクス、エネルギーの世界で
ひとつの大きな役割を担っているもの——
それは、ハイテク技術を駆使した日立電線の製品です。

日立電線株式会社 ☎東京(03)3216-1616

お知らせ

建築ミュージアムツアー スカルパ、パラディオの建築と中世の山岳都市を訪ねて

期間：1998年8月31日(月)～9月8日(火)
費用：383,000円
視察地：ヴェネツィア、ベローナ、ヴィチェンツァ
視察先：ブリオン・ヴェエガ廟、カステルヴェッキオ美術館、他多数
問い合わせ：(株)トラベルプラン
Tel：03-3403-8911　Fax：03-3403-8395
担当：酒井　春生

「新世紀末都市——東京」展 東京新世紀 from 東京世紀末

本活動は、東京の実体について多視点で新たな解読を試みるとともに、行くべき未来の姿を模索するものである。展覧会、レクチャー＋シンポジウム、ワークショップにより構成される。
期間：1998年7月13日(月)～16日(木)
場所：日本建築学会建築会館大ホール
テーマおよび参加グループ
1.「POWERS OF TOKYO」
森徹、植野斜、若松久男
2.「TOKIO計画1998(version JULY)」
宇野求、岡河貢
3.「動態都市」の試み——田町ワークショップ
STUDIO NOPE 田島則行、納村信之
4.「都市の空地」——ひまわりの島〈第2海堡〉
STUDIO NOPE 大西瞳、三澤純子
5.「脳人都市・東京」——東京超元気論
山田雅夫
費用：展覧会、レクチャー＋シンポジウムは無料、ワークショップは3000円、総合テキスト1000円、上記全部セットで3000円
申し込み方法：レクチャー＋シンポジウム、ワークショップへ参加希望の方は下記の宛先に「新世紀末都市——東京」をタイトルにして返信宛名記入の上、氏名、年齢、勤務先、電話番号、fax番号を明記の上下記へ。(先着順)
申し込み・問い合わせ：建築学会関東支部
Fax：03-3456-2058、E-mail：kanto@aij.or.jp

千葉鉄也・葩島伸彦展

今後活躍が期待される若手現代美術作家、千葉鉄也と葩島伸彦による二人展。銀座京橋付近の20の画廊が開催するアートフェア「京橋界隈'98」のうちのひとつでもある。
会期：1998年7月1日(水)～7月18日(土)無休
時間：11:00～18:00
会場：ギャルリーユマニテ東京　中央区銀座1-8-2銀座プルミエビル4F　Tel：03-3564-4350
京橋界隈ホームページ：http://kas.gaden.com/

ワタリウム美術館主宰「庭園倶楽部」開催

時代とともに移り変わる住まいと庭の関係、およびその背景にある日本の諸芸術との関係を探り、数多くのスライド上映や庭園見学旅行を通して日本の庭園美学を勉強する全10回コース。
内容：住まいと庭、「寝殿造り」と庭、彼岸の造形、中世の住まいと禅院の庭など。
会費：入会金10,000円、参加費36,000円
入会者はワタリウム美術館への入館無料
申し込み方法：氏名(フリガナ)、職業、勤務先名、住所、電話番号およびFax番号(自宅、勤務先とも)を記入の上、下記へ。
申込み・問い合わせ：ワタリウム美術館「庭園倶楽部」Tel：03-3402-3001、Fax：03-3405-7714

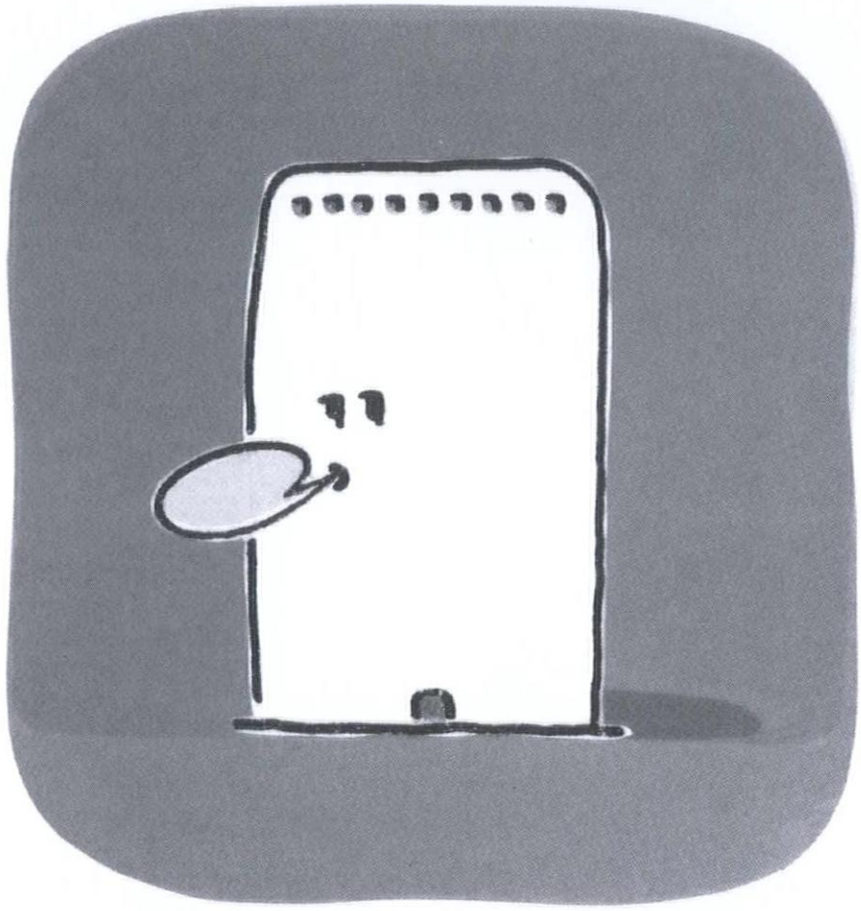
建築文化週間 '98 「建築夜学校」開催

講師である建築家の実作を見学し、空間を実際に体験した後にレクチャーを行うとともに、設計者の事務所を訪問し、設計環境を肌で感じることが出来る内容になっている。
第一夜　6月5日(金)「すみだ生涯学習センター」
パネラー：長谷川逸子
第二夜　6月6日(土)「FH・HOYA-II」
パネラー：元倉真琴
第三夜　6月12日(金)「塔の家」
パネラー：東孝光
第四夜　6月13日(土)「東京大学建築学科・土木学科棟」パネラー：香山壽夫
スケジュール
15:30～16:00：事務所見学(20名程度、申し込み制)
16:30～17:30：建物見学(20～50名、申し込み制)
18:30～20:00：講演会(当日先着順)
申し込み方法：往復ハガキに、氏名、年齢、所属、同住所、同電話番号、希望日および見学場所を明記の上「建築夜学校」と朱書し下記へ。
申し込み、問い合わせ：日本建築学会事務局普及事業課　〒108-8414 港区芝5-26-20　Tel：03-3456-2056

「建築の20世紀展」開催記念シンポジウム 「建築・都市の未来に向けて」

日時：1998年7月10日(金)18:00～21:00
会場：東京グローブ座　東京都新宿区百人町3-1-2
内容：司会：鈴木博之、基調講演：ジャン＝ルイ・コーエン、パネルディスカッション：荒川修作×石山修武×ジャン＝ルイ・コーエン×エリザベス A.T.スミス
申し込み方法：住所、氏名、年齢、勤務先、電話番号、Fax番号と返信先住所を明記の上、下記へFax
申し込み・問い合わせ：デルファイ研究所　〒102-0081 東京都千代田区四番町8-13　Tel：03-3222-5031、Fax：03-3222-5033/5062

人間すう、はく。ビルすう、はく。



私たちの呼吸は
自然の呼吸に
支えられています。

私たち人間が意識しないで呼吸しているように、人をとりまく環境も、知らないうちに呼吸しています。海も陸地も、動物も植物も。この地球全体が、ひとつの完成された空調システムとなり酸素をつくり、酸素を消費しています。

東熱のめざすひとつの頂点が、この自然の摂理を解明し、システム化することです。温度、湿度のコントロールによる環境を超えて、フィジカルな面から、メンタルな面の可能性のヒントが自然の中に隠されています。

ビルも呼吸しています。中にいる私たちのために。さまざまな分野のさまざまな建物が呼吸しています。だから東熱はいつも考えています。次に求められる環境とは何だろう。より私たちに優しく、より私たちに身近な環境の実現のために。山の朝のさわやかな空気や、冬の夜の透明な空気を東熱は忘れません。

宇宙センターからスポーツドームまで、東熱のマインドはあなたのまわりに息づいています。

時代、呼吸、マインド

東洋熱工業

〒104-8324 東京都中央区京橋2-5-12 Tel.03(3562)1351(大代表)

●世界のロックメーカー

MIWA


410 TYPE


415 TYPE


430 TYPE


441 TYPE


411 TYPE


420 TYPE


431 TYPE


442 TYPE


412 TYPE


421 TYPE


432 TYPE


443 TYPE


413 TYPE


422 TYPE


433 TYPE


444 TYPE


414 TYPE


423 TYPE


440 TYPE

◆
NEW
DESIGN

デザインで選んでもMIWA。

堅牢・安心・使いやすさなどを追求した品質第一の製品をお届けしているMIWAから、建物全体とのトータルコーディネイトにお応えする新作レバーハンドルが登場。建築空間の中に心地好さや安らぎを生み出す19モデルでバリエーションがさらにワイドになりました。

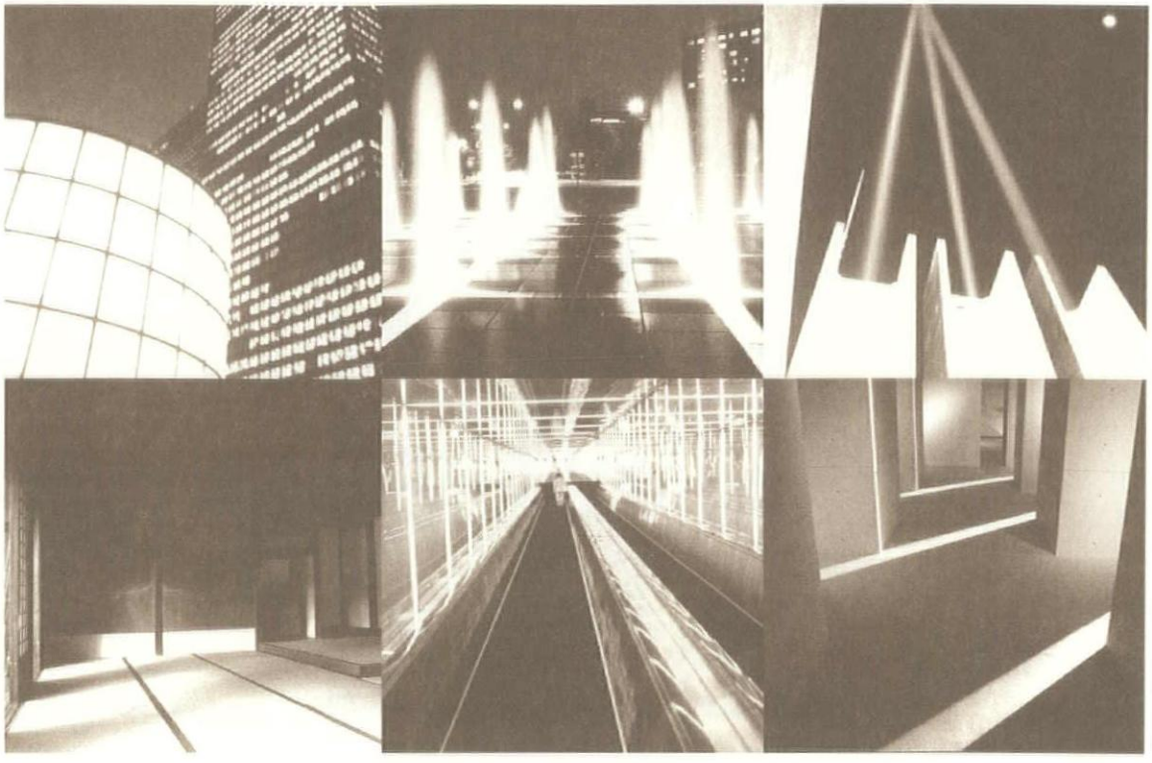
美和ロック株式会社 〒105-8510 東京都港区芝3丁目1番12号 TEL.03(3452)5551㈹ FAX.03(3455)2437●カタログをご希望の方は、当社まで。

SD9807
164

美和ロックについてはホームページでもご案内しています。http://www.miwa-lock.co.jp/

SD

8月号予告



9808

特集

光の織りなす空間——LPAのデザイン言語40

▼これは光が生み出す空間を全般的に考察する本格的な照明バイブルである。
▼ハードな技術がある程度完成された照明は、その空間デザイン計画となるとまだ黎明期。この領域のパイオニア、LPA（ライティング・プランナーズ・アソシエイツ）は、現在の日本では数少ない、光デザイナー集団である。そんな彼らのデザイン流儀が、光空間を創造するときの重要な鍵となることにはまちがいない。
▼ここでは彼らのデザイン言語を40に厳選して紹介する。

第1章　コンセプト
ブルーモーメント「魅惑の青い時空。それは昼と夜の狭間の10分間だけ出現する」／ジオメトリー「幾何学的配列と照明計画の蜜月の関係」／他

第2章　メソッド
光のベルト「歩いてみるまで分からない、光絨毯の踏み心地」／スーパーアンビエント「間接照明なんて言わせない。超間接照明は、天井を空に変える」／デイライト・クッキング「自然光を料理するレシピ、5題」／他

第3章　ディテール
定点照射「照明器具の完全消滅」／間接照明「柔らかな光が、安らぎと開放感を演出する魅惑の技法」／他

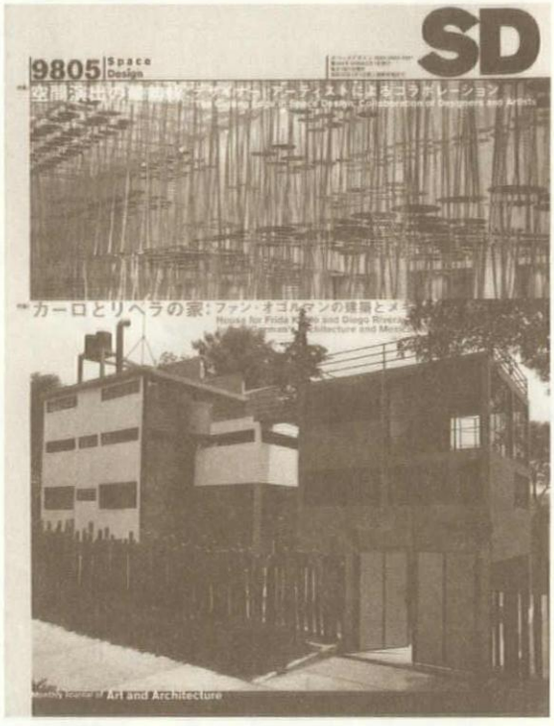
第4章　アクティビティ
プレゼンテーション「わたしたちのプレゼンテーションはもはやTVのライブ・ショウだ」／他

［論文］磯崎新、面出薫
［座談会］内藤廣＋黒川勉＋面出薫＋東海林弘靖
［付録］●LPA光辞典●LPA照明用語集

連載：
海外レポート：バルセロナ、ロンドン、サンフランシスコ
世界の現代美術館 12／水沢勉
森島紘史の起こし繪図——日本のかたち紙考 8／森島紘史

SD

バックナンバー





9805

特集1

空間演出の最前線
デザイナー、アーティストによるコラボレーション

近年、建築家とデザイナー、アーティストとのコラボレーションという異種の感性が交わることで生み出される魅力的な建築作品が増えつつある。本特集ではこうした実践的手法を具体事例を中心に紹介する。

紹介デザイナー、アーティスト：
藤江和子、川上喜三郎、中村錦平、片山利弘、新宮晋、面出薫
座談会：藤江和子+面出薫+小倉善明+栗生明

特集2

リベラとカーロの家
ファン・オゴルマンの建築とメキシカン・モダン

芸術や思想における近代化運動が盛んであった1920〜30年代のメキシコにおいて、ディエゴ・リベラ、フリーダ・カーロたちとともに精力的に活動を繰り広げていた、ホアン・オゴルマンの代表作である〈リベラとカーロの家〉を中心に紹介しながら、社会的、文化的背景を明らかにしつつ、メキシコのモダニズムを考察する。
文＝多木浩二、伊東豊雄、鈴木恂、ギジェルモ・エギアルテ
対談＝多木浩二×今福龍太

連載：
森島紘史の起こし繪図——日本のかたち紙考 5／森島紘史

定価＝2,000円／本体1,905円

9806

特集

風景創出の現在
ランドスケープ・アーキテクトの挑戦

「環境」を「風景」という美学に昇華させたものがランドスケープ・デザインである。ここで言うランドスケープ・デザインとは、その「公共的な価値」によって自然の風景と区別され、積極的な社会性が意図されたものだ。「エコロジカルな環境の復活」と「好かれる公共空間の復権」をランドスケープ・デザインが可能にできるだろうか。ここでは欧米日の近年の秀作を紹介しながら、現在のランドスケープ・デザインに足りないものを探ってゆく。

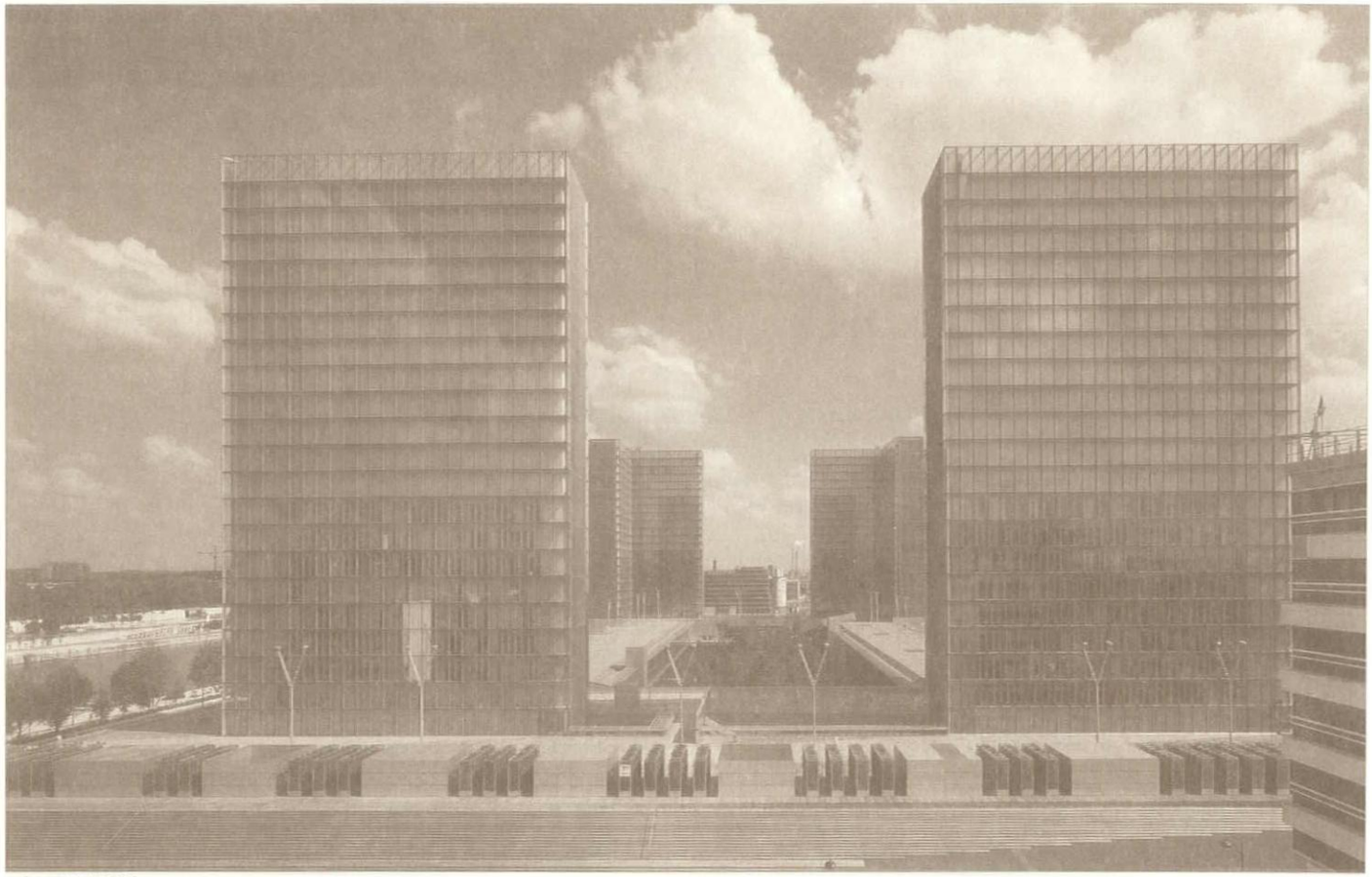
[作品紹介]
佐々木葉二、ブレイスメディア、三谷 徹、登坂 誠 + D. Back、長谷川浩己、ナンシー・フィンレイ、ケン・スミス、ダグラス・リード、トーマス・オスランド、West 8、キャサリン・ギュスタフソン、クリスチャン・チュミ、他

[クラシック・ランドスケープ] 近・現代ランドスケープデザインの名作選
グンナール・アスプルンド、カルロ・スカルパ、ルイス・バラガン、ロバート・ザイオン、アラン・プロヴォスト+ジレ・クレモン、アーウィン・ヘーリッヒ、イサム・ノグチ、深谷光軌、ピーター・ウォーカー

[フォトグラファーの視線] 写真家の目が捉えたランドスケープ・デザイン
細川和昭、廣田治雄、奥村浩司
[論文]、マーク・トライブ、ロバート・シェーファー、ドロテ・インバート
[座談会]、佐々木葉二+宮城俊作+三谷徹+古谷誠章

連載：
世界の現代美術館 10／太田泰人
森島紘史の起こし繪図——日本のかたち紙考 6／森島紘史

定価＝3,000円／本体2,857円



フランス国立図書館

SD別冊31号

本と人のための空間——図書館建築の新しい風

植松貞夫＋SD編集部＝編

総頁：168頁　定価：3500円（本体＝3333円）

内外の43の図書館を厳選し、メディアの多様化への対応、転用・再生・増築、都市型複合施設、快適な閲覧空間、巨大化と複雑化、特異な形態、大学図書館という7つのテーマの下に、豊富な写真と図版で紹介。

図書館は今、さまざまな課題を抱えている。多様なメディアの発達と普及への対処、急激に増加する図書の配架と収蔵の方法、既存の環境や建築の保全と両立する建設の方途、日常の読書室としての居心地良いスペースの作り方、高齢者や身障者に対する配慮、若年層の利用を促す工夫、など。

本書は、そうした課題の解決に役立ち、明日の図書館の姿を考える上で、数々のヒントと情報を提供する内容となっている。

収録図書館：

フランス国立図書館
イギリス国立図書館
ドイツ国立図書館フランクフルト館
ハーグ市立図書館
ミシガン大学メディアユニオン
ロサンゼルス公共図書館
ビバリーヒルズシビックセンター
オウル大学図書館、
オーデンセ音楽図書館
ハスレブ市立図書館
ヨエンスウ市立図書館
豊の国情報ライブラリー
国立図書館関西館（基本計画）
慶應義塾大学SFCメディアセンター
市川市生涯学習センター
大阪市立大学学術情報総合センター
伊万里市民図書館
湖東町立図書館、他

執筆者：

植松貞夫／図書館情報大学教授
小川俊彦／市川市生涯学習センター所長
寺田芳朗／山手総合計画研究所

SD別冊

建築家の住宅論

富永　譲

富永　譲著
菊判　128頁　定価（本体2,500円＋税）

住宅を中心に設計活動を続けてきた建築家の，その住宅に関する過去から現在までの手法，あるいは構造や材料，または一貫したテーマを，写真と図版で自ら解説する住宅論。本書では，ル・コルビュジエの研究者としても著名な富永譲が，別荘プロジェクトを含む自らの10の作品とル・コルビュジエのエピソードを交えながら住宅について語る。

［主要内容］

住宅論・移行の様相――生活のリズムを生み出す枠組
解題・10の住宅――歩行と経験
小田原の住宅1978　トポア1992
〈エピソード〉サヴォア邸：建築的プロムナードと映画的手法
武蔵新城の住宅1979　荏田の住宅1985・1992
〈エピソード〉コルビュジエの考えたトイレ
経堂の住宅1980　大船の住宅1994　王子の住宅1993
〈エピソード〉歩くという習慣
青山南町の住宅1973　東大泉の住宅1994　韮山の住宅1989
資料：年表／住宅データ

建築家の住宅論

吉田研介

吉田研介著
菊判　128頁　定価（本体2,500円＋税）

吉田研介による住宅設計論。ローコスト住宅とはどのような設計アプローチによるものなのか。著者が一貫して追及してきたテーマが，二世帯住宅，ソーラーハウス，あるいは平屋建て，三階建てなどさまざまに展開する。

［主要内容］

住宅論――私的ストイシズム
解　題――粗材・労手苦・労コスト
上原邸――土足で，個室にサニタリーをもつ家
チキンハウス――謙遜の自邸
田丸邸――ブレースを現した四五度の家
清水邸――中庭をギザギザ屋根が囲む家
戸田邸――工場地帯の二世帯住宅
亀井邸――ヴォールトを斜めに切った家
生井邸――四本柱のソーラーハウス
T氏邸――コルビュジエの屋根の家
大橋邸――診療所＋住居
都築邸――「ヴォイドなコア」をもつ二世帯住宅
資料：年表／住宅データ

建築とリアル

松畑　強著
四六判　240頁　定価（本体2,700円＋税）

若手建築家松畑強の初の評論集。建築や都市デザインを単体として考察するのではなく，広く経済や時々の政治情勢，国策や社会思潮の反映・接点として捉える。リアリティは建築においてどこに現れるのか。

［主要内容］

第１部　作品分析　批評と修辞／テイスト／サイトウィッツの幾何学／セカンドハウスの視線／透明なラビリンス／不確実性の写真=都市／ロジャースのタワー／電子メディア時代の景気のいい話／他
第２部　作家論「廃虚」・磯崎新論へ／モダニズムからモダニズムへ／Calithtenics・葉祥栄論へ／保守主義，近代主義，戦争／他
第３部　論考　機械美と古典主義，板垣鷹穂試論／アメリカ現代建築への仮説的背景／シンプリシチー／「廃虚」のエピステモロジー／ランドスケープの認識論・近代風景の起源をめぐって／他

同潤会のアパートメントとその時代

佐藤滋・高見澤邦郎・伊藤裕久・大月敏雄・真野洋介著
Ｂ５判　262頁　定価（本体3,300円＋税）

日本の近代集合住宅の嚆矢を築いた同潤会は，主に東京に豊かな敷地空間をもったアパートメントを建設した。本書は，同潤会の誕生した時代背景，そして代官山アパートを中心に全体計画，各住戸の平面計画，設備計画，そして払下げ後の増改築などを詳細に調査し，その建築や居住者の生活を記述する。

［主要内容］

同潤会アパートメントの時代
同潤会アパートメント：実践の軌跡
代官山アパートの計画とデザイン
検証・住戸計画
代官山アパートの住生活誌
代官山アパートの居住ストックの変容
新たなまちづくりに向けて

近代建築の巨匠アアルト生誕百年に適えた全三巻翻訳完結成る

各巻A4変型・ヨーラン・シルツ著　田中雅美・田中智子共訳

[最新刊] 白い机—円熟期3

[アルヴァ・アアルトの栄光と憂うつ]

336頁　定価（本体19,000円+税）

既刊の「白い机」一、二巻では、
1898〜1939年までのアルヴァ・アアルトの建築家としての成長過程、
交友関係、仕事、合理主義との関わり、思想、作品などを、
本人が書いた記事や手紙や講演の草稿を交えながら紹介した。
本書第三巻は、戦争による激動期から、建築が栄えた平和な時代、
つまり彼の人生の中で最も実りの多い時代を経て、他界するまでを扱っている。
第二次世界大戦が勃発した1939年にはすでに世界的な名声を持つ建築家であり、
自国でも評価を得ていた。
彼の建築家としての道は、そのほとんどが輝かしい成功に彩られていたが、
数々の失望を味わったのも事実である。中でも一番痛手が大きかったのは、
ヘルシンキ中心地計画が紆余曲折の末、中止になったことだ。
しかし、だからといって創造意欲が萎えることなど決してなかった。
彼の精力、熱意、自信、社交性、カリスマ性は、どこへ行っても人々の心をつかんだ。
第三巻は、そんな革新的な建築家が迎えた、人生の絶頂期の栄光と苦悩のドキュメントである。

［主要内容］　戦場からの逃避／「オフィスA」の活動／アメリカがフィンランドにつくる町／スイスでの講話／きびしい現実／フィンランド継続戦争／スウェーデンでの果たせぬ夢／建築家協会会長として／再びアメリカへ／アルテク・センターとアイノ・インスティテュート／MITでの活動／妻・アイノの死／失意の底から起き上がる／世界は救えないのか／国際人／フィンランド・アカデミー／事務所の現状／自然,人間,科学技術／地域計画／フィンランドの心臓・ヘルシンキ中心地計画／名声が生む二つの側面／最晩年

白い机—若い時1

[アルヴァ・アアルトの青年時代と芸術思想]

296頁　定価（本体9,500円+税）

本書は、アアルトの作品紹介といったものではなく、類い稀な天分をもった建築家の人間としての成長、行動、哲学、人生という面に光をあて、全人格と人生を浮き彫りにしようと試みられた評伝である。

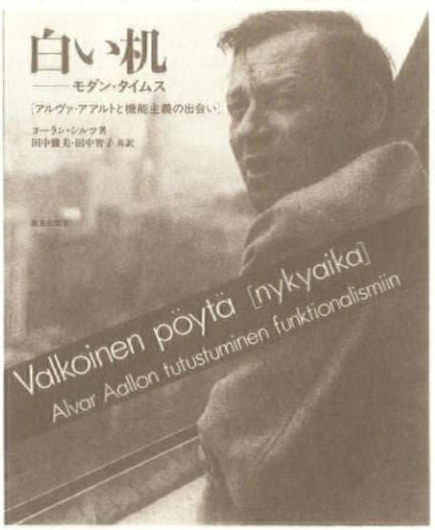


白い机—モダン・タイムス2

[アルヴァ・アアルトと機能主義の出会い]

288頁　定価（本体14,300円+税）

1920年代後期から30年代にかけて、国際的な建築家として名を馳せたアルヴァ・アアルトの人生・思想・仕事について記述する。最近発見されたばかりのプランや図面も初めて紹介している。写真・図版等315点。



鹿島出版会の建築図書案内

21世紀を築くデザイン叢書 SDライブラリー

〈各巻 A5判 箱入〉

1 アール・デコの摩天楼

小林 克弘著
272頁 本体3,400円

1920～30年代のニューヨークの摩天楼を分析し、アール・デコの摩天楼のデザインとはどんなものか、またアール・デコの時代とはどんな時代であったのかを興味深く紹介。

2 屋外空間の生活とデザイン

J.ゲール著 北原理雄訳
248頁 本体3,300円

本書は、住宅地域や市街地の公共空間—広場や街路などの屋外空間—のデザインを、そこで住む人々の生活やそこで繰りひろげられる行為や行動を分析し考察するもの。

3 近代建築の系譜(上)

1900年以後

W.J.R.カーティス著
五島朋子、澤村明、末廣香織共訳
400頁 本体4,600円

4 近代建築の系譜(下)

1900年以後

W.J.R.カーティス著
五島朋子、澤村明、末廣香織共訳
400頁 本体4,600円

長い間待ち望まれていた本書は、近代建築史の全貌を通読に堪えるようバランスのとれたタッチで描き出している。著者は、実用面、美的面、そして社会性の諸次元を重ね合わせたアプローチを採っている。

目次（上・下巻）

第一部 近代建築形成の岸辺
第二部 両大戦間における近代建築の結晶化
第三部 1940年以降の普及と変容。

5 アーキテクト

建築家とは何か

R.ルイス著 六鹿正治訳
306頁 本体3,800円

本書は建築学科の学生および卒業したての人たちにむけて、建築家とはどういう職業か、何を期待すべきか等を説き指針を与えると共に、自己を見つめ直し再認識するテクスト。

6 デザインの思考過程

P.ロウ著 奥山健二訳
256頁 本体3,300円

デザインの過程での思索や思考の普遍化を試みている。いわば、建築や都市を創造するために、個人的な次元に直接関係する考察の構造や探究の焦点を明らかにすることが目的。

7 ガウディの七つの主張

鳥居徳敏著
224頁 本体2,900円

本書は、同著者による「アントニオ・ガウディ」「ガウディの建築」につぐ3作目で、三部作を構成する。今回は豊富な語録を頼りにガウディ建築の不可解さを解明。

8 イタリア・ルネッサンスの建築

P.マレー著 長尾重武訳
280頁 本体3,700円

15・16世紀を中心にルネッサンス建築を時代と都市、そして建築家という三つの視点から論じている。各章共、建築家の主要作品が見易い図版・写真で解説された良き案内書。

9 光と風と構造

R.マーク著 飯田喜四郎訳
192頁 本体2,900円

本書は、複雑な構造物の応用解析などに用いる現代の工学的方法を平易に紹介し、それを古代から近代までの石造天井を架けた大建造物に応用した研究をまとめたもの。

10 パタンランゲージによる住宅の建設

C.アレグザンダー他著
中埜 博監訳
288頁 本体3,600円

著者は、現代の住宅生産システムの中でも、パタンランゲージの精神とその理論の枠の中で住宅建設が可能であることを証明。また手作り住宅が格安にできることを説いている。

11 デ・アーキテクチュア

脱建築としての建築

J.ワインズ著
大島哲蔵、三好庸隆共訳
322頁 本体4,200円

本書は、ミケランジェロからピカソまでの美術の成果を踏まえ、建築への新しい視点を探るものである。著者は本書によって、現代人の心を捉える建築表現を展望する。

12 コラージュ・シティ

C.ロウ、F.コッター共著
渡辺真理訳
288頁 本体3,800円

20世紀の都市デザインを支配してきた理想都市の2つの方向性—未来派的ファンタジーと伝統的な都市へのノスタルジアの概念が調和した都市が著者の追求する都市の理想である。

13 ミース再考

その今日的意味

K.フランプトン他著
澤村 明、EAT訳
224頁 本体3,300円

K.フランプトン、P.アイゼンマンら、現在第一線で活躍中の建築家・史家によるヴァラエティに富んだ評論集。従来のモダニズム賛否という二元論的視点から解き放ち、親しみやすい。

14 ルイス・カーン建築論集

L.カーン著 前田忠直編訳
258頁 本体3,600円

「沈黙と光」という言葉に象徴される近代建築の巨匠ルイス・カーンの美しいディテールと崇高な空間の織りなす建築。フィロソフィを伝える10編のオリジナル・アンソロジー

15 メガロポリスを超えて

J.ゴットマン、R.A.ハーバー共編
宮川泰夫訳
352頁 本体5,700円

今日、高度情報化社会・テレコミュニケーションの発達に伴う巨大都市の再編成について論述し、未来都市の軌道修正を提言。都市の地球規模での相互作用に留意しながら分析。

16 18世紀の建築

バロックと新古典主義

J.サマーソン著 堀内正昭訳
208頁 本体3,400円

ヨーロッパの18世紀は、バロックとロココによって幕を開けた。諸都市では多くの教会堂や宮殿が建てられ、黄金期を迎える。後半になると新古典主義への転向がみられた。

17 デザイニング・ドリームス

映画に見る近代建築

D.アルプレヒト著 萩正勝訳
272頁 本体3,900円

美しい映画の演出は、20世紀初頭より近代建築の表現、セット・デザインの効果を重視。160余点のスチールで、ミース、コルビュジエ他のモダニズムを検証。

18 アダムの家

建築の原型とその展開

J.リクワート著 黒石いずみ訳
296頁 本体4,000円

建築の原型という理念が建築史のなかでどのように変化し実現化されていったかを、ギリシャ、ローマの時代から現代に至るまでの主要な建築理論と建築作品を考察した建築論。

19 圏外からの建築

映画・写真・鏡・身体

D.アグレスト著 大島哲蔵訳
240頁 本体3,600円

著者アグレストは、本書の9つの章を通じて、映画・写真・鏡・身体を参照しながら、機能主義に代表される硬直化したモダニズム都市イデオロギーを批判する。

20 建築と非建築のはざまで

R.ハービンソン著 浜田邦裕訳
208頁 本体3,100円

本書は、建築を分析していくための新しいシンタックスを「建築の意味性」「虚構性」に見いだそうという視点から建築を語る建築論である。イマジナリーな建築に言及する。

21 空間を生きる

R.ボフィール著 太田泰人訳
192頁 本体2,900円

バルセロナの現代建築家ボフィールが語る建築論。バルセロナ、パリ、ニューヨーク、モスクワと駆け巡る建築家の活動スタイルとその過程での様々な建築理念について語る。

22 古典主義建築

オーダーの詩学

A.ツォニス他著 藤井博巳、丸山洋志、藤山哲朗共訳
224頁 本体3,400円

古典主義建築を概観することにより、形の構造から古典的建築物を捉え直す方法を探るもの。建築のみならず音楽・絵画、演劇が共有する古典主義の生成規則を明かにする。

SD Space Design Back Issues

Home Page Address:
http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm



9703 Minimal Space Architecture: Introduces simple architecture we call 'minimal': John Pawson (John Pawson House, Jigsaw), Shinichi Ogawa (Glass House), Waro Kishi (House in Nipponbashi), Toshiaki Isida (NOS House). Text: Hiroshi Maruyama, Tsuyoshi Matsuhata, etc. **Tokyo International Forum:** Photo: Koji Horiuchi. ¥1,988



9704 Expanding Horizons of Digital Design: introduces projects creating new environment of architecture and city with computer and network technology. Text: Noriyuki Tajima, Sigeyuki Yamaguchi, Eisi Katsura, Michael Benedikt, Masaki Hujihata, Akihiro Kubota, Ken Sakamura, Naohito Okude, Mitsuo Morozumi, etc ¥3,059



9705 Afra & Tobia Scarpa and Benetton: They have worked together for about 30 years. Introducing the office building, warehouse, shops etc they designed. Text+Interview: Hiroyuki Toyota. **Pisa and the Works of Massimo Carmassi:** Casa Muti, Restoration of the Theatro G.verdi,etc ¥2,000



9706 Takahiko Yanagisawa: The Composition of Theatrical Space: Introduces receent works focusing on the elements. New National Theatre, Tokyo Opera City, etc. Text: Muneshige Nagatomo, Yoshiaki Ogura, Shouzo Motosugi, Junichi Kawamura Disucussion: Masato Kawamukai and Takahiko Yanagisawa **Swedish Good Design: Undecorated Form Design** ¥2,000



9707 Hong Kong 1997: The Accelerating City
Grasping the aspect of Hong Kong through visual works by artists and interview with architects. artists: Alan Chan, Tycoon Graphics, Satoshi Asakawa, Shin Egashira, etc. Supervision: Shin Muramatsu, Kazuhiro Kojima, Hikaru Kinoshita. Text: Naonori Matsuda ¥2,000



9708 Venturi, Scott Brown and Associates: 1990's Works: Focuses on the first work in Japan, Mielparque Nikko Kirifuri and introduces 1990's works such as Seattle Art Museum and Additions, Renovations and Restoration, San Diego Museum of Contemporary Art. **Toward a New Living Environments:** Gifu Kitagata Housing Project ¥2,400



9709 A New Phase of Railway Station Space:
Introduces Railway Stations having additional value and tie with community such as JR Yabuki and JR Ohmagari. Also Introduces JR Kyoto widely noticed as International Competition. Text: Takayuki Miyabayasi etc. Talk: Tadanori Yokoo×Hiroshi Hara ¥2,000



9710 Architecture in Glass: Introducing architectures which adopt the characters of glass in such as optical and structural aspects. Searching for the present situation and possibility in the future: Extension of the Winterthur museum of Art, Hotel P, Konami Nasu Seminar House, etc. Text: Kazuhiko Nanba, Masao Ando, etc. ¥3,000



9711 Kengo Kuma: Digital Gardening: Introduces recent leading works of Kengo Kuma, advocate of post-modern architecture and winner in 1997 of the Architectural Institute of Japan Prize and the Benedicta Prize. Memorial Park and other designs. Articles by Youichi Iijima, Greg Lynn, etc. Discussion: Fumihiko Maki and Kengo Kuma. ¥2,800



9712 SD Review 1997: Publishing the result of SD Review contest with comments from the screening commmittee. Participants: Shigekatsu Takayasu Architects+Tatsuya Sakuma+Hirotada Hashizume+Hiroyuki Shigetomi, Hiroshi Kawahito, Sosuke Hujimoto, etc. **Spaces of Lighit and Color: Glass Artsits of Czecho** ¥2,000



9801 SD Review 1982-96
16th anniversary retrospective of SD Review looks at entries later built, examines relation to and significance in the world of architecture, and considers future directions. Text: Fumihiko Maki, Hiroshi Hara, Youichi Iijima, Osamu Nakasuji, ect. Round-table discussion: Makoto Motokura, Ryoji Suzuki, Akira Kuryu, and Kazuhiro Kojima ¥2,800



9802 Transparency in Architecture and the City: Swiss German Architecture Explores the appeal of the Swiss German sphere through an understanding of the background of Swiss architectural works and the context in which they came into being. Architects introduced are Herzog & de Meuron, Gigon & Guyer, etc. Texts by Momoyo Kaijima, etc. ¥2,200



9803 Czech Cubist/Rondocubist Architecture: A Reappreciation of the Revolution: Featuring extant Cubist and Rondocubist architecture in Prague; original photos. **Hiaso Kohyama: Drawings and space:** introduces Hisao Kohyama's architectural space and handling of detail through the architect's own drawings. ¥2,000



9804 Versatile Architects of the New Generation: Introduces the works and creative activities of young architects in their thirties to portray a sense of the times: INTENTIONALLIES, MIKAN, etc.
Desktop Community
¥2,000



9805 The Cutting Edge in Space Design:
Introduces specific examples of collaboration between architects and designer artists:Kazuko Fujie, Kinpei Nakamura, Susumu Shingu, etc.
House for Frida Kahlo and Diego Rivera:
Juan O'Gorman's Architecture and Mexican Modern
¥2,000



9806 Landscape Creation Today:The Challenges for Landscape Architects: Introduces landscaping set apart from the natural environment and purposefully designed to serve society. Architects introduced are Yoji Sasaki, PLACEMEDIA, Hiroki Hasegawa, Toru Mitani, Makoto Noborisaka, N. Finley+M. chiba, Ken Smith, Kyathryn Gustafson, Douglas Reed, etc. ¥3,000

SD

Space Design
Hardcover Edition
and Order Form

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to Space Design and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2560

Or mail the card to:
Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107, Japan
tel: 81-3-5561-2550

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card
Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:
☐ Please enter my SUBSCRIPTION to Space Design,
starting in

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of SD:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges(¥1,500 per order)
3. Postage(determined upon receipt of order)

Alvar Aalto
A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life : 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2
His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2
Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work : Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake
Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980 : Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2
13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai
Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sassetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo
Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brough forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3
29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2
Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito
9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu
All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiko Hayakawa
His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii
His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany
Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989
Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoei Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut
Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix : List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections : Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates
Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun
Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World
Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

●
接着剤

３Ｍ　透湿シート貼りボンド

●
住友スリーエム株式会社



住友スリーエム㈱では，住宅や事務所・店舗建築における外装パネルの内側に施工する，ハウスラップ用透湿シート貼りに最適のエアゾールスプレー型接着剤，３M透湿シート貼りボンドを新発売した．　木質住宅や鉄骨直打ち工法による事務所・店舗の建築では，外装パネルなどの壁装材の内側に，室内の湿気を外に出し，外からの雨水などの回り込み防止のために透湿シートが貼られる．　同製品は，基剤がスチレンブタジエンゴム系の接着剤で，スプレーノズルを押すだけの簡便さで，作業しにくいところでも透湿シートへ簡単に素早く塗布作業が行える．　タッカー（大型ホチキス）のようにシートに留め具の穴をあけてしまうこともなく，均一な塗布面で接着させるため貼り合わせ箇所の防水性に優れる．　しかも，鉄骨などタッカーを使用できない箇所でのシート固定，貼り合わせに適している．　また，木材などざらざらした表面素材への塗布接着性にも優れている．　塗布可能面積は，5cm幅で約160m，メートル当たり12.5円である．　ブチル系両面テープの1/3の施工価格を実現した．

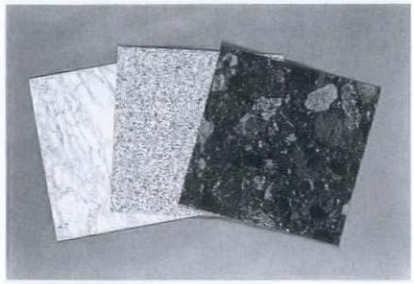
価格

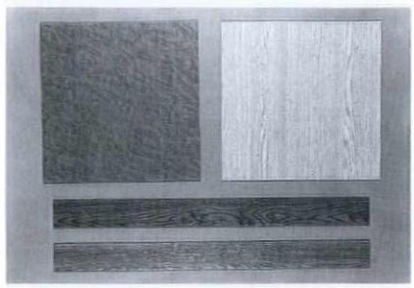
1缶420ml入り　2,000円

●
床材

リズタイル　ストーン
リズタイル　ウッド

●
ロンシール工業株式会社





ロンシール工業㈱では，ホモジニアスビニル床タイル，リズタイルストーンとリズタイルウッドを新発売した．デパートやショッピングセンターをはじめとする商業施設では，ファッション性とすぐれたコストパフォーマンスが求められている．　こうした要望に豊富な色彩と手頃な価格で応えた床材がリズタイル（ストーン・ウッド）である．　リズタイルストーンは，３種の石目柄（マーブル22色，テラゾー８色，グラニット16色）で，石のもつ質感を忠実に再現している．　リズタイルウッドは，（プランク33色，スクエア12色）で多様な天然木材の素材感を木目模様も鮮やかに表現している．　厚さは2.5㎜と3.0㎜があり，カラーは2.5㎜厚品が91色，3.0㎜厚品が30色のワイドカラーバリエーションである．　タイルの形状は，石目柄は角形（スクエア），また，木目柄には角形（スクエア）と板形（プランク）の２種がある．

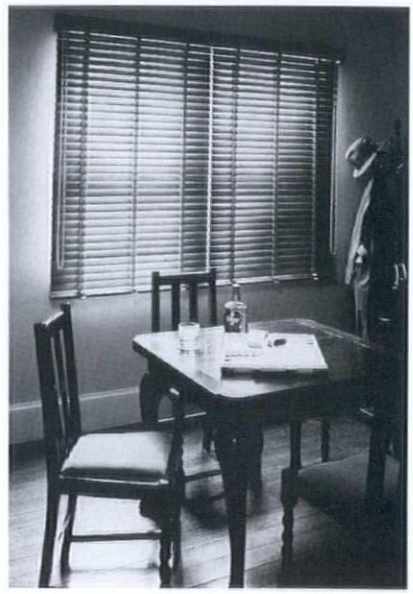
価格

2.5㎜厚品　3,970円/㎡
3.0㎜厚品　4,900円/㎡

●
ブラインド

フォレティア

●
立川ブラインド工業株式会社



立川ブラインド工業㈱では，スラット（羽根）に天然木（バスウッド材）を使用した木製ブラインド，フォレティアを新発売した．　幅25㎜のスラットとラダーコードを組合わせたフォレティア25，幅50㎜のスラットとラダーコードの組合わせのフォレティア50，同じ幅50㎜のスラットにラダーテープを組合わせた，フォレティア50Rの３シリーズを揃え，求めやすい価格に設定した．　スラットのカラーは，ホワイト，オフホワイトの２色，住宅の建具や床材とコーディネートしやすい木目柄のナチュラル，ライトブラウン，ウォールナット，マホガニーの４色，自然のぬくもりをイメージしたボトルグリーンの計７色．　ラダーコードはスラットカラーの同系色を計７色，ラダーテープはスラットと同系色のほか，４色のオプション色を加えた計10色，スラットとの組合わせで自由に選べる．　また，機構部にギア式を採用したエンドレスコードを使用しているため，操作感が軽く，開閉・昇降操作が楽にできる．　さらにオプションで，ヘッドボックスをすっきり覆うバランスを７色，スラットの木目柄は同社装飾カーテンレールとコーディネートが楽しめる．

価格

フォレティア50R　83,600円

住友スリーエム株式会社　接着剤製品事業部
東京都世田谷区玉川台２丁目33番１号
〒158-0096　Tel　03-3709-8248

ロンシール工業株式会社　建材事業部
東京都墨田区緑４丁目15番３号
〒130-0021　Tel　03-5600-1821

立川ブラインド工業株式会社
東京都港区海岸１丁目11番１号
〒105-0022　Tel　03-5404-4542

●

ガラス飛散防止対策フィルム

ルミクール　1561UH

●

リンテック株式会社



リンテック㈱では，ガラス飛散防止対策フィルム，ルミクールの新製品として，フィルムの厚さをさらに厚くするなどによって耐貫通性や耐衝撃性を高めた高性能飛散防止タイプ，1561UHを開発し，発売した．　同製品は，フィルム厚を350μm（従来品：50μm・100μm・150μm）と大幅に厚くするとともに，粘着力を一層高めることにより，その耐貫通性や耐衝撃性を向上させた高性能飛散防止タイプのウインドーフィルムで，ガラスの持つ明視性や採光性を損なうことなく，強い衝撃に対して優れた貫通防止・飛散防止性能を発揮する．　特に高層建築物に隣接し，落下物による事故の危険性が高い低層建築物のトップライトや窓ガラスなどの事故防止対策や，多くの人が集まる空港やホール，ショッピングセンター，公共施設などでのより万全な安全対策として高い効果を発揮する．　また，店舗や一般住宅の窓ガラスなどに貼ることによって外部からの侵入を困難にするなど，防犯面でも有効な手段として利用できる．　フィルム表面のハードコート処理により，清掃時の不注意による擦り傷の発生を低減する．　従来品同様，紫外線を99%カットする．

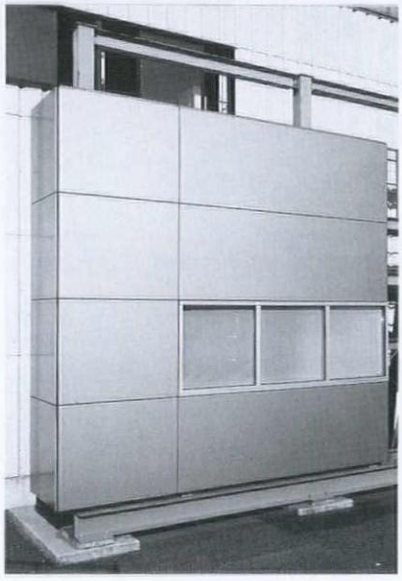
●

パネル・サッシ一体ビル用外壁

高性能複合外壁システム

●

三協アルミニウム工業株式会社
株式会社ノザワ



三協アルミニウム工業㈱では，㈱ノザワとの共同開発によりサッシと外壁パネルを機能的に一体化させた，高性能複合外壁システムを新開発した．

特長

①押出成形セメント板，サッシのシステム化により，目地部の高水密性能を可能にした．　押出成形セメント板外壁パネル（厚さ100㎜）として初めて「等圧排水機構」をサッシ―パネル間およびパネル間目地双方に採用した．

②押出成形セメント板などの外壁パネルの開口部サッシは，従来はサッシ取付け用の開口補強材（鉄骨枠）が必要でしたが，押出成形セメント板を2段中空形状にし強度を高めることで，押出成形セメント板にサッシ固定ブラケットを取付けることを可能にし，パネルに直接サッシを留め付けることが可能になった．　足場や特殊技能が不要で，内部からの安全を確保し，スピーディな施工が可能になる．

③雨筋汚れを防止する「低汚染型フッ素樹脂塗装」をサッシ，パネルともに標準採用した．　また，目地部にガスケット，外部ガラスとめ材に先付けガラスピートを採用し，現場シールを使用しない乾式目地の採用で，シールなどによる汚れが生じず外壁を汚さない．

●

床材

ＣＦシート

●

東リ株式会社



東リ㈱では，住宅の水回りなどで使用頻度の高い床材であるクッションフロア，ＣＦシートの新柄新色を新発売した．

特長

①ベターマッチコーディネーション．　色柄開発段階からのコーディネートシミュレーションにより，生活空間にマッチしたお薦めの色柄で全体が構成され，サンプル帳も空間別カテゴリー分けに変更した．

②全品が抗菌防カビ加工．　製造段階でトップ層に練り込んでいるので，長寿命である．

③全品が防汚加工．　製造段階で抗菌ワックスを塗布しているので，施工時などの初期汚れに強く，簡単なお手入れで美観を保つ．

④業界唯一の防音タイプCF-L50収録．　住宅金融公庫高規格住宅建設基準合格品である．

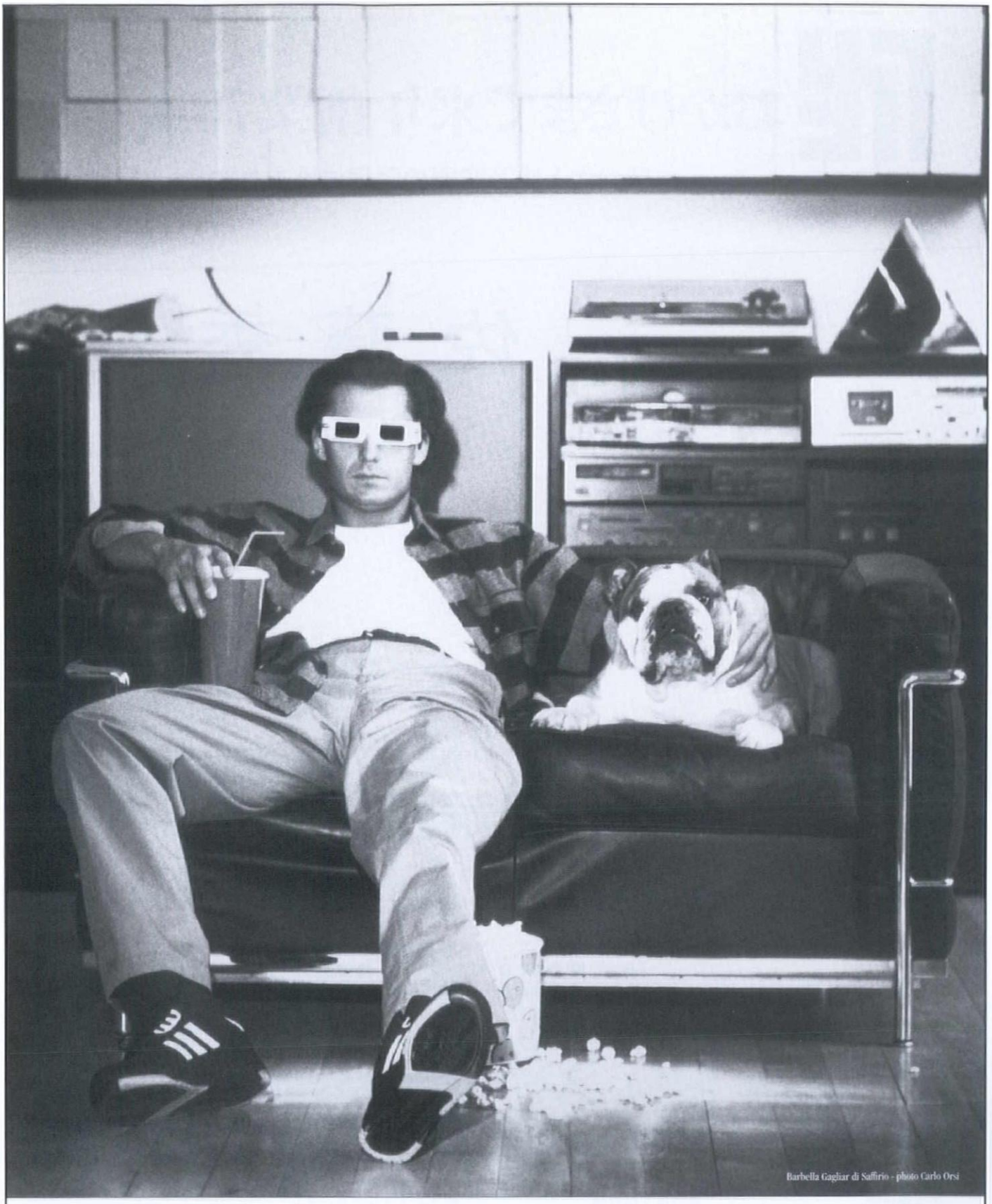
⑤全244アイテム中209アイテムに素材感を引き出す表面処理リアルサーフェスを採用．　シート表面のべたつき感がなく，足触りがさらっとしている．

⑥色記号表示．　東リカラーコーディネートシステム（T.C.C.S.）による色記号表示をしているので，東リの住宅内装用部材（壁紙やカーテン）とのカラーコーディネートが容易である．

リンテック株式会社　広報室
東京都板橋区本町23番23号
〒173-0001　Tel　03-5248-7741

三協アルミニウム工業株式会社　広報室
富山県高岡市早川70番
〒933-8610　Tel　0766-20-2332

東リ株式会社　販促宣伝部
兵庫県伊丹市東有岡5番125号
〒664-8610　Tel　06-494-6605



Cassina

CASSINA · INTER DECOR GROUP

HEAD OFFICE 2-9-6 Higashi Shibuya-ku, Tokyo 150-0011 Tel.03-3498-9300
AOYAMA SHOP 1,2F. Unimat Aoyama Bldg. 2-12-14 Minami-Aoyama Minato-ku, Tokyo 107-0062 Tel.03-5474-9001

おかげさまで来年創業70周年

——豊かさと快適空間の限界に挑みます——

株式会社　佐藤秀

取締役社長　髙橋 宗雄

〒160-8433
東京都新宿区新宿5－6－11
TEL.03(3225)0315(営業本部)
FAX.03(3225)0361

施工物件例：狛江の住宅(設計 株式会社シーラカンス)等

日章工業株式会社

●本　　社 〒101-0047 東京都千代田区内神田3－11－7(日立神田別館) ☎03-3254-3000
●大阪支店 〒541-0043 大阪市中央区高麗橋2－4－6(大正不動産ビル6階) ☎06-201-5704
●仙台営業所 〒980-0021 仙台市青葉区中央3－2－27(日産生命ビル) ☎0222-21-6989

日立製作所エレベーター・機電特約店
日立製作所OAシステム特約店
日立金属フリーアクセス、ハイベース特約店
旭化成建材パイル・ヘーベル代理店
大和ハウス工業代理店

施設商品

エレベーター・エスカレーター
立体駐車場設備(新明和工業)
バスユニット(日立化成工業)
住宅機器類
集中浄化槽
受水槽
ソーラー
受変電設備
自家発電設備
無停電定電圧定周波電源装置
ビル監視制御装置
冷暖房空調設備
通信設備
ターボ冷凍機・吸収式冷凍機
各種ポンプ設備・換気設備

OAシステム機器

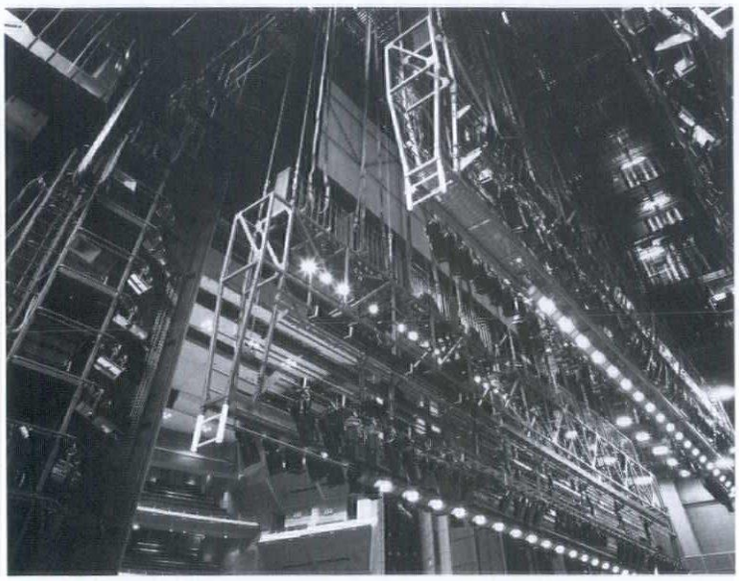
パーソナルコンピューター
ワードプロセッサー
ファクシミリ
オフィスコンピューター

建材商品

AHSパイル
ヘーベル
フリーアクセスフロア
ハイスプリット・ハイベース
鉄骨
大昭和ユニボード

建設商品

クローラクレーン
ショベル
軽量鉄骨プレハブ規格建築物
軽量鉄骨系プレハブ住宅



舞台機構設備・放送設備
設計製作施工

劇場・公会堂・テレビスタジオ
舞台吊物昇降装置、廻り舞台、
迫り上げ装置、定式物、照明設備、
音響設備、幕類、舞台用金物
設計・製作・施工

Morihei 森平舞台機構株式會社

本社・営業所　東京都台東区花川戸2－11－2
〒111-0033 TEL(03)3842-1621(代表)

北海道 TEL(011)812-2529
大　阪 TEL (06)251-2559
富　山 TEL(0764)44-4087
福　岡 TEL(092)473-6980
名古屋 TEL(052)201-4713
埼　玉 TEL(048)223-6431
栃　木 TEL(0286)65-6245

タケイ
進化コンクリート法
防水

80年余の歴史を有する躯体コンクリートの防水工法で、特許「タケイ液」を用い、長年にわたって培ってきた経験と技術に、更に新しい施工技術を導入し、水密性の高いコンクリートを造る工法システムです。

なによりも
歴史と施工実績が
「安心」の証明です。

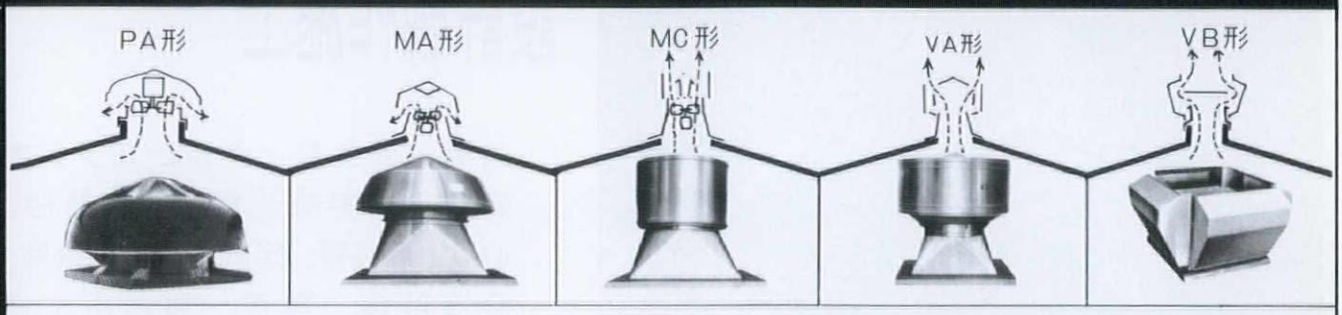
躯体防水
[屋根・地下]
責任施工

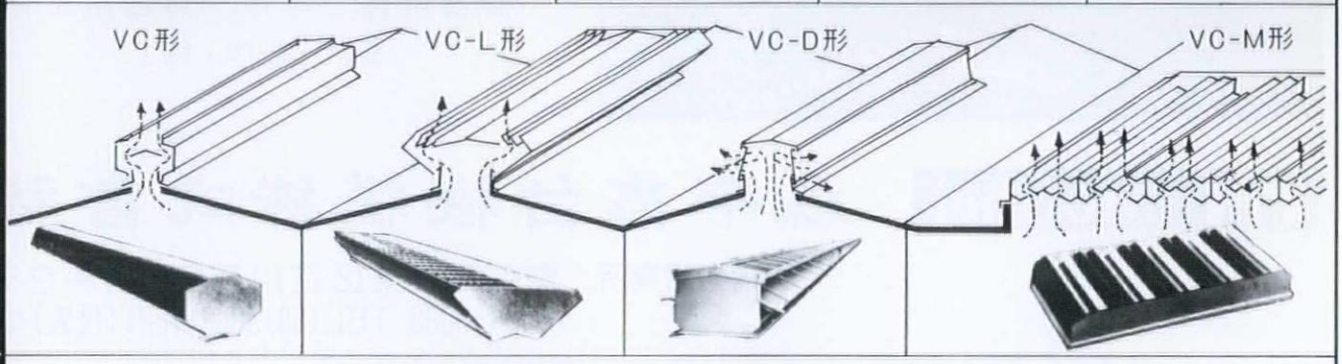
タケイ工業株式会社
本社／〒116-0014 東京都荒川区東日暮里2-12-1 TEL03(3891)8176㈹

坂本商会は創業80年 換気・排煙・採光の専門メーカーです

強制換気・自然換気装置

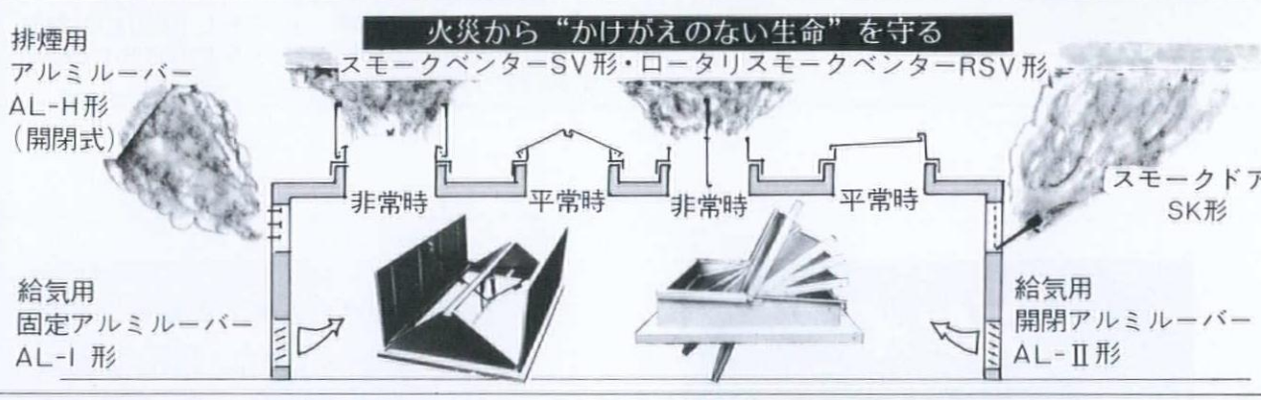
“自然の風”を効率よく招く坂本式ルーフベンチレータ群





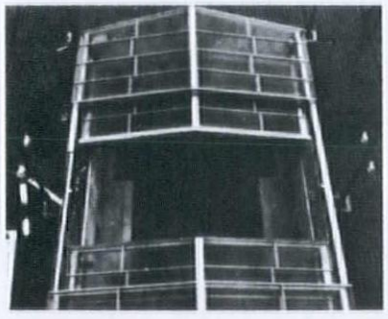
排煙・ルーバー装置

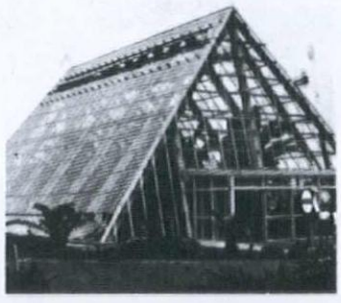
火災から“かけがえのない生命”を守る



採光装置

“太陽の恩恵”を全身でウケとめる坂本式スカイライト







株式会社 坂本商会

本社	東京都中央区日本橋2－16－12(江戸二ビル)	〒103-0027	電話 東京 (03)3271－5591(代)
松戸工場	千葉県松戸市松飛台420番地	〒270-2214	電話 松戸 (0473)87－6595(代)
技術研究所	千葉県松戸市松飛台217番地	〒270-2214	電話 松戸 (0473)87－3148
施工部	東京都墨田区東向島2丁目15番11号	〒131-0032	電話 東京 (03)3619－2221(代)

広告目次

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命下さい（五十音順）

●共栄通信社

東京――東京都中央区銀座8-2-1
新田ビル（3572）3381
FAX（3572）3590

大阪――大阪市北区西天満3-6-8
笹屋ビル06（362）6515
FAX06（365）6052

●建報社

東京――東京都文京区湯島2-30-8
（3818）1961
FAX03(3818)1968

大阪――大阪市中央区淡路町1-4-9
昭栄ビル06（231）4548
FAX06（227）0268

●新建社

東京都中央区八丁堀2-1-10
ハヤシビル（3552）8247㈹
FAX（3552）8249

●中外

大阪――大阪市北区浪花町14-25
日本生命天六ビル06（379）1791

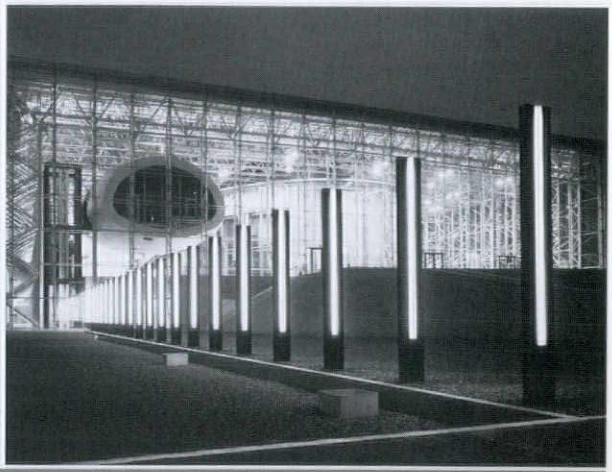
東京――東京都千代田区神田須田町2-5-2
須田町佐志田ビル（3255）8411

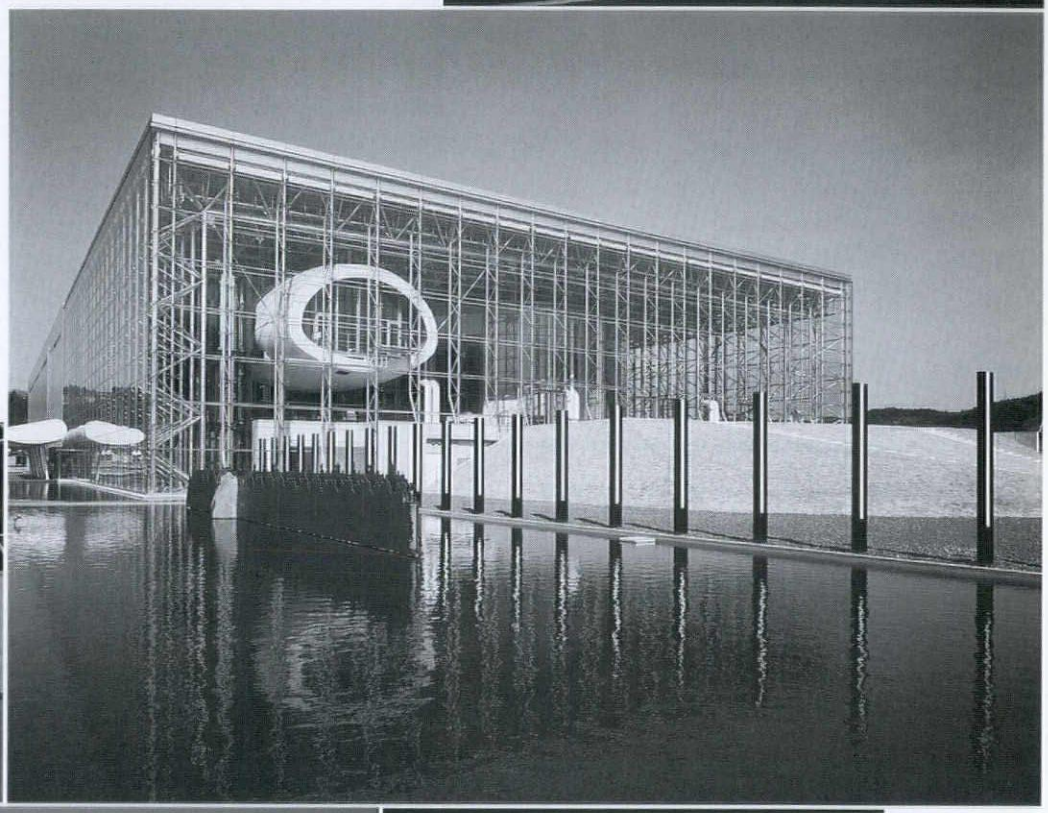
名古屋―名古屋市中区錦2-2-13
名古屋センタービル052（221）7641㈹

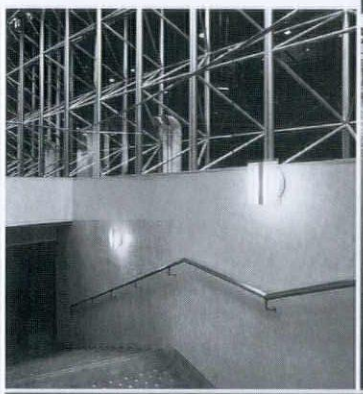
オ ㈱大本組――A12
㈱親松工務店――A14
カ ㈱関電工――A3
鹿島――A4・A5
軽井沢ホテル鹿島ノ森――A6
㈱カツシーナ・ジャパン――A19
ク 倉敷化工㈱――A19
コ ㈱弘電社――A9
コクヨ㈱――153
サ 三建設備工業㈱――A15
三機工業㈱――158
㈱佐藤秀――A20
㈱坂本商会――A22
シ 新日軽㈱――表4
新菱冷熱工業㈱――157
ス ㈱スギヤマ――A11
住友金属建材㈱――147
タ 高砂熱学工業㈱――表3
大興物産㈱――A8
タケイ工業㈱――A21
チ ㈱中東――A11
㈱中電工――A14
テ テクノ・ナミケン㈱――154
ト ㈱トーエネック――A15
東光電気工事㈱――A16
東洋熱工業㈱――163
ニ 日新工業㈱――149
日章工業㈱――A20
ヒ ㈱日立製作所――161
日立電線㈱――162
フ 不二サッシ㈱――A1
ホ ホテルイースト21東京――A7
マ 松下電器産業㈱――A2
㈱松村電機製作所――A13
ミ 三菱電機㈱――137
美和ロック㈱――164
モ 森平舞台機構㈱――A21
ヤ 八洲電機㈱――A12
ヤマハサウンドテック㈱――148
山田照明㈱――A24
リ リリカラ㈱――140
ロ ロンシール工業㈱――A10
ワ YKKアーキテクチュラルプロダクツ㈱――表2

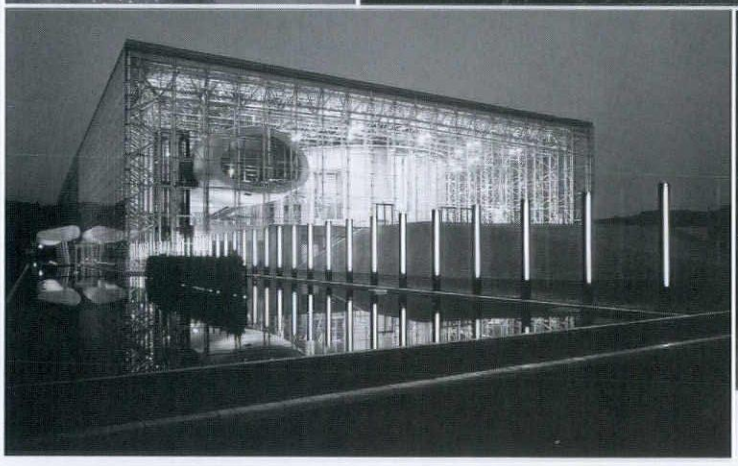
表情多彩

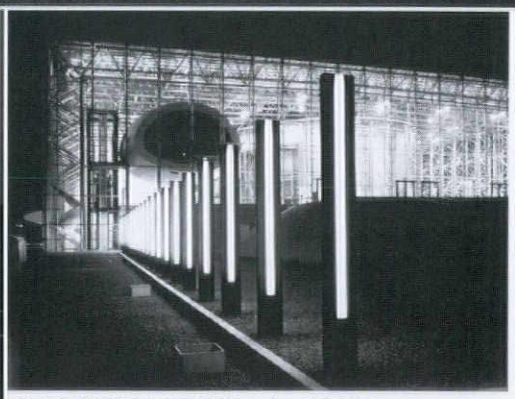
照明は空間づくりの重要なポイント。
人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい・・・。
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、
多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、
表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。











CUBE 白石市文化体育活動センター（宮城）

yamada

山田照明株式会社

本　　社／ショールーム 〒101-0021 東京都千代田区外神田 3-8-11 TEL.03-3253-5161
横浜支社／ショールーム 〒220-0005 横浜市西区南幸 2-20-1 TEL.045-311-1731

仙台支社 〒980-0824 仙台市青葉区支倉 4-34 TEL.022-267-1630
札幌営業所 〒003-0807 札幌市白石区菊水七条 2-61 TEL.011-811-2215
広島営業所 〒730-0805 広島市中区十日市町 2-2-34 TEL.082-293-6119
大阪支社 〒577-0006 東大阪市楠根 2-2-6 TEL.0 6-745-6811
北関東営業所 〒370-0851 高崎市上中居町 51-1 TEL.0273-26-4111
鹿児島営業所 〒890-0055 鹿児島市上荒田町 23-10 TEL.099-258-0031
福岡支社 〒812-0042 福岡市博多区豊町 1-9-61 TEL.092-414-8531
名古屋事務所 〒461-0001 名古屋市東区泉1-21-35 TEL.052-963-8411
宇都宮事務所 〒321-0971 宇都宮市海道町 818-2 TEL.0286-60-1381